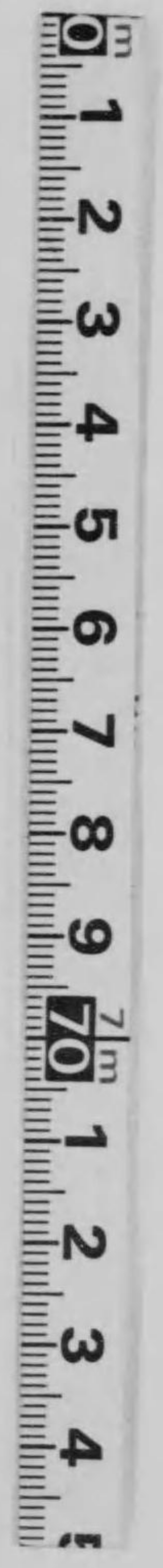


63
85□



始





源氏物語評釋全

文學博士 本居楚穎先生

文學博士 木村正辭先生 校訂

文學博士 井上頼国先生

國文註釋全書
第貳編

大正
15.6.24
内交

櫻園書院藏版

緒言

一源氏物語評釋ハ萩原廣道ノ著ニシテ十四卷ナリ、首卷ヲ上下二册ニ分テ總論ト凡例トヲ掲ゲ、題號、作者、時世、稱譽、歌、用意、趣向、一部ノ大事、注釋書、引歌、准據、卷名、人名、年立、系圖、種々ノ法則、及ビ頭書評釋凡例、本文譯注凡例等ヲ述ベ、本文ハ桐壺ヨリ花宴ニ至ルマデノ八册ニシテ、詳細ニ注釋批評セリ、本書ハ源氏ノ注釋書トシテ最モ有名ニ且ツ完備ヲ極ムレドモ、葵ノ卷以下ニ及バザリシハ甚遺憾ナリ、別ニ源氏物語々釋二卷、同餘釋二卷アリ、本文ノ難語難句故事等ヲ抄出シテ別卷トセルモノナリ、兩者共ニ花宴ノ卷ニテ終レリ、

明治四十二年十一月

編者識ス

校正譯注源氏物語評釋首卷

萩原廣道著

總論上

源氏物語といふ題號の事

源氏物語といふ名の事は。本居翁の玉小櫛に云。大かたもろ／＼の物語の名の例。おほくは其中に主としていふ人の名をもつたり。此物語もそのでうにて。光源氏君の事をひねとしてかける故に。源氏の物がたりといふなり云々。さて物語の名。光源氏の物語といふべし。たゞ源氏物語といふべきにあらず。といふ人あれど。さしもあらず。はやく作りぬしの日記にも。たゞ源氏の物がたりといへるをや。といはれたり。此説のごとし。さて源氏の事は。岡部翁の源氏新釋に云。國史また新撰姓氏錄などを案ずるに。嵯峨天皇弘仁五年に。皇子信公以下男女八人に。始て源朝臣の姓氏を賜はりて。左京に貫ね給ひしより。皇子に氏賜はるは専ら源氏なり。諸抄

に。此時三十餘人に始て源氏を賜る。といへるは委しからず。最初八人にて。次々に三十餘人には至れるなり。といはれたるがごとし。源字の事は。舊説に。濫觴小水爲九河之源の義に祝して用るなり。とあり。今案に。伊藤長胤が秉燭譚に云。北魏の時。源賀に始て源姓を賜ふ。源賀は本魏の皇族にて。源を同とうするに因て。始て源姓を賜ふ事源賀が傳にあり。本朝にても源氏は皆皇族より出づ。同一義なりといへり。かの國の史を考るに。げにも此事ありて。源賀禿髮傳檀之子也云々。太武謂曰。卿與朕同源。因事分姓。今可爲源氏。と見えたり。されば舊説はいかゞあるべき。嵯峨天皇の御時は。殊に漢籍をもてはやし給へれば。大かたは長胤がいへりしごとく。同源の義にて賜へるなるべし。さる故に源氏をば殊に重みし給ひて。皇子の氏にのみ賜へる例とはなりにけん。さて物語といふ事は。玉小櫛に云。中むかしのほど物語といひて。一くさのふみあり。物語とは今の世にはなしといふことにて。すなはち昔ばなし也。日本紀に談といふ字をぞ。ものがたりと訓たる。そを書に名づけて作れることは。繪合の卷に。

物語のいではじめのおやなる。竹取翁にうつばの
 としかげを合せて。とあれば。此竹取やはじめなり
 けん。その物語。たがいつの代につくれりとはしられ
 ねども。いたくふるき物とも見えす。延喜などより
 はこなたの物と見えたる云々。さてもろくの物
 語のさま。おのくすこしづ。かはりてさまく
 れども。いづれも昔の世に有し事をかたるよしに
 て。あるはいさ。かかたち有し事を。よりどころに
 してつくりかへてもかき。あるは其名をかしくし
 かへもしてかき。あるはみながら作りもし。又まれ
 には有し事をそのまゝに書るも有て。やうくなる
 中に。まづ多くは作りたるもの也云々。かくていづ
 れの物語も。男女のなからひの事をむねとおほく書
 たるは。よの歌の集共にも。戀の歌の多きと同じ
 ことわりにて。人の情のふかくかゝること。戀にま
 ざるはなければなり。といはれたるがごとし。なほ
 本書を見て知るべし。

紫式部の事并日本紀の御局の事

この物語つくれる人の紫式部なることは。みづから

は傳はず。紫式部といふは。いはゆる呼名なるこ
 と。玉小櫛にいはれたるがごとし。さて紫式部とい
 ふ名につきて。説ども多かる中に。河海抄に。紫の
 うへの事をすぐれてかき出たる故に。藤式部の名を
 あらためて。紫式部と號せられけりとあるを。七論
 又源注拾遺などにはとられ。玉小櫛には。袋草紙に。
 一條院のお乳母の子なり。しかうして上東門院に奉
 らしむとて。わがゆかりのもの也。あはれとおほし
 めせ。と申さしめ給ふ故に此名あり。武藏野の義也。
 とあるをとられたり。この二つをおもふに河海のか
 たまされるやうなり。紫式部日記に左衛門督公任
 あなかしこ。このわたりにぞ。紫やさふらふ。とう
 かひ給ふ。源氏ににるべき人見え給はぬに。かの
 うへはまいていかでものし給はん。と問ひたり。と
 あるをいづれも引出て。契沖爲章は。これによりて。
 かの河海説の證とせられたるを。小櫛には。ゆかり
 の説による時は。紫といふ名かの紫上にはあづから
 ぬことなるを。それとよそへてのたまへるを興な
 る。すべてたはふれ言は。あらぬことをめづらかに
 よそへていふをこそ。興とはすなれ云々。といはれ

かける日記にも見えたれば。動くことなし。この作
 れるにつきて。昔よりさまくの説どもあれど。い
 づれも後よりおしはかりていへる妄説なること。紫
 家七論。源注拾遺。玉小櫛などに委しくいはれたれ
 ば。こゝには省く。さるは妄説とだに思へば。皆無
 用なる論なれば也。さて作りぬしの系圖は。舊注ど
 もに見えたる中に。安藤爲章の紫家七論なるは。殊
 に委しく考へたるもの也。父は正四位下越前守藤原
 爲時朝臣とて。閑院左大臣冬嗣公の子。贈太政大臣
 良門公より四世の孫也。母は常陸介藤原爲信朝臣の
 女。夫は左衛門権佐藤原宣孝朝臣とて。同じ良門公
 の五世の孫にて。勸修寺家の祖なり。さて宣孝朝臣
 の北方となりて。大貳三位賢子と。辨局名不とを
 産て後。長保三年四月に宣孝卒られしかば。四五年
 ばかりやもめずみして。寛弘二三年の比より。上東
 門院へ宮づかへに出られたるさまなること。また此
 物語作られたるは。そのやもめずみのほなるべき
 こと。また萬壽二年の比までは存生にて。上東門院
 に仕へられたりしさまなることなど。委しくかの
 七論にいへれば。ひらき見て知るべし。此人實の名

たり。今案に。まづ河海に藤式部をあらためて。紫
 式部と號せられけりとあるは。上東門院の號し給へ
 る意か。また世人の號しける意か。わきがたけれど。
 まづは上東門院の號し給へりといふやうに聞ゆる
 也。もしさる意ならば。それは誤なるべし。大かた
 この呼名は。式部又侍従少納言などいふ類こそ。み
 づからもつき。事がらによりては主よりも賜ふべき
 事ならんを。その上に冠らせたる。紫。和泉。など
 いふ類は。皆他より呼分ちたる名と聞えたり。此人
 もそのはじめは。江侍従清少納言などのごとく。其
 氏によりて。藤式部といへりしとあれば。これすな
 はちその呼名なりけるを。此物語作り出て後に。他
 より稱て紫とはかうふらせつらんとぞおほゆる。も
 しくはこの公任卿の。たはふれ給へるなどやその始
 なるらん。よしならずとも。他のつけて呼たるが。
 何となく弘まれるなるべし。其故は。もし紫上の事
 をすぐれて書たるゆゑによりて。紫といふ名を賜は
 らばそは我身やがて紫上に擬へられたるがごときも
 のなれば。かの用意ふかき人ならば。必辭び奉るべ
 き事也また一條院の御乳母子の故をもてしか名づけ

給ふならば。これは殊にかしこきわざなれば。かならず甚く辭び奉るべき事決し。そのうへ帝はゆかりの者なりとの給ふとも。上東門院のそれをやがて。御みづからめし使ひ給ふ女房の名につけ給はんも。いかいしき事なるに。まして世人のしか呼んば。いとまかしこきわざなれば。必さはいふまじき事ども也。さればたゞ藤式部とのみいへりしを。藤と紫とゆかりもあれば。かた／＼に思ひよせて。他より紫とはつけたるなるべし。さてはじめはしかあだ名につけたりしも。何となく呼名のやうになりては。おのづから藤式部のかたはずたれて。専ら紫とのみいふやうにはなりけんかし。小櫛に。たはふれ言はあらぬ事をめづらかによそへて云をこそ興とはすなれ。といはれたるは。もとよりさることなれど。最初より此人に紫といふ稱ありしならば。此物語に紫上の事を。とりわきていみじくは書べくもあらず。もし書たらば。我身やがてそれにならずらふるさまに聞ゆべければ也。されば猶紫上の事を。すぐれていみじくかゝれたる故に。他よりおして紫式部とはつけたりとこそおぼゆるなれ。紫上の事は。げにもす

ぐれていみじくかゝれたるに。この物語をも。はや紫の物語。と更科日記には見えたれば。契沖の説のごとく。呼名のおこりもそれに因ることは大かたがふまじくぞおぼゆる。また袋草紙の一説に。若紫の巻を作れる。甚深なる故に此名を得たり。とあるは。先達のとられざりしごとく。ひがことなるべし。そも／＼かうやうの事は。今となりてはよくもしられぬ事なるに。たしかに引出てことわるべき。例證もなきことなれば。實にはいかなるさまなりけん。たゞその事情をおして。かりそめにいひさだむるなれば。いづれかまさしくあたるべき。見ん人擇びてとりぬかし。さてついでにいひまほしきはかの紫式部日記に。さゝも内侍といふ人侍り云々。うちのうへ。源氏の物がたり。人によませ給ひつゝ。こしめしけるに。この人は日本紀をこそよみ給べけれ。まことにさえあるべし。とのたまはせける。ふとおしはかりに。いみじうなんざえかあると。殿上人などにいひちらして。日本紀の御つぼねとぞつけたりける。いとをかしくぞ侍る云々。といふとあり。これにつきて。藤井氏の日本紀御局考といふも

の一卷あり。其おもふきは。この日本紀とあるは。日本後紀。續日本後紀をさしてのたまへるよしをいひて。書紀より續後紀までの四ふみは同じ名なれば。昔は國史の事を日本紀といひつらんよしを論らひ。さて源氏君を嵯峨天皇に准へたる事より。次々に卷中の人々を。其世の人に思ひあてたる准據を擧て。日本紀をよく讀たるよしを。のたまへるやうにいはれたり。然れども此所の文。本によりて異なるを。かの御局考には。日本紀をこそよみたるべけれ。として引れたるは。さる本も有しにや。もしくは本により給へけれとあるを見て。帝より式部を。給とはのたまふまじく。又給へとおのがうへにつけていふ意としては。語格の自他たがへれば。誤なりと見て。改められたるか。そはしらねども。よみたるべけれといひては。さえあるべしといふに。かけ合ぬがことし。たるは既に讀たる意なれば。べしと末をかねていへるにかなはず。又べしを推量りたる意として。俗言にさえガアルデアラウといふ意としては。次の詞に。おしはかりにいみじうなんざえある。さの下のある本は新と殿上人などにいひちらして。とあるにか

なはず。さるはまことにさえあるべしとのたまひたるを。いみじうさえあるといはんは。いさゝか言のかはれるのみにて。事のすぢは同じければ。さばかりたがへる事にあらざれば也。案ふに。給ふのふもじは。そへてかゝぬが昔の例と見えて。此物語の古き寫本どもに。いづれも添たるはすくなし。さればなほたまふべけれ。とよむべくおぼゆ。さて帝より式部を。給ふとのたまはんとは。後世にてはありげにもなき事のやうなれど。其世さまの詞には。さる例ども。此物語の中にもこれかれ見えたれば。はさして疑ふべきにもあらず。かくて言の意人は日本紀を讀べし。さらばまことに學問あとの給へるにて。さえは例の學才の事に。學問といふ事。あるべしは。今より後出ふ意にて。べけれもべし。共に末をかねて聞ゆべし。それを左衛門内侍の問ありとのたまへるやうにいひひがめどにいひちらして。かゝるあだ名つらきことに思ひしなるべし。かく見ざれど打あひがたし。されども日本紀とある

みにはあらず。すべて國史を日本紀と云ふならへるやうにいはいはれしは。事がら實にしかあるべくぞおぼゆる。この論もうきたる事なれば。まことにはいかゝあらん。例の人さだめてよ。さてかく日本紀の御局とつけたるにても。其世に人のあだ名つけけんならはしをおもふべし。猶他に見えたり。

時世のありさまの事

此物語をよまんに。まづ其時世のありさまを。よく思ひわきまへ置て讀べし。然らざれば事のさまたく違ふ事ありて。後世の心にては。思ひ惑はるゝ事のみ多くして。うまく意得ることかたかるべし。時世とは。此物語作られたる一條院の帝の御代の事なり。紫家七論にいへることく。この物がたりは。一條院の御代。長保の末寛弘の始。紫式部寮にて里に住れる間にかゝれたる事は。大かた違ふまじくおぼゆるに。物語のさま。昔の世に有し事のやうには書のがれたるものから。すべての事のありさまは。其世にありしおもふきにて書れたり。と見えれば。作者の在世のほどのありさまにて意得べき

こと多かり。そのありさまをかつく我大御院の上古は。神武天皇。大御院の建て。天下をしらしめしける時。神武天皇のまゝに。何事をもおきて給へり。の制度のありさまは。大かた今世の御代に仕へ奉るを伴。造といひ。諸國を國。造といひて。おのゝ生れか。其家を繼其職をも繼て。幾世ふれども。事はなかりしを。政達等にいはば。皇の御世に。もろこしの冠位儀禮のさまを。孝徳天皇の御世に。もろこしの郡縣の制度を。ひし後は。そのさまいたく變りて。大かたも。さまにぞなりにける。これら委しきさまは。日本紀を。そのあるやうは。日本を六十餘國と制め。國の下に郡を置。郡の下に郷を置。郷の下に村を置て。おのおの其吏をさだめ。朝廷にはもろこしの官位を制められ。萬の事を司る所を置れて。各其吏をさだめ給ひ。その官につきて位の階あり。又その官位につきて。位田職田とて官位の祿あり。かくて朝廷にまぢかく仕奉る人たちは。其官位を賜りて次第に

高き階にも昇りゆく事なれど。官位は其人の一世かぎりにして。家を世々にしては傳へぬ御制度なりき。また國々の司は。京より出て年を限りて。こゝかしこ移ろひわたりの。其國を治めらるゝことなりき。是いはゆる受領なり。郡領より已下の吏は。大かたその國の造。縣主などのなれるもありと見えたる。これも年限など有けん。されども元來其處に住たる人なれば。後には世々其職を繼たるさまなり。さればいと卑しき吏ながらも。威權はこよなき事どもありし也。大かたかくのとき御制度にはありしかど。我皇國には神世よりこのかた。氏姓を重みし。家系をいひたて。貴き賤きを分つ國風なりしかば。その御制度は御制度として。やう／＼にうつろひゆきつ。此一條院天皇の御世のほどなどに至りては。其職に任せらるべき家々も。大かた定りたるがごとくなれりし也。さても官位は。一世ばかりの御制なるからに。其官位につきたる祿も。また一世かぎりなりし也。されば世嗣のかはる時などには。いたく困ずべき事なる故に。私に田など買て。家のたつきとせられたる。是を庄園などといふ。今

世にも某庄といふ名の。國々に遺れるは。其人の庄とありし所にて。皆私の領所の跡なり。源氏君の須磨。八宮の宇治なども。その領所めきて聞えたり。かゝる光景なりしかば。帝の御子とさうせども。さるべき御後見などのあらざるは。いと貧しくして。人げなきさまなるもおはし。事。常陸宮の姫君。宇治の八宮などの御さまにて思ふべし。さて官位に昇ること。貴き家に生るゝ人は。その父祖の庇陰によりて。最初よりさるべき官位にも。つき給ふことなれど。地下といふより下さまなる人は。さやうの憑もあらざれば。其時々権威ある人の家に。私に心よせ仕へて。其勞をもて。朝廷につかうまつるべき種子として。官位をも申賜はり。後々までも其家の庇陰によりて。高き階にも昇りゆく事なりき。されば朝廷の御臣とも。權威ある家の臣とも知れぬさまなる人ども多し。此物語のうちにて。常木ノ紀伊守。夕顔の惟光などやうの人。皆しか也。これ上古にも今の世にも。絶てなき事なれば。その勢ひいたく異なる事どもおほし。心得おくべし。また住所の事も左京右京のうちに。定れる宅地を賜はるやう

には見えなれど。此物語などのさまにては。しか厳かなる事とも聞えず。富榮えたる人などは。己が意にまかせても宅地を買とり。或は人に譲り。又貧しくなれば賣などもせし事。他し書にも見えなれば。大かたはこれも勢ひにまかせ意にまかせて。何處へも轉りゆきし事とおぼゆる。さるは公卿より下の人々は。世の代る時などは。さるべき人もあらざれば。いと流落ることなどもありて。其勢ひのさまによりては。いかさまにもよろしきにしたがふべければ。おのづからさやうにはなれりしにこそ。まして婦人などはさまさまに浮れ漂ひて。所縁につきつ、さらぬ人の妻になる類もありと見ゆること。かの空蟬夕顔などのさまにて思ふべし。さて又いと上古には。氏姓の系を殊に重みせしならはしなりしかば。皇后に立給ふは。大かた皇子の系におはしましけるを。後にはやううつろひて。大臣の御女なども。皇后に立給ふ事もいできて。皇子など産奉り給へば。御外戚がたもその御ゆかりにつきて。上なき位にも昇りなどし給ひ。さらぬ公卿の御女たちも。女御更衣にそなはり給ひて。皇子らみ奉り給へば。同じく

御威權のいでくることなりしかば。いづれも。息女をいつきかして。宮仕に出したてんとせられたること。當時のならばしなりき。桐壺更衣の御父按察大納言の遺言せられしやう。明石入道のかたくなに思ひつめたりし事などを見て知るべし。これはた今世には。をさくなき事なれば。いとおもひの外なる事もおほし。さて又夫婦のなからひなどの事は。上古よりのなごりにて。たよりくる縁にのみまかせて。これは本妻かれは側室など。きはやかに名をつくる事だに。さばかりさよくはなかりしさま也。されば貴き人の御うへには。本妻とおほしき人の。二人をでおはするもあり。また妻とも妾ともしられぬ類ひなどもありて。さまくなりしなり。これ今世もろこしさまの婚禮のさまとはいたく異なり。そのあるやうをかつくいは。此物語また他し書どもにも見えたるごとく。同じほど。それより少しづつ。上下の品はあれども。相偶ひてよろしきほどの家に。女などありと聞ては。たよりにつけつ、文をやりて。其返事のさま。歌のよしあしなどを考へ。手のよしあしなども見て。いみじく心にかな

へるには。心ざしを盡してひたふるにいひより。又媒をたのみても心を盡すほどに。つひには事とげてかよひそめ。後にはあらはに女のかたへゆきて住などもするを。其女の父母など打聞ても。よきほどの事なれば。初はしらすかほして打すておき。後にはその婿に對面する類ひもあり。或はまた其男の。心にかなはぬをば。聞出すやがて制するもあり。又いと心にかなへるには。其女に文の返事などをしへてか。せなどもすることなりき。されば文をおくるばかりのことは。大かた何のつゝむこともなく。その歌のかへしなどのめでたければ。なか。いみじくいひはやして。感ずることなりしさまは。帝に奏覽する世々の撰集にだに。その歌どもに作者の名をあらはしか。れたるなどにて思ふべし。か。るならはしなりしかば。されには案外なる事ども。いでくめれど。それさしも名分をたて。いひさだめたる。妻妾といふにもあらねば。大かたの事はいみじき曲事とはおもはぬさまなりし也。貴き人だにか。りしかば。ましていと。下さまには。さこそはさまなる事もありけめ。今世もろこしさまの婚禮といふ

わざにめなれ且かの國の後世の理學の論など聞ならひたる心より考ふれば。いと。思ひよらぬ事のみにて。彼がいゆる淫奔の風世に満て。上下おしなべて不義ならぬはなしとこそいはめ。然れども。それは今世にしてさる事おこなひたらばこそあらめ。其世にはこれすなはち其世の夫婦の道なりしかば。誰一人ひがこと。おもへることはなかりし也。かくいひても。猶今の俗はあやしみて。いひとく人に罪おほすばかりなるは。かの夏蟲の水を疑ふたぐひにて。ならばぬ事を見聞て驚き思ふ故ぞかし。されども。又男女のなからひの正しかりし事は。今のさまとはこよなく異にて。男女つねにたいめんすといふ事はなく。止事を得ずしてあふ事のあらんに。躑躅人は簀子にだにのぼらせず。や。親しきも籬を隔たるうへに几帳をたてそへ。或は障子を隔たる物ごしなどにてあひても。猶聲さかすばかりもはづかしき事とおもへり。兄弟なども異腹なるは。なほこのぢやうにて。あらはに面を見するを恥たり。もし其世の人に今世のさまを見せたらんには。何とかいはん。いとみだりがはしく恥をしらぬ風俗

とこそいはめ。されば昔は昔。今は今。皇國は皇國。もろこしはもろこしとして。其世のありさまを疑ひあやしふべからず。猶いは。我皇國は氏姓のすぢを重くする國俗なれば。男女の縁も。あまりに貴き賤しき事たがひたるは。ふさはぬ事なれば。いかに妾なればとて。あやしくやうたがひたる者の女などを。貴き人の側に近づくる事などは。昔はをさしなかりし事也。又事理をもていは。男をさづ女の家に通ひて妻問すべきことにて。見も知らぬ女を。先男の家にむかへくるなども。うらうへなること也。さればもろこしにも。親迎などいふむさの見えたるは。かたばかりさることを思へるなるべし。すべて男女のみちは。かたみに相感てあふべきことわりなれば。聞も知らぬ人を。おやしどくの心もて。あながちに引もてきて。おしする事などは。天地のおのづからなることわりならねば。昔の世にはせざりしなるべし。又媒といふものも。其家のさま人のさまなど。よく見知たる女房などにして。女も物のいひにくからぬ人などつかはして。志のせちなるよしをいひしらする事なりしは。人の心をやぶらぬ

わざとこそいはめ。ながしと名たゝる人の媒して。其親々と嚴かにいひ契れる中には。たゞ一言のたがひもて。男も女も永き世の物思ひとなることもあるを。おもひくらべて考ふべし。大かたそのかみは。時の帝と申せども。したがはぬ女をあながちにめさるゝさまにはあらず。桐壺の帝の。藤壺の中宮をめされし所。また朱雀院の帝の。秋好中宮に思ひかけ給へる事などを見て知べし。其中に玉かづらの君の事などは。餘りにかしこき事のごとくなれど。それはた情をささだつるならはしなりしかば。うちうの事はあらはに咎め給ふことなどもなくて。すぐし給へる事と聞えたり。これらはあまりになよび過たる事にはあれど。人の妻妾と定れる女を。おしたちて奪ひけん。もろこしの王どもがうへにくらべて。皇國のならひのまされるを知べし。大かたこれらの事どもは。今世のさまとはいたく違へる事なるからに。聞つかぬ輩は。これを見聞て。我國は禮儀もしらぬ夷狄の國のごと。思ひいふめれど。それは皆もろこしのふりをのみならひたるにて。國々おのゝくならはしの異なることをえしらぬ。いみじき心が

といふべし。その中にも上にいへる。天下の御制度などは。我皇國のふりならず皆もろこしのふりを模されたること。又この男女のなからひのさまは。しかもろこしさまを模し給へるころなりしかど。猶我國ながらのならばしなる事。又今世の御制度は。大かた孝徳天皇の御世よりあなた。我國さまの御制度なること。又今の夫婦の定めは。もろこしの禮にならへるものなることを。思ひ辨ふべし。猶いはまほしき事どもは多かれど。そは又別なる書にいへれば。こゝには省きつ。たゞ此物語をよむ人の。いづもいふかしむ事どもは。おはよそ上にいへるが如きことなれば。あらゝ其あるやうを示しておく也。よくいへ時世のさまを意得て。うたがふべからず。熊澤氏の源氏外傳にいへらく。惣じて其代にて見ると。後世より見るとは相違の事あり。其世には治世無事と思へども。その世の凶事どもを取あつめ。一所に書つらねたる記を見れば。治世のなきやう也。又戰國の記を見れば。朝夕軍ありていそがしきやうなれども。世間無用の多事やみて。却て隙なるもの也といへり云々。源氏も一生好色の人のやう

に見ゆれども。さありては人の交りもなすがたかるべし。古への書を見るには。萬事おもひやりあるべし。といへり。まことにさることなればこゝにか、げつ。おのれ常にいへらく。昔の書どもをよむには。心得べきやうあり。それはまづ國史。また律令格式の書などは。大かたわろき事をば用意して記し。又その人をおもむくる法などをのみ。記されたるなれば。これをよめば。何事もいみじく聞えて。さながらに滞りなく。行はれたることのやうにおぼゆるを。此物語さらぬも其世々のうちとけ言の物語などを見れば。おもひの外にたがへる事ども多し。さる條どもを彼此かよはし考へて。其世々のありさまを推て知るべし。すべて昔の書を讀て學問する事は。むねと其時世のあるやうを考へて。今世にはたらかし用ひて。益ある事どもを知らん爲なれば。なほざりに見んはいたづらなるわざ也。まに漢學する人など。かの國の經書といふ物をのみ。常に見ならひて。彼國は何事も。すべてうべししく足ひたる國のごといふめれど。その打とけ言かきたる書などを見れば。いとあやしくわろき事も多くして。か

の經書また法令教訓の書にいへるやうなる事の。さながら行はれたることは。昔よりさらになき事いとよく知れ。其中には。あまりに道理を責る故に。中にねぢけたるふり。情なきならはしなども起れりしさま。殊に多く見えしらがふゆり。されば何れの書を読んにも。ひたふるに其文ことばに泥むことな。人情のなりゆく末々を。深く思ひはかりて。其世のさまをさとるべし。中昔のほどのありさまを知るには。此物語などは殊によりしき書なれば。彼正しき書どもに見合せて。其世のふりを考ふべし。これなん學問のむねとあるべき事なりける。

此物語稱譽の事

舊注どもいづれの抄にも。此物語古來稱譽之事。と云條ありて。むかしより人々の譽られたる事どもを記されたり。然れども皆たゞかたそはばかりの事にて。まことによくいはれたりとおほゆるも稀なり。たゞ玉小櫛にいはれたる事のみぞ。此物語のさまにいとよくかなへれば。いさゝかこゝに引いで。よむ人のしるべとす。小櫛に云。こゝらの物語書ども

の中に。此物語はことにすぐれてめでたき物にして。大かたさきにも後にもたぐひなし。まづこれよりさきなるる物語どもは。何事もさしも深く心をいれて書りとしも見えず。たゞ一わたりにて。あるはめづらかに興ある事をむねとし。おどろくしきさまの事多くなどして。いづれも。物のあはれなるすぢなどは。さしもこまやかにふかくはあらず。又これより後の物どもは。狭衣などは。何事もはら此物語のさまをならひて。心をいれたりとは見ゆるものから。こまなくおとれり。其外もみなことなる事なし。たゞ此物語ぞ。こまなく。殊に深くよろづに心をいれて書る物にして。すべての文詞のめでたきことはさらにもいはず。よにふる人のただすまひ。春夏秋冬。をりく空のけしき。本草のありさまなどまで。すべてかきさまめでたき中にも。男女その人々のけはひ心ばせを。おのゝことことに書分て。ほめたるさまなど。皆その人々のけはひ心ばへにしたがひて。一とやうならず。よく分れて。うつゝの人にあひ見るごとくおしはからる。など。おほる氣の筆の。かけても及ぶべきさまにあ

らず。さて又よろづよりもめでたきことは。まづからぶみなどは。よにすぐれたりといふも。世の人の事にふれて。思ふ心の有さまをかけることは。たゞ一わたりのみこそあれ。いとあらく淺きもの也。すべて人の心といふものは。からぶみに書ること。一かたにつきいりなる物にはあらず。深く思ひしめる事にあたりては。とやかやくと。くだくしくめ、しくみだれあひて。さだまりがたく。さまゝのくまおほかる物なるを。此物語には。さるくだくしくまゝまで。のこるかたなく。いとくはしくこまかに書あらはしたる事。くもりなき鏡にうつして。むかひたらんごとくにて。大かた人の情のあるやうをかけるさまは。やまともろこしいにしへ今。ゆくさきにもたぐふべきふみはあらじとぞおほゆる。又すべて卷々の中に。めづらしくおどろくしく。めさむるやうの事はさくなく。はじめよりをはりまで。たゞよのつねのなだらかなる事。同じやうなるすぢをのみいひて。いと長き文なれども。よむにうるさくおほゆることなく。うむことな。たゞついきゆかしくのみぞおほゆるかし。お

のれをしへ子どものために。はやくより此物語をよみとききかすること。あまたかへりになりぬるを。あだし書どもは。かばかり長からぬだに。説にうむ心もまじるを。これはさしもながき書にて。年月をわたれども。いさゝかもうむ心いでこず。たゞことはじめてよみたらむこゝちして。めづらしくおかしくのみおほゆるにも。いみじくすぐれたるほどはしられて。かへすゝめでたくなん。といはれたり。まことに此説のとき書になん有ける。その中にもげにいはれたるやうに。人の心のうちに思ふことのくまゝを書あらはしたるは。いみじくいふなる漢文にも。こまなくまざりておぼえたり。今そのゆゑを案ふに。漢文にはすべてにをはいふ物なきからに。ものゝ心ばへなどを。いと委しくいひきはめんことは。おろそかなるべきことわり也。されども其もじごと義を含みたる故に。上手の書る物などは。字の外に餘光あるごとくにして。めでたく聞ゆることなれど。すべてはいはゆる自他天人過去未來などの事を。きはやかにいひ分つことわたはずして。いとおほらかなる物なれば。 此事は別にいたる物あり

たをあげつらふのみ也。たとひ稗史小説などいふ類にて
も。心におもふ事などは猶わらくして。うはべのあ
りさまを。他より評したるごとき體の物となれり。
これからぶみのみじかき所なり。我國の文もあだし
書なるは。皆たゞ事の意の聞ゆるをのみせんとし
て。心をこめたるものならねば。此物語のごと委し
くめでたきはさらになし。さればたゞ此物語のみぞ。
漢文にもまされる皇國ぶみのほんとするべき物にて。
げにもやまともろこしいにしへ今。ゆくさきにも比
類なき書になん有ける。

此物語の歌の事

玉小櫛に云。すべて物語の歌の事。伊勢物語などの
は。おほくは古歌なれば。よきが多きを。作りぬし
のあらたによみたりとおほしきはよからず。中には
えもいはずわろさもあり。その外の古き作り物語ど
も。大かた歌はみなわろし。然るに此源氏の物語な
るは。みな作りぬしによめるなるに。わろきはをさ
をさ見えず。みなよろしき中に。すぐれたるもまじ
れり。歌は源氏なるよりは。狭衣ぞよろしきといふ

人もあれど。然らず。さころものも。ほかの古物語
どもの歌にくらぶれば。げにこよなくよろしけれど
も。源氏のよりまされることはあらず。といはれた
る。これもあれたる評なるを。近世の歌よみどもは。
うけあへぬも多くありて。とやかくやもどきいひ。
これらのことによりて。本居翁の歌をさへつたなき
やうにいへるもあるは。いみじきひがこと也。それ
は此物語の中なる歌どものさま。一ツの體ありて。八
代集などの體とはいさゝかかはりたる所もあるに。
ちかきころは。萬葉集の詞をまじへてよむを。いみ
じきわざのやうに心得。それに新古今集のしらべな
どをとりそへて。風韻ありなどいふ類の事行はれた
る。其すゑに。今俗のたゞに思ひいふことに
ちかき。いやしげなる事をさへいひて。さとし心に
へつらひたる歌などもありて。おのゝたてたる私
説をおし立んとて。さる説をもいふにぞあるべき。
それはみないにしへの心詞を深くもたどらず。此物
語などを。たゞうはべばかりのぞき見たるのみに
て。いひしらぬ味はひある事をえしらぬからに。さ
とび心に思ひなずらへて。妄に評するにこそあれ。

まことに此物語の歌は。大かた一ツの體あるものか
ら。又しかひたむきにはあらずして古ふりなるあ
り。後のさまなるあり。きすくなるあり。たくみな
るありて。おのゝ其人の其事がらに相かなへたる
なれば。もろゝの體一ツとしてそなはらざること
なし。そが中にも。巧なると餘韻あるとは。いひし
らぬまでたくみにほひあるもあり。又その一ツの體
といふも。そのさまによりて。前後の文の詞に
ははせてひきあるさまに詠れたる故に。よのつね
の歌集どもに。一首づつ。はなちて擧たるとは。おのづ
から差ありて。一ツの體あるやうには見ゆるなれど。
すべては別にあやしき體あるにはあらず。しかるを
たゞ一わたりに思ひとりて。それ稱たる先達をさへ。
つたなきやうにいひちらすめるは。いとあぢきなく
かたはらいたき事なり。此物語のうちに。歌の事を
論ぜられたるところのあるをも見て。歌といふもの
のすべてのさまをもしるべく。又作りぬしの歌にら
うゝしかりしほどをも思ひ辨ふべし。さて又本居
翁の歌は此物語のみならず。中昔の比の歌のさまを。
いとよく學びとられたるものにて。其さまおだしく

おどろゝしきふりなどは。たえてなき故に。ふと
見てはかどゝしからぬやうにも見ゆめれど。よく
よく味はひ考ふれば。げによくうつしとられたる所
ありて。古人のふりにかなへるもの也。すべて近世
に。よき歌といふをきけば。たゞ一ふしあやしき
事を考へ出て。物のあはれしらぬ人の耳に。けざけ
ざとつらぬきて。げにとおほゆべきさまのことつく
るを。上手とはする事のやうなれど。それは皆この
ころのさとび心の定めにそあれ。實に本として學ぶ
所の古の歌に似たらんには。今俗の耳には疎かるべ
きことわりなれば。しかかどなきさまにいはいれなん
は。中々いにしへの體に近きなるべし。かうやうの
事は。猶いといはまほしき事多かれど。此物語にあづ
かる事にもあらざれば。こゝには畧さつ。安藤氏が
紫家七論にも。いへらく。物語のうち。和歌ならび
に詞ども。萬葉古今伊勢ものがたり竹とりなどの古
體をはなれて。しかもおほどかにて。やすらかにや
さしく。おほかた吾國の風流をつくしたれば。見る
人をして倦事を知ざらしむ。まことにやまとなふみの
上なきものなり。といへり。いにしへの歌物語の書ど

もを。よく見明らかたる人の論は。誰も皆かくなん有ける。さて又玉小櫛云。此物語。源氏君をはじめて。よき人としたる人の事は。何事もめでたきさまにほめたるに。そのよみ給へる歌のみは。ほめたる所一つもなくして。其人の他事のよきにあはせては。歌はあしきやうにいへる事のみ。ところへに見えたる。そは此物語の中の人々の歌は。みな紫式部みづからよめるなれば。ほむればわれほめになる故也云々。こゝに其例ども多く擧みなつくりぬしの。卑下ちたれど今は略くの心しらひにていへる詞どもなるを。むかしよりそこに心つける人なくて。たゞまことにその歌のよからぬやうにのみ。注せられたるはいかにぞや。とあり。これ又心得おくべき事也。小櫛に又云。歌よむべき心ばへをしらむとならば。此物語をつねによく見べし。此物がたりに書たる事ども。人々のしわざ心ばへは。ことごとく歌よむべきことばへ也。しかいふ故はいかにといふに。まづ人の情は。古今たかきみじかき。かはる事なき物とはいへども。其中に時代のならひ身のほどなど。おのれが世中につきて。いさゝかかはれるところもなきにあらず。

かくて歌も情の物に感ずるより。よみ出るわざなれば。いにしへ今高きみじかき。かはりはあるまじかるべきことわりながらも。上つ代こそあれ。中昔よりこなたのうたはしも。かならず今思ふ心をのみ。有のまゝによみいづるにもあらず。いにしへの歌をまねびて。其おもひきによむわざなれば。いにしへの世の有さま。人のこゝろばへしわざを。よくしらすはかなはぬわざ也。又いにしへをまねふといふ中にも。萬葉集よりあなたのは。世あがり事とはくして。そのさまいたくふりにたれば。さしおきて。おほかた古今集よりこなたをまねふことなるに。そのよの歌どもは。みなむげにいやしきしづ山がつよめるにはあらず。されば古の歌をまねふにつきては。中の品より上さまの人の心しわざ。その品の世中をもしらすはかなはぬわざなるを。今の世にして。それこまかにしらすためには。この物語を見るにまさることなし。いにしへのものも。たゞ歌を見たるのみにては。その歌のいできつる。本の心のくはしきやうをしらざる故に。まねふに猶うときかたあるを。此物語を明暮によみなれぬれば。源氏君をはじめて。よき

ことのかぎりをとりあつめて。みやびたる人々にまじらひて。まのあたりその氣はひかたちを見。その物語をさくがごとくにて。そのしわざになれ。その心のうちまでこまかに見しられ。又そのかみの雲の上の有さま。をりくのおほやけ事。やむことなき家々のうちくゝの事どもまで。雅たる事のかぎりを。今のうつゝのめのまへに見るがごとくなれば。いにしへ人の歌の出来たる。本の有さま心の。よくしられて。かやうの歌は。しかくゝの時に出きて。そのをりのよみ人のこゝろは。しかくゝなる物ぞとやうに。くはしくしらすゝわざぞかし。さるゆゑに。此物語に書たる事ども。人々のしわざ心ばへは。ことごとく歌よむべき心ばへとはいふ也云々。さて此物語をつねによみて心を物語の中の人々の世中になして歌よむときは。おのづから古のみやびやかなる情のうつりて。俗の人の情とははるかにまざりて。同じき月花を見たる趣も。こよなくあはれ深かるべし。さるを近き世の人は。古の歌をまねふとはすれど。古人の世中をしらず。その情にうとくして。ただおのが今の心にまかせてよむ故に。古にたがひて

鄙しげなることのみおほくいでくるぞがし云々といはれたり。これ實にいはれたる説にて。歌よむ人の心得になる事おほければ。事の因に引出たる也。猶本書には。こまやかに其ことわりをいはれたれば。ひらき見て知べし。然るをこの段をも又さまゝのひがことをいひて。なじりたる物あれど。くだくしければこゝには略きつ。歌の學びざまを論へる書の中に引出て。悉く辯へいふを見るべし。

作者の用意の事

紫家七論に云。凡才徳ともに備ふる事は。丈夫すらかたき事になんありける。まして女にては。大和もろこしいとも稀なるべし。こゝにいにしへより源氏物語を論ずる人。たゞ紫式部が英才をのみ稱して。其實徳をいはざれば。物語の本意もあらはれがたく。式部がためにあかずうき事なり。爲章つらゝ物語とむらさき日記とをよみて。其氣象をはかり。其事實を考るに。やまとは似る人もなく。才徳兼備の賢婦なり。先づ物語のうへにて。ひとつふたつをいはし。紫上のらうくしくおほどかなる物から。おも

りかにして用意ふかく。明石の上の心たかき物から。へりくんだり。花ちる里のものねたみせず。藤壺のきさきのあやまちをくいて。はやく入道し給へる。朝顔の齋院のふかく名を、しみ給へる。玉かづらのうへの言よく人々のけさうをのがれ。總角の君の父宮の遺戒を守りたるなど。様々の婦徳を記し。殊に品定に。あだなるをしりぞけて實なるをす。め。しばしば警戒をしめしたるは。しかしながら式部が心おきてなりといへども。みなむかし物語に書なして。みづからかしたてをあらはされば。よむ人もたゞ他の噂のやうにのみおもへり。たとへば木人の歌舞は。假師がユミなることをしらざるがごとし云々。といへり。此未紫日記を引いて註して。其才徳のいみじきを玉小櫛に云。紫式部が心ばへは。此物語とかの日記とをもて考ふるに。女の學問だてして。さかしたちさえがるをば。いみじくにくみて。みづからも人にしか思はれじと。深く用意したるさま所々に見えたり。帚木巻にすべて男も女もわるものは云々といふより。いはまほしからん事をも。一つ二つのふしはすくすべくなんあべかりける。といふまでの詞など。

みづからの學問だてをにくみてせぬ心をしめしたる物なり。同巻に。などは女といはむからに云々。めにもみ、にもとまること。とねんに多かるべしといへるは。女とてもさばかりの事は。もとよりたれも有べきことなればそれほこるべきわざにあらざといひて。みづからはこる心なきことをしらせたる也。又同巻に。はかせのむすめの事を式部丞が語りたるを。君たちむくつけきこと。つまはじきをしてあはめ給へるよしかきたる。此女のやうをかむかふるに。さばかりあしくいふべき事は見えざるを。紫式部みづから學問だてをにくむ心を見せんために。ことさらにいみじくあしき事のやうに。いひなしたるもの也。又をとめの巻に。大學寮の衆の。ふるまひ氣はひ物いひなどを。いとあやしげに書るも。一興ながら。わざととりたて。學問する者の。優ならぬよしを。ことさらにいみじくいひなせる也。さるはよの人のならひ。すべて何わざも。おのが好みたふとむすぢの事をば。殊にめでたくよきさまにいひなさんとするわざなるに。みづからことに學問を好みながら。かへりてかくよからぬさまにいへる事

どもあるは。人にことなるよかき心しらひにぞ有ける。といはれたり。げに此説どもにいはれたること。此物語の中なる人々の心ばへ。又其ことにつきたるよきあしきげぢめなどは。皆ことごとく作りぬしの用意なれば。今さらには許せず。その條ごとに心をふかめてあぢはひ見なば。まさしく作者に其用意のやうを聞くがごときものにて。いみじき事ども多きぞかし。

物語の心ばへ井物のあはれを知るといふ事

玉小櫛に云。大かた物がたりは。世中にありとある。よき事あしき事。めづらしき事。おかしき事。おもしろき事。あはれなる事のさす。を書あらはして。そのさまを繪にもかきまじへなどして。つれづれなるほどのもてあそびにし。又は心のむすばられ。ものおもはしきをりなどのなぐさめにもし。世中のあるやうをも心得て。もの、あはれをもしるもの也。といはれたり。物語といふ書を見るやうは。げにたゞかゝるものになんありける。さてこの源氏

物語は。いかなる心にてつくれる。といふことの本意は。巻巻に源氏君と玉かづらの君との物語の事の問答の中に。何となく書あらはされたるを。玉小櫛に引出て。其意を注せられたり。これまことによき考にて。作りぬしの意をさながらに知らんことは。げにこのうへの事ななかりける。その委しきさまは。かの書を見てしるべく。おのがかうがへは。巻巻に小櫛の説をまじへて注せれば。今は省きつ。さて又物語の中に。よきあしきなどいへるは。よのつねの儒佛の書にいふ善惡是非とは同じからず。たゞ人の情によしあしと思ふ事にて。物のあはれを知るをよしとし。しらぬをあしとしたる事も。小櫛にいはしきいはれたれば。必見るべし。この事のすちを知されば。此物語見ても。其深き心ばへをしるによしなし。實にこの物らあはれを知るといふ事物語ぶみのむねとある事は。この本居先生をばじめて見いで。委しく説述られたるにて。いとも心ことにめでたき考になん有ける。されば小櫛の二の巻は。大かた物のあはれの事をのみ解のべられたり。今其説を引出ていはんには。いと事長くなるをもて。

備馬集の
歌の拍子
の聲にい
とあはれ
今と別
又西國
驚は物
ハテサ
云々
のふ人
やレサ
あふ俗
あはれ
引言
えく引
ずは引
なおづ
んぼべ

其要とある所を摘て。いさゝかこゝにか、げつ。委
しくは本書を見て知べし。さてその説の中に。あは
れといふ言の本をとくとて。あはれは見る物きく物
ふる、事に。心の感じて出る歎息の聲にて。今の俗
言にも。あゝといひ。はれといふ是也。たとへば月
花を見て感じて。あゝ見事な花ぢや。はれよい月か
ななどいふ。あはれといふは。此あゝとはれとの重
なりたるものにて。漢文に嗚呼などあるもじを。あ
あといひも是なり。といはれたるはいかにぞやおほ
ゆ。その故は。物に感じてあゝといへるは。古今た
がふことなきを。はれといへることは。をさゝく物
にも見えざるに。今の俗言にも聞たることなし。も
しくは伊勢わたりの方言などにや。いと心得がた
し。さればたゝあはれといふは歎息の聲とのみ見る
べき也。此外の説はすべていとめでたし。小櫛に云。
人は何事にまれ。感ずべき事にあたりて。感ずべき
こゝろをしりて感ずるを。ものゝあはれをみるとは
いふを。かならず感ずべき事にふれても。心うごか
ず感ずることなきを。物のあはれしらすといひ。心
なき人といふ也。ものゝわきまへ心ある人は。感

ずべき事はおのづから感ぜではえわらぬわびなる
に。さもあらぬは。何とも思ひわくかたなくて。か
ならず感ずべき心をしらねばぞかし云々。此物語は
殊に人の感ずべき事のかぎりを。さまざま、かきあら
はして。あはれを見せたるもの也。まづおほやけわ
たくしおもしろくめでたくいかめしき事のかぎりを
かき。又春夏秋冬をり、花鳥月雪のたぐひを。
おかしきさまに書あらはせるなど。これみな人の心
をうごかし。あはれと思はする物にて。心に思ふこ
とある時は。殊に雪のけしき木草の色も。あはれを
もよほすくさはひとなるわざ也云々。廣道云此次に物語
が考はるる巻々に注すべし。そも、紫式部が本意。とに
かくに物のあはれをしるをむねとはして。しらざる
がいふかひなきことはさらにもいはず。またそをし
りたるふるまひの過たるも。あぢきなくよからぬこ
とにて。其ことのすぢによりては。かならずあだな
るかたにながれやすきわざなれば。心には深く思ひ
しりて。そのよきほどを思ひめぐらして。顯はしふ
るまふべきすぢもあること。上の件に引出たる。巻
巻の事どもを考へわたしてしるべし。これぞ此物語

の大むねなりける。さてそは作りぬしの。みづから
すぐれて深く物のあはれをしれる心に。世中にあり
とある事のありさま。よき人あしき人の心しわざ
を。見るにつけきくにつけふる、につけて。そのこ
ころをよく見しりて。感ずることの多かるが。心の
うちにむすば、れて。しのびこめてはやみがたきふ
し、くを。その作りたる人のうへによせて。くはし
くこまかに書顯はして。おのがよしともあしともい
はまほしき事どもをも。其人に思はせいはせて。い
ふせき心をもらしたる物にして。よの中の物のあは
れのかぎりは。此物語にのこることなし。さてこれ
をよむ人の心に。げにさもあらんと深く感ぜしめん
ために。何事もことさら深くいみじく書なしたり。
か、れば此物語をよむは。紫式部にあひて。まのあ
たりかの人の思へる心ばへを語るを。くはしく聞に
ひとしく。又物語の中に見えたるよきあしき人のし
わざ心のおもむきを。よく考へみれば。しか、の
物を見聞たる時は。かやうに思はる、もの。しかし
かの事にあたりたり時の心は。かやうなるもの。よ
き人のしわざ心は。かやうなるもの。わるき人はか

やうなるものとやうに。すべて世中の有さま。なべ
て人の心のおくのくま、くまで。いとよくしられて
物の心をわきまへしりて。からぶみにいはゆる。人
情世態によく通せんこと。此物語をよむにしくもの
あらじとぞおほゆる。小櫛 廣道云。この論まことに
さることにて。作りぬしのしたの心を見とほしたら
んがごとし。これにつきていはまほしき事のある
は。すべて古今。學問といふことする人。多くはた
だ書籍に書たる事をのみ讀ならひて。今の現の眼前
にあることをばさしもたどらず。ひたすら理といふ
事をさきだて。何事も、その理におしあてかな
へんとすることよ。そも、學問といふ事は古の道
を學ぶも。もはら古のありさまをしりて。それにくら
べて。おの、生るほどの世中のありさまをもさと
り。事の成るべきやうをも思ひめぐらさんためなる
べきを。かの理といふものをおしたてたるのみにて
は。今日の日のありさまに。さながらかなひたる事
は少くして。しか學びたること。つゆもたがはずあ
ひわたる事はなきもの也。しかるを強て其理にかな
へんとては。さまざま、賢ふりたる行ひなどして。心に

もあらぬわざどもを。他にか、はらずなしいで、頑固なるふるまひするを。みづからこそいみじとも思へ。大かたの世人よりみれば。いともくあやしくこそさらびたることなるをもて。はては學問する人は。家をも身をも失ふもの、やうにさへいしらふめるは。いとあぢきなく心うきわざになんある。さるはいはゆる。人情世態に通ずるかたの學問といふことの。殊にあらざる故ぞかし。されば物語ふみの類を見て。人つ情のくまを。なごりなく知明らめて世の中のあるやうをもさとり。さて千萬の書籍どもを讀ば。一書よみて一巻のかひあらんと。疑ひなかるべし。げにそのかたのためなどには。又此物語に過たるものはあらざりけり。昔宮木孝庸といひし人。其君なる玄旨法印に。世間の便になるべき書は。何をか第一と心得侍らんと問しかば。源氏物語と答へられけるとぞ。もしくはかゝるかたの事どもを思ひ給へりけん。これら猶いといはまほしき事どもあれど。それもまた別巻にいふべし。さて又玉小櫛に云。人の情の感ずる事戀にまざるはなし。されば物のあはれのふかくしのびがたきすず

は。殊にこひに多くして。神代より世々の歌にも。其すぢをよめるを殊におほくして。心ふかくすぐれたるも。戀の歌にぞ多かりける。又今の世の賤山がつうたふ歌にいたるまで。戀のすぢなるが多かるも。おのづからの事にして。人の情のまこと也。さて戀につけては。そのさまにしたがひて。うきこともかなしき事も。うらめしき事も。はらだ、しきことも。おかしき事も。うれしきこともあるわざにて。さま／＼に人の心の感ずるすぢは。おほかた戀の中にとりぐしたり。かくて此物語は。よの中の物のあはれのかぎりを書あつめて。よむ人を深く感ぜしめんと作れる物なるに。此戀のすぢならでは。人の情のさま／＼とこまかなる有さま。物のあはれのすぢれて深きところの味はあらはしがたき故に。殊に此すぢをむねと多く物して。戀する人のさま／＼につけて。なすわざ思ふ心のとり／＼にあはれる趣を。いともくこまやかにかさあらはして。ものゝあはれをつくして見せたり。後の事なれど。俊成三位の。戀せず人は心もなからまし。物のあはれもこれよりぞしる。とある歌ぞ。物語の本意によくあ

たれりける云々。廣道云。こゝに此物語の中なるあはれの深くしむ。のびがたき記事ども引出られたれど。例のは上件の文どもに。あやしの心やとわれながら。おぼさる。葵巻の詞思ひかへし給へどえしもかなはず。女巻などあるをもて。此道の物のあはれの。深くたへがたきほどをしるべし。されば此すぢにつけては。さるまじきあやまちをも引いで。ことわりをひけるふるまひも。おのづからうちまじるわざにて。源氏君のうへにて。空蟬君の事。朧月夜君の事。藤壺中宮の事などのごとし。戀の中にもさやうのわりなくあながちならずには。今一きはものゝあはれのふかき事ある故に。ことさらに道ならぬ戀をも書出て。其あひだのふかきあはれを見せたるもの也云々。といはれたり。此次にその事ども引れたれ。此論もいといみじく聞えたり。そもく戀などいふ事はしも。今俗の心にては。皆いはゆる淫奔放蕩不義非禮の事をさしてのみいふことと思ふらめど。それは皆儒佛の教に耳なれて。しか思ひならへるものにこそあれ。實に男女のなからひは。天地の神のおのづからになし出給へる道にして。さらに人の力もて禁むべきものにはあらず。生としける物のかぎり。この

道しらぬもあらざるは。これによりて次々に子孫をうまはりもてゆく。世の中の本と有ことなれば也。然れどもさばかりいひて。いさめずしもあらば。これによりて争ひもおこり。世のみだれともなるべきなれば。ほど／＼に其道をおきて。おぼやけより其偶ふべきやうを定め置給ふ。これやがて其世の大道にして。諸人のふみしたがびゆく所の規則なり。されば梅枝巻に源氏君の夕霧君を教諭し給ふ所なども。戀のかたにてみだれ給ふことを。いたく禁しめ給へり。これ人世の道なればなり。されどもその方の事は。法令の書をはじめて。萬の教誡の書に載たれば事つきたり。物語ふみは。世中のよきもあしきもとりあつめて。真情のまゝにかたりもてゆくものなれば。さる教誡は教誡として。おのづから情のひくかたのさがたきよしを。あらなすを主として。さる教誡にはかゝはらぬなれば。さる心して見るべき也。然るを昔よりの注どもに。戀のすぢの事をいたく耻で。或は勸善懲惡といひ。或は好色の禁誡也などさま／＼の事どもをいはれたるは。皆儒佛の書の例をもて物語を見られたるひがことなるよしも。

又玉小櫛に委く辨へられたれば。彼書を見て知べし。其論の末の所に云。ものゝあはれを見せんと作れる物語を。教誡にとりなすは。たとへば花を見んとて植おふしたる櫻の木を。伐くだきて薪にしたらんがごとし。薪は一日もなくてはえあらず。せちなる物なれば。それわろきにはあらねど。薪にはよき木どもの。ほかにあまたあなるに。あたらし櫻をきりたらんは。中々に心なきしわざとぞいふべき。なほいは。儒佛の教とおもひさかはりこそあれ。物のあはれをしるといふことを。おしひろめなば。身を。さめ。家をも國をも治むべき道にもわたりぬべき也。人のおやの子をおもふ心しわざを。あはれと思ひしらば。不孝の子はよにあるまじく。民のいたつき奴のつとめを。あはれと思ひしらんには。よに不仁の君はあるまじきを。不仁なる君不孝なる子もよにあるは。いひもてゆけばものゝあはれをしらねばぞかし。されば物語は物のあはれを見せたるふみぞ。といふ事をさりとて。それをむねとして見る時は。おのづから教誡になるべきことは。よろづにわたりておほかるべきを。はじめより教誡の書ぞと心得て見

たらんには。中々の物ぞこなひぞありぬべき。といはれたり。これまたいみじき論にて。今までのちうさくどもに。かけてもいはれぬ事なるを。此翁ははじめに見出られたるにて。いとおむかしくめでたし。かゝるにつけても玉小櫛は。此物語の註釋どもの中に。一きはぬけ出たる書なるを知るべし。

一部大事といふ事

紫家七論に。一部大事と標したる條ありていはく。冷泉院の御事。或はつくり物語なり。ふかく沙汰する事なかれといひ。或は子細ある事也としきりに是を秘し。或は此趣向の見にくきにて。一部の物語とりてだに見せはしからず。と申ともがらも侍り。ともに紫式部が本意をしらざるものといふべし。爲章試に今案をしるして。識者の是非をまち侍るべし。とて桐壺巻より次に。薄雲巻若菜巻などの語どもを引て。物のまぎれの事を論じて。伊勢物語に二條后。後撰集に京極御息所。榮華物語に花山女御。これらの御かたゝ心ばせおもからずして。私のねぎことになびきたるなるべし。されどさいはひにしてものゝ

まぎれを御覽じえざる也。とて。もろこしの楚。幽王晋の元帝などが事を引出て云。これ他の國の事にてさへ心よからず。いはんや朝廷は皇神のさづけさせ給ひしより此かた。萬世一系さらにまぎれ給ふことなきもの也。すゑの世にも女御更衣のうちに。心ばせおもからぬうちまじりて。帝系のまぎれもいでさぬべしやと。遠くおもひはかりし諷諭を見れば。式部は女なれども。其性質の美と學問のちからとうちあひて。識見おのづから大儒の意にひとしいふべし。又薰大將の事は天道好還の理をしめしたるおもむき。羅大經が筆に同じ。羅大經が筆とは。上に晋帝を論を今ははぶきたり。したる。韓林玉露の文の事なる本書を見るべし。此一件が一部の大事にして。講ずる人の意得あるべき事也。といひ。また或問を設けて答へて云る事の中に。皇胤御一代にても。在原氏藤原氏などにまぎれ有んは。吾國の御爲もの憂事にして。東海をふむ魯仲連ありぬべし。さるは藤壺に源氏の通ひて。冷泉院をうみ給ふは。誠にあるまじきあやまちにして。源氏姦淫の罪重しといへども。皇胤のまぎれおもはずなるかたにあらず。桐壺帝の御爲には。正しく子なり孫なり。神武天皇の御血脉な

り。伊勢宗廟其祀をうけ給ひ。天下の蒼生其まつりごとをいたし奉るべし。それすら猶冷泉院の御後をすて。朱雀院を正統にかへせるは。いとも厳しき筆にあらざるや。そも一旦人倫の亂あると。長く皇胤のまざる。と。何れか重くいづれか輕かるべしや。斷案をくだしがたしといへども。臣下の意にていは。源氏の罪をしらざるまねして。皇胤のおもはぬかたならぬをよろこぶべし。式部が主意おしはかるべし。さしもに用意ふかき式部が。當時宮中にも披露する物語に。心得なくして書べしや。此作言諷諭に心つかせ給ひて。いかにもものゝまぎれをあらかじめふせがせ給ふべし。ようせずはうたがはしき事ありぬべし云々。とて。猶くはしく論じてすべて諷諭と見たり。然るを玉小櫛に。又これを論じて云。冷泉院のものゝまぎれを諷諭にとりて。一部の大事也として。そのよしを論じたるも。なほ儒者ごゝろにして。ひたすらもろこしのふみどもの例にのみなぐみて。物語のこゝろをしらざるもの也。その論の中に。源氏君と藤壺中宮との密事を。はじめにはいとやさしきまにかきなし。終りにはい

とおそろしく有まじきあやまちなりけり。とことわりたる氣象を見よといひて。しひて諷諭にせんとしたれども。さきにも薄雲巻を引ていへるごとく。源氏君此事を。後にはいとおそろしくあるまじかりける事とおもひしり給ひながら。其後もなほ朧月夜君に忍びく逢給ひしは何とかいはん。もし藤壺中宮の御事を。いとおそろしきあやまちなりとことわれる心ならば。其後にかゝる事をまさに書べしや。もしはたして諷諭ならむには。一たびはいましめながら。又立かへりてすゝむるにぞなりぬべき。又みをつくしの巻にいはいく。當代のかく位にかなひ給ひぬることを。思ひのごとうれしとおぼす。注これは源氏君のおぼせるにて。當代とは冷泉院の御事也。もしかの論のごとくならんには。源氏君冷泉院の御位につき給へるにつきては。いよくおそろしく思ひて。皇胤のまされぬる事を歎き給へるさまにては書べけれ。かやうに思ひのごとうれしとおぼすなどは書べきものは。なほこの物のまされのかの説ども。あたらぬこと多けれども。かしくさすぢの事なれば。今はその辨へはもらしつ。かにかくに此御事。わき

て諷諭といふべきにもあらず。そもく此物のまされは古今ならびなき大事にはあれども。物語は物語なれば。さる世の中の大事を。一部の大事として書べきにはあらず。これも物語にては。たゞ物語の中の一つの事にぞ有ける。然らば此事はいかなる意にて書るといふに。まづ藤つぼの中宮との御事は。上にもいへるごとく。戀の物のあはれのかぎりを。深くきはめつくして見せむため也。そは男も女もよきことのかぎりをとりてし給ひて。よろづに丁ぐれて。物のあはれをしり給へるどちの御うへといひ。又ことわりたがへるあながちなるあひだの戀には。殊に今一きはあはれのふかきことある物なる故に。ことさらにわりなくあるまじき事のかぎりなる戀を。此御方々のうへに書出で。かたたく物のあはれ深かるべきかぎりをとりあつめたる物ぞかし。さて冷泉院のもの、まされは。源氏君の榮えをきはめんために書る也。そはまづいづれの物語にも。むねとしてよきさまにいふ人有て。その人のうへをいふとは。よにあらゆるよき事をえりあつめていふ中に。身のさかえは人の世のよき事のかぎりなれば。

其人の萬にさいはひ有て。つひにうへなき身となりぬる事などをいふぞ。物語の多くの例にて。此物語も源氏君の榮えをきはめてかゝんとするに。人のさかえのきはまりは帝の御位にして。執政大臣といへ共。たゞ人はなほあかぬところある故に。太上天皇の尊號をかうふらしめんとするに。さるべきよしなくはゆくりなく。まことに淺はかなるつくり事めくゆゑに。帝の御父とせん料に。此物のまされは書るもの也。そもく此君。帝の御子にて。后と大臣とを御子にもち給へるうへに。帝の御父にてさへおはしますよしをもて。太上天皇になり給へる。かくてぞたふとくめでたき御身の榮えはきはまりける。なほ此尊號かうふらしめ奉ん料也といふあかしは。薄雲巻に。夜居の僧の此物のまされを。はやくよりしり居たるが。みかど冷泉院へひそかに奏せんとする時の詞にいはいく。これはさしかたゆくさきの大御事と侍ることを。過おはしましたし院ささいの宮。たいいま世をまつりぞち給ふおとゞの御ため。すべてかへりてよからぬ事にやもり出侍らん。かゝるおいはうしの身には。たとひうれへ侍りとも。何のく

いか侍らん。佛天のつけあるによりて。奏し侍るなり。廣道云。本書に、に注ありてその辨あれど。長ければ今はぶきつ。おのが考はの巻にいふべし。かくて奏したることをさこしめして。みかどの此僧にのた文へる御詞にいはいく。心にしらすきなきましかば。後の世までのとがめ有べかりける事を云々。こゝにも注はぶ。又僧の申せる詞に。天變しきりにさとし。世中しづかならぬはこの氣なり云々。よろづの事。おやの御世よりはじまるにこそ侍るなれ云々。註あり。かくて次の文にいはいく。いよく御がくもんをせさせ給ひつ。云々。一世の源氏。又納言大臣になりて後に。さしにみこにもなり。位にもつき給へるもあまた例ありけり。人がらのかしこきことよせて。さもやゆづり聞えましなど。よろづにぞおぼしける。秋のつかさめしに。太政大臣になり給ふべきこと云々。註あり。そもく此物のまされの事。さきくの巻よりつきくにいひ來て。こゝにいたりて。源氏君を御位につけ奉らんとおぼしめしよりたるところへおとしたる。次第のおもむきをよく考ふべし。さて此君の榮えをきはめて書むとならば。今一きさみす。めて。帝の御位につけ奉るべきを。太上天皇にてやみ

ぬること。作りぬしの深く心をつけたるもの也。そは狭衣物語に。がの大將をつひに帝にしたるは。此物語の源氏君をまねびて。今一きはすゝめて書るものなるを。かの大將は。帝の位につけたるによりて。何とかやまことにつくりごとめきて。そのよしなく。中々に淺はかに聞ゆるを。紫式部はそこをよく思ひたるものにて。帝の御位をばのこして。太上天皇もそのよしなくてはゆくりなき故に。桐壺巻に。こま人の相したる詞に。國のおやとなりて。帝王のかみなき位にのぼるべき相おはします人の。そなたにて見れば。みだれうれふる事やあらむ。とはじめよりまづしたがまへをまうけおきて。此物のまぎれをかきて。かならず尊號を蒙り給はではかなはぬさまにかきもてゆきて。薄雲巻に至りて。御位につけ奉らむとある所に。此君の詞に。故院の御心ざし。あまたの御子たちの御中に。とりわきておぼしめしながら。位をゆづらせ給はんことをば。おぼしめしよらずなりにけり。何かその御心あらためて。及ばぬきはにはのぼり侍らん。とある。これ帝の御位にのぼり給ふべきなれども。その一きはをば。ことさ

らにのこせりといふ。つくりぬしの下心を思はせたる詞にて。いともし心ふかき作りさま也。大かた此もの、まぎれをかきたることは。此源氏君の榮えをきはめんとめといふこと。上件のおもひきどもをむかへてしるべし。なほいは。かの狭衣は。おほかた何事も此物語をまねびて。すこしづゝ事のさまをかへて書る中に。大將の女二宮にしのびて逢奉りて。うみ給へる御子を。さかのるんの皇子にしなして。まぎらはして後に。その御子を東宮にたて奉らんといふさだめある時。天照大御神の御告によりて。つひに此大將を位につけたる事は。もはら此冷泉院の物のまぎれをまねびて書たる物なるを。それもかの大將を位につけて。榮えをきはめんとめなること。此物がたりと同じ作りぬしの意也。さればかれをもてこれをなずらへしるべき也。小上といはれたり。此二つの論いづれよからむ。皆作りぬしにしたに思へる事なれば。後よりおしきはめては。さらいにふべきよしはなきものから。既にかゝる論どもの出来しうへは。たゞにもえあらで。おのれが思ふむねをもいさゝかこゝに記しつべし。さて此二つ

の論のうち。おのれはまづは安藤氏のいへるかたやよろしからんぞとおぼゆる。さるはかの七論のかきさまは。小櫛にいはれたるごとく全く儒者意にして。漢籍の例をのみもて論じたる物にはあれど。作りぬしをしたの心は。いさゝか諷諭めきたる事もありしにか。とおぼゆるよしもあればなり。その故は此物語よりささぐの物語も多かれど。帝の御妻にもの、まぎれありて。其御中にうまれ給へる御子を。御位につけ奉り給へりなどいふ事は。絶てなく。大かた此物語をはじめなるべきを。便し今の世に傳はらりしと聞えたり。それらにはさるべきを。わあだし物語も多かりしと聞えたり。それらにはさるべきを。つらゝゝ事の情をおして案ふに。作りぬしの在世のほどより。此物語ははやく宮中に流布したるさま。かの日記にしろく見えたれば。人にもかつゝ見せられけんほどしられたり。さてしか人も見て流布したらんには。つひに帝も皇后も見給ふべき物なるに。かくめづらかにかしこきすぢをかゝれたること。いともしも意得がたし。それはたもろこしのごとく。他し氏々の世といふことあらばこそ。それになぞらへても書のがるべきを。わが御國は。神代よりさることなれば。い

づれの御時にかとはかけれども。まさしくわが國の其世のさまをうつしたる趣なれば。たゞひ嵯峨天皇に准へ。醍醐天皇に擬へ奉りたるにもあれ。時のみかどの御先祖にませば。むらゐの罪さりとて。何事もよろづおほらかによびかにて。きはゝしく咎め給ふなどの事はあらざりし時にはあれど。つひには帝もみそなはさん物に。かくあるまじき事どもを。ものふかく用意ありし人の。つゝまはずかゝれたるにておもへば。心の底に思ふ事どもは。必ありしなるべし。さるは安藤氏のいへるやうなる意なりしか。そはきはめていひがたけれど。大かた此一條のみは。諷諭めきて聞ゆる中にも。かの柏木ものまぎれは。まさしく其報を示したるにて。そのころむねと行はれたる佛説の趣によりて。因果を觀面に見せたる物なり。しかれどもしかげゝゝとはかかずして。深くたどりて見ん人の心にまかせつゝ。さる諷諭めきたる筆つきをあらはさずして。人情のゆくまゝにかきまぎらはしたる。これやがて作りぬしの意にて。女の議論がまじきをつゝめるなり。な

はいはい。此事は桐壺巻に。世の人光る君ときこゆ。またかやく日宮と聞ゆとある所。伏案のはじめと見へたるに。この二つを對へ舉たるをみれば。此物のまぎれの事。物がたりの中のむねとある事にて。其餘の事どもは。皆これをまぎらはんために。あやなしたる物のやうにさへ見ゆめり。されば此事のみは。猶作りぬしの意ありし事となんおぼゆる。そはいかなりし事を思へるにか。今實には知れがたき事なるを。しひていはんはかしこきわざなれば。おのれも又その論をばとめつ。よく見ん人はよく見てよくさとするべくなん。さてかうやうに見る時は。小櫛の説はいかゞしきを。かつつこゝに辨へいば。まづ源氏君。此事を後にはいとおそろしくあるまじき事と思ひしり給ひながら。其後もなほ臚月夜等に恐びし逢給ひしは何とかいはん云々。といはれたる。ことわりはまことにさる事なれど。これすなはち情を本として。物のあはれをむねとかけ。物語ぶみの體にして。あるまじき事とはおもひしり給ひながら。なほわが御心にもまかせかね給ひて。のどめずかよひ給へる趣なれば。これをもては論ずべ

からず。安藤氏のいへることは。げにもつきやうなる儒者意と聞えたれば。おそろしくあるまじく思ひ給ふ。とあるのみをもて。諷諭といへるは。今少しわたらぬことなれば。それを辨へられたるほことわりなれど。かくいひつめては。これもまた議論といふべきまにぞ聞ゆる。すべて諷諭といふものは。その事とさしあて、いふ議論のごとくにはあらでた作りぬしの心の庭にのみ秘たる事なれば。この巻にはかくいへり。その巻にはしか書りなどいふ。巻の例などをもていふべきにはあらず。もししかつふしとさだかに跡あるほどならば。諷諭とはいふべくもあらず。又其心得させんための人にだに聞ゆれば。其餘の人には聞えざるも。なでふ事かあらんなれば。さらぬやうにまぎらはして。其事をつむが諷諭のならひ也。されば今となりては。いよく知れぬ事なれど。其世のままとその事がらと思ひて。作りぬしの心をおして。かうもやと思はんぞ。この諷諭といふことの見やうなりける。あだし事どもは。此物語の中に。作りぬしの意を揆みていへる事あるを。こゝかしこ引合せて考ふれば。大かたし

らる。事なるを。かくにははせてさとしたる事は。それにか、はるべき事にはあらずかし。然れどもかの巻に。物語の心ばへをかける所に。その人のうへとてありのまゝにいひいづる事こそなけれよきもあしきも世にふる人のありさまの。見るにもあかず。さくにもあまる事の。後の世にもいつたへさせまほしきふしつゝを。心にこめがたくて。いひおきはじめたるなり。とあるなどは。物語のすべてのさまをいへるなれば。これらの證には引もいづべくや。さてまた小櫛に。みをつくしの巻に。當代のかく位にかなひ給ひぬることを。思ひのごとうれしとおぼすと。あるをも引いで、いはれたることも。しかおぼすは。大かたの人情のかたにつきて。しかおぼすべきさまのことを書たるなれば。證にすべき事にはあらず。又皇胤のまきれぬることを歎き給へるさまにこそ書べけれ。といはれたれど。しかか、ばやがて議論がましくなりて。いはゆる勸善懲惡などの體なるべし。諷諭と勸善懲惡とは。其すぢ異なる事なるを。大かた一ツことのやうに。おしくるめていはれたるは。たゞかの儒者意をやぶらんとてのわざな

るべけれど。いまずこし細しからざるに似たり。さて又物語は物語なれば。さる世中の大事を。一部の大事として書べきにはあらず云々。といはれたるもいかゞ。おのれは中々に。さる世中の大事のために。一部の物語は書たるもの、やうにおぼゆる也。さるはあだし物語どもは。させるふしもあらねば。いはれたるやうに。一部の大事などを思ふべきにはあらざれど。此物語は一ふしやうかはりたるに。此物のまぎれの事ばかりは。いたくめづらかなる事にて。かいなでの物語どもの例をもていふべき事とはおぼえねば也。また諷諭などいふ事は。大かた儒者意にはあなれど。此作りぬし。みながら漢籍を見ぬ人ならばこそあらめ。すでに文法なども漢文に似たる所ありて。あだし物語とはこよなくかはりたるに思へば。あながちに彼にならへるにはあらねども。さることおもはずとは定めがたくやあらん。されどこれは。かの諷諭のかたにひかる、ひが心にもあらんか。とにかくに證なき論なれば。しひていふべくもあらず。さて又ことわりにたがへるあながちなるあひだの戀には。殊に今一きはあはれのふかきことあ

る物なる故に。ことさらに云々といはれたるは。一
 わたりさることに似たれど。それも事がらによるべ
 き也。かく皇胤のまぎれぬばかりの事をしむ。とり
 たて、書ずとも物のあはれのふかきことはいくらも
 あらんを。殊更に此御かたのうへにしもか、れ
 たるは。別に心あるものに似たり。なほは、宇治
 の卷々などは。かくあるまじき事のかぎりをばか、
 れたらねど。もの、あはれのせちなることは。今す
 こしまさりて聞ゆるをもても。あはれのかぎりは。
 あながちに上なき御かたのうへならでも作りぬ
 しの心にて。つくして見せんもやすかるべくなん。
 さてまた源氏君の榮えをきはめんために書る也。と
 いはれたることゝもは。殊にいかにぞや聞えたり。
 人の榮えのきはまはりは。帝の御位にして。執政大
 臣といへども。たゞ人はなほあかぬ所ある故に云々
 といはれたれど。それまた事がらによるべき也。そ
 も、他の國の帝などならばこそ。帝の御父とせん
 料になど。意にまかせてもかくべけれ。これはかの
 薄雲卷に。冷泉院の帝の先例をかながへさせ給ふと
 ころにも、もろこしにはあらはれてもしのびても。

みだりがはしき事いとおほかりけり。日本にはさら
 に御覽じうるところなし。たとひあらんにても。か
 やうにしをびたらん事をば。いかでかつたへしるや
 うのあらんとする。とあるごとく。我御國は神代よ
 りうごなき御くらむなるを。いかに空言物語なれ
 ばとて。かくおふけなき事のか、るべしや。それよく
 心得たる人なればこそ。かくさまにいへるにはあれ。
 さらばいよ、ことに意あるに似たり。榮えのきは
 めをか、んとて。執政大臣などにしなしたりとも。
 其か、んやうにて。榮えのきはみとは聞ゆべければ。
 何のあかぬことかはあらん。よしや帝の御位にのほ
 り給ふさまにかけりとも。かうあるまじき御中のゆ
 ゑならでも。のほり給ふべきやうは。前にいくらも
 あるべし。しかるをかくおそろしき事の故にて。太
 上天皇の尊號得給へるやうにかきなしたるは。子細
 あるべき事なりかし。さてまた薄雲卷に夜居の僧の
 此事を帝へ奏する所の語どもを引て。尊號かうふら
 しめ奉らん料也といふ證とせられたるは。げに其
 料とは見えたれど。これによりてたゞ榮えをきはめ
 んための料のみとは見えず。されば其語を注せられ

たるおもふきも。本文の意とは異なるやう也。おの
 れが考はかの卷にいひて。そこに件の説を辨ふるを
 見るべし。此一條をすべて。源氏君の榮えをきはめ
 んための料也。といはれつれど。さばかりには見え
 ず。源氏君の榮花のさかりは。藤末葉卷にて。何事も
 みな御心のま、になりたるさまにかきて。前の卷々
 に見えたる事どもはてを結び。さて太上天皇に准
 へ給ふ事をいひ。其次に六條院へ行幸の事ある。こ
 れぞ榮えのさかりのきはみをか、れたる所とぞ見ゆ
 める。其次の若菜卷に。四十の御賀の事の見えたる
 も。榮えのきはみの事にはあれど。かの卷は既に女
 三宮の事より。卷の始を書出られたるは。柏木の物の
 まぎれの伏案にて。衰にむかふ始なれば。此卷より
 は衰へがたをかける物と見るべし。それより女三宮
 の事いできて。つひに薫君生れ給ひ。右衛門督うせ
 給ひ。落葉宮の事あるまで。皆源氏君の御心をくる
 しめ給ふ事のみなれば。よきかたの事にはあらず。
 さてつひに御法卷に。紫上のかくれ給へる。これ悲
 哀のきはみなるに。幻卷はそのかなしひの事のみを
 か、れたれば。すべて源氏君のうへに。榮えばかり

をか、んと構へたるにはあらざる事をしるべし。も
 し源氏君の榮えをのみ物せんとならば。か、るわろ
 きかたの事をばはふきて。紫上の事も雲隱のうちに
 こめ。柏木のくだりもことよくのがれ給へるさまに
 か、べき事なるを。かくあしきかたの事をもかける
 は。みなかの物のまぎれの報應を示せるものなるべ
 し。さてつひに源氏君の御末の榮えは。夕霧大臣の
 かたにとゞめ。桐壺帝の御末は。朱雀院の御子のか
 たに定め。致仕大臣の末は。紅梅大臣にとゞめたる
 も。安藤氏がいへることく。作りぬしの用意ありし
 事なるべし。さてまた太上天皇にてやみぬること。
 作りぬしの深く心をつけたるもの也とて。狭衣の事
 を淺はかに聞ゆといはれたるも。桐壺卷の相人の事
 も。薄雲卷の照應の事も。皆いはれたることくにて。
 つゆもいふべきよしなし。但しこれもたゞ榮えをさ
 はめんためのみなるやうにいはれたるばかりはうけ
 がたし。又かの狭衣を引て。かの大將を位につけた
 る事になすらへて。榮えをきはめんためなることを
 しれ。とやうにいはれたるもいかい也。げにかの物
 語は。此物語をうつせるものにて。其例を思ひたる

事勿論なれど、かの大將をつひに位につけたるにて
も、まぎらはしきを省きすてたる。作りぬしの意はし
るきにはあらずや。そも、ウヂノ氏姓を賜はることは、
御臣となり給へる事のしるしなれば、一たび氏姓を
賜ひては、ふた、び皇子となりて、大御位を嗣給ふ
べくはあらぬことわりなれば、いとしも上つ代には、
絶てなき事なりけるを、後にさる例の出来しは、さ
るべき皇子たちのおはしませで、やむことを得給は
ざりし時の例なるを、其例を例として、いかさまに
も作るべき物がたりふみは、あながちにかくべきや
うやはある。然れどもまほならぬ皇子たちの、もし
さる故ありて、御位につかせ給ふ事などあらば、そ
れこそは御臣に下り給へるを、かへし給はんにはお
とりたるらめ、よしや世人はしらずがほつくるとも。
天照大御神の何とか見給はんとすらん。狭衣の作者
の、そこをおもへる故ありて、大御神の御告により
て、かの大將を御位につけたるは、げにいとさるべ
きことわりにて、此物語の天變の事。又冷泉院の御
後をたちたるなど、もはら同じかきさまとこそお
ぼゆるなれ。されどかうやうの事どもは、皆つくり

ぬしの心のそこにありし事にて、誰かはその實を知
るべきなれば、七論も玉小櫛も、共にいたづらなる論
にちかく、今かく辨へいふことも、猶た、同じおし
はかりごとなれば、これかれともいたづらごと、
いふべくなん、後の見ん人おのがじ、心をにえらび
てとりぬ、さてまた此論どもを見て、もし安藤氏が説
を、げにとおもふ人などあらんに、かの諷諭の旨を
なほもいはんとて、この作りぬしの御世さまの事を
引あて、試に論ずる類、ゆくさまにも必あらんと思
ふを、それはいとくひがことなれば、さらに思ひか
くることなけれ、そも、我皇國のならばは、た
とひかしこき御あたり、いかやうの御事あらんに
ても、けざくとあらはして、其よからぬ事をいふ
などは、かけてもあらぬことなるを、後世にいたり
ては、憚なくいひららす類も出来しは、皆もろこし
さまのならばしのうつれるにて、いともくかしこ
きわざなれば、ゆめく、此うへの事をいふべから
ず、もしさる推量の事どもをいはんとらば、廣道
らもいと多くいふべきを、かくてのみさしおくは、
わが大御國よりの御おもひけにしたがひ奉るもの

ぞ。かへすくもくちさがなき事をないひそとよ。
但し物によそへなどしていふ事は、昔より例ある事
なれば、この作りぬしの心ありげに見ゆる事ばかり
を、事のついでにあげつらへる也。さればたゞ子細
ありし事なりけん。とのみ見てあるべし。あなかし
こ。

總論下
此物語注釋どもの事

此物語のちうさくの事は、源注拾遺玉、小櫛にいはれ
たるごとく、河海抄ぞ大部の抄の始なりける。然れ
ども契沖のいはれたるやうに、暗記の誤などにやあ
らん。某の書にありとて引出給へることの、今の本
にはさらに見えぬ事ども多く、又引歌の句なども、
本集とはこれかれかはりたること、あれば、た
しかなるあかしになりがたき事おほし。其次は花鳥
餘情なるが、これはた大かたは河海によられたる事
も多く、又誤れる件ども、少からずして、ひたすら
には従ひがたし。其次には、咲花、細流、明星、孟
津、岷江入楚、萬水一露、湖月抄など、なほさまく、
多かれど、本居翁のいはれたること、皆さまさま
の抄どもを引出て、すこしづ、考を加へられたるの
みにて、さしてかはれるふしもなし。其中に細流は
一ふしありて聞ゆる事も多く、餘の抄よりはいたく
まされること、もあり。また湖月抄は、師説も今按
じ、さまく、の抄にはたちさまりて聞ゆる事のおほ

かるは。さきくの抄どもをくらべて見て。そのよろし
きに從へる故なるべし。されども多くは。岷江入楚
よりぬき出たりと見ゆる事ありて。入楚に引もらさ
れたる事は。さながらに遺りたる事どもあり。此
抄は本文をさながらに擧げたるに板本にて得やすき故に
や。今世にもあつかふ物。大かた此抄ならぬはな
し。されどなほいかにぞやおぼゆる事どものおほき
よしは。玉小櫛にしくはしく辨へられたるがごとし。
さて河海花鳥をはじめて。其ほかの抄どもは。おほ
かた雲の上はるかなる御かたのあらはし給へる
物にて。時代もなほいにしへに近かるを。かゝるは
いかにといふかしむ人どものあなるは。げにさるこ
と也。其故をいかにと考ふるに。大かた中昔よりこ
なたの物識人たちには。あぢきなき一の癖ありて。
何事のうへにも秘説などいひて。させるふしもなき
ことまでも秘らるゝ事なりし故に。かゝる抄どもを
も。たゞ一人一人にのみ秘傳へて。あまねく人に見す
る事などは。をさくしなかりしならはしなりしうへ
に。古の書どもを見集めて。事の證を考ふるなどの
學も。おろそかなりしかば。たゞかくぞと一わたり

に考へ出たる事を。暗記のまゝに注しつけられたる
類ひも多き故にぞあるべき。又昔の公事儀式。或は
衣服調度の故實などは。さるやんことなき御家々に
て。注せられたることなれば。これは誠に誤なかる
べき事なるを。それだに古き書と相てらして見れば。
猶いかにしくおぼゆる事どもあり。案にこの物語
つくれる。一條院天皇の御時よりはそこの年をか
さねきて。令式の御制度も。やうくあらぬさまに
なりゆきたるに。承久建武の亂れよりは。大内のあり
さまも。いたく古にたがへることおほく。注者たち
のいさしける世も。大かた亂世なりし故などにぞあ
るべき。もとよりもさながらに。しられたる事なら
ば。別にちうさくを物せらるべきわざにもあらぬを。
既に注釋を物せられたるにても。こゝかなる事ども
の知れざりしほどはいちじるし。然ればそのかたさ
まの説ども。又ひたひきにはたのみがたし。され
ば今は湖月抄よりあなた注どもは。舊注と稱へて
大かたには漏したり。されど事のさまの違はざる事
は。先づ舊注より擧めてゆくべきことわりなれば。十
に二三をばしるしつけぬ。さて契沖はうしの源注拾

遺は。右の舊注どものたがへる條どもを。あまねく
古書どもに考へたゞして。其わろき事どもを論ひ
たる物にて。いとおむかしくめでたきふみ也。此人
はよにいみじきさえありし人にて。其餘の歌集何く
れの説ども。かの傳などやうの説にはかゝらず。
古き書に相照して。其實を考へ合せられたれば。浮
たることはひとつもなくして。近世にいはいゆる考證
學のはじめの師なり。さればこの拾遺にて。此物語
のちうさくのやうもいたく改まりぬれば。これより
こなたなるをば。新注と號けて別てり。しかれども
この書は。大かた舊注の誤を正すをのみせんとせら
れたれば。本文のうへにかけて用ある處はいとすく
なし。されば其説をとれることも又いと多からず。
さるはあだし事の論は。引出たりとも。本文よむべ
きためにはあづからぬばなり。さて此書は。近きこ
ろ板にそりて世に弘まれるを。いかなることにか。
こゝかしこもらせる條どもありて。たゞこのこれ
る寫本。又玉小櫛源注餘滴などに引れたる條ども
の。脱たること彼此あり。さる所どもは寫本また餘
滴などよりとりて引たるもあれば。さる心して板本

とあはぬを疑ふべからず。其次は岡部翁の新釋とい
ふ物あり。その惣考一卷は。紫家七論と共に板に系
りて行はれたるが。大かたかの七論に似たるものな
ること。玉小櫛にいはいれたるがごとし。其巻末にち
うさくの例ども擧げられたる所あるは。こたびもそれ
に從ひて。なほこれかれまじ加へて。文法をことわ
るたすけとしたり。そのよしは凡列にいふがごとし。
さて桐壺卷より次々のちうさくのやうは。舊注をま
じへ用ひて注せられたるに。其舊注と今按とのけぢ
めなくして。いと紛らはしきを。彼此くらべ見
て。今按のかたをのみ引出たり。この本は賈本あり
とおほしくて。おのが見たりしも二やうあり。餘滴
に引たるは又べちの本と見えて。をりたがへる
所どもあり。おのが見たる二本のうちには。別記の
そへるかた。後に改あられたるものと見えて。ちう
さくもいさゝか多き所もあり。また一本とたがへる
所なども。後に考へられたりとおほしき事どもおほ
し。然れどもその別記のそへるかたは。寫しさまい
とわろくして。讀がたき所々多ければ。せんかたな
くしてはじめの稿本と見ゆるかたを。むねと引用る

たり。此書の大むねは。かの惣考にもいはれたるがごとく。大かたは諷諭のたぐひと見られたる所々多くして。いと長き論などもあれど。おもふむねもありて。さる條どもはもらしたり。されどやむことをえぬ所には。かつ／＼引出て。そのよしをことわりつ。次に加藤宇萬伎の雨夜物語たみ詞といふものあり。これは帝本卷の品定の解にて。所々に俗語をくはへて注したり。其説どもは。大かた岡部翁の傳へられたるさまにて。新釋と同じければ。今はさしも引出ず。さて其次に。本居翁の玉小櫛あり。此書は物語といふもの、すべてのやうを論ぜられたること。いとこまやかにして。昔より其類にあることなし。中にも作りぬしのこゝろしらひどもを。此物語の中に何となくかすめていはれたるを見出て。卷々のさる所々を引あつめて其よしを注せられたるなどは。かけても思ひ及ばぬかうがへなるに。物のあはれをせる事。物語のむねとあることなるよしをいはれたるなども。昔よりの注どもにたえていはれぬ事にて。いとめづらかにめでたきこと上條にかつ／＼引出ていへるがごとし。猶其委しきよしは。彼書の

一二の卷にいひ盡されたれば。今はそれにゆづらひて略きたることいも多し。かならず別に見るべき也。さて卷々の注釋のやうも。さき／＼の抄どもとはことかはりて。めでたき説どもの多かる中に。てにをはの格カク。詞のはたらき様などは。此翁の世に出られざりしほどは。いとたど／＼しきことなりしを。はじめて委く考へなめられしほどのことなれば。語のうつりさま。はたらきさま。てにをはの係結カキムスなどの脈スヂ。いと／＼こまやかにして。みやび言のつかひさまは。此ふみにて始めてあきらかなれりとぞいはまし。しかのみならず。大かたの書の見やう。人情のおもふくさまを。深く考へて物せられたりと見ゆること多くして。其説どもいとおだやかに。強説シヤクゴトと聞ゆることはいと／＼稀也。すべてもの、ちうさくのみにはあらず。何事の説にても。人情のおもふく末々をこまかにさぐりて。其世のさま。作りぬしの意はいふもさら也。今の人の打きく所までも。深く思ひはかりて物せざれば。理コトワザは理として。げにさなりとはうけあへぬものなるを。此翁の説はさる事までゆきたらひて。げにとおぼゆる事はなほ多し。

然れば。此物語いできてよりこのかた。注といふ注の中には。この玉小櫛にまざる物はひとつもなく。作りぬしのしたにおもはれたるを見得られたりとおぼゆる事も。またこの小櫛に過たるなんなかりける。これはあながちにほむるやうなれど。他の抄どもとくらべ見て。よく／＼味ひしるべき也。然るを此書は。いたく年老てもせられつるよしにて。末摘花卷より末は。注釋いとすくなくして。わづかに三卷ばかりに書つめられたるのみなるは。いといとあかずくちをしきわざになんある。されば若紫卷までは。むねと彼説をとりもちおしかど。末摘花卷より下は。おのがちうさくをのみむねと物して。彼説を擧たることの少きは。擧べき説のなれば也。又他の抄どもには。いか／＼しくおぼゆることの多かるも。悉く辨へんはわづらはしくて。拾遺新釋のせちといへども取ざることはいかやうりて。其故をばこゝとわらぬを。小櫛はたま／＼いかにぞや見ゆる事共をも。大かたに引出てわけづらひたる事ども多し。さるは淺はかなるあはれをも。此書をのみ殊更に論ずるやうにて。いとをこがましく思ふ人もあるら

めど。かくばかりめでたき書なれば。たま／＼考へてそこねられたる事をも。大かたのめでたきに心ひかされて。初學の輩などは。みながらさること、うべなふ類もあるべしと思へるからに。やむことをえず辨へ試みたる也。見ん人さる心していたくなとがめそ。さて尾張人鈴木氏がかける。玉小櫛補遺といふもの、二卷あり。小櫛の中にはれたること。さらぬ所々をも。少しづつ、みづからの考を補ひ加へたるもの也。これもまたとるべき事少からず。をり／＼に引出たり。さて其次には。江戸の石川雅望が著せる。源注餘滴といふものあり。湖月抄を本として。それにながへる注どもを。むねと拾遺新釋の二抄より引出て。少しづつ、今按をくはへ。卷々の引歌類例など。出る所たしかならぬなどを。本書にあはせて校へ正し。句のたがへるを引直し。又さま／＼の異本を擧て。本文をも校へ合せ。又語の注などには。あらゆる物語どもの中より。其類を聚めて引たる所もありて。便よき事少からず。おほかたこれらぞ。此近き世にいできたる注釋どもにはある。此外におのがえしらぬ物も有べけれど。えしらぬをばいか／＼は

せんとて。右の抄どものげにとおぼゆるくだりどもを。かたみにぬきいで、注しつゝ、その足ざるところに。おのが釋をものしつるなり。さてちうさくの外に、安藤爲章の紫家七論といふものあり。必見るべし。此人わかきほどより此物語を好みて。もろもろの家説をも聞。後に紫式部日記を得て。おのづから紫式部の心ざしをさとりしかば。あらはしききたるよし。其書の後にいへり。卷中のおもふきは。上にもしばしば引出たるごとき物にて。此物語の大ひねを論じ。彼日記を此物語に引合せて。式部の才徳のいみじかりし事を稱し。又むかしよりの注どもにははれたるひがことを論じ破りていとめでたき事多し。但し玉小櫛に。その大ひねたゞもろこし人の書ども作れる例をのみ思ひて。物語といふもの、趣を思はず。といはれたることありて。大かたこの辨へことの如くなるもの也。されど小櫛の説もなほいかにぞやおぼゆる事どもありて。そのよし上にてへるがごとし。とにかくに舊説をはなれたる始の物にて。源注拾遺におとらぬ書也。また北村久備といふ人の著せる。すみれ草といふ物あり。これは玉小

櫛に。系圖を作らざりし思ひわたれど。いとまなくてはたさず。といはれたるをわかぬことに思ひて。此物語に見えたる人々の系圖をあらため作り。又小櫛の年立の圖にならひて。今少し委しき年立の圖をもつくりて添たるもの也。されば系圖と年立との事は。かの書のたらしむるに譲りて。今は別につくり出ず。彼書をとるをへて見合すべし。さて又熊澤氏の源氏外傳といふものあり。此書の事は。小櫛に論ぜられたるごとく。いはゆる外傳にして。物語よむには。さらに用なきもの也。これはそのかみ京にて。やんことなき御かたぐに。おのが立たる經濟の儒學を傳へし時。この物語によそへて。其旨を解たるものと傳へ聞ぬ。げにさるさまの物と見えて。うべくしく聞ゆる條もおほかれど。本文にあづからぬあだし事なれば。今は大かたもらして載ず。

引歌の事

物語の中に。ふるき歌をたゞ一句ばかり引出て。事の餘韻をいみじく聞せたる。その本歌を昔より引歌といひならへり。この引歌ある所殊にめでたくして。

事からのありさま身にしむまでに聞ゆる所々おほくげにぬけいでたるかどくしならでは。かうは思ひよらるまじ。と感ずるにも餘りあり。さてとられたる歌は。古今集をはじめて。後撰拾遺六帖などに見えたる。又この作りぬしの時よりあなただの。家々の集に出たる歌なるを。奥入河海などにかいあつめて擧られ。其後々の抄にも。次々に引をへられたり。然るにその引給へる歌ども。その本書とくらべて見れば。詞のたがへる所も多く。或は本末入たがひ。又は何の集にも見えぬ歌などもありて。いとみだり也。これらは拾遺新釋小櫛などに。さまゝいはれたる事あるに。餘滴には殊に心して其本をたゞして載たり。されど猶のこれも多く。意の聞えぬ歌などもまじれるを。新釋などには。注者のみだりにつくりてのせられたるやうにさへいはれたり。然れども今世にはうせて知れぬ集も。其世にはありて口ならしけんを。引れたるもあるべく。或は今世の集なる方。寫しひがめなどして。却てたがへるなども有べければ。しかあながちにいふべくもあらず。されどもまれには餘りに拙き歌ども。見ゆれば。さるこ

と絶てなしとも定めがたくや。又本の歌の詞を。わざと引かへて用ゐられたるもあるは。作りぬしの殊に心しらひありし事と見ゆれば。それは今いふかぎりにはあらず。其所々に注するがごとし。さて又湖月抄などには。引歌の所に。かゝる點をかくる例なるに。其點かけたるに引歌ならぬ所いとおほし。引歌といふは。其歌の意をみながら知ざれば。引出たる一句ばかりの意も聞えぬところの事也。其餘はたとひ其歌の詞をとりてかゝれたりと見えたるも。あやどりたるのみなるは猶類例のたぐひ也。されば今は此引歌の所のみ。一點をかけて分てり。其餘は釋に其ゆゑを註しつ。

准據の事

舊注に准據といふ事ありて。桐壺帝は醍醐天皇に准へ。朱雀院の帝は村上天皇に准へ。源氏君は西三條右大臣光公或は西宮左大臣高明公に准ふるなどいひ。又夕顔の何がしの院は。河原左大臣融公の河原院に准へ。帚木の中川の家は。藤原相如朝臣の家に准ふるなどいふ類ひの事也。これら其例をいひもて

江入一桐桓天皇を皇泉和泉天皇に
見ふふ天院皇を平武皇に
ええな皇を浄冷城雀天

ゆく時は。似たる事もいとおほけれど。あながちに
其人の事とさしあて、准へたるにはあらず。皆つく
り事なるくさはひに。彼此取まじへて。其おもかげを
かゝれたるなれば。さる事をいはんには。かぎりも
なき事なるに。又しかひしとあたる事はたえ
てなければ。末つひにいたづら事也。されば玉小櫛
にははれたるごとく。とてもかくても有べき事なれ
ば。今は悉くもらしたり。日本紀御局考には。源氏君
を嵯峨天皇に准へ。桐壺帝を桓武天皇に。朱雀院の帝
を平城天皇に。冷泉院の帝を仁明天皇に准へて書た
りとして。似たる事どもを引出ていはれたることあり
。これ桐壺帝を延喜の帝に准へたりといふより
は。まさりて聞ゆれども。猶しか引あて、見んは。
物語ふみのさまにあらず。さればたゞ桐壺帝は。い
づれの御時にかおほしましけん一人の帝と見るべ
く。源氏君は。その御子にて。源氏を賜へる人と見
るべし。中川の宿も其時の紀伊守が家。何がしの院
もたゞ何がしの院と見てあるべし。しかれども又た
まゝいではえあらぬ所などもあるをりは。舊注
にははれたる事をさながら擧たる類もあれど。そは

卷々の名どもの事

やむことを得ざる事にて。その所にことわるが如し。
さて又桐壺卷に。長恨歌の畫を。亭子院のか、せ給
ひて。伊勢集に見えられたれば。實にありし物なる事論なし。
伊勢集にも見えたれば。實にありし物なる事論なし。
されば亭子院の帝の次は。延喜の帝にさせば。桐壺
帝は延喜の帝に准へたりといふべきがごとくなれ
ど。然らず。これはたゞ其頃名高き御屏風なりしから
に。長恨歌の因にとり出たるのみにて。これにより
て桐壺帝を延喜の帝に准へたる證にはならず。須磨
卷に。千枝常則といふゑかきの見えたるも。其頃の
上手といひし人なるべき故に。とり出たる類ひ也。
さればさる事どもをば清く思ひすて。たゞさしあ
たる人々を。かりに眞の人のごと思ひなしてよむべ
きなり。

卷々の名どもの事

がことゝもは。新注どもに辨へられたれば。これも
またさらにははず。新釋の帯木卷に。舊注を辨へられ
たる所に。此物語の名ども。いとかるき事よりつけ
たるを。此卷など一つ二つの名にのみ。よかき意あ
らんや。古き書どもの名のやうも。みなやすらか
にのみ。からもやまとも有けるをおもふべし。とい
はれたるは。まことにさること也。されども猶よく
考れば。いさゝかづゝは。作りぬしの心しらひあり
し事かとおほゆるも。これかれ見えたり。それはそ
の卷々のはじめにいへれば。こゝにはもらしつ。

人々の名の事

此物語はめでたきことおほかる中に。すべて人々の
名をいはずして。たゞその前後の詞つきにて。その
人の事と聞ゆるやうにかゝれたるは。まことにいみ
じき筆といふべし。されば朱雀院のみかど。冷泉院
のみかどなどまうすも。たゞおりのさせ給ひし後に。
それおはします宮の名をもて申したるにて。實に昔
おはしまし、朱雀院、天皇。冷泉院、天皇の御事にはあ
らず。たゞ惟光良清時方などいふ。二三人にのみ名は

あれど。それもしか家司めきたる人に。ありげなる
名を。わざと作りていへるなれば。これも猶かりの
名なり。又上にもいへる千枝常則などの類ひは。實
に在し人と聞ゆるを。事のさまによりてとり出たる
のみなれば。物語のすぢにいさゝかもあづからぬ事
なり。されどもあまたみえたる人々の事なればたえ
て名なくてはわからがたき所もある故に。かりにと
なへし名どもはかたゝあり。それはた作者のつけ
られたるは。いとしも多からず。事のさまによりて
は。空蟬の君を帯木とも二やうにいへることく。さ
してたしかにいひわかちたるにもあらず。たゞそこ
のさまによりて。その事と聞ゆるためまでにつけた
るのみ也。北村久備がすみれ草の凡例に云。帝をは
じめ参らせ。人々の名を稱へいふ事あり。先桐壺帝
と申は。桐壺卷にもはらなる帝なれば。後に物語をよ
む人の。其帝とわかつ料に。かりに名附たるもの也。
物語の詞に桐壺帝といふ事は見えず。人々の名も是
に同じ。大臣も納言も幾人ともなくあれば。何の大
臣。何大納言と。かりに名附て。其人をわかちたる
なり。かく人々をいひわかつに。物語の作りぬしの。

始よりおほせたる名と。物語をよむ後の人の。云習はしたる名とよたつ也。作りぬしの始よりおほせしは。光源氏句兵部卿宮。薰大將。紫上。夕顔上など也。よむ人の名附しは。秋好中宮。權齋院などいふ類なり。秋好中宮を物語の詞には。秋の御かたとのみ有て。秋好とは見えす。權の齋院も。朝顔の姫君とみゆ。それは朝顔の歌を源氏君とよみかはし給ひたれば。その朝顔の歌よみ給ひし姫君といふ意なるを。後に齋院に成給ふ故に。物がたりよむ人の名づけて。權齋院と申しなり。此外みな是に同じ。人々の名を後より稱へいふにも。亦其品三つあり。歌と詞によりておほせしは。朧月夜内侍。雲井鷹などなり。歌の詞を卷の名とも。其人の名ともしていへるは。螢兵部卿宮。玉葛君などなり。卷の名によりていへるは。桐壺帝。竹川左大臣。紅橋右大臣。葵上などなり。餘は准へてしるべし。といへり。なほかのすみれ草の系圖には。其人々の下に。其名のゆゑをも注したれば。委しくはそれを見て知るべし。この作りぬしのつけたると。よむ人のつけたるとのけぢめは。先よく心得おかせれば。よみもてゆくう

ちに。まどはしきふしも出来れば。かならずわきまへおくべき也。さて又湖月抄其ほかの本にも。人々のおもふ心いふ詞の標に。某甲心。某乙詞。などと記す例なるを。其人の名のいまだあらはれざるさきにも。其標をつけたり。たとへば帝木卷に頭中將のなでしこの歌よみたる女の事を語るゝ所に。夕顔としるしたる類のごとし。それは後に夕顔卷にて。夕顔の歌よみし女なれば。たがふことはあらざれど。しか其人のあらはれぬうちより。後の名をひきこしあらはしては。作りぬしの心にひめおきて。後にあらはし出たる時。めづらしくをかしからん。とかまへられたるたくみをうしなひていとあぢきなし。されば今はいさゝか心して注せれど。さてはまたかの抄などを見なれたる人の。なか／＼にいふかしむべければとて。頭書の釋どもには。その人とまづ名を顯はして注したり。これはやむ事を得ぬしわざにてもとよりおのれが心にはあらず。されば此物語をうま／＼讀試んとおもふ人は。始にちうさくにて其意をさとらおきて。さて後某甲心。某乙詞。などいふことをもしるさぬ本を見て。文の意をよみあぢはふべ

し。いひしらずめでたくおもしろき所どもはおほきぞかし。

年立の事

此物語の紀年の事は。玉小櫛をたすみれ草に圖をつくりて。いとくはしくしるされたれば。それにゆづらひて今は物せず。これはかならず心得おくべきこと也。さて年立は。源氏君の齡をもてつけゆきたるものなる中に。物語のなき年のをり／＼あるは。作者の心しらひありし事と見へたり。それは先、桐壺卷と帝木卷との間に物語のなきは。桐壺卷は源氏君の本傳にて。其始をかたり出たるまでなれば。おとなになり給ふなどの事を。此間に省きたるにて。さして論なし。其次は花宴卷と葵卷との間に。一年がほどの物語なし。これは桐壺帝おりむさせ給ひ。朱雀院の帝御位につかせ給ふほどの事なる故に。わざと其けぢめをたて、はふかれたるか。或は御くらむゆづりの事を委しくいは。さま／＼の事どもありて。同じすぢの重なるべければ。省かれたるか。そはよくもしられねど。省れたる所はかならず御世のかは

る所々なり。そは次はみをつくしの卷と繪合卷との間に。また一年がほどの事なし。これは朱雀院の帝おりむさせ給ひ。冷泉院のみかど御位につかせ給ふほどの事なり。また其次は若菜の下卷に。はかなくて年月もかさなりて。うちのみかど御位につかせ給ひて十八年にならせ給ひぬ。とある。年月もかさなりてとある語に。源氏君四十二より四十五まで。四年の物語をこめ省きて。四十六の年。冷泉院の帝御位ゆづりの事をかゝれたり。これも御代のかはりめなり。其次は雲隱卷也。これは源氏君の終の所なれば。さらに論なし。句宮卷は薰君と句宮との傳をかき。竹川と紅梅とは。鬘黒大臣と紅梅大臣との御すゑの事をかゝれたるなれば。この三卷もさして年立にはあづからず。橋姫卷より夢浮橋卷までは。薰君の齡をおひて一ついきにしるされたり。さて源氏君の紀年を。御代のかはりめごとに。かくけぢめをたてられたるは。いかなる意とも知れねど。大かたは其御代々々の勢ひによりて。源氏君のうへに盛衰のあるを。かき分られたるものに似たり。さるはまづ花宴卷までは。猶いと若くおほしけるほどにて。かるが

ろしき御しのびありきなどし給ふ事をかきて。わか
くさかりなるさまをのみあらはし。さて葵巻よりは
御代かはりて。弘徽殿がたの御勢ひつよくなりて。
やうくにはしたなき事多くなりまさりつ。つひ
には。須磨のうつろひありけるは。しばらく衰へさ
せ給ふやうを書分ちたるにや。さてからうじて其事
とけて。みやこへかへり給ふ事をするしたるみをつ
くしの巻をて。一ついさとして。其後を一年か
れたるものなるべし。此間に蓬生關屋の二巻あれ
ど。かれは末摘花君と空蟬君との終をとぢめたる。
いはゆる並の巻なれば。さて年立にあづかる事に
はあらず。さて繪合巻より冷泉院の帝の御世となり
て。源氏君の御いきはひやうくへのぼりゆき。よ
ろづ御心のまゝにして。つひに藤末葉巻にいたりて。
太上天皇に准へ給ふよしの尊號かうふらせ給ひ。六
條院へ行幸の事ある。これぞ此君のさかえのきはみ
を書つくせる所なるべき。さて若菜巻にいたりて。御
位ゆづりありて。これより朱雀院の御子の御世とな
りたるに。女三宮の御事おこりしは。六條院のうへ
に。よからぬ事の出来つるはじめ也。それよりの二

三巻は。柏木君の事。女三宮の御事。夕霧君の事など
をいふ巻々なれど。猶かの物のまぎれに。六條院の
御心をつくし給ふさまをかけるは。まづはよからぬ
方の事也。さて御法巻に至りて紫上うせ給ふ。是生
涯の御なげきにて。まぼろしの巻は其御歎きの事の
みをしるされたり。さて雲隠にてかくれ給へるをみ
れば。みな此君の盛衰哀樂のうへによりて。御代の
かはりをたて。其けぢめある所に。年次を省きて。
わかちなしたる物と見ゆれば也。これなん此物語の
一部は大綱を思ひかまへて。堅に年月の経ゆく事を
立られたる法なるべくみゆるは。猶おしはかりのひ
がことにやあらん。されど大かたはたがふさしくぞ
おぼゆる。

系圖の事

此物語に見えたる人々の系譜の事も。用あることな
れば。一わたり心得おくべし。これはたすみれ草の
委しきにゆづりて。今は省きつ。たゞしかの書には。
皇胤。大臣族。卿大夫族。系圖なき人。といふ四つ
をもて類を分てり。それわろしとはあらねども。

物語よむ方にていは。これに猶主客正副などの法
をたておきて見るべし。しかせざればうまき事ども
のゆきかはるはしなくを。きはやかに心得ることか
たし。それはまづ一部の主と立たるは。光源氏君な
ること論なし。これに對へたるは。かややく藤原宮
なるをそはかくかへ事なるをもて。この御ゆかりに
御女姪の紫上をとり出てかへたる也。されば源氏君
と紫上とは此物語の主とある人なり。さて源氏君に
相副ては。致仕太政大臣頭中將なり。又此御かたが
たに對へたるは。二條太政大臣弘徽殿皇后の一族な
り。これははじめをはり。源氏君の御族とは。御中
よからぬさまにして。彼此相對へたるが物語のおも
ふきなれば。客の法なり。帝も朱雀院と冷泉院とは。
其御外戚のひくかたによりて。事を分ちたり。これ
なん此物語の大略の趣の立さまなりける。さて其次
は六條御息所の御族。髭黒大臣の一族。さては明石
入道の族などなれど。これはさして重々しくたてた
るすぢにはあらず。其外の人々は。唯このむねとあ
る事のたすけに取書たるなれば。更にいふべきにも
あらず。然れどもおのづかのよりきたる所に。法

あることなれば。等閑に見過すべからず。その巻々
に評ずるを見るべし。さてまた宇治の巻々にいたり
ては。薰大將を主とたて。句宮をあひ副たり。是
六條院に致仕大臣を相副たるがごとし。これは六條
院の御子と。明石中宮の御子とを相對へて立たるも
のにて。大かた同じほどに並べたる物から。まづは
薰大將をむねとしたる書さま也。さて八宮の姫君た
ちをその客として。かの巻々にはかゝれたるなり。
なほこまかにいは。さまの法どもあれど。そ
れも其所々に評じたれば。こゝにはたいその大むね
をいふのみ也。されば系圖を見んにはかゝる事をよ
く思ひ辨へて見るべき也。これは物語を讀べきため
の系圖なれば。其系圖につきての用あることは。か
やうの趣どもを見ん爲なれば。先、かくおどろかしお
くなり。

此物語に種々の法則ある事

この物語のめでたき事を。今更にいひはそさん。は。
ことさらびたる事なれど。委しく見るにしたがひて。
さすくいみじさのいひしられぬは。たゞ一わたり

にかゝれたる物にはあらで。其事を記しそむるはじ
めより。くさくさの法則を思ひ構へて。かゝれたる
ものとおぼしければ也。さてその法則といふは。我
國のふみには。いまだ正しく見えたる物もなけれ
ば。何れのふみの法ぞといはんやうもなけれど。も
ろこしの書どもに。文章の法則をいへるを見るに。
大かたそれと異なることもなきさまなる所あれば。
まづはその法どもによられたる物とやいはん。さは
いへもろこしの文法といふ事も。これよりはいと後
世より。盛にいひ出し事なれば。それによれりといは
むをば。誰もくさくさあへまじきことにはあれど。
そのもろこしの文法も。昔はじめてかきたる人の。
みづからいひ出たる事にはあらず。皆その文のいみ
じきを見て。それにならんとする後人の。かりに
名づけて評したるに起れる物にて。すべてはたゞか
りそめの法なり。されどその昔の文どもは。みづか
らしか思ひかまへてかゝざりしにもあれ。後より名
をつけて評して見れば。さる法則どものあるにより
て。しかいみじく見ゆるなれば。法ありといはんも
うきたる事にはあらず。されば此物語の作りぬしも。

さる法どもをおしたてんとて。かゝれたるにはあら
ざるべけれど。いみじきさまありて。もろこしの書
どもをあらねく見られたるよしなれば。おのづから
其法のうつるまじきにもあらず。さらば昔よりさ
だある。司馬遷が史記の法ありなどいふことも。
みながらより所なき言ともいふべからぬにや。さ
ればとて彼と此とは。語のさまも事の意も。いたく
かはりたることなれば。あながちに彼にならひたり
などはいふべからず。かくいひても猶ひたぶるなる
皇國の學者どもは。例の漢に似たりといふをいみま
らひて。おのれを罪人とするもあらめど。そはなほ
一わたりの論といふべし。そもく皇國言ながらの
文といふものは。祝詞宣命をおきての外は。古の世
にあることなく。物事を記すには。すべて漢文章を
かりてかけりし事。誰もよく知たるがごとし。然る
にこの物語といふ物出来てよりは。皇國言ながらの
文章も。かつくおこりそめにたり。さはあれど。此
物語より前つかたの物は。たゞにもの打いふがごと
く。詞をつらねたるのみにて。いまだ正しく文章と
いふべきほどのものもあらぬを。此物語いできてな

ん。始めてかくめでたくいみじき文章は世にあらは
れたる。さるはまづ文章といふことは。いはゆるあ
やことばにて。其記してもてゆく事を。文にかざりて。
讀む人にめでたくおもしろく聞しむるわざなれば。
たゞに物うちいふがごとく書つくるをいふにはあら
ず。文はあや。又かざるなど、よむ意。章はあきら
かにあやある意の字なれば。これをもてたゞ言に
あらざる故をば知べし。我皇國には。もとよりしか
ことくしき名をつけていふ事はあらずりけれど。
かの祝詞などの。語をかざりと、のへて。勢ひめで
たくかゝれたるをみれば。猶たゞ言に物いふごとく。
つらぬべき物にはおらざりけらし。されば何事もか
ざらぬがよしとて。おもふ事をつぶくと書つけ
たるのみにては。何のをかきふしもなくして。文
章とならんやうはなし。たゞ文章といふ名のみは。
もとより漢の名を借たるなれど。其事の意は皇國の
いにしへも同じかりし事。これらをもておもふべし。
しかれば此物語の文章も。かの史記などにまさしく
ならへりといはんこそひがことならめ。それ讀うか
べたる人の手に。いかでおもしろくかきなさんとお

もはやおのづから其法のうつるまじきものにはあら
ず。さても猶彼と此とは。事のつらぬさまも。もの
のいひさまも。いたくかはれる事にしあれば。たと
ひさながらうつしかゝんとすとも。たえて似つく事
はあるまじきなれば。彼にならへりといはんは。ま
たといみじきひがこと也。たゞこの皇國言ながら
の文章といふべき物は。此物語を書出たる始なる。
といはんには。さもあらずとは誰かいはん。よしや
その本末はとされかくまれ。今此物語の文章を評し
て。そのめでたきよしをあらはし出つ。文ならふ
輩のたつきともせんとするには。おのづから法の名
をたて。そのめでたき事をいはざれば。何をよす
がにてか事をさとさん。それはた其法の名をしも。
べちに悉く作らんも。いとたはやすき事にはあれ
ど。かの漢文章の法則といふこと。既にこゝにも傳
はりたれば。言をかへていひたりとも。誰かは彼に
ならへる物ならずとはいはん。さればいたづらなる
わざにかゝづらひて。なかくに紛らはしくせんよ
りはと。かのもろこしの後世の文法共にいへる法に
ならひ。かつその名目などを。かたそ借て評す

る也。見ん人さる意していたくな答めそ。そのうへ
 これはおのれがはじめて思ひつきたる事にもあら
 ず。安藤爲章が紫家七論に。はやく其端を見いで、
 いへらく。上略全篇は富貴温潤の氣象にして。官家
 の文章なれども。中に山林出世あり。市井田家あり。
 貧困哀傷あり。閑情風景は卷ごとに見えて。情をう
 つし景をかたどる事。まのあたり其人にむかひ。其
 所に遊ぶがごとし。全體は傳にして。又おのづから
 序の體あり。跋あり記あり論あり書ありて。諸體そ
 なはれり。彼は、き木の品定は。殊に奇妙なるもの
 なり。爲章曾て其章段をわらため侍りける時。序し
 て云。論破あり論承あり。論腹あり論尾あり。能よ
 り細にいり。俗より雅におもむき。繁より簡に歸し。
 波瀾頓挫。照應。伏案などいふ。もろこしの文法お
 のづから備り。其氣脈は悠揚として寛裕に。其文勢
 は圓活として婉曲なり。是品定のみならず。一部に。史記莊
 韓柳歐蘇にひとしかるべし。わたりて此意をつくべし。史記莊
 韓柳歐蘇にひとしかるべし。女の筆にてはめづらか
 いにしへより紫清といひならはしたれども。清少納
 言は才氣狭少にして。さかしだちたる跡あらはに。

にくさげおほきものなり。同日にも論すべからず。
巴上品定云々。といへり。又岡部翁の新釋惣考にも。
 これらにならひて文法を釋んとおもはれけんと思え
 て。其釋を擧られたる所に云。文義に。末にあらん
 事のはしを前に擧る。これを生張本とも伏案ともい
 へり。此二事少しの違はあれど。大かた同じければ
 互にしるせり。又前文後文相對へて知るを照應とい
 ふ。又其語を即時にことわるを頓挫といふ。又文に
 ある人相對して。互に應對せる語の外に作者の其事
 を評せる類をば。記者の語といふ。俗に草子地といふものなり。又
 其應對など。誰か詞ともふと分がたき所には。或は
 源氏。或は紫上など注せり。又文の句絶には。傍に
 點し。讀には中に點せり。讀とは語の小別也。小段をば。如此
 するし。大段をば。如此記せり。大段とは其事の終り也。これら
 はわが國に例なき事もあれど。見わきよからむ料の
 みなり。その外右の數條の外にも注法あれども。本
 文を注せる例にて知るべければ。大かたを擧るのみ。
 惣て後世の注例に異なる事多し。よく心をつけて見
 るべし。先入の物を主として。不意にそしる人も有
 べけれども。惣てわたくしをわすれて古意につきた

り。誤れるは猶改むべし。といはれたるなどにより。
 又玉小飾にも。こまやかなる所をおく深く尋ねて。
 作りぬしの心を用ゐたるを。こまやかにあぢはふべ
 きよし。しばし、いはれたるを本として。さまざま、
 ふかくたどり見るに。げにも思の外なる事ども、あ
 りて。其法則の嚴かなるに驚くばかりなれば。岡部
 翁の立をめられたる法に。今少し事くはへて。さて
 この評釋をばものしつるなりさてその法則のやうは
 いかんといはんは。まづ一部にわたたりて一部の法則
 あり。一卷ごとに一卷の法則あり。一段ごとに一段
 の法則あり一章ごとに法則あり一句ごとに法則あり
 て。いさ、かなる事の末々まで。あやしきまでたら
 ひたる法則あり。その一部にわたる法則といふは。
 時世年月の移るを經とし。人事のゆきかはるを緯と
 して。物語の趣を作りなすに。時世年月の移りゆく
 經のかたにては。上條にもかつく、いへるがごと
 く。まづ桐壺帝の大御代其次に朱雀院の帝の御代。
 其次に冷泉院の帝の御代。其次今上としるしたる帝
 の御代。と定めおきて。其中間に必物語のなき空し
 き年をおかれたる。これ法則なり。又源氏君の齡を

おひて生れ給へるよりおほよそ五十年餘の事を。五
 十四帖に書つらねて。右の御代々に相かなへ其御
 代さまのおもふきによりて。此君のうへに盛衰の
 あるさまをかき分られたるこれ法則なり。かくてそ
 れに隨ひてさまざまの人のうへをも年をおひて。大
 かた相かなふべく。齡のほどをおもはせたる。是亦法
 則なり。宇治の卷々は。また薫君の齡をもて年をお
 ひて句宮を并べ奉たる。これまた法則なり。かく定
 めおきて。さて人世のゆきかはりいでくる事ども
 を。緯にあやどりて語りゆくにつけて。さまざまの
 法則あり。そは上條にもいへることく。先づ光源氏
 君といふをたて、一部の主とし。それに對へてか
 やく日宮藤壺取出たる。これ光と赫とを對へた
 る正對の法なり。然れども藤壺宮の事はかくろへ事
 なる故に。其所縁に御女姪の紫上をとり出たる。こ
 れ藤の花のゆかりに紫といへるにて。いはば藤壺宮
 のかはりのこときものなれば。始終源氏君に相偶ひ
 たるはずべてこの紫上也。これ奇對といふべし。かく
 なしたるはたゞに光と赫と相むかへたらんよりは。
 今一きは心深く見えて。かけても及ぬ結構也といふ

べし。さてその光る君の御すゑを語るに。薰大将と
 匂兵部卿宮とをならべ擧たるこれ光のなごりに。匂
 と薰とをとり出たる。これはた正副の對法にて且源
 氏君のおもかげをうつしたる照應なり。又源氏君に
 相副て。致仕大臣をあらはして。其事どもを助けあ
 やどりたるこれも正副の對法なり。また二條大臣弘
 徽殿皇后の事をあらはして。源氏君の御族と。御中
 のよからぬさまにとりなして。物語の種子としたる。
 是いはゆる主客反對の法なりさて又紫上は。何事も
 めでたくたらひて物語の中の女の主とある人なる。
 其反に末摘花君といふ。かたちわろく心もおくれた
 る人を擧て紫と紅とむかへたるこれも反對の法也
 さて又人々のうへを語り出ること。其人々により
 て一やうならずさま／＼事をかへて書出られたる中
 に六條御息所の事をかゝれたるはいと／＼めづらか
 なり。夕顔巻に。六條わたりの御しのびありきの頃
 といひ出て。そこにかよひ給へるさま。又變化のそ
 れによそへてあらはれたるさまなども書ながらい
 まだ誰とも其人をばあらはさず。はるかに未なる葵
 巻にいたりてはじめて前坊の御息所なるよしをい

れたるなどは。いとおもひの外の筆つきにていと
 とめでたし。これいはゆる伏線の法の奇じきもの也。
 又朝貌の姫君は。帚木巻に。空蟬の方にて女房ども
 の源氏君の事を評する語のうちにははせおきて。
 さて次々に顯しかゝれたる。これも同じ法なるに。
 一人は御むすめの齋宮にそひて伊勢へ下り給ひ。一
 人はみづから賀茂の齋院に立給へるなど。伊勢と賀
 茂と相對へたるにて。件の伏線を引動かしたる書さ
 まとしられたり。さて又葵巻に。賀茂祭の車あらし
 ひの事によりて。御やすどころのいさすたまの事を
 いひ。それによりて葵上はみまかり給ひしことより。
 源氏君の御息所をうとみ給ふを恨みて。つひに伊勢
 へ下り給ふなども。伊勢と賀茂と葵と神と對へたる
 に似たり。さて物のさまざざのいくだりは。いと／＼
 かしこき御事なるに。それをしもかゝれたるは。作
 りぬしの心しらしひありげに見ゆる事。上條にいふが
 ごとし。然るに其事によりて。源氏君は太上天皇に
 准へられ給ひて。こよなき榮えをきはめ給ふさまに
 かゝれたる。其報應をかゝんとて。女三宮の物のま
 ざれをとり出たる。これ照對の法なる中に。おのづ

から報應を示したるもの也。さる故に夜居の僧都が
 冷泉院にはのめかし奉り。辨のおもとが薰君にあら
 はし申たるも共に同じ趣なるは。わざとその照對
 なることをあらはにしたるにて。いと／＼心ふかき
 ももの也。さて柏木君はこの事の物思ひつもりてつひ
 にうせ給ひ。其末々落葉宮は夕霧君むかへとり給
 ひ。致仕大臣の後は紅梅右大臣の方に定れるなども。
 皆この報應のなごりを示せるなるべし。又夕顔君の
 うかれたいよひたるに。浮舟君のよるべなきをむか
 へたるも。照對の法にてなにがしの院と宇治宮とを
 ひかへ。源氏君と頭中將と二かたなるに。薰君と匂
 宮との二かたを對へ。五條の宿の八月十五夜と。三
 條の家の九月十三夜とを對へて。共に御車にのせて
 出給ふさまにかゝれたるも正しく照對をしらせたる
 也。さて一人はへんぐゑのためにとり殺され。一人
 はこたせにかすめとられたるなども。すべて同じ筆
 づかひなる中に。たてたる心なき女の。よかるまじ
 き趣をにははせたり。さて夕顔のなごりを玉かづら
 にうつしても猶浮舟と對へたる法ありて。筑紫と常
 陸と東西に對へ。大夫盛と常陸介との。むくつけく

あらびたるをむかへ。長谷寺と小野の庵とむかへた
 りと見ゆる事あり。さて又須磨のうつろひは。源氏君
 のしばしの衰へをかゝん爲なるを。はやく若紫巻に
 其端をあらはして。北山にて良清に明石上のことを
 かたせたる。これその伏案にて。遠く須磨明石の
 巻をかくべき結構の法也。これを見て。かの石山
 寺にて。須磨明石の巻より作られたりなどいふ。舊
 説の妄なるを笑ふべし。又花宴巻は。桐壺帝の御代
 のかぎりにて。源氏君の若きさかりのきはみをあら
 はしたるに。櫻に匂ふ臙月もて。内侍のかみの物の
 まざれをあらはしおきて。さて其事のつもり／＼て。
 つひに須磨にさすらへ給へるに。明石入道むかへと
 りて。いつしかしづき奉り。そこよりつひに都へか
 へり給ふ事を。秋の月によせて書れたるに。第三年
 の八月十五夜。初て参内し給ふよしをかゝれたるは
 春の花にいできそめたる禍の。秋の月にとけはてた
 るにて。盛衰の因縁を。月花によそへて思はせたる。
 これいはゆる首尾相應する法也。なほ此外にも。源
 内侍の年老てすきがまじきに。近江君のしだには
 したなきをむかへ。博士の女のさえがりたるに。大

學の儒者のかたくななるを照したるたゞひ。いさゝかの戯れ事のうへまでも。その法なしといふ事なし。されどさることかなる事どもは。いづれも其卷々の評釋にいへれば。こゝには只その大なることのみをいふなり。さて事が中にもいみじきは。雲隱卷をたてながら。すべて詞を略かれたる。此事のみはいといとめでたく。いとくゞめづらしくして。やまともろこし古今にわたりて。かゝる筆づかひのいみじき書は。他に又あることなし。これ省筆法のいみじきものにて。かへすくゞもめでたし。然るをさきくゞの注どもに。よしもなき佛説などを引いで。さまさま用なき事をばいはれたれど。この雲隱のさるべきよしを解れたる物のなきは。いとくちをしくあかぬ事なり。ましてかのつたなき物をつくりいで。そのかはりなどいひし人は。いはゆる大海の一瀾だに作りぬしの心をえしらぬものにて。いとくゞあぢきなくかたはらいたし。抑。此物語は桐壺卷に更衣のうせ給へるを。帝のいたく歎き給へるより書起されたるに。揚貴妃のためしをひきいで。たづねゆくまぼろしもがなつてにても。たまのありかをそこ

としるべく。とよみ給ひし事を載たるより。つぎつぎに源氏君のさかえを書もてきたれるか。つひに御法卷にいたりて紫上のうせ給へる。これ物語の主とある人の。まつ一人かくれ給へるにて。やがて光源氏の雲隱れ給ふべき下がまへ也。さて幻卷にいたりて。正月より十二月まで。かの紫の御おもひにて。いたくなげき給ふよしを。をりから時々の月花木草によそへて書つくされたる趣。いとくゞものがなしくして。此御歎きの故に。源氏君はやがてかくれ給ふべきやうにかゝれたる。其中に。雲をわたる雁を見て。大空をかよふまぼろし夢にだに。見えぬたまのゆゑへたづねよ。といふ歌をよみ給へるを。やがて卷の名におふせたるは。桐壺の末を結ぶものに似たり。よしや此論はあたらすしもあれ。かくなしおきて。源氏君のかくれ給ふ所をかくまじき結構とせられたるは。たがひなくぞおぼゆる。かの幻卷の末に。物思ふとすぐる月日もしらぬまに。年もわが世もけんやつきぬる。といふ歌をよみ給へるよしあるは。源氏君の辭世めきたる歌にして。やがて雲かくれ給ふべきを示したるもの也。さて雲隱卷

の中に。そこばくの年月をこめおきて。匂宮卷の始に。光りかくれ給ひにし後云々と書出て。その御すゑの事どもをついでられたる筆づかひ。いはんかたなく心ふかくして。さらしくかけても思ひ及ばぬ事どもなりかし。すべて世にあらゆる作り物語ども。やまともろこしをいはず。いづれもくゞ。其むねとたてたる人のうへをば。かぎりもなき榮えを極めたるさまにして終らぬはなし。されどもそこにいたりては。殊更に作りたる跡。けざくゞと見えて。いとてづゞに見ゆるがつねなるを。此物語は。既に藤末葉卷にその榮えのきはみを書をへて。また若菜卷より其報應の事どもをかき出。こゝに至りてその終をつゝみ省かれたるからに。いさゝかも作り事めきたることなく。實に有し事のごとおぼえて。いひしらぬ味ひあり。また舊説にもいはれたるやうに。このかくれ給へる事を書出んには。こゝにもかしこにも。同じやうなる歎きのさまを。書あらはさざれば事たらず。さては同じすぢの重りて。いとわづらはしかるべきを。それをば省きてなかくゞに。幻卷一帖に。光君の御歎きをつくしたるなど。いとくゞめでた

き文章の法といふべし。見ん人心をふかめて讀味ふべきものぞ。さて次には夢浮橋卷を書さして。筆をといめられたる。いひしらずめでたし。さるは先。この宇治の卷々は。始に薫君と匂宮との傳を。匂宮卷にいひ出おきて。さて橋姫卷より。八宮の姫君たちの御事を書出られたるに。これよりさき源氏君の事をかたりたる卷々とは。そのさまいたく事かはりて。いとしめやかにあはれふかく。人情のさがたさかぎりの事どもを。いとくゞせちにつらねられたるものにて。八宮の世にわびて宇治へ引籠り給ひ。さしつぎて北方うせ給ひ。姫君たちのみなしごとなり給ふを。おふしたて給ふ御心づかひより起りて。佛の道に御志ふかくなり。おこなひなどせさせ給ふさま。又薫君の柏木君の事をほの聞しりて。身をあぢきなく思ひなし給へるより。つひに佛の道に心ざしふかくなりて。物學びにとて宇治へおはしたるさま。又大姫君の中君を。いかで世にあらせ奉らんとて。我身をすて。いたつき給ふさまなど。いとくゞあはれふかくして。打よむに涙もはぬぬめり。さてかくとりくゞに打しめりたる佛ごゝろのすゑ。つ

ひに薰君大姫君にけさうし給ひしを。事よくのがれんとて。中君にあはせ奉り給へるを。猶あかずおもはして。匂宮をいざなひて。中君にあはせ奉り給へるに。大姫はかなくなり給ひしかば。又中君に思ひうつりて。とりかへさまほしくおぼえ給ふこと。中君のそれを通れんとて。浮舟君をかたしるにとす。め給ふうちに。匂宮に事いできし事。それより薰君の浮舟を宇治にすゑて通ひ給ふを。匂宮聞しりて。ひそかに。通ひ給ふ程に。つひにはあらはれて。浮舟君の身をなげんとせし事など。いづれも。さりがたきあはれのかぎりにて。ことわりならぬもなきやうなるは。かの源氏君の。花やかににぎは、しかりし御さまとは。こよなく體ミカダをかへられたる物にて。今一きはめづらかにあはれ深し。たゞ匂宮のみ。源氏君よりもあだしくにぎは、しくかきなし。それにつけて物語りの趣をかきしう書めぐらされたりと見えたるを。それだに浮舟卷にいたりては。いとほしきまでに見えたるは。いともし。上手の筆つきといふべし。大かた源氏君の御本上は。あながちなることをおぼしとむるくせは有ながら。又い

と人のなさを思ひしり。もの・あはれふかくして。花も實もあるさまにかきなされたるは。此物語のむねとある人なれば也。其なごりを二かたに分たる法なる故に。薰君は源氏君にもまさりて。しめやかにあはれ深き御心ばへにかきなし。匂宮は源氏君にもまさりて。にぎは、しくあだめき給へるやうにかきなされたる。これ光といひ。薰といひ。匂といひ名につきて。其心ばへをあらはし分られたるに。其人々の本上を。心にいりて見たらえやうにか、れたるは。いともし。めづらかに。めでたしといはんにも餘りあり。さて浮舟君の尼になりて。小野にかくれすむことを。薰君の聞しり給ひて。常陸介が子の小君を御使にて。小野へつかはし給へるに。浮舟の尼ははぢらひて。えしも逢給はねば。小君のむなしくかへり参りたるによりて。薰君のさま。いにおぼす事ある所にて。すべて一部を書とめられたるは。鬼神もえしるまじき筆づかひと云べし。かゝるにこそ此物語はよみはてたる後もさしおきがたく。のこりおほくて。又くりかへし。見れども見れども。いくたびもあくことなくして。餘情のきはま

なきにはあれ。山路の露といふもの。かきそへられたる人は。これをあかずくちをし。おもはれけんほどは。ことわりなれど。又作りぬしのいみじき心を。えしらぬものに似たり。そも文章に筆を省く法は。いたつきをいとひて省くにはあらず。必省かではえあらぬ所にて。わざと省くことなるを。此物語の文は。殊に委しくたらしむるものにて。俗にいふかゆき所へ手のとくやうなる體カタなれば。打見るにはいと長々しく見ゆるやうなる物から。又かくすくよかにたぢきりて。筆を省かれたる所などは。いときはしく。かけても思ひよらぬすぢにて。雲隠卷と夢浮橋卷の末のさまとは。いみじくいひしらがふもろこし人の文にも。たえて見しことなくなんありける。それはた初よりつゞくとつらねたる事のすゑをかくふいにたぢきりては。何のをかしきふしもあらねど。既に藤末葉卷の太上天皇の事に。光君の榮えをきはめつくしおきて。さて雲隠をしめしたるうへなれば。此君の事ははてにしを。なほその餘波ナゴハに。宇治卷をかきくはへて。かの御末の事どもをいひつくしたるはてなれば。かくてもさらにあへなき

事なくして。其餘情のかぎりなきことたとへていはんやうもなし。さて又夢浮橋と名づけられたるも。玉小節にいはれたること。此物語に出たる事は。みな夢ぞとやうの意をふくめて。とぢめられたりと思えたるを。なほ思へば。源氏君の終をかきたる幻卷に對へて。夢幻をかけ合せて。法をとられたる物とおほしく。かへすも心ふかくめでたし。すべて此物語は。めづらしきかきさまの多かる中に。かいての人のおもひもかけぬ事あり。其二はすぢにいへりし。雲隠卷と夢浮橋卷の末との事也。今三は人々のうへに名をつけずして。いと多かる人々の事を。つゆのみだれなくかきとられたる。六條御息所の事を伏おかんとて。既にかよひ給へるよしをいひながら。猶誰ともいはずして。あまたの卷々をへてほころばし出されたと。藤ばかりの巻と眞木柱卷との間に。筆を省かれたる所と也。人々の名をつけられざる事と。六條御息所の事とは。上條にかづもいへれば。今またいはず。眞木柱卷の初。いととめづらし。そは先玉かづらの巻の末よりして。玉葛君に心をかけたる人。いとおほかる中に。登兵

部卿宮。ことさらに心ざしを見え給ひ。さうじもかの宮をば。こゝろにおもほすさまにかきなし來りて。さて藤袴の巻に玉かづらの君。内侍のかみになりて。月かはりなば入内し給はん事をきつて。こゝかしこより御文どもの有ける中に。かの兵部卿宮ばかりには。御かへしありし事をいひて。とぞめたるを。眞木柱巻の初は。いとく思ひかけぬさまにかはりて。けさう人の中に。殊に思ひおとし給へるさまに見えたる。髭黒大將の。既に玉葛君を得たる事をかき出たるに。猶其よしをばことわらで。内にきこしめさん事もかしこし。人にあまねくもらさじ。といさめきこえ給へど。さしもえつゝみあへ給はず。とかきはじめたる筆づかひ。いとくあやしくくすしく。めづらかに思ひの外にて。はじめは何事ともしられぬを。やうくよみもてゆくまゝに。此大將めきて聞えくるなど。打おどろくまでに奇しく珍らし。さてなほあまたの詞どもをへても。きはやかに其よしをばいはずして。霜月になりぬ。といふことを。あらためて書出たるより下に。大將殿ひるもいとかくろへたるさまにもてなして。こもりお

はするを。いと心づきなく。かんの君玉つはおぼしけり。とはじめてあらはし出られたる。いとく巧なるものにぞありける。これ反覆のいみじき法にて。いとらうたげにおいらかなる女の筆して。虎おほかみをも走らし。おに神をも驚かすべきいきほひありといふべし。猶そこに注する事どもを見て知るべし。大かたこれらぞこの物語の中にすぐれてめでたきところなりける。然るを昔よりの抄どもに。用なき事をば多くいはれつれど。かやうの事はさしも心をつけられずして。なほさりに看過されたるは。いとくあへなくくちをしきわざになん有ける。今さしいで、かくいひたてんは。われながらいとをこがましけれど。かくさだかに法ある事を。さしおかんがあかずおぼえて。うけばりがましきそしりをかへり見ざるになん。なほ此外にも。これやかれやおほかれど。其卷々に注したれば。さのみはとてかきとめつ。大かたは准へてもさとりべし。一卷に一段の法あり。一段に一段の法ある事なども。其卷ごとに評したれば。こゝには略きつ。

をりくのけしきをかける所の事

此物語のうちに。春夏秋冬。をりくのけしきをかける所は。ことさらにえんにみやびたる詞おほくして。いひしらずめでたき事は。誰もよく知たる事にていまだしき輩は。これをのみ類に賞て。名文なりなどいひのゝしること也。然れどもこのけしきをかかれたる所は。あながちにそのえんだちたる詞をのみ。むねとしてかゝれたるにはあらず。みな其時々かきあらはしたる人々の心にあはせて。事がらのあはれを深くせんためなる事。帯木巻に。有明月夜のあけはなるゝさまを書たる所に。何心なき空のけしきも。たゞ見る人から。えんにもすこくも見ゆるなりけり。とある意をおしひろめてしられたり。なほ此外はれたる事あり。あはせ見るべし。されば此語は。一部にわたりて。さるけしきを書たる所の作りぬしの意なるを。しか殊更にはいはずして。こゝにかく挿みて聞せたるなど。事をさしくせぬ此文の例にて。他にもさる類ひおほし。たとへば。今世に芝居といふことを見るに。其をりからの草木などを作り

たて。又其事に似つきたる所のさまな。ほどくに作りかまへおきて。さて其わざするをのこども。さまくふさはしきかたちにいであちて物すればこそ。事がらのまことめきて。見る人の心をも動かすなれ。もし其時所のさまにつきなくして。さきみだれたる花の盛に。怨霊をあらはし。風あらくふき雨打そゝきたる堤の陰などに。さらくそぞきたる姫君などの。たゞすみたらんには。誰かはげにと打うなづくべき。物語のけしきを書たる所の心ばへも。これにひとしく。みな其をりからのさまに随ひて。いとくしくうれしひかなしひの。身にしむべきくさはひに書たるなれば。これをのみほめしらんは。かの芝居につくりならべたる。くさくさの作り物のみを見てほめたらんがごとく。いとくをこなるわざなめり。さるを近き世に。歌よむ人などの。文章とてかくを見れば。此物語などのさるけしきをかける所などを。こゝかしこいあつめて。いさゝかばかりつらねたるのみなるを。ことくしくべちに文章とぞいふなる。又それが學びのためにとて。さるくだりどもをかいつめて。ことに卷をな

したる書などもありて。おほかたはさる物を見てぞ
つくりならふめる。學びのためには。それわろしと
にはあらざれど。これをのみ我皇國の文章ぞと思ひ
いはんは。かの牛の毛の一すぢとかいふらんほどの
事にて。何のかひもなき事なり。おのれはやくその
やうなきことを思ひしりにしかば。いかてさるまな
びのために。ふるき文どもをあつめて。其法を示さむ
と思ひたちつ。これやかれやとよみ試しかど。此
物語をおきての外は。これらの法のあひかなひて。
文章のほんとなるべきものをさしなし。かれ思ひ
こうじて。つひに。此書のちうさくをも。思ひたち
たるなれば。文學んとおもふ人は。さる所々に評ず
る事を心とめて見るべき也。それが中には。みじ
かさとりと思ひひがめて。鶴のはぎをたち。龜の
脚をそへたらんがごとき。ものぞこなひもあめれど。
いさゝかものゝたつきとなることいも、あるべから
んかし。これらもいとさし過たることにはあれど。
昔よりの註釋どもに。其さだなきがあへなくて。お
どろかしおく也。たゞし細流抄などに。かの桐壺卷
に。夕月のをかしきほどにいひ。月は入がたの雲と

いひ月は入ぬといふくだりに。その首尾なりとやう
に注しておどろかしほめられたる事あるは。實にい
とよく見出給へるなれど。猶その月に對へたる。風
の脈をば思ひもらし給へる類ひもありて。くちをし
く覺ゆる事ども多し。かしこに評ずるを見て知るべ
し。されど又。かゝる事に心つき給へるにても。細
流は諸抄にまさりたることを知るべし。

頭書評釋凡例

一、さし、の抄どもの説を擧たるは。舊注新注をい
はず。みな口かく方なる箇の中に。其書の目を一
字づゝしるし。余が今あらたに注する説どもは。
圓き箇の中に。評釋など、記しつ。評は本文のい
みじき所々を批評しあらはし。釋は本文の通えが
たきを釋もてゆくことなり。かれこの注をも評釋
と名づけつ。
一先達の説を用ひたる書目の標をこゝに擧ぐ。引合
せて見るべし。

- 〔奥源氏奥入〕 宮内少輔藤原伊行朝臣作
- 〔通注奥入追注加〕 京極中納言定家卿補注
- 〔函水原抄〕 河内守源光行朝臣
- 〔紫雲明抄〕 紫雲寺素寂法師
- 〔最源中最秘抄〕 同作
- 〔河海抄〕 四辻左大臣善成公
- 〔花鳥餘情〕 一條禪閑兼良公
- 〔秘源語秘訣〕 同作
- 〔和和秘抄〕 同作

不審抄出 宗祇法師

- 〔祇注帶木別注〕 同作
- 〔弄咲花抄〕 牡丹花宵柏紀聞西 實隆公説
- 〔葉一葉抄〕 宵柏作
- 〔細細流抄〕 西三條右大臣公條公
- 〔圓明星抄〕 西三條内大臣實澄公
- 〔孟孟津抄〕 九條禪閑植通公
- 〔岷岷江入楚〕 中院中納言通勝卿
- 〔蜀岷江入楚中一説〕 西三條實澄公説通勝卿記聞
- 〔巴紹巴抄〕 里村紹巴
- 〔厚萬水一露〕 能登永閑
- 〔湖湖月抄〕 北村季吟
- 〔湖湖月抄師説〕 笑形如菴説
- 〔湖湖月抄中一説〕 季吟記聞 已上舊注
- 〔源源注拾遺〕 契冲法師
- 〔源源氏新釋〕 岡部真淵
- 〔玉玉小櫛〕 本居宣長
- 〔玉玉小櫛補遺〕 鈴木 朗
- 〔餘源注餘滴〕 石川雅望
- 〔雅集雅言集覽〕 同作

一雅語譯解 鈴木 朗
已上新注

此外になはさまぐの注釋ありといへども。昔よりむねと用ゐる來らぬもの。又今余が見ざるかぎりはずべて擧ず。右の中にも。雅言集覽。雅語譯解の二つは。此物語の注ならぬども。もはら此物語の雅言を解たる物なれば。こゝにくはへつ。此外に引たる書は。某書云。また某名云など、おのゝ其名をあらはして記しつ。又をりく或抄として引たる物は。本居先生の書入本といふ物の中に引れたる注にして。誰人の抄とも知れず。玉小櫛にも。或抄として引れたると。全く同書と見えたるもの也。さて右の抄どもを引用したる中に。舊注はかた。省きてたゞ其要とあることのみを擧。むねとは新注をとれり。其中にも玉小櫛は殊に多し。其ゆゑは上にいへり。

一舊注のうち。河海花鳥などに既にいはれたることの弄花細流などにさながら見えたるを。湖月抄などに。後の方をのみむねと擧たることを。玉小櫛

に難じて。さきの方をまづ擧べきことわりなるよしはれたるはまことにさること也。然れども。後にいできたる抄どもは。さきの抄のわろき事を。見出られたる事もありて。よき事も多ければ。今はあながちにその前後にはかゝはらで。たゞ事のすぢの。穩かに聞ゆるかたを引出たり。もとより彼此同じ事なるは。さきの方のみ擧つ。されどもさきの抄よりも。今少し書加へられたる事などあるは。又後の委しさによれり。これはたやむことを得ぬしわざなり。

一舊注新注ともに。解れたるすぢは。げにと聞えながら。其解さまのいかにぞやおぼえて。まぎらはしくたしかならざるは。同じおもふさながら。其語どもを改めて。おのが釋の下に記したる所たゞあり。されどわづらはしければ。ひとつづつ。其故をばことわらず。これはいと快らぬわざなれど。とにかくに本文の意の。通えやすからん爲にとて也。されど一ふし考へ得られたりと見ゆること。少しものこさず餘釋に擧て。其解さまのわろきよしを辨へいへり。

一諸注にいはれたる説の。いづれも同じ意なるは。詞みとかくして意の通え安きをとりつ。さるは頭書にもものするに。長きは便あしくて也。

一釋の長くて。頭書に物するにわづらはしきと。諸抄の説を辨へいふべきことのある條とは。餘釋と號けて別にいへり。されども本文の意の。ふつにきこえがたき所は。長きをいとはず頭書にその説共を擧盡しつ。さて又語の類例。物事の根源。或は儀式調度の故實など。さして本文の脈にあづからぬ事は。みな餘釋にしるしつ。

一本文の傍にしるしたる俗言の譯語どもは。頭書にその語の義を注せず。語釋と號けて。べちに其語の本の心ばへを注す。これら皆まづ先達の説をあげ次に余が案ををしるして。其足ざるを補ふ。

一舊注新注をいはず。よろしき説なれど。事の長きは其要とある事を摘て頭書にしるし。其餘れることを餘釋にもものしつ。

一餘釋語釋ともに。いとく解がたき條どもは。諸抄の説を多く擧て。後に余が考を注す。但し諸抄の中に。解得られたりとおぼゆるあれば。そのよ

ろしき説のみを擧て。他をば略さつ。又彼此同じさまなるは。さきの説のみを記し。いづれも解さまのわろかめるは。たゞ余が釋のみを注しつ。

一文章を批評したることは。我皇國の書にはをささ見へず。大かたは今始めてものすることなれば。其さまをもろこしさまにならひたり。其よしは上條に既にいへり。其法則のかりの名どもを。こゝに擧て大むねを注す。これはたゞ初學のためのみなり。さて此目どもは。もろこしにいへるをさながらにとれるもあり。又此物語の注に昔よりいへるを用ゐたるもあり。又今あらたに余がつくれるもあれど。事のさまのさとりやすきを主として。あながちにもろこしの例格に拘り泥まず。見ん人さるこゝろしていふかしむべからず。

主客
人と人と相對ひて事ある時。其むねとあるかたを主といひ。その主たる人のためにして。對へる方を客といふ。これによりて。其所の文に内外の差あり。又其卷其段につきても主客の法あり。准へて知るべし。

正副

軍を出すに。大將軍と副將軍とあるがごとく。その主とある方を正とし。それに附屬へる方を副とす。これにつきて文法に輕重あり。

正對

人にされ。物事にされ。同じほどの事を相對へて。優り劣りなきを正對といふ。これはただに對といひても有べけれど。次の反對にひかへて正字を加へたるのみ也。

反對

これは其事の反うへに相對ふをいふ。たとへば雨ふると日てる。夜と晝などのごとく。其事同じからずといへども。表裏に相對ふをもて反對といへり。

照對

照應 照應 此の二つ大かた同じさまなれど。照對は一事の相似たるさまを再びあらはして。前の事に相照し對へたるをいふ。たとへば日と月と東西に光をあらそふがごとく。照應は。前に出たる事の末。あへなく消失せずして。再び其脈

をあらはして。前の趣に相應くをいふ。たとへば日の光をうけて。月も星も光をはなつがごとく。

間隔

一つの事を語りもてゆくに。一つらに書つては。いと長く煩はしくなりて。見ん人の倦んことを思ひはかりて。暫く切斷て其間に他事を挟み隔るをいふ。たとへば遠く海山を見るに。所々雲霧のへだりて。なかくにけしきをかしく見ゆるがごとく。此法卷中に殊に多し。

伏案

伏線 伏案 此の二つおほかたは同じ事也。伏案は。末にいふべき事を思ひ構へて。ひそかに其端をあらはしながら。伏せおく事也。伏線の線は絲すぢとよむ字にて。遠くいとすぢの端を伏置て。をりく其縫めをあらはしつ。末に至りて結び覚る時。其絲ぐちを引ば。貫きたるぬひめ悉く動くことの如し。又結構といひたる所あるも同じ類也。結構はしたがまへの事也。

抑揚

抑はおさふること。揚はあぐることにて。文の勢をなす法なり。たとへば柄確の頭を揚んとしては。其尾をつよく踏抑ふるがごとく。事がらをつよく揚ていはんとて。前つかたを抑へてかくをいへり。

緩急

字のごとく緩きと急しきと也。其事を叙ること。緩き時は靜にして。ながき春日のうららかなるに。處女子の野邊をゆくがごとく。急しき時はすみやかにして。野分の風の。梢をまきてすぐるがごとく。各其事にしたがひて書さま異なり。

反覆

事の急にうらがへりて。前の勢にいたくたがふを云。さるはわざとしか反覆して見ん人におもひの外の事と驚せんため也。たとへばしづかにすみわたりける月影の。俄にかきくもりて。神いみじく鳴はためきたる夕立の雨の。たちまちに降來たらんがごとく。

省筆

事の長かるべきをいたく約めて。前後のさまによりて。かゝる事と見ん人にさとりしむる類。また他にてありし事を。人の物語の中にいへせて其趣をしらしめ。或は煩はしきをいとひて省けるなどの類をすべて省筆といふ。

餘波

大じき事を書はてたる後に。其なごりのあへなく消失ん事を惜みて。其けしきなど書へて引延たる類をいふ。餘波はいはゆるなごりにて。大波の引去りたる跡に。猶さゝら波しづまらず。遠淺に潮の遺りてやうく引さるさまに譬へていへり。

種子

これかれの物語の聞つきなき時に。物一ツとり出て。物語の種子とする事也。若紫の雀子。女三宮のから猫の類ひなり。

報應

これはいはゆるもの、報の應するをいふ。其事の報に彼事をあらはして。もの、道理も均

くすること也。

諷諭

今の現にある事に諷へて。一ツの事をあらはし出つゝ。ものゝことわりを論ずをいふ。この二ツは。作者の心の中にある事なるを。推量りて云也。

文脈 語脈

文脈とはつらねもてゆく文章のすぢをいひ。語脈は語のかゝりゆくすぢをいふ。此すぢの續きて。事の意を貫き通すこと。人身に脈ありて。體中を貫き通れるがごとし。又伏線の條理を。脈といひたる所もあれど。そは別事也。

首尾

事の始と終と也。これは首尾あひかなひて結ぶ所をいふことなれば。正しくは首尾相應などいはずはかなはぬことなれど。暫くいひならへるに隨ひて。首尾とのみいふ。これより下は。舊注どもにいはれたる名目のまゝなり。

類例

其事其語の比例に。他し書語。また歌などを引出たるを。類例といひならへり。これは注法の目也。

用意

これは作者の意を用ゐて。事におりたちでまよよくとりなしあつかふ事を。いひならひたりたとへば。空蟬君のさまよくもてつけたるありさまを。用意ありなどいへる。用意のことし。

草子地

物語の中なる人の心詞ならで。他より評じたるごとき所を。草子地といへり。これは物語かたる人の語にとりなしたる作者の語也。その中に草子地ながら。しばらく其物語の中の人の心になりていふ所あり。また物語の中なる人の詞ながら。實は草子地よりいふ所あり。思ひわかつべし。

餘光 餘情

餘光にはひと訓む意にて。文外に打にはひ

て。いひしらぬ味ひあるを賞ていふ語。餘情は其事竟たるに。猶かぎりなきあはれの含まりて聞ゆるをいふ。このふたつは共に形なき事なれど。言外にほひ餘りたるいみじさを評せんために。とり出たるのみ也。

此外にもなほあれど。今は其大むねをのみ舉つ。他は准へてもさとするべし。

本文譯注凡例

一此物語の本の事は。玉小櫛に云。本はむかし河内本といふと。青表紙といふと。大かた二やう有しとぞ。其中に定家中納言の本なるをもて。ちかき諸抄。なべてよきあしきをいはず。ひたぶるに青表紙のかたをとられたるさまなるはいかにぞや。いづれの本にまれ。よきあしきにつきてこそ。とりもすてよきあしきなれ。かならずそのぬしによりて。さだむべきにはあらざるをや。といはれたる。まことにさること也。かくて青表紙のかたおこなはるゝにつけて。河内本はおのづから世にもてはやさずなりし故にや。それとおほゆばかり

異りたる本も。今世には見へず。但し紹巴抄といふ物には。青表紙中比斷絶のやうなりし。といへる事あり。さらば中比は。むねと河内本を用ゐしにや。さればもしくは今世に傳れる物の中に。河内本といへるもあるにや。そはともあれかくもあれ。さしたる異本とはあることなし。然れども。すこしづゝの事は。かたみによきあしき所あれば。今此本文は。互に校へ合せて。そのよろしき方にしたがひて定めつ。其本どもは萬水一露。湖月抄の本をはじめて。別におこなはるゝ板本五部ばかりに。古き寫本二三部を校へ合せてたるに。玉小櫛に校正せられたると。餘滴にをりゝ引出たるとを。あひまじへて用ゐつ。なほひろくあさりもとめなば。よき本ども。あるべからめど。おのが見ぬをばいかはせん。後の人なほよく校へ正すべし。

一校へ合せたる本文は。余がよしと思へる方にのみ從ひてものしつれど。彼此ことわりのたがはぬ所は。異本のかたをも右旁に注して。イ云々とするしつ。されどまさしく誤れりと見えたるは。わづ

らはしくてさらに注せず。さてまた。りると誤れる類は。いと多ければ。そこになへるかたをのみとりて。わろきかたはかいやりつ。又侍給などの。りふなどの辭は。古き寫本どもには大かた省ける例と見へたれど。これによりて竟には大かたをはの格をさへ誤りて。意のきこえぬ事も出来しさまなれば。今は悉く加へてかきたり。これは古さまにはあらざれど。しか誤らんよりはまさりたれば也。

一 本文に脱たる語ありと見えて。とにかくに義の貫かぬ所には。かりに「」かくのごとき標をいれて。釋に其ゆゑをことわりつ。又衍りて加はりたりと見ゆるもとはしばらく「」かくのごとき標を圍みて。さながらに其字を省き。又かならずなくてはえあらぬ語の。脱たりと見ゆる所には。試に其語を補ひて。「」かくのごとき圍の中に記しつこれら皆やむことをえぬしわざ也。

一 假字は大かた古に隨ひてあらためたり。其中に梅をむめ。馬をむま。諾をむべなど。いにしへ。うといひし發語を。むといふ類は。此物語か、れた

る頃も。既にしかかけりとおぼえて。和名抄其餘のものにも。むとあるかた多し。此物語は。既に訛り類れたる音使の詞。また字音の語なども。さながらにかゝれたる例なれば。これらも皆むめむまとやうに。むとかくべきことわりなれど。さては初學の輩の見てまどふべきさはひともならんかとして。猶うとかけの類これかれあり。これらは作者の意にさへたがふ事とはおもへれど。此書は初學のためにとて。本文をだに譯して注せるほどのことなれば。これはたやむ事を得ぬしわざ也。また語の清濁も大かた古に隨ひて點をくはへたり。されどもまれに知れがたきは。多くは清音のまゝにしてさしおさつ。

一 爾有米里をなんめり。何止をなんど。有辨伎をあんべいなどいふ類は。みな音便にくづれたる語なれど。此物語はその世の俗語のまゝにかゝれたる例なれば。初よりかゝりしにこそ。されば今はた聊も改めず。さて書さまは。なめり。など。あべい。と書たるを。んを加へてよみならひたり。これは其世の詞つきを失はじとてのわざと見ゆれば。

片假字のンを加へて。そのよみさまをかつくしるしつ。されど後々に至りては。わづらはしくて皆はふきたり。いづれもンを加へたる心によむべし。此類なほ多し。准へてしるべし。さてまたうれしくかなしくなどのくを。うれしうかなしうなど。うと書たる。これも音便の語なるを。諸本たがひにまじへて書たれば。今改るにおよばず。語調のよろしきにしたがひていづれにもしるしつ。

一 本文の左旁に譯語をものせることは。いとく俗びたるしわざにて。識者のおもはんこともかややかしけれど。此物語をよむ人ごとに。雅言の耳遠くて。事の意を辨へがたしといふによりて。此書を講ずるをりなどに。いさゝめに其語の意を。本文の旁に記しつけたるを見て。かくてはいとたよりよし。といふ人のおほかるゆゑに。其本のままに彫せつるなれば。もとより識者に見すべきものにはあらず。たゞいとうひ學びの輩。さては女童などの。ふと見て。やがて解りつべきくさはひにもと思ふばかり也。さはあれど。千年にちかき雅語を。今世の俗語に譯しとりて。決く其

意にかなへんことは。先達もいへることく。なかなか容易からぬわざなれば。つとめて先達の譯されたる旨にもとづきて。余が考をもくはへたれど。猶言の意の異なること多くして。全く相當らぬ事どもあり。故相當らぬ所には。雅言一語に。俗言を二語づゝならべて擧たり。其語の意を互にとりまじへてさるとるべし。さても猶譯しがたき所は。たゞに某々のこと也。とやうに注せり。さて又漢字をも交へて譯したるは。いと逆なることわりなれど。今世は。なべてこの漢字のこゝろもて。よろづを通ずる事多ければ。大かたに知らるべきかぎりは。約やかなるをせんとして。かつく注しつけたる也。これはたなべて。俗に用ひなれたるもとして注せれば其字の本義には。たがへる所々なきにもあらねど。正しく相當る字して注する時は。却て初學のさとりがたき事も多ければ。これもやむ事を得ずてなん。されど餘りにたがへることゝもは。いさゝか心しらしめて記しつ。また本文の右旁に注したるは。いづれも其字の音なりとしるべし。

一此物語を講説せんとするには。雅言と俗言とあひかなふべきやうを。初よりよく思ひ定めて物せざれば。釋く人の意と。聽く人の意と。いたくたがふことありて。うまうその文の意を。傳へ受ることあたはず。此はおのれ年をろ試みてさとれる事也。さる事の爲には。此譯し語ども。いさかやうあることもあるべきにや。これはついでにいふのみ也。

一此物語の文章は。みづからさかしだちたるをいとひて。よろづおほどかにもせられたる故にや。彼と此と事のかはりたる所に。きはやかなるけぢめなくして。ふと見ては一ついさなる事のやうなる所あり。またその文語も。うらうへに打かへして。語勢をあやなされたる所々多く。なほざりに見ては。意の聞えかぬることあり。又かならず前にいふべき事を。いつも後へまはして。其事と聞ゆるさまにかゝれたる所おほく。甚しき所は。紙一ひら二ひらを過ても。猶何事ともさとりがたき事もおほし。これらあだし物語どもとは。こよなくすぐれたる所にて。文章の法とする

にたれり。然れども。初學の輩のこうずることなれば。今假にその標をつけて。其おもふべきを示さんとす。これはた漢文の例にならひたる事多けれど。はやく新釋に物せられたるにしたがひて。事をましくはへつ。其例どもこゝに擧るがごとじ。

大段落の標
一事を全く語り竟たる界に。此標をものしつ。小段落の標
一事のしばらく竟たる所の界などに。此標をものしつ。されども皇國言のふみは。漢文のごとく。きはやかに分るゝことなき所もあれば。これはた大かたの標と心得べし。次なるも同じ。

彼と此と事を分つ標
彼と此と。自と他と。事のかはる所。又問答のまぎらはしき所。また此事をしばらくさしおきて。彼事を挿みたる所などの界に。かゝる點を加へて標とす。

眼目の語の標
これは漢文に。字眼などいへるにひとしく。其所にひねとある語。或は殊更に多くつかひて。

けしきをあやなしたる語。または伏線の脈を綻ばしたる語などの右旁に。かゝる點を用ひて標とす。委しくは其所々の釋に。さる故をばことわるべし。

○語の清濁の標
濁るかたの點は常のごとし。必清てよむべき語を。俗に濁り來れる語には。○點をほどこして。其清べきよしを示しつ。

●助辭發語の標
助辭發語のまぎらはしきには。左旁にかゝる點をしるす。

「互爾乎波の首尾の標
これはいはゆるてにをはの係と結との標也。結びたる所の紛らはしきは。かやうの點を右旁にしるす。これに依て語脈を見明らかむべし。これいと要あること也。

語脈轉倒の標
語の脈を上下に轉倒して。文勢をなしたる所。のまぎらはしきには。かくのごとき點を右の旁に引て。其語の脈を示す。この點のされたる所を

繼て心得べし。たとへば。桐壺卷のはじめに。母北の方なん。いにしへの人のよしあるにて。おやうちぐし。さしあたりて世のおほえはなやかなる。御かたぐにもおとらず。何事のぎしきをも。もてなし給ひけれど云々。とある處などは。いにしへの人のよしあるにて。何事の儀式をもてなし給ひけれど。とつゞく語脈なる中に。おや打ぐし云々の事を挿みて語る法なり。されば此點をつぎて其意をさとるべし。又北方なんとあるなんは。もてなし給ひけれど。とある所結にて。つねにはけるといふべきを。れと轉じ。ど、うけてつゞけたる也。されば「かゝる點をつけて。其首尾を知しむ。又よしあるにてとある。にての辭は。正しくはもてなしへ係る脈なる事を。知しめんとて。(甲乙)の點を左旁に標しつ。餘はこれに准へてしるべし。猶語脈のまぎらはしき所には。かく二筋の點を引そへて。そのすぢを詳にす。此は殊に心をつけて見わかつべし。大かた此物語の聞えにくき所々は。此法をしらずして。よのつねの書

をよむがごとく。たゞにおしつゞけてよまんとするからに。事の意の辨へがたきをかし。されば殊によく心得おくべき也。

(甲)(乙)(丙)(丁)隔句文脈の標

これはいはゆる隔句法の遠く係りたる所にて上より受たる文脈をしらしめんために。係りて断たる下に(甲)をしるし。受て繼たる所に(乙)をしるしつ。この點を引合せて。其文の係りたる意を解るべし。二重にも三重にも句を疊みたる所には。(丙)(丁)(戊)(己)など、記して。其脈を分つ。

△▽ 語意を補ふ標

いひ切たる語の末に。含めのこしたる意。又今世にては。必意を加へてさくべき所などに。其意を左旁に注するに。他の譯語と紛れしがために。かゝる點の中にしるしつ。この中なる語の意を挿み補ひて。その文を解るべし。いと長き意の含まりたるは。別に頭書の釋に其故をいへり。

右の外にも。聊づゝの注例あれど。そは准へてもさとするべし。舊印本などに。人々の心詞の所には。

某心。某詞としるし。草子地には。地としるす類は。いづれも改めず。引歌の所に。かゝる點をかくる事も。湖月抄の例にならへる事ども。上條にいへるがごとし。

校正譯注源氏物語評釋首卷終

帖第一桐壺評釋

〔舊注〕此卷の名はすなはち此卷に御つぼねは桐壺なりといへる詞をもちて名付たる也一名は壺前裁といふ是もおまへのつぼねせんさいのさかりなるをとある詞によりてなり云々

〔新〕こを卷の名とせしは此卷に光源氏君の母御息所の局をきりつぼねといひ且専ら此御息所の事をいふ卷なれば也或抄に壺前裁とも名づけしといふはおまへのつぼ前裁てふ詞のあればなりされど桐壺こそことにわたりて聞ゆれ〇惣て此物語は紫式部の在し御時の様を書たるもの也されど前代の帝の御名をあげ其外の人々の様をも今の一人にあたらぬやうにかきなしたるは罪をのがれんとて也さてこのほどは帝の御いきほひやおとろへゆかせ給ひ臣下の權のみつよれるをうれへてひそかに帝の御いきほひつよりまさんずる心がまへを書たりと見ゆそのよしは次々にいふべし

〔玉〕源氏君生れ給へるより十二歳元服の事まで見えたりかくて卷の末におとなになり給ひて後は云

云とあるを花鳥餘情に此詞に十三歳十四歳十五歳三箇年の事をばこめて帯木卷は十六歳也とあり今思ふにしからずおとなになり給ふとは元服しておとなの形になり給へるよしなりこれに三年こもれりといふべからずなほ下の文にたゞいまはをさなき御ほどにつみなくおぼしなして云々とあるにてしるべしされば此卷は十二歳までにて帯木へ年立はつゝかざるなり伊勢物語にむかし男うひかうふりしてと書出せるも業平朝臣の成人のはじめを先いひおきてさて奈良へ下られたるは其後いつにても有べきがごとく此物語も此卷にまづ元服までを書おきてさて年立は帯木よりつゞけたる也桐壺卷は序文までもいりたらずといへる説いはれたる事なり

〔釋〕この桐壺の一卷は源氏君の本傳なりされば初に御父帝の御母更衣を寵し給ふ事より源氏君の生れ給へる事を擧げて末に御元服ありて源氏の氏を賜ひて御臣の列にいり給へること又當時の右大臣殿の婿になりてその里亭にすみ給ふよしまでを擧たる也故帯木より次下なる卷々とは年立もつゝか

たゞ此卷のみもてはなれたるなればさるこゝろして讀べし

(評)此物語の筆づかひのいみじきとはいふもさらなれど此卷は初の卷なればにやことにいみじき所所おほし先最初に帝の更衣を寵し給ふ事の甚しきよしをいひおこして次々に人のそしり恨のおこるさまをいひさてそのうらみねたみの故によりて竟に更衣は病となりてうせ給へるよしをいへるは或人もいへるごとく源氏君の孤と也給へる事をいひて見ん人のあはれの深くかゝるべき程としたるなるべしさて其次に更衣の身まかられたるを帝の深くをしみ歎かせ給ひて更衣の母北方のかたへ頼負の命婦をつかはされたる所又命婦がかへり参りたるところの一段は殊に語をえりとゝのへて文づらはなやかに心をかなしく書なされたりその中にをりからのけしきをかゝれたるなどはさらにいじめでたきに其法おそかにみだれずしてかなしびをそふるひいきとなれるさまかけても及ばぬ筆つきといふべしさてそこまでは上に揚貴妃のためしと書出られたるより白氏文集なる長恨歌をしたに

にははせてかゝれたるに其脈つゆもみだれずかつ彼にはよりながらいづこも其語の意をとりかへて新らしくめづらしく書なされたるなど卷々の引歌の法と同じくして文章の餘韻となりたるえもいはれずめでたしさて末にいたりて源氏君の傳にうつりその容貌と才藝とのいみじくめでたきよしをいふ中に高麗の相人に見せ給へるをいひて一世のほどにあるべき事を先いはずせたるなどぬけ出たる書さまといふべしこれなん一部のおもふきを思ひ構へられたることのはじめなりけるさて其後元服し給ひて其夜右大臣殿のむこに成給へる事をいへるはやらゝおとなになり給へることをしらせたるにて此卷の事のすぢこゝに終れりさる中に藤壺中宮の傳左右大臣の傳弘徽殿女御の事東宮の御事頭中將葵上の事など挿みあらはして末の卷々の源因とせられたるなどいとも透間なきものもおほかた卷中の人々の事は源氏君の御族の一とも藤壺中宮の一とも左大臣頭中將の一とも右大臣弘徽殿女御の一ともにて其餘の人々は皆それに屬たるがごとき人々也さればそのむねとあるかぎりを

ばみな此卷に引出て末の卷の基とせられたる法いとおそかにめでたしさて卷末にいたりてふたゞび光る君といふ名の事をいひてとぢめられたるにてこの卷は此君の本傳をむねとかゝれたることもおのづからあらはれてかぎりなくあぢはひふかし大かたかゝることは先達もをりゝ注せられたることあれどさしも委しくはれたるもなければここがましけれどさし出て評ずる也見ん人意の過たるを思ひゆるしてよ

いづれのおほん時に

〔玉〕此物語はすべて作り物語にて今世にはゆる言ばなしなりさる故に昔いづれの御時にありけんかゝる事の有りといへるにて此詞一部にわたれり云々

女御更衣(花)女御は后につげる女官也更衣は女御よりは次の人なり云云

いとやんとなきいはにはあらぬが(釋)或説に源氏君はよきををつくしてかけるなれば御母も大臣家の女などにつくりなすべきをやんとなきはならぬとあるはしばらくおさへて見る人にあはれと思はせんとて也末に帝のわたくし物にかしづき給ふなどある皆其意也といへり此説しかるべし

ときめき給ふありけり(評)時めき給ふ更衣ありけりなどは、いずしてそれより下らうの更衣たちはといふ所にて更衣と知しめたるいみじき筆づかひといふべしやうのと次々にいと多し心得

おくべしはじめより(玉)もとよりといはんがとし

うらみをおふつもりにや(釋)人の恨の我身にかゝる事を物を引負ふになぞらへて負といへる也さて恨をおひてとやかくや心を苦しめたるが積りて竟に病がちなり給へる意なり

まごち(新)まごにすみがち也いよ／＼あつ云々(評)人の妬むによりて里にすみがちなれば逢給ふを遠くしていよ／＼飽ずあはれにおぼえ給ひつゝ、竟には人の所しりをもえ懼らせ給はぬ也げに人情はさるものになんありける此脉次々にます／＼甚しくなりもてゆく様よく／＼心をつけて味はふべし世のためしにもなりぬべき

(新)末に楊貴妃にたとへんの本えめをそばめつ、(新)あしくきはしき物を見る時のさま也長恨歌傳に京師長安爲是側目といふにもよりしならん

いづれの御時にか。女御更衣あまたさぶらひ給ひける中に。いとやんことなききはにはあらぬが。すぐれてときめき給ふありけり。はじめよりわれはと思ひあがり給へる御かたぐ。めざましきものにおとしめそねみ給ふ。おなじほど。それより下らうの更衣たちは。ましてやすからず。あさゆふの宮づかへにつけても。人の心をのみらごかし。うらみをおふつもりにやありけむ。いとあつしくなりゆき。もの心ほそげにさがちなるを。いよ／＼あかず

あはれるものにおもほして。人のそしりをもえはからせ給はず。世のためしにもなりぬべき。御もてなしなり。かんだちめうへ人なども。あいなくめをそばめつ。いとまばゆき人の御おぼえなり。もろこしにも。かゝることのおこりにこそ。世もみだれあしかりけれ。とやう／＼あめのしたにもあぢきなう。人のもてなやみぐさになりて。楊貴妃のためしもひきいでつべうなりゆくに。いとほしたなきことおほかれど。かたしけなき御心ばへの。た

ぐひなきをたのみにてまじらひ給ふ。ちゝの大納言はなくなりて。は、北のかたなんいにしへの人のよしあるにて。おやうちぐし。さしあたりてよのおぼえはなやかなる御かたぐにもおとらず。何事のさしきをも。もてなし給ひけれど。とりたて、はかしくしき。御うしろみしなけれは。ことゝある時は。なほより所なく心ほそげなり。さきの世にも御ちぎりやふか、りけん。よになくきよらなる。たまのをのこみこさへうまれ給ひぬ。いつしかと心もとながらせ給ひて。いそぎまゐらせて御覽するに。めづらかなるちどの御かたちなり一のみこは。右大臣の女御の御はらにて。よせおもく。うたがひなきまうけの君。と世にもてかしづき聞ゆれど。この御にはひには。ならび給ふべくもあらざりければ。おほかたのやんことなき御おもひにて。この君をばわたくしものにおもほしかしづき給ふ事かぎりなし。母君はじめより。おしなべてのうへみやづかへし給ふべききはにはあらざりき。おほえいとや

おくべしはじめより(玉)もとよりといはんがとし

(評)桐盤帝の更衣を寵し給ふことをそのかみ専ら行はれたる長恨歌に依て巧みに書なさんと結構なる故にこゝに初てかの傳の文をにははし出られたる也されども彼にはすこしも拘らずしていと新しくめづらかりとりなされたる事次に評するがごとし
もろこしにも (評)これ即ち楊貴妃の事を初めて鑑ばし出されたるにてはるかの下に人のみかのためしまでひきいづつとさうめきなげきけりとある首尾也心得おきてよむべし

天の下にもあぢきなう (玉)天の下の人あぢきなき御しわざとするよし也或抄云はじめに女中のれたみはいひ次にかんだちめうべ人といひこゝに天の下にもといへり(評)この或抄の説げにいと委しく心得たりと云べし作者の心ありし事末にてしられたりそこにいふべし
はしたなき事おほかれど (玉)こゝは更衣の身に受る方よりいへり

父の大女ごんはなくなりて (評)更衣の父按察大納言の事を何となき物語の中に挿みて説出されたりかくてその委しき事は更衣のうせ給へる後に着されたりこの文法巻々におほし心得おくべしこゝよりは更衣の心づかひの苦しきありさまを委く説はじむる也
は北の方なん云々よしあるにて (釋)なんはもてなし給ひけれどあるけれど結びてどい受たる格なりいにへし人のよしあるにてはいにしへのよしある人にてといふ意也小櫛にては下のもてなし給ひけれどいふへつやく間也とあり標の點にて心得べし

御契やふかりりけん云々 (釋)帝と更衣と前世の御宿縁やふかりりけん清らかなる御子を生給ふといふ意也さへといへるは男御子なる故に殊にめでたき意にていへる也
いつしがと云々 (釋)御産は更衣の御まことにてあるなれば帝の何時歎生れ給ふとやうに心もとなく待遠におぼしめしける故に急ぎまわらせて御覽するなり

一のみこは云々 (釋)帝の第一の御子也後に朱雀院と見えたる御事也右大臣の女御は右大臣の御女の女御といふ意也兼中弘徽殿とある御事なり(評)主客の法を設けて初めて朱雀院の御事を書出せりこれやがて源氏君の方と弘徽殿の方と反對して御中のよからぬ事を語る最初の事なりさて一のみこの御勢ひのいみじきことを掲ひて却てそれにもまさる若宮の御寵愛の甚しき事をいへる抑揚いとめでたし
まうけの君 (釋)春宮の御事なり

御にほひには (釋)にほひは容顏のうつくしくめでたきをさしていへるなり

わたくしものに (釋)帝の私物として格外にかしづき給ふといふ意なり下に見えたる御着袴御元服の式などのよのつれに絶たるさまなど皆取物のうちなり心をつくべしかしづきは尊ふたより轉りていたはるにもいへり
母君 (釋)一本によりて補ふ此詞なき本はわるし小櫛の脱なり

おしなべての上宮づかへ (細)女御更衣は別殿に伺候して時々こそさふらふべきを此人は奥侍などのやうに御前さうめしまとはせはかへり

てかるんしきなり(花)すけ内侍などのごとく朝夕に御前にしこうするを上宮仕といへり

(評)此段立かへりて更衣の御寵愛のさまをいひてさて若宮をうみ奉玉へる後の事に及べり

上ずめかしけれど (新)今昔物語の古本に貴人の上衆とかき下衆をば下衆と書り時の俗語也(釋)今俗にも上しうなどいふ也さて上衆めきてはあれど軽きつたに見えしとつづく意の文中に其軽く見ゆるゆゑを掲みてことわる也此法巻中に多し

まつはさせ (釋)絲の物に纏はるゝごとく御側に引つけて放ち玉はめ意なり

まうのぼらせ玉ふ (玉)種「藤原基云給ふは給ひと有しを説けるなるべし

おほとのこもり過して (湖師)長恨歌に春宵苦短日高起とある心なり
やがてさふらはせ玉ひ (玉)更衣を

むことなく。上ずめかしけれど。わりなくまつはさせ給ふあまりに。

べき御あそびのをり。なに事にもゆるあることふし。には。まづま

うのぼらせ給ふ。ある時はおほとのこもりすぐして。やがてさふらはせ給ひ

など。あながちにおまへさらず。もてなさせ給ひしほどに。おのづからかる

さかたにも見えしを。この御子生れ給ひてのちは。いと心ことに。おもほし

おきてたれば。坊にも。ようせずは。このみこのる給ふべきなめり。と一の

みこの女御は。おぼしうたがへり。人よりさきにまわり給ひて。やんこと

なき御思ひなべてならず。御子たちなどもおはしませば。この御かたの御い

さめをのみぞ。なほわづらはしく。心ぐるしう思ひ聞えさせ給ひける。かし

こき御かけをば。たのみきこえながら。おとしめ。さすをもとめ給ふ人はお

ほく。我身はかよわく。ものはかなきありさまにて。なかくなるもの思ひ

をぞし給ふ。御つばねはきりつばなり。あまたの御かたをすきさせ給ひ

田舎宮ニ
宮中衛
郭注巻四
問道云々

局へ退らしめず翌日もそのまゝ御前にさふらはしめ給ふなり
いと心ことに(釋)若宮生れ給ひてよりは更衣をも格別に思しめす也
坊にも(孟)東宮坊 職員令 (釋)天位を嗣給ふべき皇太子のおはします宮を東宮坊といふ
一のみこの女御(釋)一の御子の御母女御といふを略きていへるなりすなはち弘徽殿の女御なり
人よりさきに参り給ひて(湖)弘徽殿女御は餘の女御更衣よりさきに入内ありて朱雀院一品宮前齋宮などの御母なれば帝の御思ひやんとなかりしなり (評)坊にもようせずはといふより下源氏君の方と御中のよがるまじき事のよしなはいへるついでに帝も弘徽殿をば懐らせ給へる事を擧て弘徽殿がたの御威勢の争ひがたきさまをあらはせり此脉やうにすいみゆく文勢に心を付べし
きずをもとめ(釋)きずはあやまち也漢書の吹毛求疵といふ語に依てかくかくれたるなるべきこと毒注のごとくなるべしあやまちを求め出して恥をあたへんとする意なり (評)此段恨をおふ事のますい深くなりゆきてつひにうせ給ふべき事のすぢないよくすいめてゆく也なかりなる物思ひをぞし給ふ (細)此物語なかりといふ詞いづくも妙なり云々御寵愛なくばやうにはあるまじきをこれゆみに中々なる物思ひもあるなり
御つぼればきりつばなり(釋)帝のおはします清涼殿の丑寅の方にある浪景舎を桐並といふ御つばに桐を植られたりとそこに更衣の御局はあるなり (評)殊更に御座所より遠き桐つばなとり出たるはあまたの御方々の恨をかされんとて結構なるべし作者の用意いとこまやかに巧なり
あまたの御かたなくを(花)弘徽殿麗景殿宣耀殿などを過てゆく馬道つゞきなればあまたの御かたなくを過させ給ふとはいへり
御まへわたり(釋)あまたの御かたなくの前を更衣のわたりて清涼殿へ上り給ふないふ舊説はひがことなり
げにことわりと見えたり(評)この語は作者の自評なり更衣の時めき給ふさまを強く聞せたる筆づかひいといふ
うちはし(細)きり馬道に板を打わたしてかよふみち也
わたしの(釋)彼此の殿の間に打わたして建たるを渡殿といふ今世につり屋といふ物のことし
あやしきわざをしつ(湖)けがらはしき物をまきちらして更衣をおくりむかへる女房のきぬのすそをよこしなるべし
めだうの戸をさしこめ(新)和名抄に辨色立成云馬道俗音米多字向堂之道也と書りこは外へよきさくるかたなき馬道なりさてその馬道の所々をさへさる妻戸を閉ちてかたにてもこなたにても心得てひらかぬ也云々
はしたなめ(玉)はしたなからしむるにて更衣を迷惑せしむるをいふ
後涼殿(花)御殿の西にあたる殿なれば堂の御所にちかき也俊成卿云うらうぞんとよむべし假字がきの物を正字のごとくよめばこはく

しき也云々
うへつぼね(玉)つれの局の外に御座所ちかきあたりに別に休息所にまうけたる局なり
そのうらむましてやらんかたなし(釋)やらんかたなしははらし遣る所なき意にて皆更衣の身に負ひ給ふと云こゝる也(評)此段更衣の思ひわびたるを御覽じていとあはれのかいりゆく情けにさも有べき也かくて又恨をおふ事一段ふかくなりにけり
一のみやの奉りしにおとらず(釋)一宮の御着袴の時奉りしに劣ずといふ意也のむじいとめづらしさてこれは非例のことなれど御おぼえの殊なるがゆみにかくは有にて前に私物にとありし脉なり
くらづかさなめど(釋)内蔵寮納殿也共に御寶物など納めおとこるなり
えそれみあへ給はず(釋)更衣を情しと思ふ御かたなくも若宮をばしひて得羨みあへ給はずと也あへは
つ、ひさなき御まへわたりに。人の御心をつくし給ふも。げにことわりと見えたり。まうのばり給ふにも。あまり打しきるをりくは。うちはしわた殿。こ、かしこのみちに。あやしきわざをしつ。御おくりむかへの人の。きぬのすそたへがたう。まさなき事どもあり。又ある時は。えさらぬめだうのとをさしこめ。こなたかなた。心をあはせてはしたなめわづらはせ給ふ時もおほかり。事にふれて。かざしらず。くるしきことのみまされば。いといたう思ひわびたるを。いとあはれと御らんじて。後涼殿に。もとよりさふらひ給ふ更衣のさうしを。ほかにうつさせ給ひて。うへつぼねにたまはす。そのうらみましてやらんかたなし。このみこみつになり給ふ年。御はかまき事。一の宮の奉りしにおとらず。くらづかさ。をさめどの。ものをつくして。いみじうせさせ給ふ。それにつけても。世のそしりのみおほかれど。このみこのおよげもておはする。御かたち心ばへ。ありがたくめづらしきまで見

強てすることにて敬字の意也あへずはその反にて不敬なり
 物の心しり給ふ人は (釋) 御かたがたの中にも物事の情をよく思ひわきて知給ふ人は却て賞歎き給ふとの意也なりけりは深く歎息したる辭なりさてかくいふは源氏君の心も心もすぐれてめでたきよしを語り出るにて仇なふ人もめで奉るとまでいへるなり猶下にもあり上に玉の男御子と書出たる詠也心得おくべし
 そのとしの夏 (評) 上の段に恨みのつもりたる事をいひ置てこゝに至りて竟に病を引出給へるさまに過ぎなされたり是より下は帝の御寵愛の進みゆく方を主とあらはしたり
 みやす所 (玉) 此物語の例をもて考ふるに細流にも注せられたる如く御子なうみ奉り給へば御息所と申せりさて是は女御更衣などの外に別に此所あるにはあらざ女御更衣などにわたれり云々

え給ふを。えそねみあへ給はず。ものゝこゝろしり給ふ人は。かゝる人も世にいでおはするものなりけり。とあさやしきまで。めをおどろかし給ふ。そのとしの夏。みやす所はかなきこゝちにわづらひて。まかでなんとし給ふを。いとまさらにはゆるさせ給はず。としごろつねのあつしさになり給へれば。御めなれて。猶しばしこゝろみよ。とのみのたまはするに。日々におもひ給ひて。たゞ五六日のほどに。いとよわうなれば。はゞきみなくゝそらして。まかでさせ奉り給ふ。かゝるをりにも。あるまじきはぢもこそ。と心づかひして。みこをばといめ奉りて。しのびてぞ出給ふ。かぎりあれば。さのみもえといめさせ給はず。御覽じだにおくらぬおぼつかなさ。いふかたなくおぼさる。いとにほひやかに。うつくしげなる人の。いたうおもやせて。いとあはれと物を思ひしみなながら。ことにいで、も聞えやらず。あるかなきかにさえいりつ、ものし給ふを御覽するに。きしかたゆくすおほしめされず。よ

まかでさせ奉り給ふ (新) 落着たまついで其事のさまを次々にしらす文の一つなり
 あるまじきはぢもこそ
 (湖) あまた妬む人あればなり
 みこをばといめ奉りて
 (玉) 源氏君もともに退出給はんには人のよくしるべき故にひそかに入のしるまじきさまにて更衣のみ退出なりそは人のひろく知てはれたる人々のしわざにて恥がましき事などもあらんかとてなり
 がぎりあれば (湖) 別をいしませ給ふもその限りあればなり
 いとにほひやかに云々 (新) 一は御休所の御ありさまをいよく書とりたり
 あはれと物を思ひしみなながら
 (新) 今はがぎりと思へば御なごりなも御子の御事なも思ひしみて奏しおくべき事多かるべきなり
 あるかなきかにきえ入つ
 (釋) 氣息のあるかなきかに消かへりてなはするさま也氣息と云ずし

ろづの事を。なくゝ契りのたまはすれど。御いらへもえ聞え給はず。さのみなどもいとたゆげにて。いとよなよくと。われかのけしきにてふしたれば。いかさまにか。とおほしめしまどはる。てぐるまのせんじなどの給はせても。又いらせ給ひては。さらにえゆるさせ給はず。かぎりあらんみちにも。おくれさきだ。とちぎらせ給ひけるを。さりとともうちすて、はえゆきやらじ。との給はするを。女もいとみじと見たてまつりて。かぎりとしてわかる、道のかなしきにかまはしきはいのちなりけり。いとかく思ひ給へましかば。といきもたえつ。きこえまほしげなることは。ありげなれど。いとくるしげに。たゆげなれば。かくなからともかくもならんぞ。御覽じはてむ。とおほしめすに。けふはじむべきいのりども。さるべき人々うけたまはれる。こよひよりときこえいそがせば。わりなくおもほしなから。まかでさせ給ひつ。御むねのみつとふたがりて。つゆまどろまれず。あかし

きりつは

てそれと聞しむるは文調を失くせしとてのわざなるべし

きしかたゆく末おぼしむかれず (釋) 俗言に時節の分別もなくといふ意なりいたく悲ひ給ふさまなり

われかのけしきにて (玉) 我か人かなどいふたがふほどによわき心なり

いさまにいと (玉) 俗言にこれは何とせうぞといふ意なりまどはるといへるにてしるべし

てぐるまのせんじ (河) てぐるまは石階の高き門よりのぼる中の重を出入のためなり中重の警車とも云なり (和秘) 輿に輪をかけて手してひく

車をいふなり内裏の門の内などをのるなり更衣重調なれば (註) 重にのりて退出あるべきよしを仰らるゝ旨言なり

又いらせ給ひては (湖) 更衣の局へ帝入らせ玉ひて御覽じては鑑別れがたく思しめすなり

さりとて打すては (釋) さりとともは然有ともなり病をさして然とはのたまへるなり (玉) ゆくは死てゆくなり上の階次の歌にて知るべし (評)

こいの御調いとせらにあはれにて鬼神もおしのごひつべくな

かざりとて云々 (新) 右のかざりあらん道にも云々といふをうけては契り奉りしかど命はおのののかざり有て別れ奉るがかなしきにいひ

さて云々ともかくてもいきたまものは命にてこそあれとなり (玉) 拾遺にいへることく生に行なわれたり但し行のたはたわがる道と

いへる縁のみにて歌の意は生なり

いきりたえつゝ云々 (釋) 思もたえつゝは絶つゝして未絶ざる意なればたえんゝにてといはんがごとし (評) いかく思給へまじかばといふ

下に奏しおくべき事は多かりしと後悔の意を含めたるにてかざりもなればに聞えたり又聞えまほしげありげくるしげたゆげなど殊更

に四つのけもじを重れたるは皆他より推量りたる更衣のありさまなればなりいとくはしくめでたしといふべし

けふはじむべきのりども (評) いのりの事にて限りなき御別れのわりなきを交りたる書さまいとらうしくあざやかなり

御使のゆきかふ (拾) (新) 行歸なり萬葉に往反とかけり

よなか打過るほどに (玉) これは更衣の里の人々のいへる詞を御使のききたるところをいふなり

こもりおはします (抄) 夜の御殿などへ引こもり給へるなるべし

みこはかくても (玉) 御母更衣はうせ給ひてもの意なり

例なき事なれば (細) 七歳巳前の人隠忌の事醍醐の御代に法をたてたる、事兩度改れり是ははじめ七歳巳前の人も隠のいみあるべしと有し時

の分にかけるなり

あやしと見奉り給へるを (玉補) こゝに脱あるべしと故大人にさきに聞たるを小橋にはもちされたり (釋) をもじ下に傳る所なしもしくは指文

か (評) こゝの語かなしひの情を懸したり打よむ者の腸を断るゝこゝちす

かねさせ給ふ。御使のゆきかふほどもなきに。なほいふせさをかざりなくの

たまはせつるを。夜中うちすするほどになん。たえはて給ひぬる。とてなき

さわげば。御つかひもいとあへなくてかへりまゐりぬ。きこしめす御心まど

ひ。なにごともおぼしめしむかれず。こもりおはします。みこは。かくても

いと御らんせまほしけれど。かゝるほどにさぶらひ給ふれいなさきことなれば。

まかでたまひなんとす。なにごとかあらんともおもほしたらす。さぶらふ人

人のなきまどひ。うへも御なみだのひまなくなれおはしますを。あやしと

見奉り給へる(を)。よろしきことにだに。かゝるわかれのかなしからぬはな

さわざなるを。さしてあはれにいふかひなし。かざりあれば。れいのさほら

にをさめたてまつるを。は、北のかた。おなじけふりにものぼりなん。とな

きこがれ給ひて。御おくりの女房のくるまに。したひのり給ひて。をたぎと

いふ所に。いといかめしうそのさほうしたるに。おはしつきたることち。

よろしき事だに云々 (釋) 此所いたく紛らほしきを諸注に何のさだまなきはいふがしき事なりまづよろしき事だには新釋に常さまの事にだになりとある意にて俗言に相應な事と云意なるべし

おなじけふりにも云々 (釋) 當時の葬はむれと火葬なりしからに煙といへるなり母北の方更衣と向く死んとの給ふをかくあやなしていへるなり(玉) こがれは煙の縁の詞をもていへるにて文のあやなり此類多し心を付べし

女房 (釋) 房はつばねにて今いふ部屋の事なり仕へする女の房の事なり

り轉りてつふる女をすべていふ
稱となれるなり今世女中衆といふ
がごとし

愛宕といふ所〔河〕桓武天皇平安城
に遷都の時此地を諸人の葬所に定
めらる延暦遷都記に見えたり
むなしき御からをみる

〔玉〕これははまだ葬に出た、いれざ
るさきにいはいたりし語にてかれ
てはつくの給ひつれどいなり
はひになり給はんを〔釋〕火葬なれ
ばかくいへり同じ煙にもとありし
脈なり

三位のくらゐ〔玉〕これは三位のく
らゐと書たれば三位は音にてさん
心と訓んぞ物語の詞つきなりける
宣命〔釋〕簡位の旨をいれたる勅
語のみみなり〔湖〕大臣勅を奉り
て内記に命じて作らしむるよし延
喜式に有少納言これをよむと云々
今一さざみの位

〔箋〕更衣は四位女御は三位なり
物思ひしり給ふは〔釋〕にくみ給ふ
人々の中にも物の情思ひしり給ふ

人はといふ意也上に物の心しり給
ふ人はとありしすぢにて情む人の
中より賞る方の人をとり出たる文
のあや也

さまあしき〔釋〕きりつぼの更衣一
人を寵し給ふ故に他の女御更衣た
ちはおのづからすさめられたるを
嫌悪さといへる也外見のわるき意
也

うへの女房〔玉〕すべてうへとは帝
の御あたり近き事にいへりうへつ
ばれうへみやづかへなどのごとし
これは帝の御前ちかくつかうまつ
る女房をいへり

〔奥入〕ある時はありのすさびに
にくかりきなくてぞ人は戀しかり
ける〔拾〕六帖第五物語「ある時は
ありのすさびにいたらはで戀しき
物とわかれてぞあるこの歌はあり
て奥入の歌なし何に出たるにつ
〔釋〕案に奥入の引歌はげに疑はし
きもの也されども六帖の歌をうへ
て引出べきにもあらず別にさやう

かばかりかはありけん。むなしき御からをみる。猶おはする物とおもふ

が。いとかひなければ。はひになり給はんを見奉りて。今はなき人。とひた

ぶるに思ひなりなん。とさかしらの給ひつれど。くるまよりおちぬべうまど

ひ給へば。さは思ひつかし。と人々もてわづらひ聞ゆ。うちより御つかひあ

り。三位のくらゐおくり給ふよし。勅使きてその宣命よびなん。かなしきこ

となりける。女御とだにいはずなりぬるが。あかずくちをしうおぼさるれ

ば。いさひとさざみのくらゐをだに。とおくらせ給ふなりけり。これにつけ

てもにくみ給ふ人々おほかり。物思ひしり給ふは。さまかたちなどの。めで

たかりしこと。心ばせのなだらかにめやすく。にくみがたかりし事など。今

ぞおぼしいづる。さまあしき御もてなしゆゑこそ。すげなうそねみ給ひしか。

人からのあはれになさけありし御心を。うへの女房なども。こひしのびあへ

り。なくてぞ。とはかゝるをりにや。と見えたり。はかなく日比すぎて。後

のわざなどにも。こまかにとふらはせ給ふ。ほどふるまゝに。せんかたなう
かなしうおぼさるゝに。御かたゝの御とのゐなども。たえてし給はず。た
だなみだにひぢて。あかしくらさせ給へば。見たてまつる人さへ露けき秋なり
◎なきあとまで。人のむねあくまじかりける人の御おぼえかなとぞ。弘徽殿
などには。なほゆるしなうの給ひける。◎一の宮を見奉らせ給ふにも。わか宮
の御こひしさのみ。おもほし出つゝ。したしき女房。御めのとなどをつかは
しつゝ。ありさまを聞しめす。野分たちて。にはかにはださむき夕暮のは
ど。つねよりもおぼしいづる事おほくて。ゆげひの命婦といふをつかはす。
夕月夜のをかしきほどに。いだしたてさせ給ひて。やがてながめおはします。
かうやうのをりは。御あそびなどせさせ給ひしに。こゝることなる物のねを
かきならし。はかなくきこえいづることのはも。人よりはことなりしけはひ
かたちの。おもかげにつとそひておぼさるゝも。やみのうつゝには。なほお

の歌ありしにこそ猶よく尋ねればいなるにやとある下に含めたる意も本歌のさまによりては聊たがふべしかれ試に△ヨミケン△
△アラン△と二やうに記しおきつ

御かたんの御とのぬ (釋)女御更衣たちの帝へ御番に参り給ふ事也

露けき秋なり (河)後選「人はいさことぞともなきながめにぞわれは露けき秋もふらる、(釋)案にこれは引歌にはあらず類似のみ也たカカハ
て見奉る人までも帝の御心をおしはかり奉りて涙がち也といふ意を露けきとはいへる也さて秋なりといふに時のおしうつりたることをおも
はせたる筆のはたきさらしにめでたし

のわかたちて (餘)和名抄云暴風史記云暴風雷雨語抄八和知又乃和木乃加世(釋)野分は秋の暴風を云たちては其風の吹立つなりたなごり
よみて野分めきてとやうに説る注はひがことなりさてはふく風などの詞なくして聞えぬことなり野分はあながちに木を折家を倒すばかりの
大風のみいふにはあらずた強くふく風のことなればこのけしきに論なし

はださむき (拾)萬葉に膚の字をかきてはだへさむしとよめる歌おほし(釋)此説のごとく膚寒きなり將といふ説はわろし野分の風吹立てに
はかに膚寒き夕ぐれなりげにいと人戀しくおもほし給ひけん事うべなりともうべなり

夕月夜となりたるさまいとめでたしこの一段は殊に詞をといのへてみやびかに書なされたり次々心とめて見るべし

やがてながめおほします (評)つれよりもおぼし出る事多き故に命婦を出し給ひても猶そのまゝに打ながめておほしますなり餘情思ひまゐるべ
し下の命婦がかへり参れる所と相照してあははふべし

かうやうのなりは (釋)夕月夜のかしきほどに (釋)夕月夜は宵のほど月夜にて曉の闇なる比を云八月の十日ころのさまなり(評)御使を出し給ふほどに暮はてて
やみのうつしには(奥入)「うづ玉のやみのうつし」はさだかなる夢にいくらもまさらざりけり(細)夢にいくらもまさらざりけりといひたるよ
りは此傳は猶ほかなきとなり引歌のとらさま奇妙なり

門ひきいるより (釋)車を門より引入るなり車といはずして車と聞ゆるはいひなれたる故にもあらんか又心して省けるにも有べし次々も皆
まかり

やみにくれて (餘)後選雜一兼輔朝臣「人のおやの心はやみにあられども子を思ふ道にまどひぬるかな(釋)此歌の詞をにははせて書るなり更衣
を想ひ給ふなげきにくれまどひて母君のふしまつみ給へる間になり

草もたかくなり (釋)これはとりつくるはぬけしきを共しくいへるまでにて實に草の高くなるにはあらずかれこちしてといへり心をつく
べし(評)上に野分たちてといひ夕月夜といひ出たる脈ながへず次々も皆風と月とを並べ擧て時のけしきをわかれたるいとおそかに注め

自然に注に月の事をいはいはれ
たれど風のさだなきはいかにぞや
さてこいには闇をもて月に反對し
草をらて風のけしきをそへられた
る殊にめでたきかきさまなり心を
つくべし

へむぐらにもささらず

(奥入)新勅「とふ人もなき宿なれ
どくる春はやへむぐらにもささら
ざりけり實之(餘)此歌家集并六帖
二の卷にも見えたり(細)春を月に
かへて引用

よもぎふ (釋)は君の卑下の詞な
り上の草むぐらなどの縁なり

げにえたままじく (釋)げには今ま
でとまり侍るがいとうきをとおる
をうけてげにといへるなりえたま
まじくは命もこらへがたきさまに
見ゆるを云

内侍のすけのそうし給ひしな
(釋)これよきまきに典侍なる女
房を御使に遣されし事ありしさま
に書なしたるなり次のげにこそと
いへるは其典侍の奏したる語をう

とりけり命婦かここにまかやつきて。かどひきいるより。氣はひあはれな
り。やもめずみなれど。人ひとりの御かしづきに。とかくつくるひたて、め
やすきほどにて。すぐし給ひつるを。やみにくれて。ふししづみ給へるほど
に。くさもたかくなり。野分^{ノノヰ}にいとあれたるこちして。月かげばかりぞ。
「やへむぐらにもささらずさしいらたる。みなみおもてにおろして。は、君と
みにえものもの給はず。今までとまり侍るが。いとうきを。かゝる御つかひ
のよもぎふのつゆわけ入給ふにつけても。いとほづかしうなんとて。げにえ
たままじくない給ふまゐりてはいと心ぐるしう。心ぎも、つくるやうにな
ん。と内侍のすけのそうし給ひしを。もの思ひ給へしらぬこちにも。げに
こそいとしのびがたう侍りけれ。とてや、ためらひて。おほせごとつたへ聞
ゆ。しばしばゆめかとのみたどられしを。やうく思ひしづまるにしも。さ
むべきかたなくたへがたきは。いかにすべきわざにかとも。とひあはずべき

けていへるなり

やいためらひて (釋) やいは暫時といはんがごとしためらひは猶豫せるなり命婦の用意いみじく聞えたり

まばしは夢かとのみ (釋) 更衣の身まかられしを餘りのかなしさに暫くは夢かと思しめしたどられしとなりたどるは手取の意にて物を捜りしするやうの事にいへりこゝは夢かと思ひさぐられ給ひし意なり

さむべきかたなく (新) 上に夢かとのびては参り給ひなんや

(湖) 母君に参内あれとなり露けき中に (釋) 涙がちなる露の中にといふ意なるを折から秋なればかくの給へるなり

むせかへらせ給ひつゝかつは人も云 (評) 御かなしみのありさまき得ていといみじ

うけ給はりもはてぬやうにて (新) こゝの心づかひ有べき事なり

(評) やうにてとかける更にめでためも見え侍らぬに (評) 見え侍らぬと有て光にてとある事的情つらぬきて縁の詞はなれずいとくめでたし(湖) 勅定を光にて見るとの心なり

ほどへばすこし云々 (新) 上の物語をむかへ見るに事のこゝろ相はなれずして又かまならぬやうに書なしたり

もろともにはぐまぬ (玉) これはもろともにはぐまぬがおぼつかなきをと有けんを誤れるなるべし本のまゝにては種ならず云々さてもろともには更衣の母と諸共に也若宮里におはしまして祖母一人してはぐみて帝のもろ共にはえはぐみ給はぬよし也更衣と諸共にといへる注はひがこと也さてはおぼつかなきといふ詞にかなはず

むせかのたみになずらへて (玉) 物し給へとは母に禁裡へまの

人だになきを。しのびてはまゐり給ひなんや。わかみやのいとおぼつかなく。露けき中にすぐし給ふも。心をしうおぼざるを。とくまゐり給へなど。

はかしくしうものたまはせやらす。むせかへらせ給ひつゝ。かつは人も心よわく見奉るらん。とおぼしつゝまぬにしもあらぬ御けしきの。心ぐるしさにうけ給はりもはてぬやうにてなん。まかで侍りぬる。とて御文たてまつる。

めも見え侍らぬに。かくかこきおほせごとをひかりにてなん。とて見給ふ。ほどへば。すこしうちまざる。事もや。とまぢすくす月日にそへて。いとしのびがたきは。わりなきわざになん。いはけなき人もいかに。と思ひやりつゝ。もろともにはぐまぬおぼつかなきを。いまは猶ひかしのかたみになずらへて。ものし給へなど。こまやかにかせ給へり。

みやぎの。露よきむすぶ風のおとにこ萩がもとを思ひこそやれ。とあれど。え見給ひはせず。いのちながさの。いとつらう思ひ給へしらるゝに。つ松のお

もはんことだに。はづかしう思ひ給へ侍れば。も、しきにゆきかひ侍らんこととは。ましていとはかりおほくなん。かこきおほせごとを。たびくうけ給はりながら。みづからはえなん思ひ給へたつまじき。わか宮は。いかにおもほしするにか。まゐり給はんことをのみなん。おほしいそぐめれば。こ

とわりになしう見奉り侍るなど。うちうちおもひ給ふるさまを。そうし給へ。ゆ、しき身に侍れば。かくておはしますも。いましうかたじけなくなどの給ふ。宮はおほとのもりにけり。見たてまつりて。くはしく御有さまもそうし侍らまほしきを。まぢおはしますらんを。夜ふけ侍りぬべし。と

ていそぐ。くれまどふ心のやみも。たへがたきかたはしをだに。はるくばかりに聞えまほしう侍るを。わたくしにも。心のどかにまかで給へ。としごろうれしくおもたしきついでにのみ。たちより給ひしものを。かゝる御せう

そこにて。みたてまつる。かへすくつれなき命にも侍るかな。生れし時よ

引給へとのたまへる也云々若宮を我もそこと諸共にはぐまぬがおぼつかなきほどに今は若宮を更衣の形見ぞと思ひて具し奉り給へわれもそこともろともにはぐまんとなり云々

みやぎの、云々〔玉〕拾遺に類歌を證に引て宮城野を宮中にかへるまでは有まじきかといへれど猶宮中の心有べし東屋の巻に宮城野の小萩が本としらませばといふ歌も宮城野とは八宮の事にいへるたぐひ也花鳥に露吹結ぶを涙とあるはわろし〔釋〕案に露吹むすは猶涙を籠す意あるべしさらば露は用なく聞ゆ風は今日の野分の風也つれよりもおぼし出ることおほくてといへる首尾なりよく味はふべし宮城野は陸奥の名所也こはきは木萩なるを小萩にとりなして兒の縁にかけたる也一首の意は野分たちて禁中にもそるに涙のよほさるゝにつけて若宮の御うへをいかにも思ひやり給ふと也露は風のふくにつけてよりのひて玉なすを吹結ぶとはいへる也

松のおもはん事だに〔細〕いかにしてありとられし高砂の松の思はんこともはづかし六帖五〔釋〕いのちつれなくながらへて高砂の松とひとしく人にしられんもはづかしとの意なるべし新釋に説あり別に記す

もししき〔釋〕もししきは太宮の枕詞なるをやがて大宮の事にしていへる也奈良をあたによし山をあし引といへるたぐひの例なり

宮は大とのこもりにけり〔玉〕これより命婦が詞也地よりいふにあらざして此けりはおしはかりて定めたる言也

まぢおはしますらんを〔釋〕このないかやしきやうなれど後世にといふべき意のなにて例多し誤にはあらず

くれまどふ心のやみも〔釋〕くれまどふは心の昏くなりて惑ふ也闇の縁にまづかといへり人のおやの心はやみにあられども云々の歌をおもへる事は勿論なり但し引歌にはあらず

かたはし〔釋〕堪がなき悲みの端ほどものこゝるなり

はるく〔新〕明けすを約めていへり

わたくしにも〔釋〕此度はおほやけ事のついでなれば私にもといへるなり

まがて給へ〔釋〕退出てこなたへ來給へといふ意なり

おもたしき〔新〕而起しきにて面おこすとといふに同じ

かへすく〔抄〕上の詞に命長とのいつらう又其前に今までとまり侍るがとありこれらにて見れば返々つれなきといへる尤味あり

生れし時より云々〔評〕上に父の大納言はなくなりてと何げなき語の中に更衣の種姓をかたり出おきてこゝに至りて其委き由を著はしたり

それは大殊更には説ずして母君の語の中に挿みたるいともいともめでたしと思ふ心ありとは更衣の宮仕してもしくは常の御寵をかうふり若宮など生れ給はいみじき家の榮えともなるべく思ひおきてられたる意にて當時の風俗すべてまやうなりしなり心あらん人は心とめて見るべしさて又上に夜ふけ侍りのべしといそぐといひおきて又かくながしき物語を説出たるはこのほどにますく、夜の更ぬべき種

子としたる文のたぐみなり

宮づかへのはい〔釋〕上に思ふ心ありしといへる即ちこの本意の事なり

くづほる〔餘〕契沖云くづ折るなり或云萬葉に可多知久都保里とあれば折る義にはあらざるべし〔釋〕たゝ願る、義なりさてこゝは志の願る、事にて今俗もいふ語也なほ莫也

うしろみ思ふ人なき〔釋〕このうしろみは用意なりはかしくしくうしろみ助くる人ならで宮づかへに出人にまじらへば人わろき事のみ多くして出たらぬよりはおとるべき事をなかくといへるなり

人けなき〔釋〕いとく、慢られて人がましくももてなされぬを人氣なきといへり

よこさなるやうにて〔細〕あまりに籠蓋しき故に人の妬みなどつもりてうせぬれば横死のやうにおもへり

心のやみ〔釋〕子を思ふあまりの類

きりつば

り。おもふ心ありし人にて。故大納言いまはとたるまで。たゞこの人の宮づかへのはい。かならずとげさせ奉れ。我なくなりぬとて。くちをしら思ひくづほるな。とかへすくいさめおかれ侍しかば。はかしくしうしろみ思ふ人なきまじらひは。中々なるべきこと。思ひ給へながら。たゞかのゆるぞんをたがへじ。とばかりに。いだしたて侍りしを。身にあまるまでの御心ざしの。よろづにかたじけなきに。人げなきはぢをかくしつ。まじらひ給ふめりつるを。人のそねみふかくつもり。やすからぬことおほくなりそひ侍るに。よこさなるやうにて。つひにかくなり侍りぬれば。かへきてはつらくなん。かしこき御心ざしを思ひ給へ侍る。これもわりなき心のやみになん。といひもやらず。ひせかへり給ふほどに。夜もふけぬ。うへもしかなん。わが御心ながら。あながちに。人めおどろくばかりおぼされしも。ながるまじきなりけりといまはつらかりける人のちぎりになん。世にいさ、かも。人の心

心を云水の歌上に見えたり
 夜もふけぬ (評) 此語めでたし上に
 夜もふけ侍りぬべしとていそぐとい
 ひて母君の長き物語をいひ終
 られたる故にまさしく夜のふけた
 るよしをこゝに挿みてあらはしお
 くなりかくて直に命婦の歸ること
 をいはずしてなほそのあへしらひ
 の答を記されたるいとくしみじ
 き筆といふべし
 ながいるまじきなりけり
 (新) かくほどなく別れ給はんさい
 つさがとて人めおどろくばかり思
 されしとなり
 よにいさゝかも云々
 「新」主上の常のおぼしめしも此人
 故にはみだれ給へるなりかの後涼
 殿の更衣の局を外へうつされしな
 どの類なり
 さきの世ゆかしうなん
 (新) 前世にいかなる契り有てかと
 なり
 うちかへしつゝ御しはたれがらに
 (釋) うちかへしは打返し〜幾度

をまけたるとはあらじと。おもふをたゞこの人の名にて。あまたさるまじき
 人のうちらみをおひはてくは。かう打すてられて。心をさめんかたなきに。
 いと人わろく。かたくなになりはつるも。さきの世ゆかしうなん。とうち
 かへしつ。御しはたれがらにのみおはします。とかたりてつきせず。なく
 なく。夜いたうふけぬれば。こよひすぐさず。御かへりそらせんとて。いそ
 ぎまゐる。月は入がたの空きようすみわたれるに。風いとすしく吹て。草
 むらの蟲のこゑも。もよほしがはなるも。たちはなれにくき。草のもとな
 り。
 すいむしの聲のかぎりをつくしてもながき夜あかずふるなみだかな。えも
 のりやらず。
 いとすしくむしのねしげきあさぢふに露おきそふる雲のうへ人。かごとも
 聞えつべくなん。といはせ給ふ。をかしき御おくりものなど。あるべきをり

ものたまふ意なりとほたれがらに
 涙がらといふをかくいへるなり
 かりてつきせず (釋) いつまで語
 りても物語の盡ぬ意なり上に夜更
 侍りぬべしとていそぐといへるを
 結ばんとてかくいへるなり
 なく (玉) 此詞は下のいそぎ参
 るといふへかり此類つれにお
 ほし云々
 夜いたうふけぬれば
 (玉) 或抄に前に夜もふけぬといへ
 る故にこゝにはいたうふけぬれば
 とかけりといへるまことに心をつ
 くべきふしなりすべて此物語はか
 く何となき詞にも心をいれたる所
 多きぞいし
 いそぎまゐる (評) こゝにて命婦の
 立てかへるなり次の事どもは其か
 へりさまの事をいひて餘情をおも
 はしむる法なりこの類次下におほ
 し心得おくべし
 月は入がたの空きよう云々
 (評) 上に夕月夜のなごしきといひ
 月かげばかりぞといへる跡なる事

にもあらねは。たゞかの御かたみにとて。かゝるようもや。とのこしおさ給
 へりける。御さうぞくひとくだり。御ぐしわけのでうどめく物そへ給ふ。わ
 かし人々。かなしきことはさらにもいはず。内わたりをあさゆふにならひて。
 いとさうしく。うへの御ありさまなど。思ひいでさこゆれば。とくまゐ
 り給はんことを。そゝのかし聞ゆれど。かくいそしき身のそひ奉らんも。
 いと人ぎうかるべし。又見奉らでしはしもあらんは。いとうしろめたる思
 ひ聞え給ひて。すがくともえまゐらせ奉り給はぬなりけり。命婦は。まだ
 おほとのごもらせ給はざりけるを。あはれに見たてまつる。おまへのつぼせん
 さいの。いとおもしろささかりなるを。御らんずるやうにて。しのびやかに。
 心にくきかぎりの女房五人。さふらはせ給ひて。御物がたりをさせ給ふな
 りけり。このころあけくれ御覽する。ちやうごんかの御多。亭子院のかかせ
 給ひて。いせつらゆきによませ給へる。やまとことのはをも。もろこしのうた

は諸注にいはれたるがごとし但月のみならず風の事も又同じ脈にて野分たちてといひ野分にいとやあれたるこゝちしてといひきてこゝに風いと涼しくといへる荒かりし風のやうく吹しづまりて月かげのすくしく澄たるさまひきあひてえもいはれぬけしきなり草むらとあるも前に草もたかくなりといひやむぐらよもさふなどいへる脉なるがこゝに玉りて蟲の聲をそへ出して次の歌の種としたり心をつけて見るべし

もほしがほなるも (釋) 涙といはずして催しがほといへるおもしろし舊注に哀を催すなりとあるはたがへり蟲のなくといふに涙をおもはするは歌詞のつれなれば涙を催すなり

立はなれにくき (釋) 或抄にあはれにものがないきすまひを見すてがたき心なりといへり

草のもとなり (新) 上に草も高くなりまたよもぎふの露わけといへり (河) 蓬がもと、同じ風情歎

すむじの云々 (釋) 蟲の聲々々ある中より鈴蟲一つとり出て枕前におきたりそはやがてふるといへん料なりさて意は鈴蟲のごとく聲のさざりを盡してなくとも秋の長き夜もあきたらずしていつまでも出くるなみだかなといへるにて降る涙とは涙を雨にとりなせるより出たる歌詞なり

えものりやらず (新) 命婦此あはれを見すてがたくて車にのりかぬるなり立はなれにくき草のもといへるもこれなり云々

いとしく云々 (釋) いとしくは露おきそふるへかゝる語脉なりさて蟲の音しげきあさちふにとはなく聲のしげき宿にといふ意露おきそふるは涙をながし流るといふたとへなり雲の上人は勅使の命婦をさしたる事論なし諸注解さま紛らはしくて一首の意たしかならず

かことも聞えつべくなん (新) もとよりなげきの露ふかき淺ちふに御使につけて涙をそふればかここともいふべきとなり (釋) この説のごとしかことは物によそへて怨をいふことなり

いはせ給ふ (新) すでに車よせて乗などする間に人して返しをいひ出せしなり

御おくりもの (玉) すでにへておくり物といふは客のかへるを送る時に贈る物なひひて送物なりた々なて贈る物にはあらず

ぞうど (餘) 漢王莽傳前漢調度とあり和名抄に調度部あり (釋) 今俗にいふ道具のことなりさてこれは下にしろしのかんごしならましづばとあるくだりの用に御ぐし上の調度めく物をそへたるなり心得おくべし

すがくとも云々なりけり (玉) すべて文になりけりといへるは上の事のよしを解釋したることき語のとちめにおく辭なり云々この次に御物語せさせ給ふなりけりといへるも帝のまだ大とのごらざるよしを解釋したる文のとちめなりみな此意なり

命婦は云々 (譯) これより命婦がかへり参りたる事をつたるなりさてその歸りたる事をば省きて命婦がおもふ心より書出られたるなかへんにみだりし上に夕月夜のをしきほどに出したてさせ給ひてやがてながめおはしますといへる所をうけて繼ぎたる所なりよくあぢは

ふへし

おまへのつばせんさいの (河) 庭前

杖は清涼殿の東庭井に西庭朝餉井に響所の前あり云々 (釋) 庭

とは小庭の事なり前杖は字のごとく家の前庭に草木を栽るをいふ

こは秋草の花盛なるさまなり

御覽するやうにて (万) 御らんずる

やうにてとつける詞おもしろきなり命婦のかへるを御心には下さり給へどもうへは草花を御らんずるやうにての心なり落着は人目をいさへはかり給ふ御心なるべし

長恨歌の御み亭子院のかいせ給ひて

(玉) 此繪を亭子院の御みづから書給へるやうに聞ゆれどもさにはあらず繪師におほせてかゝせ給へるなりさて上に女房四五人さふらはせ給ひて御物語せさせ給ふといへるはずなはちこの長恨歌のすぢの事を御物語せさせ給ふなりたゞそのすぢをなまくらごとといへるすなはち上の御物語せさせ給ふよ

きりつは

をも。たゞそのすぢをぞ。まくらごにせさせ給ふ。いとこまやかに有さま

をとほせ給ふ。あはれなりつること。しのびやかにそらす。御返り御らんず

れば。いとまかしこきは。おき所も侍らず。かゝるおほせごにつけても。

かきくらすみだりご、ちになん。

あらし風ふせぎしかげのかれしよりこはきがうへぞしづ心なき。などやう

にみだりがはしきを。心をさめざりけるほど。御覽とゆるすべし。いとか

うしも見えじ。とおほししづむれど。さらにえしのびあへさせ給はず。御らん

んとはじめし年月のことさへかきあつめ。よろづにおぼしつゞけられて。時

のまもおほつかなかりしを。かくても月日はへにけり。とあささしうおほし

めさる。故大納言のゆむこむあやまたず。宮づかへのほいふかく物したりし

よつてびは。かひあるさまにとこそ思ひわたりつれ。いふかひなしや。とう

ちの給はせて。いとあはれにおほしやる。かくてもおのづから。わか宮など

しなこつわれるなり此所かやうに見ざれば長恨歌の繪歌の事こゝにはよしなし
 いせつらゆきに (釋) 此御屏風の事は伊勢集に見えれば實に傳はりてありしにこそきはめて名高き御物なりけんぞおほゆるかれこゝにそれを借出でてそのありさまを實にしたる文なりかゝる事猶おほし
 もろこしのうたをも (釋) これは伊勢實之とは別なる文人におほせてかゝしめ給へるなるべし并の事ははぶきていはねはこゝに用なき事なればなり
 たゞそのすぢをぞまくらごにせさせ給ふ (釋) たゞ長恨歌にいへる事におくれたるすぢの事をのみ言種にし給ふなりまぐら言とは俗に頼ばなしといはんがごとき意なり寝ころびて物語する事なり諸注心得かえられたりとおほしくて盛なる説なしさてこゝまでは帝の御ありさまを語るなり

おひいで給はひ。さるべきついでもありなん。命ながくとこそおもひねんせめ。などのたまはす。かのおくり物御らんせさす。なき人のすみかたづねいでたりけん。しるしのかんざしならましかば。とおもほすもいとかひなし。たづねゆくまほろしもがなつてにてもたまのありかをそことしるべく。ゑにかける楊貴妃のかたちは。いみじきゑしといへども。筆かぎりありければ。いとほひすくなし。太液の芙蓉。未央の柳も。けにかよひたりしかたちを。□からめいたるよそひは。うるはしうこそありけめ。なつかしうらうたげなりしを。おほしいづるに。花鳥の色にも音にも。よそふべきかたぞなき。朝夕のことくさに。はねをならべ。えだをかはさん。とちぎらせ給ひしに。かなはざりけるいのちのほどぞ。つきせすうらめしき。風のおと蟲のねにつはても。物のみかなしうおほさるゝに。弘徽殿には。ひざしうへへの御つぼねにも。まうのぼり給はず。月のおもしろきに。夜ふくるまで。あそびをぞし

しのびやかにそらす (釋) この奏すところ中口づからの御返答もみなおしこめて省きたるなり
 おき所も待らず (釋) かつたじけなき御事は蓬生の宿に置べき所もなしとの意にてふかく謝し奉りたる詞なり
 あらき風云々 (新) はぐみみ奉るべき母御息所はあらずなりて御子のうへも心もとなしとよめるなり拾遺集長歌にたのもしき陰に二たびおくれたる二葉の草をふく風のおらきつたにはあてじとてせべき袂なふせぎつとよめり
 などやうにみだりがはしきを「玉」みだりがはしとは歌のよろしからざるよしなりなどやうにと歌よりつゞきたるにて心得べし云々さて此歌實にみだりがはしきにはあらず例の紫式部が卑下の心ばへにてかゝいひなせるものなり云云

給ふなる。いとすばやしう。ものしときこしめす。此ころの御けしきを見たてまつる。うへびと女房などは。かたはらいたしとき、けり。いとおしたちかどくしき所ものし給ふ御かたにて。ことにもあらずおほしけちて。もてなし給ふなるべし。月もいりぬ。
 雲のうへもなみだにくる、秋の月いかですむらんあさぢふのやど。おほしやりつゝ。ともし火をか、げつくして。おきおはします。右近のつかさの。とのぬまうしの聲聞ゆるは。うしになりぬるなるべし。人めをおぼしてよるのおといにいらせ給ひてん。まどろませ給ふことかたし。あしたにおきさせ給ふとても。あくるもしらで。とおもほしいづるにも。なほあさまつりごとは。おこたらせ給ひぬべかめり。ものなどもきこしめさず。あさがれひのけしきばかりふれさせ給ひて。大床子の御ものなどは。いとはるかにおほしめしたれば。はいせんにさふらふかぎりは。こゝろぐるしき御けしきを見て

なればかくてもへゆる世にこそ有けれといふ歌のこゝろなり
 ひひあるさまにとこそ(釋)湖月傍注に更衣を后にもと思召たるべしとあれど必しも后にもといふ意にはあらず女御などの意にはあるべけれ
 どたひひあるさまにとのみ見てあるべし
 かくてもおのづから(玉)かくてもは更衣はなくなられてもなりおのづからはさるべきついでといふへかり若宮云々へはかりあらず
 なき人のすみかたづね出たりけん云々(玉)あけくれ長恨歌の事をまくらごととせさせ給ふほどなるからふと此事をおぼしめしよれることよ
 しあること也(評)上にみぐし上のうどうどめくものといへるをこゝにて類はし出たる巧みさらにとめてたし長恨歌に
 臨叩道士鴻都客能以三精誠致三魂魄爲三感君王展情思遂教方士懸勲竟云々唯將舊物表三深情三細合金釵寄將去釵留一股合一扇三釵三金三合分細三但令心似金三細三雲三とあり
 たづねゆく云々(新)この幻のわざする人もあれかしそれをやがて傳にても御息所の靈のあり所だにしらばやと也まほろしとは幻術する人を
 いふ幻のことは虚幻詭誕惑人也と字注にいへり(釋)まほろしはこゝは幻師といふ意にてこの方士をさしたる也し一つ略けるは例な
 りさてこのまほろしはるかに末なる幻の巻に大空をかまほろし云々といふ歌の所へかけてふかき意の照應ありとおぼしきよしありそこ
 にいふべし

いとほひすくなし(新)よく書し繪といへど實の人のやうに艶色のなきなり
 太液の芙蓉云々(典入)長恨歌云太液芙蓉未央柳。芙蓉如面柳如眉。太液は池の名芙蓉ははちす也未央は宮殿の名なり
 けにかよひたりしかたちを(釋)氣に似ひたりし容貌也げにとよみたる注はひがごと也氣は楊貴妃の氣色に也かよひは似通ふなること例いと
 多しさてかたちをの下に語脱たるなるべしさらでは聞えがたし試にいはいおもふになどやありけんなほ考ふべし
 からめいたるよそひはうるはしうこそ(玉)すべてうるはしうといふ言は古書にては美麗の意なれども物語などにいへるはた美麗の意には
 あらで俗言にきつとしてかたといふ意みだれず正しき意にいへりこゝは楊貴妃の唐めきたるよそひはあまりきつとしてかたてたをやか
 にはあらざりけんといへるなり
 花鳥の色にも音にも(玉)かの楊貴妃がたちは猶芙蓉柳などにもたとへしを更衣のかたちは然すとふべき物もなくすぐれたりことなり
 はれをならべ云々(河)長恨歌に在天願作比翼鳥在地願爲連理枝
 かなはざりけるいのちのほどぞ(新)前にかきりあらん道にもおくれさきだじと契らせ給ふと有しも此翼をならべ云々の事なり且歌にかき
 りとてわづる道のかなしきにと御休所のみしなどもあはせ見るべし
 つきせずうめしき(釋)長恨歌の結句に天長地久有時誓此恨綿綿無絕期とあるをおもはれたる句なるべし長恨歌といふ題は此句にて

つけたるなりこは因にいふのみ
 ぞ
 風のおとむしのれにつけても
(評)此段また風と虫とをとり出て
 帝の御悲みの種としたりさて次に
 月をば轉して弘徽殿女御の遊樂の
 種として更に帝の御思ひをよませ
 たる文のたくみいひまらずめてた
 し此所虫と風のとちめの際なり
 心をつくべし
 弘徽殿には久しう云々
(評)もの妬みしてひがくしき女
 の情をいとくうつされたりこれ
 はた前後に見えたる主客の脉な
 り
 月もいりぬ(細)此詞殊勝なり前に
 夕月とかき入がたの雲と書て月も
 いりぬといふ妙なり(釋)此御説
 のことし但月のみにはあらず風も
 又添たる事上に注するがごとし此
 句月のとちめなり
 雲のうへも云々(玉)いかですむら
 んとは雲の上にてだに涙にくる
 月なればまして淺茅生のやどには

まつりなげく。すべてちかうさふらふかきりは。をしこ女。いとわりなきわ
 ざかな。といひわはせつなげく。さるべき契りこそはおはしましけめ。そ
 こらの人のそしりうらみをも。はからせ給はず。この御事にふれたること
 をば。だうりをもうしなはせ給ひ。今はたかく世中のことをも。おぼしすて
 たるやうになりゆくは。いとたいくしきわさなり。と人のみかどのためし
 までひきいでつ。さつめきなげきけり。月日へて。わか宮まわり給ひぬ。
 いとこの世の物ならず。きよらにおよずけ給へれば。いとゆしうおほ
 したり。あくるとしの春。坊さださり給ふにも。いとひきこまほしうおほ
 せど。御らしろみすべき人もなく。また世のうけひくまじきことなれば。なか
 なかあやふくおぼしはかりて。色にも出させ給はずなりぬるを。さばかり
 おぼしたれど。かきりこそありけれ。とよの人も聞え。女御も御こゝろおち
 る給ひぬ。かの御おぼされたのかた。なぐさむかたなくおぼしまづみて。おほ

月影のいづて消むこと涙にくる
らめと月のすむことなひて住な
かれたり

ともし火を (奥入) 長恨歌夕殿
飛思消然秋燈挑盡未眠
鐘鼓初長夜歌々星河欲曙天
(釋) 秋燈一本孤燈と有下二句は餘
滴に隨ひて今加へ引つ

うこんのつひさとのお申
(釋) 右近のつひさは右近衛府也と
のぬまうしとは直宿に侍らふ武官
の人々各の名をなりのり申す事也其
聲をきこしめして夜の更たるを知
しめす意也右近衛のとのぬ申は丑
の一刻なり

あくるもしらでと
(釋) 上に見えたる長恨歌の御屏風
の繪によめる伊勢が歌の詞をとら
れたり玉すだれあくもしらで
れし物を夢にも見じとおもひかけ
きや伊勢集に見えたりこれは長恨
歌の春宵苦短日高起また怒々生
死別離年魂魄不離來入夢とい
ふ句もよめる歌なり

すらん所にだに。たづねゆかん。とねがひ給ひしるしにや。つひにうせ給
ひぬれば。またこれをかなしひおぼすことかぎりなし。みこむつになり給ふ
年なれば。このたびはおぼしまりて。こひなげき給ふ。としごるなれむつひ
聞え給へるを。見奉りおこなしひをなん。かへすの給ひける。今はず
にのみさぶらひ給ふ。七つになり給へば。ふみはじめなどせさせ給ひて。よ
にしらすさとうかしこくおはすれば。あまりにおそろしきまで御らんず。今
はたれもくえにくみ給はじ。は、君なくてだにらうたうし給へ。とて弘徹
殿などにも。わたらせ給ふ御ともには。やがてみすのうちにいれ奉り給ふ。
いみじきもの、ふあたかたきなりとも。見ては打たれぬべきさまのし給へ
れば。えさはなち給はず。女みこたちふたところ。此御はらにおはしませ
ど。なずらひ給ふべきだにぞなかりける。御かたぐもかくれ給はず。今より
なまめかしくはづかしげにおはすれば。いとをかしううちとけぬあそびぐさ
いふまじきもの、ふあたかたきなりとも。見ては打たれぬべきさまのし給へ
れば。えさはなち給はず。女みこたちふたところ。此御はらにおはしませ
ど。なずらひ給ふべきだにぞなかりける。御かたぐもかくれ給はず。今より

なほあまつりとは

(奥入) 長恨歌春宵苦短日高起
從是君王不早朝 (細) 長恨歌
には貴妃が寵によりて也こは更
衣の御歌きにおこたらせ給ふ也猶
の字殊勝なり (評) この御歌のこ
とく樂みと悲しみととりかへられた
るにておしも彼を疑はずしてかへ
りて新らしくめでたきいきとな
れり

あさがれひのけしきばかり (釋) 案
にのもし種かならずもしくはのみ
と有しを脱せるにや (細) 朝がれ
ひは女房の陪膳大床子は殿上人の
陪膳也いづれをも御覽じいれぬと
也 (玉) このやうは大床子のお
ものは外さま朝がれひは御内々也
大床子の御ものなどはいとはるが
におぼしめしたればといへるにて
しるべし大床子のを常の御膳也と
いへる注はまざらばし
すべてちかうさふらふかきりば云々
(評) はいぜんにさふらふかきりば
云々といひて又ちかうさふらふか

きりつば

に。たれもくし思ひ聞え給へり。わざとの御がくもんはさるものにて。こと
ふえのねにもくもむをひやかし。すべていひつかけば。ことくしううたて
ぞなりぬべき人の御さまなりける。そのころこまうどのまゐれるが中に。か
しこき相人ありけるを。きこしめして宮のうちにもさんことは。うだのみか
どの御いましめあれば。いみじうしのびて。このみこを鴻臚館につかはした
り。御うしろみだちてつかうまつる。右大辨のこのやうにおもはせて。あて
たてまつる。相人おどろきて。あまたたびかたぶきあやしふ。國のおやとな
りて。帝王のかみなきくらゐにのぼるべきさう。おはします人の。そなたに
てみれば。みだれられふることやあらん。おほやけのかためとなりて。あめ
のしたをたすくるかたにてみれば。又そのさうたがふべしといふ。辨もいと
さえかしてきはかせにて。いひかはしたる事どもなん。いとさうありける
文などつくりかはして。けふあすかへりさりなんとするに。かくありがたき

ざりはといへるはいたづらに重なりたる加くなれど然らずこは帝の更衣を寵し給ふことのとちめなる故に殊にはしをおこしてすべて云々といひ又立かへりてそこの人の調恨をも云々と語りてつひに他朝のためしよ引出つといへるにて卷首に人のそしりをもえ懼らせ給はずよのためしにもなりぬべきといひ楊貴妃のためしも引出つべうなりゆくといひて女御更衣より公卿殿上人に及びつひに天下の人のもてなやみぐさになりたりといへる事の首尾を合せて結びたるなりさて楊貴妃のためしといへるよりこなたかの長恨歌の句をとりてこいかしこ挿み入られたるが彼意のまゝにはとらずして引用たるなどすべし妙なりとも妙なる物にてもろこし人のいはゆる換骨奪胎といふべきなり

月日へてわが宮参り給ひぬ (新) 今の定め父母の喪は服一年暇五十日にて其後今にかはらず然ればこのわが宮も御暇五十日を過てはまゐり給ふべきをわが祖母君のすがくとも参らせ給はで月日おほく過して其年の冬にいたりて参らせしなり云々下略
いとこの世の物ならず (玉) 久しく見給はで月日へて見給ふゆゑにいよ／＼つくしくなりまさり給へるなり云々
いとひきこまほし (釋) 一の宮を引こしてわが宮を東宮にせまほしうおぼましとなり

なつ／＼あやふく (玉) 源氏君を坊に立給ふ事をあやふくおぼしめすなり
かぎりこそ有けれ (玉) 帝の源氏君をさばかり思しめせどもかぎり有て坊にはえ立給はざりけるよと世人申すなり
女御も御心おちら給ひぬ (玉) 補) 前の一の宮の女御は覺し疑へりに應ぜり
なぐさむかたなく (釋) 更衣のうせ給ひしよりこのかたなくさむかたなく思ひなげき給ふ意なり舊注に源氏君立坊の義もやとたのみ給ひしかどもさもなかりしげばなくさむかたなくといへるは過たるべし

みこむつになり給ふ (新) 右の一の宮坊にさだまり給ふより御祖母の卒までの間に年ありて今六歳になり給ふなり
このたびはおぼしめりて (釋) 上の更衣の卒し給へる處に何事あらんとおぼしめたらざといへるをうけて六歳になり給へればこの度は死ぬといふ事を思し知て懺歎き給ふといへるなり
ぬといふ事を思し知て懺歎き給ふといへるなり

としごろなれむつび云々 (評) 祖母君の情を推量りたる文にてつゆばかりも透問なき書ざまなり此人はさしも用なければうせ給へる事をこいひひて先かくしたるなり
今は内のみ (評) 源氏君の内ずみし給ふ事を先いひ出ておくなり文のかはりめに心を著べし
ふみはじめなど (釋) 御讀書始り博士をめて御注の季經をよみそめ給ふなり御注は唐の玄宗の注したるなりさてなどいへる中に其ほかの諸藝をならひ給へる事をこめたり
こにしらず (釋) すべてかく世に云々といふはいみじく勝れたるよしをいへる事にて此世の中には未知らずといふ意なり他もこれに准へてし

るべし

おそろしきまで (釋) 才氣のすぐれたるに膽をつぶし給ふさまなり
やうのおそろしきは今俗にもいふ語なり舊注に命の長からぬ物なればとあるはひがことなり
は、君なくてだに (新) 母君は妬れてうせなれば御子をだにらうたくし給へとなり (釋) 案に舊注もこの意に解れたれどだにの辭なくしての下にありてはさらさまやうには聞えぬことなりもしくは母君ならだにとありしをなくてと寫し誤れるがさらばわが宮の實の御母ならずともいふ意になりて聞ゆべし猶考ふべしさて今はたれも／＼えにくみ給はじといふは帝のわが宮にの給へる語母君ならだには弘徽殿女御にの給へる語なり思ひわかつべし

みすのうちに (釋) いと／＼幼き人といへども男子をばみだりに腹の内へ入られざりし昔の風俗思ふべし
人にたいめんしたるよろこび。かへりてはかなしかるべき心ばへを。おもしろくつくりたるに。みこもいとあはれなるくをつくり給へるを。かぎりなうめで奉りて。いみじきおくり物どもをさげたてまつる。おほやけよりもおほくのものをたさはす。おのづからことひろがりて。もらさせ給はねど。春宮のおほぢおとなど。いかなることにか。どおぼしうたがひてなんありける。みかどかしこき御心に。やまとさうをおはせて。おぼしよりにけるすぢなれば。いまでこのきみを。みこにもなさせ給はざりけるを。相人はまことにかしこかりけり。とおぼしあはせて。無品親王の外戚のよせなきにてはただよはさじ。わが御世もいとさだめなきを。たゞ人にておほやけの御うしろみをするなん。ゆくさきもたのもしげなること。おぼしきだめて。いよ／＼みち／＼のさえをならはさせ給ふ。きはことにかしこくて。たゞ人にはいとあたらしけれど。みことなり給ひなば。世のうたがひおひ給ひぬべく。もの

いみじきものゝふあがたき(釋)
 この物語が、れたる比の世には武
 士は物のあはれを知らぬものゝ一
 くきにかぞへられたる世ごまなり
 きこの事いたく論ある事なれどこ
 こに用なければ略きていはずあた
 のたは清みいたきのかは濁りてよ
 むべしさてかくいふは源氏君の
 たちのめでたきよしをほむる例の
 跡にて弘徽殿の女御さへつひにえ
 さしはなち給はぬといへるにてそ
 の容貌のいみじくめでたきよしは
 しまれたり

女御千代二と云(釋)かく女
 たちとくらべて猶まされるま
 にいへるにてます源氏君のめ
 でたきはしまれたり
 今よりなまめかしうはづかしげに
 (釋)わか宮六歳なれどかたちめで
 くおほする故に色めきたるやう
 におぼえて打向ふ人々のほづかし
 くおぼえ給ふなり故打とけぬあそ
 びぐさといへり打とけぬは心のお
 かれて用意する事あそびぐさは散

し給へば。すぐえうのかしこきみちの人に。かながへさせ給ふにも。おなじ
 さまにまらせば。源氏になし奉るべく。おぼしおきてたり。年月にそへて。
 みやす所の御ことを。おぼしわする、をりなし。なぐさむや。とさるべき人
 人をまわらせ給へど。なずらひにおぼさる、だに。いとかたき世かな。と
 うとましろのみ。よろづにおぼしなりぬるに。先帝の四の宮の。御かたちす
 ぐれ給へる聞え。たかくおほします。は、ぎさきよになくかしづき聞え給ふ
 を。うへにさぶらふ内侍のすけは。先帝の御時の人にて。かの宮にも。した
 しらまわりなれたりければ。いはけなくおほしとし、時より見奉り。いまも
 はのみたてまつりて。うせ給ひにしみやす所の御かたちに似給へる人を。三
 代のみやづかへにつたはりぬるに。え見たてまつりつけぬに。ささいの宮の
 ひめみやこそ。いとようおぼえて。おひいでさせ給へりけれ。ありがたき御
 かたち人になん。とそうしけるに。まことにや。と御こ、ろとまりて。ねん

び種といふ意なりさてこゝまでは
 容貌のいみじきを賞たるなり次は
 才能の事を稱するなり
 くしぬひかし(釋)雲の居る天
 までも雲かしといへるによそへて
 大宮人のほめのしる事を聞せた
 るなり
 ことくしううたてぞなりぬべき
 (釋)うたてといふ詞は甚しければ
 却てわるくなる意につかひたりこ
 こも其意にてわか宮の才能を一つ
 づいひつづければかへりて作り
 事めきてあしくなるといふ意なり
 宇多の帝の御いましめ(典入)寛平
 遠被(云)外番之人必可召見(者)在
 慶中見之不可直對(耳)(新)
 外番の使人朝参の時は天子顔れ給
 ふなりこれは使にても別に召る、
 たり又はおのづから來れる韓人
 などを給ふなるべしさてこゝの
 人使のため來れるにもあれみ
 この御相のために召ん事は右の御
 戒に准じてはかり給ふとなるべ
 し

ごろにきこえさせ給ひけり。は、ぎさき。あなおそろしや。春宮の女御のい
 とさがなくて。きりつばの更衣の。あらにはかなくもてなされしためしも。
 ゆ、しう。とおぼしつゝみて。すがくしうもおぼした、ざりけるほどに。
 きさきもうせたまひぬ。心ほそきさまにて。おほしますに。た、わが女みこ
 たちと。おなじつらに思ひ聞えん。といとねんごろにきこえさせ給ふ。さぶ
 らふ人々御らしろみたち。御せうとの兵部卿のみこなど。かく心ほそくてお
 はしまさしよりは。うちずみせさせ給ひて。御心もなぐさむべくなどおほ
 しなりて。さむらせ奉り給へり。ふぢつばと聞ゆ。げに御かたちありさま。
 あやしきまでおぼえ給へる。これは人の御さはまさりて。思ひなしめでた
 く。人もえおとしめ聞え給はねば。うけばりてあかぬ事なし。かれは人もゆ
 るしきこえざりしに。御心ざしのあやしくなりしぞかし。おほしききるとは
 なけれど。おのづから御心うつろひて。こよなくおぼしなぐさむやうなるも。

鴻臚館 (河)職員令云云番寮頭一人掌三佛寺僧尼名籍番客辭見儀饗送迎及在京夷狄監當番舍事義解謂鴻臚館也(釋)外番の人をおく處をもちしにて鴻臚館といふに依りて支番寮なるをも鴻臚館とつけらしなりこゝにこまうとばさしおつたればわが宮をそこへ遣はし給ふなり

わてたてまつる (釋)わては引つれてといふ意なり鳥集集に率字をよめるよくあたれり下皆こゝにならふべしかたふきあやしふ (釋)ものを考ふる時は首を傾ぐるものなる故に考ふる事をつたふといへるなり下皆同じ國のおよとなりて (釋)漢ぶみに民之父母といふ語のあるに依りてみかどを國のおよといへるなり

そなたにてみれば (釋)そなたとは帝王の相をさしていへるなりおほやけのかためとなりて云々 (釋)朝廷のかためといへるに攝政關白などの事なり (玉)攝政關白などい成給ふべき相かとも思へども帝王の相なれば攝關にしては其相たがふべしといふなり (評)この一段は源氏君一代のうちに有べき事を思ひかまへてこの相人に先いせたるにていとも巧みなる伏案なりよく心を付べし初にわたるのめてたきないひ次に才能のいみじきをいひこゝに至りて一世の吉凶をことわれる傳文の法なりこれより下の詩文の事どもはたゞこのにはひにかきそへて源氏君の秀才なるよしをほめたるまでなり

さえかしこき (釋)先達のいはれしこととく巻中にさえといへるはことごとく學才の事にて學問といはんがごとしたゞに才氣の事にはあらず心得おくべし

いみじきおくり物 (新)此さげもの、事梅がえの巻にいさゝか出たりいかなる事にかと (抄)東宮を立かへ給はんかと思ふ疑ひの有なるべしやまとさうをおほせて (玉)みかどの御心に此御子をもし親王にもなさば人の疑ひなど出来てかへりて御ためによろしからじと考へ給へることやがてやまとさうとはいへるなり云々やまと相としいへるはこまの相人のことをいへる所なる故なりさて相といふからおほせてともいへるなり

さう人はまことにかしこかりけり (玉)高麗の相人のみだれられふる事やあらんと申せるが御みづからおほしめし考へたる所とあへる故に相人はかしこかりけりとおほせるなりわが御世もいとさだめなきを (釋)帝の我御治世も定めがたく思しめすよしなりさるは御懸みがちにて御命もいかにとおほせるなるべし其ほどに若宮をゆくすまのもしさまにせんとおもほすなり

たゞ人にておほやけの御後見を (釋)このたゞ人は臣下の事をさせるなり御うしろみは政を相くる事にて攝關また大臣などなりたゞ人にはあたらしけれど (新)世にたぐひなき光君を臣とせんは惜き事なれどなり

すくえうのかしこきみちの人に (玉)宿曜師首は一の道也二十八宿九曜の行度もちて人の運命を考るものなり (釋)宿曜のみちのかしこき人といふ意也源氏になし奉るべく (釋)氏姓を賜はるは臣となり給へるしるしなれば世のうたがひなば預ひ給ふまじきなり源氏の事は巻首にいへりおきては用言にてさだめといふに同年月にそへて (釋)こゝより藤原中宮の御事を説出せり桐葉更衣に似給へるに依りて御心のとまること紫の上の藤原に似給へるゆゑに源氏君の御心のとまりしがごとししたどめおくべし

なぐさむやと (新)過にし更衣の事をおぼしうれへ給ふ御心を少しもおもひ和み給ふかとなり (釋)さるべき人々とは然るべき女御更衣となり給ふべき人々なり

なずらひに (釋)なずらひは體言なり更衣に准給ふざりの人もな

わはれなるわざなりけり◎源氏の君は。御あたりさり給はぬを。ましてしげくわたらせ給ふ御かたは。えはぢあへ給はず。いつれの御かたも。われ人にとらんとおほいたるやはある。とりくにいとめでたけれど。うちおとなび給へるに。いとわかうちつくしげにて。せちにかくれ給へど。おのづから見だてまつる。はみやすどころは。かげだにおほえ給はぬを。いとよろに給へり。と内侍のすけの聞えけるを。わかき御心ちに。いとわはれと思ひさこえ給ひて。つねにまわらまほしうなづさひ。見奉らばや。とおほえ給ふ。うへもかぎりなき御思ひどちにて。なうとみ給ひそ。あやしくよそへ聞えつべさこちなんする。なめしとおぼさで。らうたうし給へ。つらつきをみなどは。いとよふたりたりしゆゑ。かよひて見え給ふも。にげなからずなん。など聞えつけ給へれば。をさな心ちにも。はかなき花紅葉につけても。こゝろさしを見え奉り。こよなう心よせ聞え給へれば。こきでんの女御。又この宮

かりしなり

いとたき世かなと (釋) 准におぼさる人だに有がたき世中かなとやうにおぼしてさるべき人々を参らすることなどもうとましくおぼしめす意なり

先帝の (釋) いづれの帝など、しびて准據をいふ説はわろした 先帝とのみ心得べし

内侍のすけ (玉) 上にゆげいの命婦が内侍のすけのそし給ひしといへると同人たるべきか (釋) さも有べし此物語不用なる人を出すにもおのづからそのすぢある事多し

今もほの見本りて (釋) 幼くおぼせし時より見奉りたるが今もほのつには見奉るとなりかくいふは大人になり給へればみだりに人に對面し給ふ事のなけれはなり物がかりのやう委しといふべし

三代の宮づかへに (釋) この桐つばの帝まで御三代に

とも御中をばししきゆゑ、うちをへてもとよりのにくさもたち出て、もの

しとおぼしたり。世にたぐひなしと見たてまつり給ひ。名たかうおぼする宮の

御かたちにも。なほにははしはたとへんかたなく、うつくしげなるを。世

の人ひかる君とさこゆ。藤つばならび給ひて。御おぼえもとりくなれば。か

がやく日の宮と聞ゆ。此君の御わらはすがた。いとかへまうくおぼせど。十二

にて御元服し給ふ。わたちおぼしいとなみて。かぎりある事にこそをそへさ

せ給ふ。一とせの春宮の御げんなく。南殿にてありしきしきの。よとほしかり

し御ひいきにおとさせ給はず。所々のきやうなど。くらすかさくさうゐんな

ど。おほやけごとにつかうまつれる。おのそかなる事もこそ。ととりわきおほ

せとありて。きよらをつくしてつかうまつれり。おはしますとの。ひんが

しのひさし。ひんがしむきに御いしたて。くわさの御座。ひさいれのおと

の御ぞ。御前にあり。さるのときにを源氏まわり給ふ。みづらゆひ給へる

傳はりて宮づかへつまつるに

いまだ御やす所に假給へる人を見ずとなり舊注に光孝字多醒關たるべきかあるを玉小櫛にもとられたれどしびて准據をいふは、この物語の例ならねば新釋餘通などにとられざりしに従ふべし

いとようおぼえて (釋) おぼえてとは假給ひてといふことなり卷中いづこもしかり

れんころに聞えさせ給ひけり (湖) 四宮の御入内の事を申させ給ふなり (釋) 一、までの語脈いさ

さか粉らはしきをしるしたる點によりて詞の、ある所を思ひわくべきなり

きりつばの更衣の (釋) 桐壺に居給ひし更衣といふ意なり

あらはにはなくもなされし (釋) あらには密にせずしてけざ

けざとあきらかにおとしめあなづりてもなされし意也ゆいしうはかの嫉妬のために病がらになりて

つらつき。かほのにはひ。さまかへ給はんとをしげなり。大藏卿くら人つか

うまつる。いとさよらなる御ぐしをそぐほど。心ぐるしげなるを。うへはみ

やす所のみましかば。とおぼしいづるにたへがたきを。心づよくねんじかへ

させ給ふ。かうふりし給ひて。御やすみどころにまかで給ひて。御そたてま

つりかへて。おりてはいし奉り給ふさまに。みな人なみだおとし給ふ。みか

どはたましてえしのびあへ給はず。おほしまさる、をりもありつるを。ひかし

の事とりかへし。かなしくおぼさる。いとかうきびなるほどは。あげおと

りや。とうたがはしくおぼされつるを。あさましううつくしげさそひ給へり。

ひさいれのおとみのみこばらに。たひとりかしづき給ふ御ひすめ。春宮よ

りも御けしきあるを。おぼしわづらふことありけるは。この君にたてまつら

んの御心なりけり。うちにも御けしき給はらせ給ひければ。さらばこのをり

の御うしろみなかめるを。そひふしにも。ともよほさせ給ひければ。さおほ

つひにうせ給へる故に思々しうとはの給へるなり

きさきもうせ給ひぬ (評)この一段は藤原中宮の傳なるがまづ更衣に似給へるよしをいひて帝の御心にかなひ給ふ故をあけて直に入内し給へるさまにはいはず御母后の一たびはうけひき給はざりしよしをいひてさて後后もうせ給ひてつひに入内し給へるさまに書れたるは例の事をかるくせずしてます、帝の御心にかなひ給ふべき根ざし、ふかくせんためなり其中につゆも事の情を失はぬ筆づかひいとめてたしとめてたしてこの後はさしも用なき人なればすみやかにうせ給へるよしをいひてとりかくされたる又いとめてたし

御うしろみたち (釋)これはさふらふ人々の中に殊に御うしろみをする人なるべし玉小櫛補遣にたちを濁りてさふらふ人々御後見たちて参らせ奉るなりといへるは次に「なぞおぼしなりてといふにかなはずたちすみてよむべし

兵部卿のみ (細)紫上の父なり後に式部卿なり
うちずあ (釋)入内して禁中に住給ふをうちずあといふ云
藤つばと聞ゆ (河)藤原親、手木、但非、上古此木、敷、建曆御記 (釋)禁中五舎の一飛香舎也入内してそこに住給へるを人みな藤原と申すとの意なり

げに御つたちありさま (釋)げにとは前にいとうおぼえてと内侍のすけの奏したるをうけてげにといへるなり
人の御きはまさりて云々 (釋)先帝の姫宮なれば世の思ひなしもめでたく女御更衣たちもえおとしめ給はればおしたちてたちはぬこゝろなしとなり

かれは人もゆるし聞えざりしに云々 (釋)かれとは更衣の事なりさてこゝは藤つばの方を主といふ所なればまづ彼は云々といひて次にこれは云々といふべき抑揚の定れる法なるをかく上下にとりかへられたるは奇といふべしまばらく此二句をこれば云々の上へ入れて心得べしさらでは勢ひ聞えがたがるべし

おぼしきまるとはなけれど (釋)更衣をかなしみ給ふ御心のまざることはなけれど藤つばの更衣に似給へる故におのづから御心うつりて前に参らせ給ふ人々よりは格段におぼしなくまむやなるもあはれる御心ざしなりといふ意也

源氏の君は (新)前に源氏にせん御おきて有し事をいひて其後宣下ありし事は略せり云々
ましてしげくわたらせ給ふ御心は (釋)前に弘徽殿などもわたらせ給ふ御心にはやがてみすの内にいれ奉り給ふ云々御心もくもく給ふといふ意也 (新)こゝはすべての女御更衣たちの中をいふ内に藤原もあれどそれは又次にいへり

うちおとなび給へるに (釋)他の女御更衣たちはいづれも年たけておとなび給へる中に藤つばはいとわかくうつくしげなれば源氏君にはち

れんころにかくれ給へど又自然に海ては源氏の見奉り給ふとなりこのところいとわかうつくしげにてといへる上に藤つばはなどの語なくてはいとまきはしく聞ゆも引見たてまつる (釋)来るのるはりの誤にや下へかけて少し程かならず
いとあはれと思ひ聞え給ひて云々 (評)もの、まきれの端こゝにはじめてあらはれそめたり母に似給へりと聞て幼き心にあはれのかいりゆくさまげにさもあるべき情なりうへもさきりなき御思ひどちにて (新)藤つばと源氏とは同く共に帝のおぼしめすどちとなり
あやしきよそへ聞えつべき (玉)或抄に藤つばの桐壺更衣によく似給へれば源氏の御母ともよそへ云べきこゝちし給ふとなりといへるよろし
いとうにたりしゆふ (玉)うせにし更衣のつらつきまみなどは此源氏君とよく似て有しと

したり。さふらひにまかで給ひて。人々おほみさまなるほど。みこたちの御座のすまに。源氏つき給へり。おとけしきばみ給ふ事あれと。物のつま

しきほどにて。ともかくもえあへしらひ聞え給はず。おせへより内侍せんじうけたまはりつたへて。おとけ参り給ふべきめしあれば。まゐり給ふ。御ろく

の物。うへの命ふとりてたまふ。しろきおほうらきに。御そ一くだり。れい

のことなり。御さかづきのついでに。

いとさなきはつもとゆひにながき世をらざるこゝろはむすびこめつや。御

心ばへありておどろかさせ給ふ。

むすびつる心もふかさもとゆひにこきむらさきの色しあせずは。とそらし

て。ながはしよりおりてふたうし給ふ。ひだりのつかさの御らま。藏人所の

たかすゑて。給はり給ふ。みはしのもとに。みこたち上達部つらねて。ろく

どもしなぐにたまはり給ふ。その日のおまへのをりびつ物。こものなど。

のたまふなり湖月に藤壺と源氏と
似給ひてといへるはかなはずにた
りしはいはゆる過去のしなれ
ば更衣の事ならでいなはず
かよひて見え給ふも「玉」これも似
てといふ意にて藤壺の御願の源氏
君と似て見え給ふよしなり云々
にげなからずなん「玉」よそへて母
と申し子といはんに似げなきにあ
らずとなり上にあやしうよそへ聞
えつべきとあるをうけて然聞ゆる
なりさてこの所上よりの文の意を
とほしていはうせにし更衣のつ
らつきまふなどこの源氏といとよ
く似て有しかば又藤壺の源氏と似
て見え給ふところもあやしう世子
ともよそへいふべきこゝちのすれ
ばしつよそへて母と申し子といは
んににつかはしからざるにあらず
とのたまへるなり（釋）此段右の
説にてあきらかなり諸注いづれも
とき得られたるはなしさてなめし
とおぼさずとは更衣を藤壺になず
らへ給ふを無禮とおぼさずして

右大辨なんうけ給はりてつかうまつらせける。どんじき。ろくのからびつど
もなど。ところせきまで。春宮の御元服のをりにもかずまされり。なか／＼
かぎりもなくいかめしうなん。その夜おとこの御さとに。源氏の君まかでさ
せ給ふ。さほらよにめぐらしきまで。もてかしづき聞え給へり。いとさびわ
にておはしたるを。ゆゝしうつくしとおもひ聞えたまへり。女君はすこし
すぐし給へるほどに。いとわかうおはすれば。にげなくはづかしとおぼいた
り。このおとこの御おぼえ。いとやんことなきに。は宮。内のひとつ御ささ
いばらになんおはしければ。いづかたにつけても。物あざやかなるに。この
君さへかくおはしそひぬれば。春宮の御おぼえにて。つひに世中をしり給ふべ
き。右のおとこの御いさきはひは。ものにもあらずおされ給へり。御子どもあ
またはら／＼にもものし給ふ。宮の御はらは。藏人の少將にて。いとわかうを
かしきを。右のおとこの。御中はいとよからねど。え見すぐし給はで。かし

と帝のことわり給ふ意なり
こなう心よせ「玉」他の女御更衣
たちとはかくべつにまさりて藤壺
は心なよせ奉り給ふなり
うちそへてもよりの云々
（評）人情まことに然なんありける
さて上に更衣のうせ給ひて後源氏
君のつちのめたきにめりて一
度思ひゆるし給へるを竟にこゝに
て又もとのごとく御中よからず香
なされたりこれのよしあしの主
客の跡なるがます／＼甚しくなり
ゆくさま味はふべし
たにたぐひなしと見奉り給ひ云々
（新）これは帝の藤壺を見給ふ御
心なりあまたの人を奉りつれどか
かるつち人はなかりしゆふなり
名高うおはする宮（新）これも同じ
藤壺の御つちの名高きをいふな
り右と引つけてよむべし此名高
きを擧てそれよりもまさる光君を
いはん料なり或説に弘徽殿の御腹
の是女たちを云といへるはわるし
ひかる君（釋）容貌のめでたくうつ

づき給ふ四の君にあはせ奉り。おとらずもてかしづきたるは。あたまほしき
御あはひどもになん「源氏の君は。うへのつねにめしまつはせば。こころや
すくさとずみもえし給はず。心のうちには。たゞふぢつばの御ありさまを。
たぐひなしと思ひ聞えて。さやうならん人をこそみめ。にる人なくもおはし
けるかな。おほいとこの君。いとをかしげにかしづかれたる人とは見ゆれど。
心にもつかずおぼえ給ひて。をさなきほどの御ひとへと、ろにかゝりて。い
とくるしきまでおはしける。おとなになり給ひて後は。ありしやうにみす
のうちにいれ給はず。御あそびのをり／＼。ことふえのねにさ、かよひ。
ほのかなる御こゑをなぐさめにて。うちずみのみこのましうおぼえ給ふ。五
六日さぶらひ給ひて。おほいとこのに二三日など。たえ／＼にまかで給へど。
たゞいまはをさなき御ほどに。つみなくおぼしなして。いとなみかしづき聞
え給ふ。御かた／＼の人々。世中におしなべたらぬを。えりとこのへすぐり

くしくして光るがとき故に光る君と世人の名けたりとなり
かやく日の宮(釋)ならび給ひては源氏君に並び給ひてなり御おぼえは帝の御寵愛なりかやくは日の盛なるかたをいふこれ世人のつ
けたるなり(評)光る君といふに相對へて赫く日宮といへるとめでたしこれなん此物語の中の主とある人たちなることを先よく心得おく
べし

十二にて御元服し給ふ(河)人生て十二を一属といふ此歳冠禮する和漢の例なり禮記曰天子之子十二而冠
ぬたち(新)居にも立にもなり

かざりあることに云々(抄)一世の源氏元服の儀式は定れる事なりそれに論事をくはへらるゝなり
御ひき(釋)何事にまれば事ある時に世人の共しくいひさわぐ事をひきといふ世の禮といふ意なり

所々のきやう(抄)北山抄云所々賀勝之事王彌。廳女房別納殿上藏人所。兩亮。諸大夫。三宮。發倉院屯食。五十以上。應和例云々
(釋)所々にて賀勝を賜はることなり

發倉院(釋)無主没官の田租諸庄の物餉錢の類を納めおきて年中の變などに充らるゝ所なり
おほやけ事につかまつれる(玉)すべておほやけさまの事はたゞ定まれるあとのまゝにたがへじとまもるのみにてことに心をいり、事はな
くこまやかなるかたはなきものなればなり云々

ひきいれのおと(玉)加冠の人をいふ(湖)其日冠をめさせむる人なりとやりを引入る故なり
みづらゆひ給へる(拾)和名抄云唐韻云鬚和名毛止々利鬚也四聲字苑云鬚和名美豆長一云訓同上。鬚也(餘)眞酒云東帯はあげみづらにし
直衣にはさげみづらにす源氏今日はあげみづらなりゆひやうは華亮裝束抄に云はし

大藏卿くら人(玉)これは大藏卿なる人の理髮の役をつかまつるといへるなれば理髮にあたる詞あるべきになきは聞えがたしさればこれは
くし上と有けんをくら人とは寫し誤れる理髮を御くし上といふべきものなりもし又花鳥の説の如く大藏卿にて藏人頭をかけたるよしな
らばくら人の下に理髮をいへる詞の有しがおちたるかいつれにまれ其詞なくして何事を仕奉るとも聞えず

御やすみ所(花)今案一世源氏の元服にも下侍を以て休所とす四宮抄に見えたり(抄)下侍とは殿上の次を云
御そ奉りかへて(花)童體の時は赤色の關籠の冠を着す云々源氏君は無位なれば體殿の黄袍なるべし
おりにはいし給ふ(新)仙花門より東庭に出て拜舞と西宮抄にいへり(釋)堂下において帝を拜し給ふなり

皆人涙おとし給ふ(釋)拜舞の禮のおとなびてめでたきを感じていづれも落涙し給ふさまなり堂下にて拜し給ふ故にといふ説はわるかめり
あげおとり(花)わらはにてみゆき人の冠して見おとりする事なり

ひきいれのおと(玉)加冠の人をいふ(湖)其日冠をめさせむる人なりとやりを引入る故なり
みづらゆひ給へる(拾)和名抄云唐韻云鬚和名毛止々利鬚也四聲字苑云鬚和名美豆長一云訓同上。鬚也(餘)眞酒云東帯はあげみづらにし
直衣にはさげみづらにす源氏今日はあげみづらなりゆひやうは華亮裝束抄に云はし

大藏卿くら人(玉)これは大藏卿なる人の理髮の役をつかまつるといへるなれば理髮にあたる詞あるべきになきは聞えがたしさればこれは
くし上と有けんをくら人とは寫し誤れる理髮を御くし上といふべきものなりもし又花鳥の説の如く大藏卿にて藏人頭をかけたるよしな
らばくら人の下に理髮をいへる詞の有しがおちたるかいつれにまれ其詞なくして何事を仕奉るとも聞えず

御やすみ所(花)今案一世源氏の元服にも下侍を以て休所とす四宮抄に見えたり(抄)下侍とは殿上の次を云
御そ奉りかへて(花)童體の時は赤色の關籠の冠を着す云々源氏君は無位なれば體殿の黄袍なるべし
おりにはいし給ふ(新)仙花門より東庭に出て拜舞と西宮抄にいへり(釋)堂下において帝を拜し給ふなり

皆人涙おとし給ふ(釋)拜舞の禮のおとなびてめでたきを感じていづれも落涙し給ふさまなり堂下にて拜し給ふ故にといふ説はわるかめり
あげおとり(花)わらはにてみゆき人の冠して見おとりする事なり

ひきいれのおと(玉)加冠の人をいふ(湖)其日冠をめさせむる人なりとやりを引入る故なり
みづらゆひ給へる(拾)和名抄云唐韻云鬚和名毛止々利鬚也四聲字苑云鬚和名美豆長一云訓同上。鬚也(餘)眞酒云東帯はあげみづらにし
直衣にはさげみづらにす源氏今日はあげみづらなりゆひやうは華亮裝束抄に云はし

大藏卿くら人(玉)これは大藏卿なる人の理髮の役をつかまつるといへるなれば理髮にあたる詞あるべきになきは聞えがたしさればこれは
くし上と有けんをくら人とは寫し誤れる理髮を御くし上といふべきものなりもし又花鳥の説の如く大藏卿にて藏人頭をかけたるよしな
らばくら人の下に理髮をいへる詞の有しがおちたるかいつれにまれ其詞なくして何事を仕奉るとも聞えず

ひきいれのおと(玉)加冠の人をいふ(湖)其日冠をめさせむる人なりとやりを引入る故なり
みづらゆひ給へる(拾)和名抄云唐韻云鬚和名毛止々利鬚也四聲字苑云鬚和名美豆長一云訓同上。鬚也(餘)眞酒云東帯はあげみづらにし
直衣にはさげみづらにす源氏今日はあげみづらなりゆひやうは華亮裝束抄に云はし

大藏卿くら人(玉)これは大藏卿なる人の理髮の役をつかまつるといへるなれば理髮にあたる詞あるべきになきは聞えがたしさればこれは
くし上と有けんをくら人とは寫し誤れる理髮を御くし上といふべきものなりもし又花鳥の説の如く大藏卿にて藏人頭をかけたるよしな
らばくら人の下に理髮をいへる詞の有しがおちたるかいつれにまれ其詞なくして何事を仕奉るとも聞えず

縁を契る心をもむすびこめたりやいかにと問かけ給ふにむすびはもとゆひの縁語こむるは葵上の事をなり
むすびつる云々「玉」三の句のにもじは結句の下へふくめたる意有てそこへかゝるてにはななりふくめたる意は紫の色しあせずは仰のごとく
もとゆひに長き契をこめ奉らんといふ意なりかく見さればにもじ聞えがたし「釋」ふかきあせずなどみな濃紫の縁なりもとゆひは紫の組た
る糸なればなり心もふかきとは帝の仰のかたじけなきよしをそへたるにや下句は源氏君の御心だにいはらずはなりと舊注にいはれたるがこ
とし

ながはしよりおりて「花」御殿より南殿へかよふ廊なり大内の時は此所にきざ橋有て東庭におる、道あり引入のおとやなども此階よりおりて
御前の辰巳のかたにて御前に向て舞踏し侍るべし

みこたちかんだちめつられて「弄」源氏の元服に縁を給ふ事は東宮の御元服の時の儀を表するなり其時は諸福ことごとく賜ふなり
なりびつものこもの「細」をりうづとよむなり折に入たる物なり「玉」こものは籠物なり獻物にはあらざ「釋」籠に入たる菓子なり

右大辨なんうけ給はりて「釋」右大辨なる人承りてそれらに仕奉らしめたるなり上に源氏君を誠慮箱へめて奉りし右大辨なるべし「抄」右
大辨勤仕例天慶三年二月十九日源清平

どんじき「新」古記春日語棟屯食幾十具裏飯幾百とあれば屯食をソ、ミイヒと有説は誤也屯食は今世に二重の壘といふ物ぞ其遺制ならん
ろくのからびつ「釋」諸官に賜はる縁を入たる辛櫃なり「花」縁の辛櫃は親王以下の元服にはこれをたてず東宮の御元服の時の事なりそれ故
次の詞に東宮の御元服のなりにもかざされりとなり

そのよおとりの御まことに云々「釋」御元服ありし當夜左大臣殿へ源氏君禁中より出て行給ふ也さほうとは葵上と婚禮し給ふもろ／＼の儀式な
り

女君はすこしすぐし給へるほどに「釋」紅葉、賀、巻によとせばかりこのかみにおはすればうちすこしはづかしげにさかりにとのほりて見え給
ふとあるによりて諸注に源氏君の十二にあって十六歳と定められたり「潮」葵上は源氏に四の兄なり此年のましたる事ゆゑ始終葵上には心
おかせ給ふとなり「評」案に葵上の源氏の御心にそまぬまにいはるは年のたけ給へる故のみにはあらざれどこれも其中の一つにはあれば
この説もすつべきにあらず心得おくべし

ものあざやかなるに「釋」父母いづかたにつけても種姓貴くして他にすぐれ給へるをあざやかとはいへるなりあざやかは俗にはつきりとした
りといふ意なり
よの中をしり給ふべき「釋」これは帝の御うへを申奉ることく聞えていともかしこきいひざまなれどもそのかみ振關の事をかくさまにもいひ
しなり大臣の威權おもひやるべし

宮の御はらは「釋」宮とは帝と御一腹の三の宮にて左大臣の北方を申すなりその御腹の御子は葵上とこの藏人の少將となりこの宮は後の巻々
に大宮としられたるが御事藏人の少將は頭中將とつけたるが事なり

くらうどの少將「釋」近衛の少將にて藏人頭に補せられたるを云「評」この一段左大臣の威權をかけたる序に右大臣の末のいきほひを頭はし且
頭中將の傳を始て出せり此人源氏君に相匹ひて何事にもめづきさまに書たるが始終少しづつ劣りさまにかゝられたるは巻中の主とある人な
らばなり正副の筆すぢ心を付べし

あらまほしき御あはひどもになん「評」左右の大臣の御中はよかられど云々せられたるはげにかくあるべき御間がらなりと地より評したるな
りさてかくいふは末にはさはあらで彼此互に御中のわるき事をいはんとて先かくいひおくなりと心ふかき書さまなり

さやうならん人をこそみめ「釋」見めとは我物にして明暮にあひ見る事なり此詞次下に多し皆同じ

おほいと「釋」大殿といふ事なり次々いとおとしたるは今皆補ひつ「評」この段藤室の君を母に似たる人とて戀しのび給へる心やうや
う轉りて我物として見まほしくおぼえ給ふといふ端を起したり此脉次の巻どもにちら／＼と見えたるがつひに若紫の巻にいたりてぼぼし出
せりさて又こゝに葵上の御心につかぬ事をも挿みて後の伏線としたる更にめづたし正妻の心にそまぬからにあだし人はいよ／＼心の深まり
ゆく情けにさる事になん有ける

心にもつゞおぼえ給ひて「玉」此上に調たらず脱たるにやその故はさやうならん人といふより人とは見ゆれどいふまでは源氏君の心を
直にいへる語心にもつゞ云々は物語の地よりいへる語なればかならず其堺に云々といふ調なくてはとのはざるは後の人の寫すとして
おとしたる物かはたもとより装式部がとりはづして誤れるものか此たぐひなること巻々にをり／＼あるなり

御ひとへ心に「玉」なまなきほどの心は物をたやすちに思ひて他の事にわたらぬをいふ

おとなになり給ひて後「玉」元服し給ひて後はいふ事なり

みすのうちにも「新」藤つばのみすのうちにもなり「釋」上に御ともにはやがてみすのうちにいれ奉り給ふとありし首尾なりそのかみの禮儀
思ひやるべし

琴笛のれに聞かよひ「新」琴は藤つば笛は源氏の物の音にあつる説よし次下にも似たる事あり凡和漢ともに物の音によりて情をかよはすこと
おほし

つみなく「釋」源氏君の功き故にたえ／＼なるなも何の罪なき御心と左大臣の思ひゆるし給ふなり
もとのしげいさを「釋」もとのとは故の更衣のおはしし所といふ意なりみさうしは源氏君のおはします御局とし給ふなり
は、みやす所の御かた／＼の「玉」御かた／＼とは更衣の局と母の里とにつかへし人々をいへるが

より後藤末紫卷に三十九歳のよし見えたる其あひたにはすべて齡をいへることなければ此卷を十六歳とせられたるもたゞかの藤末紫卷より逆にかぞへて定めたるものなるを諸抄の説其間に一年の違ひ有故に此卷は十七歳なりその一年たがへるよしは玉かづらの卷のところにいふべし

○此發端の語は見るに心得べきやうあるなりまづ此帯木卷は細流にもしるされたることく此物語一部の序のごとくなるを此發端の語も又一部にわたりて序の如くにて源氏君の壯年のほどの事をまづとりすべて一つに評したるものなり此卷のはじめのこの事にはあらずいひけたれ結ふとがの多きといふもかゝるすき事といふも皆これより後の卷卷にある事共をさしていへるなりこれより前桐壺卷にはいまださることなしかたりつたへけむといへるすなはち此物語此後の卷々の事どもなりかくてまた中將などに物し給ひし時といふより其始へ立かへりてその有しやうをつぎつぎに語るよしなり

(釋)帯木と名づけたる事は舊注のごとしさて此名

にことくしきゆゑよしのあるやうにいはれたることゝもは新釋に辨へられたることくなるべければ今ははふきたりさて又此卷のはき木の歌はかの是則の歌によりたることは論なきをその本歌のこゝろ猶うたがはしきよしありしかれどもたしかに思ひ定めたる説もなければしばらく舊注のまゝにものしつ顯昭の袖中抄十九の卷にも説ども多く出されたれどいづれもげにとおぼゆるもなし其中に綺語抄を引て二つの義を擧られたるうち「帯木のある杜のあるなり其杜いとしげくてもりの中にはき木をおひたりそれを遠くつみればあるやうにて杜の中に行て見れば木のしげりて見えぬなり」とあるや事の情に近かるべからんさて品定をもとせずして空蟬の事も巻名につけたりといふことの説は大かた新釋のごとくならんかされどきはめてはいひがたし

○發端の語の事は玉小櫛にいれたることく源氏君の一世のうちにあらし事共を先評したるにてげに此語一部にわたれりさて此語を結びたる所は夕顔卷の末に「かやうのくだしき事はあながち

にかくろへしのび給ひしもいとほしくてみなもらしといめたるをなみかどの御子ならんからに見ん人さへかたはならずものはめがちなるとつくりごとめきてとりなす人もし給ひければなんあまりものいひさがなきつみさりどころなくといふ所なりされば此卷より夕顔卷の末まで一つづきなる文なるをかりに三卷となしたるものなりそのよしは夕顔卷にこの語と引合せてくはしく注せるを見るべしさて此語どもによりて猶考ふるに發端にかゝるすきごと、いひしのび給ひけるかくろへ事といへるは源氏君の一代のうちの好色事をさしたるやうには聞ゆるものから又この空蟬夕顔の事をさしていへるにはあらずかと思ふよしありさるはかゝるすき事としもいへるかゝるの詞も卷々すべてのごとしはあまりに廣きに過て聞えたるにかるびたる名をやながさんとあるも帝の御子として受領ばかりの分際なる女に心をつくしてあらぬ所にまどひありき給ふをかるびとはいへりと聞ゆればなり結びの語に夕顔の事を書はてたる後にかやうのくだしき事はあながちかくろ

へしのび給ひしもといへるも此空蟬夕顔をさしたりと聞ゆるをも引合せておもふべし若紫より次々の卷に見えたる人々はさばかりに賤しきもあらず大かた源氏君のよばひたまふべきほどの人なればさしてかるびたるすぢにはあらず此卷の末に空蟬の君の思ふ心を書たる所などにも夫ある身にて逢奉りし事をばさしもいはずしてたゞ身のほどの賤しきを恥らひたる事をのみむねといへるも貴き賤きかけはなれたるけぢめありし故なるべく見ゆるをも考へ合すべしかくて此卷より夕顔卷までの事どもは其もと雨夜の品定に馬頭がいへりしことより御心つきてさるくまゝにまでおもほしかけたるささなる事はその脈を次々に引出たる詞どもの中に著く見えたる中に夕顔卷にかやうのなみくまではおもほしかゝらざりけるをありし雨夜の品定ののちいふかしくおもほしなるなどいへるをも考ふべし然れば此一つゝきの文には受領ばかりの中の事をまづとり出あらはして品定のなごりをあやなしたる條とすべしかくして見る時はいひけたれ給ふ答といへる答も好色の外の事にはあらでこの

空蟬夕顔の外の好色事をさしたりとすべしされど
 暫く本文には先達の説のまゝにとりて注しつ見ん
 人猶よく考ふべし
 (評)此巻より夕顔巻までは一ついきの文なるを三
 巻に分られたるさまいとめづらかなりさるはいか
 なる心ぞといふことは今知るべきにはあらざれど
 かいなでの筆ならば先桐壺巻に源氏君の傳をかき
 次に此巻に品定の事をいひさて中川の段をひとつ
 にすべて空蟬巻とすべきことなるをさはあらずし
 て品定につけて中川の段をあらはしさて其事の
 末を截てべちに空蟬巻をたてさて夕顔の巻をかき
 てとぢめられたるはいと案外なることちするにつ
 きておしはかりに考れば例の事をきはしくしくせ
 ずしてさりげなく書まざらばされたるにやとぞお
 ぼゆるさるは此品定はあるが中にも心をいれて世
 にあらゆる女のさがどもをくまなく論じあかした
 る所なれば先達のいはれけんやうに實に一部の序
 のごときものにてふかく心をこめられたる物から
 こればかりを別にはなちて某の論某の序などやう
 にもものしては餘りけざやかにて女の手してはかな

くなつかしく書たる物のさまならねばわざとかく
 きざらはして何となく物語のうちにくめたる物な
 るべしさればそのさまも雨夜に源氏君の御とのぬ
 所のつれづれなるに頭中將左馬頭藤式部丞などの
 何となく來つどひてうちとけ物がたりすることの
 やうにとりなし猶桐壺の脈をとり出て其前後を大
 殿の事もてわやなされたるなど物語といふものゝ
 やうあることを螢巻に源氏君と玉かづらの君との
 打とけ言の中にあはしたると同じ筆つきなれば
 なりさて其大殿の事より中川の段を引出られぬも
 に俄にはからずして御方違へにとりなして空蟬君
 をあらはし出その事をばかたりはてずしてなかば
 にてたちきりてとぢめたるなどわざとしどけなく
 書まざらばしたる物とおぼえてかの品定のきはき
 はしからむことをかいけちておしつゝみたる筆づ
 かひめきたり
 ○品定のくだりのいみじきことは諸抄にいはれた
 ること多ければいふもさらなる事ながら實に此物
 語のむねとある所なる故にや殊に作りぬしのさえ
 のほどあらはれてかへすゝめてたしそれが中に

も初に長雨のはれなきをいひおこして物語のし
 めやかなるべきしたくみをなしおきさて源氏君と
 頭中將と殊さうにむつれ給ふよしをとき出てう
 ちとけ言のたさふべきくさはひとし次に又雨の
 脈をあらはしていよゝのどかにつれづれなるこ
 とをいひつひに御厨子のふみどもを引出てたはふ
 れ給ふより此論のはしをおこされたるに左馬頭藤
 式部丞参りあひてますゝ物語のさかりになりゆ
 くさまなどつゆばかりもすさまじきものなりさて
 物語する當夜のさまの脈をうしなはしがために一
 段ごとのさるゝ所に人々のありさまいふ言思ふ心
 などを挟みあらはされたるさましくその人をうち
 見るがごとくにしていはんかたよくめでたしされ
 ば其所にいたるごとく當夜のさまをあらはしたる
 第幾段なりとて評せり心をつけて見るべし此脈十
 二段にしてつひに其論竟たるに藤式部一人をまづ
 下させて省かれたるなどは殊に心きゝたる書きま
 なりといふべしさてまた此品定の大かたのすぢは
 はじめに人の種姓につきて上中下の品ある事をい
 ひ次に女の本上につきてさまゝの心ばへある事

をいふうちにしか何事もたらひてめでたき女はよ
 くに有まじきよしをことわりてよろづ男の見ゆるし
 てすすすべき事を何となく挿みていましめられた
 りさて其次にさまゝの女の難ある事どもを擧てあ
 だゝしきとさがなきとの女のやうをとり出て
 たみによきあしき事あるよしをあげつらふ中にす
 べては種姓にもよらずかたちをいはずたゞまめ
 やかにしづかなる心のおもふきなるを竟のたのみ
 所に思ふべきよしをいひてよにたらひたることは
 なかるべき事をふかくしめされたり次にしふねき
 女のくせをいふ事のついでに女の男に對する心し
 らひをそれとなくいひ出ていましめられたる所殊
 にめでたしさて其次に三の事のたとへを引いで
 てうはべのけしきだちたる女としめやかにまこと
 ある女とをくらべいひてなほじちになんよりける
 とある所すべて此論のおちのたる所なりそもゝ
 女の本上につきたるわろさくせをおしくるめてい
 はゞたゞこのあだゝしきとさがなきとしふねき
 との三にてこれを一つもぐせざる女は、大かた世
 中にあることなしされば女はとにかくにこれを

つゝしみ男はこれを見忍びんより外に男女のなからひの心もちぬはなきよしをいはんとて、これかれ事をあやなしてさてあだなると實なるとを相たのむべき所の大むねなるよしをしめしたるものなりさてその次に人々の昔ありし事を語るやうにしてさがなきとあだなるとの女を對へ擧てそのあるやうを馬頭にはせてことわり次にはかなき女のためしを頭中將にかたらせざえがりてこちゝしき女のさまを藤式部にはせて興としたるなりこれはた此二を反對としたるなりさてそのさゑがる女のこのついでにすべて女の才學だてし或は世間の事を辨へがほするくせのいたくけにくゝよからぬ事をいひてをほりたるこれの作りぬしの日此の心しらひにてその世の女のさゑがりたるをかたはらいたく思ひていせしめたるなりこれらの事は猶其所々に評ずるを考へ合せてさるとるべしかれば此一段にて世中の男女のなからひの有さまをば大かたに書つくされたりと見ゆればつらく委しく見ん人は教とも戒ともなさばなること多かるべしかしさいへ作りぬしの心はしかひたむき

に教ぞ戒ぞなきはしう書たるにはあらでなかゝる筆つきをかくさんとてさまにまぎらはしたる物なれば舊注のごとく教戒にとりなし儒道にいひよせ佛法にしひつけなどせんことはいとあぢきなくさりとてまたおしなべたる昔ばなしのつらにいひなしてさばかり作りぬしの心をこめられたる事をたゝあだめきめなれたる打つけのすき事せん媒となるやうに評したらんはいとうもれいたくあたらしきことなり見ん人ふかく心してあぢはふべし

○昔よりの注どもに品定にいへる女のくせを卷々に見えたる人々にあて、藤壺にあたり葵、上にあたりなど注せられたるは一わたりいはれなきにもあらざれどしかさしつけて此事はそれにあてん此人は彼にあてんとてかゝれたるさまには見えざればかたをばあたりたるやうなるもいひもてゆけば又かたはらあたらしき所ありてみながらかなへりと思ゆるはひとつもなしされば大かたはいたづら事めきたれば今はさるすぢどもをば皆はふきたりしかれどもまづかくさまの女のさがを論らひ

たるはこれをおしひろめて源氏君にさまの人の人を相對へてその心ばへのあるやうを見すべきくさはひとは見えたればその源因とは見るべきなりさてまたこれに一段二段三段としるしめてゆきてつひに十八段にいたりて十八段の品定などいふ事ふるくよりいはれたることなれどこれはた一條のおちぬる所々かの段のぢやうのやうには見えぬうへに上にいふがごとく事のすぢも段ごとにかはればさばかりはしくいふべくもあらずされば今は又それをも省けり但し一事のさるゝ所には例の標をつけて彼此はなれたる事のさまのみをかりそめに示しつ

○品定と空蟬夕顔の事とはいたくもてはなれたるごとく見ゆれどさにはあらずかの馬頭がいへりしことより源氏君の御心つきてさるあやしき所にもあくがれ給ふさまに書なしたる物なる故に所々にそのつなぎの詞を挟みて品定の段とかけはなれぬやうにかゝれたりさればくゞしけれどその所々にて其脈なることを評じあらはせり其中に夕顔君の事は品定の時頭中將のかたり出られたる事

なれば品定の次にまづかき出べきことなるをさあらずして先空蟬君をあらはし次にゆゑりなきさまに夕顔をあらはされたる筆づかひさらしめたし大よそつくり物がたりは打見るよりかゝるおもふきぞとたやうの目にも末のさまの見えしらるるはいとあさはかなるものなるをかくとりかへて思ひかけぬさまに物するにてこそ其書のめづらしさもいとみじくはおぼゆるなれ見ん人さる意して作りぬしよにぬけいでたるかどゞしさをあぢはひしるべしかゝる事ども猶他にもおほし

○空蟬と夕顔とは同じほどの人なるを相對へて擧たる中に一人は用意いとこまやかにふかくしてわろかめるかたちをもさるかたにとりなし世中のありさまをもふかく思ひしりて物のあはれもいみじきに心のみさをもたゝならぬさまにとりなし一人はかたちをかしくおほどかに打とけてさしたる用意もなくたゝはかなげにこめきたるさまにかゝれたるは反對の法なりさていづれも同じ夏の事なる故に空蟬といひ夕顔といへるも心あるに似たりさて又これらの人々は物語のむねとある人々にもあ

らざるからに空蟬は國へくだりたるよしにて事を
 たちきり夕顔はうせて玉かづらを残しといめたる
 さまにして末の物語の伏案とせられたりさて空蟬
 は關屋卷に其終をかゝれたるは源氏君の須磨より
 かへり給ひて人々をもらさずとふらひ給ふ事のつ
 いでに其末をとぢめたるなり夕顔は玉かづらの卷
 にいたりてかの頭中將のいどみの末の脈をとり出
 べきためばかりにして終れるなど皆とくはふきて
 むねとある人の事をかたらんとてなりこれらまづ
 よく心得おくべし

○桐壺卷と此卷の品定とはこの物語の一部の發端
 なるよしは先達もいはれたるがごとし其中に桐つ
 ぼは經品定は緯のごとしさるは桐壺はむねと源氏
 君の傳にてそのはじめよりの事を年月にそへて語
 るなれば經也品定は専ら人事のうへをかたるなれ
 ばこれ緯なりおほよそ世間のありさまは經には月
 日のおのづから過ゆき緯には人事のこゝろとなり
 出るにてさまざまの物語どもはいでくるなれば先
 このたてぬきの大かたをあらはし定めおくにぞ有
 けるこれは作りぬしのしか思ひてかゝれたるに

はあらざれどたがはぬ事なればちなみにいふな
 り

○桐壺卷と此卷の品定とは發端の卷なればにや文
 章の語のはこびいとむつかしき所おほくしてあや
 にいりくみたる所などはふとさとりかぬる類ひも
 ありこれは作りぬしの意してかゝれたる事にやあ
 らんされどよく其語のうつりを考へつゝ見れ
 ばいひしらずめでたき所も又おほし中川のくだり
 よりは専ら物語にうつれる故にや文の語いとすが
 すがしくして大かたにいりくみたる所はすくなし
 これも作りぬしの意ありし事かたおのづから然
 るかしらねどもとにかくにあやなしたるは文あり
 てめでたくすがしきはかはらかにてめでた
 し

○此卷に源氏君と紀伊守との問答の所二所あるに
 いづれも問答のきふなる所にいたりてはこれかれ
 の語の中にさかひなくおしつゝかけてかゝれたるに
 その人のいふことゝきはやかにわかれたるいひし
 らずめでたしすべて御國言の文は漢文とは異にて
 この問答のかさなりてきふなる所殊さらには書と

にく、して事情をそこなふこと多きものなるをか
 くあざやかにかゝれたるはいとくぬけ出たる文
 かきなりけり猶かやらの所々は次の卷々にもいと
 多し心をつけて見ならふべし

ひかる源氏名のみことくしう
 「玉」此下にもじなをへて心得べし
 「花」この發端の詞は桐壺巻の終の詞に光る君といふ名はこまうどめて聞えてつけ奉ると書るをうけていへるなり
 「釋」この御説のごとく桐壺巻より續きたる文の脈也ことくしうは光るといふ名の事々しきよし也
 いひけたれ給ふとが「玉補」此とがを師の好色のとがと解れたるはいか好色の外のとがなるべしかの須磨に流され給ふ時の世の風説も好色の過のみにはあらざりしやの類ひなり若好色のみのとがとして下のいとといふ詞聞えがたし「玉」ひかるといふにけたれといへるおのづからの文のほひなり
 いとやかゝるすき事どもを云々
 「玉」かゝるすきことといふより名をやながさんといふまではその時に源氏君のみづからおぼせる心ないへる也
 「釋」すきことといへる

光る源氏。名のみことくしう。いひけたれ給ふとがおほかなるに。
 かゝるすきこといをも。すゑの世にも聞つたへて。かろびたる名をやながさん。
 としのび給ひけるかくろへごとをさへ。かたりつたへけん。人の物いひさかなざよ。
 さるはいといたく世をはいかり。まめだち給ひけるほどに。なよびかにをかききことはなくて。かたの、少將にはわらはれ給ひけんかし
 まだ中將などにもし給ひし時は。うちにのみさふらひようし給ひて。おほいとのはたえくまかで給ふを。しののみだれや。とうたがひ聞ゆることもありしかど。
 さしもあだめきめなれたる。うちつけのすきくしさなど。は。このましからぬ御本上にて。されにはあながちにひきたがへ。心づくしなることを。御心におぼしといむるくせなん。あやにくにて。さるまじき御ふるまひも打まじりける。なが雨はれまなきころ。内の御物いみさしついき。いとやながむさふらひ給ふを。おほいとのはおぼつかなくうらめしと

即好色の事なりいひけたれ給ふ事多かるへに又かゝる好色事をし給へりと後世までも聞傳へていふるくしき名をや流さんと云つていひしつゝしみて深くひめ給へる隠事をさへ語り傳へたる世の人のものいひはさかなきものぞといふ意也さてそのつくるへ事はこれより次の巻々にするしめてゆく事どもをさしたる也
 さるはいといたくをなはかり云々
 「釋」さるはいといふ辭なるはいと異にてされどさはいへなどいふ意に近く聞ゆなよびかにをかきき事はなくて「玉補」是は卷々にある歌をおとめいへると同意にて源氏君の事をかくいふは即作者の卑下にて此物語の作りさまのつたなくをかしからぬよしを下にことわりたる也またの少將いせ物語などのふりとはかはれるよし也
 いたの、少將「花」清少納言の草子に物語の名も出せる處にこまの、物語いたの、少將とあり「釋」この物語今は世に傳はらずおもふにあだめきたるさまなりしなるべし宗祇云作り物語の人に對する事面白くけるなりといへりさる事なり
 まだ中將などに「玉」上の發端のすべての語をうけて其始つたよりの事どもをこれよりかたりはじむるなりまたといふも其始へ立つていふ故なりなどいふもははじめつたをひるくいへる詞也云々
 さふらひようし給ひて「釋」このさふらひは體言なり伺候とのぬなどいはんがごとし俗言には、禁中の御番をよくし給ひてといふ意なりおほいとのは「細」桐壺にも内ずみのみこのましようおぼ給ふ五六日さふらひ給ひておほい殿には二三日などたえくまかで給ふとあり
 「釋」この御説のごとくきりつたの巻の脈をうけてつがれたる所なり
 しののみだれやと「湖」奥入「春日野のわかむらさきのすり衣しののみだれがきりしられず内裏にていかなるみだれ心もあるならんと發上がたには思ひうたがふとなり
 さしもあだめきめなれたる云々
 「釋」さしもはこのましからぬへ傳る脈なり此段のてにをはいと紛らはしきをひとわたりいは宗祇注にやうに人の疑ひ思ひしども光君の御心にはなびきやすき人に心とめ給ふことなき御本上なるによりさもなかりけりといふ義也といへるやよろしからんされどもさもなかりけりといふにあたる詞なれば打つけにさは聞えがたしさればしばらく御本上にてといふ下にさはなかりしどもまたと云ふことを加へてきくべしこの處大かた脱文あるべくおほい
 御本上「釋」本上は本性の借字にて几帳を木丁とく類ひ也「餘」荷子性惡黨禪種、獨者豈人之本性也哉
 まれにはあながちに「釋」まれにはひきたがへあながちに心づくしなることをとつて語脈なるを打かへしてかくいふは例の文法なり引たがへとはうちつけのすきくしなどは好ましからぬ御本性に引たがへといふ意也
 おぼしとやむるくせなんあやにくにて「釋」なんはあやにくへのみ係る辭のごとくなれどさては下のりるといふにかなはざれば猶打まじりけるへかゝる辭と見るべしあやにくにては心づくしなる事をさるまじき事とおぼす物からなはあやにくにてといふ意なり

さるまじき御ふるまひも打まじりける (玉) これまでの文中將などにて物し給ひしころのさまをひろくいへる也此巻の時のことにはかきらす
〔細〕此段は悉皆源氏君の本性を書あらばし侍る也云々 (新) なりがたきをしひて戀給ふ御くせ故にうつせみ藤つばなどの有まじき御しわざ
もありし也

長雨はれまなきころ (釋) 五月雨のはれまなきころなる事下の中河の家さまにてしられたりこの段下の品定の事をいばんとての發端なり
御ものいみ (釋) 何事にまれつゝし給ふべき寒まる時に人の出入をとめて警戒し給ふ物忌といふこゝはさることのまじつゝ故に源氏
君の里に出給はずして禁中にながく居給ふ也 (玉) 上に内のみさふらひようし給ひてとあるを此ほどは御物いみのさしつゝきていよく
長居し給ふなりすべいととといふ詞はみな此意をもて見るべし

ふるづの御よそひ (釋) よろづのとは御装束よりはじめてもろろの御調度までをいふなるべし
たゞこの御とのぬ所の宮づかへをつとめ給ふ (玉) 御とのぬ所は禁中にて源氏君のおはする所なりすべつとむとは俗言に擧出してするとい
ふ意なり俗にいふとはいさゝかたがひ有 (釋) 源氏君の御とのぬ所へ宮づかへをつとめ給ふといひて左大臣殿の源氏君をかしづき給ふさま
を敵れがてらきかせたるなり

宮ばらの中將は (釋) 頭中將の御母は桐葉帝の御妹三宮なるからに宮腹の中將といへるなりこゝよりむつれ聞え給ひけるといふまでは頭中將
の源氏君にしたしきゆゑを挿みたるにて別に一段なるものから下のうちとけことの品定をとき出んとしたくみなり心をつくべし
右のおとゞの云々すみかひは (玉) 頭中將のすみかひ也男の女の許へ通ふをすむといひて此すみかひはすみすむ所といふこと也さればいたはりか
しづき給ふといふも頭中將をなり

この君も (釋) 源氏君の妻上の御心につかぬにむかへて此君もといへるなり物づくは心のすゝまぬ也
すきがましきあだ人なり (釋) 本巻を物づくして外に通ひ給ふことあるよしをほめかしかつは次の品定を引出んとてかくいへる也實にあだ
人なるよしにはあらず只若き人の勢ひを敵れて評じたる語と見るべし
我がたのしつらひ (釋) 我がたとはおほい殿にて頭中將の住給ふ所をいふしつらひは家内のかざりなど也まばゆくしてはきら／＼しく目もか
がやくばかりなるをいふ

がくもんをもあそびをも (釋) がくもんは漢文章を學び給ふことあそびは管絃を習ひ給ふ事也
まつはれ (釋) 絲の物にまつはるゝにせて人のむつまじく立はなれぬをいへる語なり
かしこまりもおつず (細) へだてなくむつび給ふ故におのづから禮儀をも忘れて伴ひ給ふと也是則品定の物語など打とけたることの始にかけ
るなるべし

つれ／＼とふりくらして云々

(釋) 上に長雨はれまなき比とわき
出たる跡を再びこゝにあらはして
打とけ言の物語をしめやかにせ
んげしきとせられたるいとめでた
し

おほとなぶら (新) 式にも夜もすが
ら御寮所に有ともし火を御燈油と
書たりおほとのおぶらのあ反な
なればおほとなぶらといふ
いろ／＼の紙なるふみ (釋) 艶書は
かされの薄やうにかくゆゑにい
いろの紙なるといへるなり

さりぬべき (細) 中將に見せてもさ
もあるべきなば見せんと也
かたはなるべきもこそ (細) 其中に
見苦しきも有べきと下の心は興
あるふみをばかくし給ふ也

そのうちとけて云々 (釋) あまりに
うちとけたるふみは人に見られて
はかたはらいたき物なればし源
氏のおぼされんはゆかしく見まは
しとの意なり

おしなべたる大かたのは云々

おぼしたれど。よろづの御よそひ。なにくれとめづらしきさまに。てうとい

で給ひつゝ御むなこの君だち。たゞこの御とのぬ所の宮づかへをつとめ給

ふ宮ばらの中將は中にしたしくなれ聞え給ひて。あそびたはふれをも。

人よりは心やすく。なれ／＼しくふるまひたり。右のおとゞのいたはりかし

づき給ふすみかひは。この君もいとものうくして。すきがましきあだ人なり。

さにとても。我がたのしつらひまばゆくして。君のいでいりし給ふに。うち

つれ聞え給ひつゝ。よるひるがくもんをもあそびをも。もろともにして。を

さ／＼たちおくれず。いづくにてもまつはれきこえ給ふほどに。おのづから

かしこまりもおかず。心のうちにおもふことをもかくしあへずなん。むつれ

聞え給ひける。つれ／＼とふりくらして。しめやかなるよひの雨に。殿上に

もをさ／＼人づくなに。御とのぬ所も。れいよりはのどやかなることちする

に。おほとなぶらちかくて。ふみどもなど見給ふついでに。ちかきみづしな

(釋) 數ならぬどい源氏に對して
中將のわが身を卑下したる語なり
なみ／＼のふみはほど／＼におの
れらも女と番がはして見侍るべし
と也

ましがほならん夕ぐれなどのこそ
〔玉〕夕暮などましがほならん文
そといふ意、ましがほは文のさま
ないふ也夕暮へかゝれる詞にはあ
らずさてましがほといへるはまつ
よしなあらはにはかゝりて其心をか
すめたるをいふ也

かたはしづゝ見るに〔玉〕これは必
見せ給ふにと有べき也其ゆゑは上
のふんずればといへるはこゝへか
かる言なるに見るにといひてはふ
んずればのこゝり所なくてといひ
はずにもこゝの語にかなはざれ
ば也云々 (釋) 此説いはれたりさ
らば上のやむことなくもかたはし
づゝ云々へかゝる語と見るべきに
や此事を得の意なりこれを例の尋
きかたの語としてばせらにといふ
につきなく聞ゆべし

る。いろ／＼のかみなるふみどもをひきいで。中將わりなくゆかしがれば。
さりぬべき。すこしは見せん。かたはなるべきもこそ。とゆるし給はねば。
そのうちとけてかたはらいたし。とおぼされんこそゆかしけれ。おしなべた
るおほかたのは。かすならねどほど／＼につけて。かきかはしつゝも見侍り
なん。おのがじゝうらめしきをり／＼。ましがほならん夕ぐれなどのこそ。
見どころはあらめ。とゑんずれば。やんことなく。せちにかくし給ふべきな
どは。かやうにおほざうなるみづしなどに。うちおきちらし給ふべくもあら
ず。ふかくとりおき給ふべかめれば。これは二のまぢの心やすきなるべし。
かたはしづゝ見るに。かくさま／＼なるものどもこそ侍けれ。とてこゝろあ
てに。それか。かれか。などとふ中に。いひあつるもあり。もてはなれたる
事をも。おもひよせて。うたがふもをかしとおぼせど。ことずくなにて。と
かくまきはしつゝ。とうかくし給ひつ。そこそこおほくつどへ給ふらめ。

それかかれかなど
(釋) 其人の文かかの人ふみか
頭中將のとふ中といふ意也
そこにこそ〔玉〕そこは其所にて今
の世にも人にむかひて其許といふ
に同じ
聞え給ふついでに (釋) このにもじ
はるかに下なるとうめきたるけし
きもはづかしげなればといふ所へ
係る也甲乙の點つけたるをよ／＼こ
ゑるえてよみ味ふべし
女のこれほしと (釋) しもは助辭
なりこれほしと出で難のつけら
れぬよき女は世にありがたしとい
ふ意也かなは歎息したる也 (玉)
よ／＼より品定の始也しなだめと
いふ名目もはやく物語のうち夕願
巻に見えたり
てはしりかき (玉) なさげにと讀ま
りててはしりかきとよむべしなさ
げのために手をはしりかき也かも
清くよむべし云々
摩りふしのいらへ (釋) なりふしに
つけたるふみのいらへ歌のかへし

すこし見ばや。さてなんこのづしも心よくひらくべき。とのたまへば。御覽
とどころあらんこそかたく侍らめ。など聞え給ふついでに〔女の。これはじ
もと。なんつくまじきはかたくもあるかな。とやう／＼なん見給へしる。た
だうはべばかりのなさげに。てはしりかき。をりふしのいらへ心えてうちし
などばかりは。ずるふんによろしきもおほかり。とみ給ふれど。そもまこと
にそのかたをとりいでんえらびに。かならずもるまじきは。いとかたしや。
わがこゝろえたる事ばかりを。おのがじゝ心をやりて。人をばおとしめ。か
たはらいたきことおほかり。おやなど。たちそひもてあがめて。おひさきこ
もれる窓のうちなるほどは。たゞかたかどをきつたへて。こゝろをうごか
す事もあめり。かたちをかしくうちおほどき。わかやかにてまざるゝことな
きほど。はかなきすすびをも。人まねに心をいる。事もあるに。おのづから
ひとつゆゑつけてし出ることあり。みる人おくれたるかたをばいひかくし。

などを心得てする也。うは發語

ずぬふんによるしきも (河)其人の分にしがひてよろしき也

そのかたを (玉)そのかたとは上の手はしりかきをふしのいらへうちなどするたぐひをさしていふ也

かならずもるまじきは (釋)右の二くさの事を撰ぶに必定もるまじく取入んほどの人は有がたしと也

わがこゝろえたる云々おほかり (玉)これは上のうはべかりの云々のたぐひなる女に多くある事ぞといふ也別に一種にはあらず (釋)心得

たる事とは銘々にならびえたる能能のたぐひを云それを自贊して人をあなどりおとしむる也

おやなどちそひもてあがめて (釋)父母など其女につきそひ有ていつきかしづきあがむるをいふ

おひさきこもれる窓のうちに (河)長恨歌楊家有女初長成 養在深窓人未識 (玉)おひさきこもれるとは年わかくて行ききの多く

長きをいふわがき人をよこもれるといふも同じさてこもれるといひて窓の内とつけいふはおのづからの文のほひ也さて窓の内といふは

長恨歌の語によりて人の女の親の家にあるほどをいふ詞也實に窓の内にすめるよしにはあらず

たかたつどを (釋)かどは才の意なりかたつどは才藝のかたはし也

かたちをかしく打おほどき (釋)をかしくはかたちのよきないふおほどきは大やうなる意にて俗言におほこといふがごとく心のつかぬさまを

いふなり

まざる事なきほど (湖)親のもとにて外の所作もあらぬほど也

人まねに心をいり (釋)人のするを見まねにふと心をいれて習ふこともあるに心ともなくおのづから一藝ならひとる意なり

ゆゑづけて (玉)何にまれ一藝などを大いにしづる也

まれびいだすに (玉)すべてまれぶとはその有さまのまゝをかつたるをいふ

くたさん (玉)屬さん也下さんにはあらず

みおとり (釋)見そめたる時よりやう／＼に劣るを見おとりと云

うめきたるけしきもはづかしげなれば (釋)甲乙の點つけたる語脈をつぎて心得べしうめきたるとは心の不平を歎息したるさまなりはづかし

げは諸注頭中將の恥らひ給へるさまにとかれたるを餘瀝に例ども多くあげて中將の體の源兵君にはづかしく見ゆる意にいへるやかなふべ

からんうめきたるけしきとあるは恥たるさまとはいはく異なるべ也

いとなべてはあられど云々 (湖)中將の物語をことごとくおぼしあはするにはあられど也

ほゝゝみて (玉)たみ詞に含笑なりといへるよろし

そのかたかどもなき人は (玉)上に

たかたつどを聞つたへてといひ

ひとつゆゑづけてなどいへるは

たかどある女なるをそればかりの

能もなき女も世に有べきにやとい

ひ給ふなり

とるかたなく口をしきいとは云々

(釋)とり所なくわらきといふなり

とおほゆばかりすぐれたるとは共

に少くして大かた同じほどならん

といふ也何事にかざらず世中のあ

りさまげにかくなん有ける

(評)この品定の段は初に先女の難

なきは大かたよに有まじきといふ

より書出られたりそは新釋に是ぞ

下の數々の論に冠らしむる語にて

條々この理をつくせりさて終にれ

ぢけがましきおぼえだになくば物

まめやかに靜なる心の趣ならんを

ぞつひのたのみ所には思ひおくべ

かりけるてふにて結びをはれりとい

はれたる如くしなだめとはい

へども大かた定らぬ方が主として

論ぞられたりさてまづ才藝の聞え

さてありぬべきかたをばつくるひて。まねひいだすに。それしかあらじ。と
そらにいかいはおしはかり思ひくたさん。まことかと見もてゆくに。見おと
りせぬやうはなくなんあるべき。とらめきたるけしきも。はづかしげなれば。
いとなべてはあらねど。われもおぼしあはする事やあらむ。うちほゝゝみて。
そのかたかどもなき人はあらんやとの給へば。いとさばかりならんあたり
は。誰かはすかされより侍らん。とるかたなくうちをしきと。いふなりとお
ぼゆばかり。すぐれたるとは。かずひとしくこそ侍らめ。人のしなたかくら
まねぬれば。人にもてかしづかれて。かくる。ことおほく。じねんにそのけ
はひこよなかるべし。中のしなになん。人の心々おのがじつたてたるおも
ふきもみえて。わかるべきことかた／＼おほかるべき。しものきさみといふ
きはになれは。ことにみ、たつずかし。とていとくまなげなるけしきなる
も。ゆかしくて。そのしな／＼やいかに。いづれをみつの品におきてかわく

あるもまことにすむれたるは有が
たきよしなひ次に此段に至りて
種姓につきて品格のけぢめないへ
る也その中に源氏君と頭中將との
問答のありさまを委しくあらはし
たるはつれなる雨夜に打とけ
てかたらひ給ふ情景をうしなはじ
がために一段ごとの切る所にそ
のけしきを挿み入れたるにて例の
いとめでたき筆つきなり此脈を先
よくわきまへ置てよむべしさて又
この段は玉小櫛にもいはれたるこ
とく上中下三つの品をいふ中に上
が上と下が下とははぶきてもはら
中の品の事をいはんしたくみなる
故にまづくちなしきというなるを
な等しくとり出てそれをばしばら
く傍へはぶきおきて中の品をとり
出んとしてその中にも又さまま
の故ありてひたむきにはいひがた
きよしの難をまうけて源氏君の詞
として抑へたる也よく味ふべ
し猶次々にいふべし
人のしなたかく生れぬれば (釋)人

べき。もとのしなたかく生れながら。身はしづみ。くらゐみじかくて。人げ
なき。またなほ人の。かむだちへなどまでなりのぼりたる。われはがほにて
家のうちをかざり。人におとらじとおもへる。そのけぢめをばいかりわくべ
き。と問給ふほどに。左の馬のかみ。藤式部丞。御物忌にこもらんとてまゐ
れり。世のすきものにて。物よくいひとはれるを。中將まらとりて。このし
なじなをわきまへさだめあらそふ。ひときにくきことおほかり
れども。もとよりさるべきすぢならぬは。よの人の思へることも。さはいへ
どなほことなり。又もとはやんことなきすぢなれど。世にふるたつきすくな
く。時世うつろひて。おぼえおとるへぬれば。心は心としてことたらず。わ
ろびたる事ども出くるわざなめれば。とりくりにことわりて。中のしなにぞ
おくべきずりやうといひて。人の國のことにかづらひいとなみて。しな
さだまりたる中にも。またささみくありて。中の品のけしうはあらぬ。え

の種姓貴く生れたるはしたが小人々に崇められてわろきともかくるゝものなればおのづからそのけぢめひこまなくめでたきかたに見ゆる意也
おのけしひのたてたるおもふきも云々 (釋) 中品なるはさして人にもあがめらるゝばかりもあらずおのけしひのたてたる志のおもふきも見えて
ゆるかるべき也 (玉) よしあしの見えわかるゝこと也上文に上品の人ばかりもあらずおのけしひのたてたる志のおもふきも見えて
いとくまなげなるも (新) 中將の限なげにのたまへば猶此事委くつかん事をゆかしみおぼすまに問を設出てとかしむる也さて其品々やい
はにとは右のときはは一わたりの品也猶それが中にもささみくこゝろあらめとてとひげますまなりくまは限曲などの字を書て入めぐり
たる所又陰ふかく隠れたる所などいふ
いづれを三の品におきてわくべき (釋) 人の品たかくといひ中の品といひ下のきさみといふをうけて三の品といへり
なほ人の (細) 諸大夫などの時を得て次第に昇進して公卿までなりのはる人也 (釋) なほ人こゝにては地下をいふ
左のうまのかみ藤式部のじよう (評) この二人をあらはし出されたるいとめづらしこの品定源氏君と頭中將とのみにてはいとさうくし
ければこの二人をそへてにさほしくしたる也然るに却て馬頭主となりて物うちいひ主とあるべき源氏君はなかくに打れふりなどし給へ
るさまにかゝれたるさらにとめづらしをかしめてまたこの二人の事も後の巻々にすこしは出さるべきなまなくしてたゞこの品定にの
かむれと物いひたるばかりなるも思ひの外のことらしていとめづらし
御物いみにこもらんとて (釋) すべて物忌は外に出ず家内のみとちこもり居る事なる故に籠るといふ也こゝは源氏君と共にこもりて御つれ
づれをなぐさめ参らせんとてといふ意也
世のすきもの (新) 今の世にてのすきものも也さてこゝにては好色のみを云にあらざさしく風流なども有ないへり
ものよくいひとはれるを (玉) 深くこまかなる所までよくゆきとほりていふなり
いと聞にくきことおほかり (玉) この女のよきあしきないふ故也
なりのぼれども云々 (細) 左馬頭の申也前の二の品を評する也惟光がむすめ藤内侍のすけなどにあたり (釋) さるべきすぢならぬとは公
卿になるべき種姓ならぬ也さはいへど猶こゝ也さはいふもの、世人のおもふ所もとよりの公卿とは一段ひきく思ふよし也 (玉) さはいへ
どはいづこにても俗言に何といふてもといふ意也
又もとはやんことなき云々 (細) これは種姓よき人のおとるへゆくをいふなり末摘花にあたり (釋) 舊注どもにこの品々の女の事を末の巻
に見えたる誰にあたりとやうにいはれたる一わたりさることなれどかならずしこの論にひしと打あはせてかゝれたるにもあらざ
ればしかひたむきに定めてはたがふことやおほしされば只世にあらゆる女のくさくをこゝに論じおきてつきく其おまかげの人をあ
らはす種子とせられたりとのみ見てあるべしされば次々にもさる説は大かたはぶきつ

心は心として「湖」わが心はなほむかしよりし時の心ながら家まつしければするわざも事たらはぬ也
 とりてことわりて「玉」ははりのほれども云々とはやん事なき云々とをそれ／＼にことわりて也
 ずりやうといひて人の國の事に「孟」受領とは諸國の守をいふ國衛庄園の事なり行ふもの也（釋）人の國の事とは京ならぬ他國の事にあつ
 かるをいふが、つらひはひりあひといはんがごとし受領をいやしめたる書さま也
 しなさいたりたる中にも「湖」受領の品に定りながら又次第々ありて也「玉」ささみ／＼は段々の有て也
 中の品のけしうはあらぬ「玉」けは異にてあやしからぬ也云々物のさしあしからぬをけしうはあらぬといふ也
 えり出つべきころほひなり（釋）國の守介は外官なる故に内官よりはこなく賤しめたること也しけれども他國へ出てみづから政を執行ふゆ
 へにおのづから勢ひもつよく家も富さかえけるによりて後にはいとたふとくなれりこの作者の時も大かたは昔のまゝにはあらざりしさま卷
 の中所々に見えたりさるからにころほひなりとはけるなり心をつくべし世の勢ひを見るにたること多かるべし
 なま／＼の上達部よりも「玉」俗言になまじけの公卿といふことなり公卿といふばかりにて世のおぼえも何も公卿のやうにもあらぬをいふ次
 の非参議の云々と相對へて見へし
 非参議の三四位どもの「玉」いまだ参議に任ぜずして公卿にあらざる三位四位の人どもをいへりつねには位を以て三位以上を公卿とすること
 もあれどこゝは官に就て参議以上を公卿としてそれに對へていへる也なま／＼のかんだらめよりも非参議のといへる語の勢ひをもて知べし
 青表紙水には三の字なしそれによれる本はひがごと也かならずゆるゆるやかに三四位とあるべき語也四位とわきりていふ所にはあらざ
 やすらかに身をもてなし「玉」公卿にあらざればよろづ心やすき也
 思ひかけぬさいはひ（釋）かしこ御あたり近づき奉りて御子うみ奉る類ひなひふ
 すべてにぎはしきに「玉」すべては上の受領の事をも合せていへり（釋）さらばすべて富たるに依て女の品は定まるなるべしとの意也に
 ぎはしきとは家の賑はしく富たるをいふ
 こと人のいはんやうに云々「玉」今馬頭のいへるはさらににぎはしきをよしといふにはあらざる物を其意を得ずして仰らると中將の源氏君
 にいふ也源氏君はよくころを得給ふべき事なるに心もえぬこと人のいはんやうに也色このみならぬ人のいはんやうにといふ注はひがこ
 と也（釋）この處少しまざらばしもしくは源氏君ににぎはしき富榮え給ひながらさもあらぬこと人のいはんやうにといふ意にもあらんか
 猶考ふべしさてにくむといふは何れにしてもたかりそめににくむまねする意なり實ににくむにはあらず此所富榮の物語のさまをあらはし
 たる第二の段なり
 もとの品時世のおぼえ打あひ（釋）此段は上が上の品をいひてそれを打おき次に下が下の中にも思ひの外にめづらしき事あるをいへり反動

の文法なり玉小柳にこれなも中の
 品のうちなりといはれたるはいさ
 さかたがへり
 うち／＼のもてなしけはひ
 （釋）もてなしは其女のもてなしさ
 まなりけはひはけしきの外へ見ゆ
 るをいふおくれたらんはくちをし
 たらんなりさらにもいはずは論に
 も及ぶぬ意なり
 なにをして云々（湖）彼女を見る人
 の思ひおとしむる心也
 うちあひてすぐれたらんも云々
 （釋）この打あひは其女の身のほど
 にあひかなひて何事もすぐれたる
 をいふ上の打あひとはさすとこゝろ
 異なりさてこれももとの品ときよ
 のおぼえ云々の中の女の事なり別
 に一種にはあらず
 上は打おき侍りの
 （釋）上が上の事は我が及ぶべき
 かぎりならねばさしおきていはじ
 となりこゝにて上が上の論ははぶ
 きたり（玉）上件なりのほれども
 云々の條よりもとのしなときよの

りいでつべきころほひなり。なま／＼の上達部よりも非参議の三四位どもの。
 世のおぼえくちをしからず。もとのねざしいやしからぬが。やすらかに身を
 もてなしふるまひたる。いとかはらかなりや。家のうちにたらしぬ事などはた
 なかめるまゝに。はぶかすまはゆきまで。もてかしづけるむすめなどの。お
 としめがたくおひいづるも。あまた有べし。みやづかへにいでたちて。おも
 ひかけぬさいはひ。とりいづるためしどもおほかりかし。などいへば。すべ
 てにぎはしきに。よるべきなゝり。とてわらひ給ふを。こと人のいはんや
 ちに。こゝろえずおほせらるゝ。とて中將にくむ。もとのしなときよのおぼ
 えうちあひ。やんことなきあたりの。うち／＼のもてなしけはひ。おくれた
 らんはさらにもいはず。なにをしてかくおひいでけん。といふかひなくおほ
 ゆべし。うちあひてすぐれたらんもことわり。これこそはさるべきこと。お
 ぼえて。めづらかなる事。と心もおどろくまじ。なにがしがおよぶべきほど

おぼえ云々までの條々は女の身の品の種々をむれといひこれより下の條々は其女の心おきてふるまひのしななくをいひてこれより上とこれより下とは品定の整と縁との如し大つたこれらの事ども心をつけてこまかにわきまへ味ふべしなほざりに見んは作りぬしのさげかり心をいれたるほいなきわざなりかし

さてよにありと人にしられず
(釋)これより上條の反對に世に有ともしられぬほどの下の品の中に珍らしくらうたげならん人のあらんをいふ上のめづらかなる事と心もおどろくまじといふよりうけて見るべし此條はめづらしきに心とまる事をせんとしたる論なり

あべたらんむぐらのかぞ
(釋)あべたらんは荒たる事なりむぐらのつどは律の生しげりたる門と云意にて荒たるさま也(玉)むぐらの門といふからとぢられといふ也

ならねば。かみがかみはうちおき侍りぬ。さて世にありと人にしられず。さびしくあべたらんむぐらのかどに。思ひのほかにはらうたげならん人の。とぢられたらむこそ。かざりなくめづらしくはおぼえぬ。いかではたか、りけん。とおもふよりたがへることなん。あやししく心とまるわざなる。ちの年おひ物むつかしげにふとりすぎ。せうとのかほにくげに。思ひやりことなる事なきねやの内に。いといたくおもひあがり。はかなくしいでたることわざも。ゆゑなからず見えたらしむ。かたかどにても。いか、思ひのほかにかしからざらん。すぐれてきすぎなしかたのえらびにこそおよばざらぬ。さるかたにてすてがたきものを(ば)。とて式部をみやれば。わがいもうと、いもの。よろしききこえあるをおもひての給ふにや。とやこ、ろうらん。物もいはず。いでもやかみのしなと思ふにだに。かたげなるよを。と君はおぼすべし。しろき御そどものなよ、かなるに。なほしばかりを。しどけなくきなし給ひて。ひも

おもふよりたがへることなん云々(釋)思ふにたがへる也蓬におもはずふるさとにいとほしたなくてありければこゝちまどひにけりといせ物語にいへる類也とあるがごとし

ちのとしおひ云々(釋)これも珍らしきに心とまる事ながら又一種なり上なるはおぢぶれたる家の事これは何事もわろびれて見ゆる家の事なり

思ひやりことなることなき(釋)外よりの思ひやりゆかしげなき事也思ひあがりは其女は身をけたかくおもひあがり居る也かたかどにても「玉」たとひわづかに一ツ二ツのかどあらんにてもといふ也

さるかたにて「玉」中の品にとりてはといふ意也云々物をばのぼもじはやを誤れるなるべしげにては聞えず式部を見れば(釋)馬頭かたりさして式部が方を見やりたる貌なりその夜のままを願はしたる第三の段也

物もいはず(釋)父の年おひ云々と云よりの評をわが妹の事に思ひあてたるにやあらん物もいはずと戯れて書たる也といくをかし○上文との品時世のおぼえ打あひといふよりこゝまではもしくは頭中將の詞にやこゝにのたまふにやといへる事さらに馬頭が云たる事とは聞えずれば也されども又ながしがあふべきほどならねば云々といへるは中將とも聞えずしばらく奮説に隨ひて馬頭の語とす猶考ふべしいでや云々かたげなるをなと「弄」源の心に葵上の事を思ひあはせ給ふ也「玉」よなをなは世なる物をの意なり(釋)なもじの下に傍注のことき意をいひきしてと受たる也

白き御そどもの云々(釋)これより源氏君の打とけ給ひてますしめたきかたをいへり例の跡なりそひふしとは臂をつきてよこに臥すといふ今俗よこになるといふこと也ほかけは火影に御貌の見ゆるをいふ體言なり

あくまじく(釋)飽足まじと也

大かたのよにつけて見るには「玉」此段萬のうへにわたりてまことにさる事なり(釋)昔は難の意也

をのこのおほやけにつかうまつり(釋)是より男子の宮づかへの事をもてたとへを取なり

よのかためとなるべきも(釋)よのかためとは政事をとりて滞なきいはゆる柱石の人をいふまことのうつわものとは眞の大器といふこと也攝政關白也とかぎりていへる注はわろし

かしこしとて云々(釋)いかばかり賢き人なりともたゞ二人にて天下の事の執行はるべきならねばさまんくのつかさ人ありて上は下に助けられ下は上にながき従ひて互にゆづりあひて政をするならんと也らんの辭あちはひあり「花」天下はひろしといへども諸人力を合せて治れば中々やすき也せばき家の中の事はあるじ一人のはからひなればゆづるかたなくして大事なる心也このあるじはうしろみの事をいふべし

「玉」聖徳太子憲法に上行下靡云々

とあればかり云々

〔河〕そへにとてとすればかりか
くすればあないひしらずあふさき
るさに古今集俳諧 (釋) とすれば
なとあればとて引れたるは自
他の差によれるなるべし此歌の釋
別にいふべしあふさきるさは雅語
譯解に左に餘れば右にたらぬと云
心也といへり一つよき事あれば又
一つわるき事も有といふたとへま
でなり

なめらにさて有ぬべき人の
(釋)なめは斜字の意にてゆがみ
たる也俗にゆがみなりといへる
よくあたれりさて有ぬべきはそ
のまゝにて堪忍してさしおかるゝ
ほどの人也
すくなきを「玉」此をもじは下の開
じくは云々といふ所へかゝる語也
(釋)此説のごとし甲乙丙丁の點つ
けたるをよく味ひて語脈を誤るべ
からず
すきんしき心のすさびにて云々
(釋)すきんしきすさびにまかせ

などもうちすて。そひふし給へる御ほかけ。いとめでたく。女にて見奉
らまほし。この御ためには。かみがかみをえりいで。も。なほあくまじく見
え給ふ。さまくの人のうへどもを。かたりあはせつ。おほかたのよにつ
けてみるにはとがなきも。わが物とうちたのむべきをえらばんに。おほかる
中にも。えなん思ひさだむまじかりける。をのこのおほやけにつかうまつり。
はかしくしきよのかためとなるべきも。まことのうつわものとなるべきを。
とりいださんには。かたかるべしかし。されどかしこしても。ひとりふたり
世中をまつりてちしるべきならねば。上は下にたすけられ。下は上になびき
て。ことひろきにゆづらふらん。せばき家のうちの。あるとすべき人ひと
りぞ。思ひめぐらすに。たらはであしかるべき大事どもなん。かたしくおほ
かる。「とあればかゝり。あふさきるさにて。なめらにさて有ぬべき人の
すくなきを。すきんしき心のすさびにて。人のありさまを。あまた見あは

てさまくの女のさまを見くらべ
んなどの物好みにはあられどひと
へに本妻にもとさだむべき人と
かれこれ推み初たるが竟に定らぬ
なるべしといふ意也同じくは云々
は直さずしてさながら心にかなふ
人もあるべきかと思ふよしを其中
にはさみてことわりたるなり
わがからいりなし「玉」男のたす
けてなほす事のいらざるなりいり
は俗言にも錢がいるかれがいるな
どいふいり也
心にかなふやうもやと「玉」思ひさ
だむべきよるべとすばかりに心に
かなふとつゞく語也云々
さだまりがたきなるべし「玉」上に
おほかる中にもえなん思ひ定むま
じかりけるといへるをうけていへ
るなり然思ひ定めがたきこととはか
やうやうなる故なるべしとみづ
からおしはかりたるよし也
見せめつる契ばかりな
(釋)ふと逢せめたるも我にたぐふ
べき前世の宿縁なるべしとやうに

せんこのみならねど。ひとへに思ひさだむべきよるべとすばかりに。おな
じくはわがからいりをし。なほしひきつくるふべきところなく。心にか
ふやうもや。とえりそめつる人の。さだまりがたきなるべし。かならずしも。
わがおもふにかなはねど。みそめつる契りばかりを。すてがたく思ひとする
人は。ものまめやかなりと見え。さてたもたる。女のためも。心にく。おし
はからる。なり。されどなにか。世の有さまを見給へあつむるまゝに。心に
およばず。いとゆかしき事もなしや。君たちの上なき御えらびには。まして
いかばかりの人かはたぐひたまはん。ところせく思給へぬだに。かたちきた
なげなくわかやかなるほどの。おのがじは。ちりもつかじと身をもてなし。
ふみをかけど。おほどかにことえりをし。すみつきほのかに。心もとなくお
もはせつ。又さやかにも見てしがな。とすべなくまたせ。わづかなるこゑ
きくばかりいひよれど。いきのしたに引いれ。ことずくななるが。いとよく

思ひて離別せず堪忍するよし也さやうの男は人よりもまめやかに見えさても猶もたれたる女も何事かよき所あるべしと心にしおしはか
らるゝといへるなり

されどなにか「玉」されどは心にくしおしはかるといへるにあたりていへりなにかは何かは也心にしおしはかるといへどもさやう
のたぐひも何かはゆかしからん意也云々

よの有さまを見給へあつむるまゝに「釋」馬頭世上のありさまをかれこれ見集るにしたがひて也

心におよばず「玉」及びなきやうに思はるゝをいふ注にこれをと思ひ及ぶこともあらずといへるはかなはず

君たちの上なき御えらびには云々「釋」君たちは源氏君頭中將をさしていへり上なき御えらびは此君たちは當世の貴人なれば此上もなき御
びといふ意也ましては我らだに如此なればましていかにかりの人かよく御心にかなふ人とはなり給はんといへる也たぐひとは配偶する意
也

所せく思ひ給へぬだに「玉」細流にこゝにて句を切て心を上へかけて見る也とあるがごとし我らが賤しき身にだにしお思ひ侍るをまして君た
ちの上なき御えらびにはといふ也たみ詞にあましく女を見あつむるだにといへるはたがへりそは所せく思はぬをひろく見あつむる意にとり
ていへるなれどさる意にはあらずとてころせしといふ詞は言の本の意は所の狭き意より出たるなれども用る意は必しもしからずこゝは
貴人は身の重々しくて萬の事たやすからぬをとこころせしと常にいふ其意にて妻をえらび給ふことも貴人は何くれとむつかしくしてたやすか
らぬを我らがこゝと下さまの人はさやうに事むつかしくはあらざるをそれだにといふ意にていへるなり「釋」此意はめて誤脱ありとおぼ
えて事の意委しくわきまへがたしされども暫く右の説どものごとく見てあるべし猶今一つ試にいへり所せく思ひ給へぬだにといふ事はなき
本もあれば脱したる事は論なし此詞を上世のありさまを見給へあつむるまゝにといふ下へつ付けて見る時はことわり直きて聞ゆるにつけ
て案ふに本はしか有けんを一度おとして後にまた書入るゝ時に二行ならびたる右の行へ書入たる左の行へ入たるぞとおもひ誤りて後に又
寫す人のこの所へ入たるなるべしもの寫すにはかやうの事をりゝあるもの也さてもなほされど何かといひたる事様ならず是は河海になに
がはなにがしといふ心とやうにいはいはれたることくもとはなにがしと有しなしを脱せるならんかくして見る時は「されどなにか」世のあ
りさまを見給へあつむるに「所せく思ひ給へぬ」身だに心におよばずといふゆかしきこともしやまして君たちの上なき御えらびにはいかに
かりの人かたぐひ給はんといふ意となりて事もなく聞ゆるべししては君たちの上にある意也

かたちきたげなく云々「釋」猶馬頭の詞也上の條はつひのみ所とすばかりの女の世に有がたきよしをいひこゝよりは女のうへにつけて
さま／＼のくせある事をいへりよく／＼わかつて心得べし

ちりもつかじと身をもてなし「釋」つかじはつけじを寫し誤れるなるべしこれは若き女のおの／＼身をたしなむ事にて塵ひとつも身につけま
さるゝといへるなり

しとするありさまをいへる也

ふみかけどおほどかに云々「釋」おほどかは細流に大やう也とある意也さておほどかに言振をしとはふみの詞をばいとよくえらびて手づく
ならぬやうに書ながらしお探ひたることくにはせで大やうなるやうにまぎらはしたるをいふ也さらば言のつゞきことわりなし萬水一露に
大やうなるさまにて文をわけども詞をえらびつくるひてかくとの義也といへれど言のはこびさは聞えず又おほどかにすみつ云々へかゝ
る語かともおほへど文の勢もあらず

すみつきほかに「新」墨つきなるべし手つき口つきなどいふつきに同じ書たる墨色筆づかひなつかれていふ也

こゝろもとなくおほはせつ、「拾」返事の墨つきほかにて心もとなれば猶もさやうなる返事を見てしがなと思ひて又ふみをやればすべもな
きまで返事せずまたせつとにかくに人をなやますなり

わづかなる聲きくばかりいひよれど「釋」わづかなるこゝは小さき聲なりそれをきくほどにいひよるとはいひよりてつひに物こしなどにて逢
たるさま也息の下にひきいれとは息よりも細きやうなる聲することにてひきいれ聲などもいへり言づくは物いふ事のすくなき也

いとよくもてかくすなりけり「玉」文をわけども云々わづかなる云々の二つを合せていふ也さやうの女は身のおくれてたらはぬ所をよくかくし
て男に見あらはされぬ也俗言にしがを見せぬといふ意也云々さてなりけりといへる意はすべて世中の女はおくれてたらはぬ難あるが多かる
物なるを右のごとくなるがそれをよくもてかくすことぞやといふ意なり

なまびかに女しと見れば云々とりなせばあだめく「玉」あだめくとはあだなるさまに見ゆるをいひてたゞにあだ也といふとは異なりさて物や
はらかに女らしき女ぞと見ればさやうの女は必心よわくしてあまりなまびかに引こめらるゝ物なる故におのづからとりなす時はあだなるにと
りなざるゝさまなる物ぞといふなり

これをはじめのなんとすべし「玉」右のなんは殊に世に多くある物なる故に女はまづこれをつゝしむべきことぞといふ意にていへる也第一の
難といふごとく聞ゆるれどもさにはあらじ云々「新」此女より上にはまだ入たて見たる女をこまかにいはずこゝに至て女の難をいへば是
を最初の難に擧たり「釋」最初の難とあるよろし多かる中の最初の難也

ことが中になのめなるまじき「釋」ことが中にとは多くある事どもの中といふ意也諸注わるしなめなるまじきはゆがみなりにすておきか
たき意なり「玉」此所むかしより讀誤れるから意もたがへりこれはなめなるまじきと讀て人のうしろみのとつゞけてよむべし人のうしろ
みとは夫のうしろみするをいふ夫をうしろみする方の事は女のよろづの事の中に殊になのめにてはえあるまじき第一のわざなるをいへり注
ども意にしては事が中といふ詞聞えずよく味ふべし

物のあはれしりすくし云々「釋」物のあはれを知るはいとよき事なれどもあまりに知過したるは又あたるかたにもちかきもの也すくしとい
はき木

はき木

はき木

はき木

はき木

はき木

はき木

はき木

はき木

はき木

はき木

はき木

はき木

はき木

はき木

ふに心をつくべしはかなきついでなきけとは湖月に花紅葉月雪などのをりふしに歌とみなどする心也といへるがごとしありの下にてもじ

なそへて次の詞へかけて心得べし
をかしきにすいめるかた (玉) 風流のかたは夫のうしろみの方にはなくともよかるべきが如くなれどもと也物のあはれしりすぐしとは物のあ

はれしれるよしのふるまひするをいふ (釋) すいめるといふ詞心をつくべし
またまめくしきすぢをたて (玉) 又といふ詞下にいかはくちをしからざらんといへるへかけて見べし風流なる方はなくともよかるべし

と見えたれども又さやうにあらざる意にてそのよしをいひつゝくる也 (釋) まめくしきすぢとは夫の後見してよろづ夫のためにまめやかにいとなむすぢの事也たてといへる心をつくべし

みはさみぢに (玉) 古の女はみな髪をたれたるに額髪とて左右に耳より前へもたるることなるをたつくるはぬ女は耳より前へたりたる髪をうるさくむつかしく思ひて耳のうしろへかいてはさむを云

びさうなきいへとうじ (拾) 無美相主人母 (釋) うつくしき相なき家刀自のたゞ一偏に心うちとけたる後見ばかりをしてと也このしてといふ詞はるかに下なる何事ぞなど云々といふ所へかけてきくべしさらではこゝる實きがたし後見ばかりをして云々の事にも何事ぞなどあわ

つかに云々といふ意也打とけたるとは食物衣物につきたる心やすだての後見といふ事也家刀自は家内の事とる女あるじないふなり
朝夕の出入につけても云々 (釋) 夫朝夕わが家を出入するにつけても公私の人のありさまのよきあしき事などをうとき他人にわざとかたらは

るべしや近く見ん我妻などに談合もすべく思ひてふまれもなかれもする事どもあらんにもきもわかず思ひも知ぬものと思へばその妻の

かたもおのづから打背向れて人しれずわらひも歎きもせらるゝを聞て妻の何事ぞなどあわつかに仰さぬたらんはくちをいへるなり
きゝわき思ひしるべからんに (玉) むつましくかたらふ妻の物のあはれをしりてかやうの事の心をも聞わけて分別あらんに語らまほしと也

うちもみまれ涙もさしぐみ (釋) 目にも耳にもとまるよきあしき事につけても打も笑れ涙もさしぐむ也小櫛にかりてかひなき妻のこちなき

を思ひてひとりわらひもせられ又いふかひなき事を思ひて涙もさしぐむ也といはれたるはいたくたがへりそは此次に人しれぬ思ひ出わらひ

もせられあはれとも打ひとりこたるとあるがその事なりしかるを却てその注には思ひあまる事どもの中に歎息すべき事を思ひては歎息する也といはれたるは筋脈いたくたがへり筋脈にも云べしさしぐみは涙の出くるさま也

おほやけられたしく (玉) おのが身にはあづからぬ人のうへの事をかたはらより見聞てはたたく思ふこと也此おほやけは俗のいやしき

言に身にあづからぬ人のうへの事に師するを法界りんきといふ法界の意にあたり
心ひとつに思ひあまる事など (釋) わが心一つにては決めたたく思ひあまる也これも公私のよしあしにつけての事也 (玉) これはおほやけは

らたたくとは別事也つゝけて心得べからずさて何にかは云々は二つを合せていふなり

なにかはきかせんと思へば (釋) 此女は物の心しらればきかせてもかひなければなり打をむかればは其女の方へ向ふも物うけて背向る也

人しれぬ思ひ出わらひ (釋) 其女のいふかひなきを人しれず思ひつゝけてたゞひとり笑ひも歎きもせらるゝ也あはれは歎息の聲なり

なに事ぞなどあわつかに (玉) 夫のそのさまを妻の見てそれは何事ぞなどいひて也 (釋) あわつかにには騒がしく静ならぬ意也あわはあわつゝわたいしなどのあわと同じ聲

既はひがこと也假字もわとつくべし
さしあふぎぬたらんは (玉) うち仰のき居るにてあわつかなるさまを云なり (釋) その事と心もつゝかして空を仰きてうかとしたる體也

いっかへはくちをかしからぬ (玉) うちをかしをかしからぬ

もてかくすなりけり。なよびかに女しとみれば。あまりなさに引こめられ
て。とりなせばあだめく。これをはじめのなんとすべし。ことが中になのめ
なるまじき。人のうしろみのかたは。物のあはれしりすぐし。はかなきついで
のなさけあり。をかしきにすゝめるかた。なくともよかるべし。とみえた
るに。また。まめくしきすぢをたて。みはさみぢに。びさうなき
いへとうじの。ひとへにうちとけたるうしろみばかりをして。あさゆふの
出入につけても。おほやけわたくしの人のたゞすまひ。よきあしきことの。
めにもみ。にもとまる有さまを。うとき人にわざとうちまねばんやは。ちか
くて見ん人の。さゝわき思ひしるべからんに。かたりもあはせばや。とうち
もまされ。なみだもさしぐみ。もしはあやなきおほやけはらだしく。心ひ
とつに思ひあまる事などおほかるを。なに。かはきかせん。と思へば。うち
そむかれて。人しれぬ思ひいでわらひもせられ。あはれともうちひとりぞた

る詞なりこが中に云々といふよりこれまで一つきなり
 (評)かくのごとき女世にいと多きものなり俗言にはたらきてなどいふさまの女なりさてこの女のさまをわかれたるはさもあるべき事なるをそれにそひたらん男の心をわかれたる筆つき心の中に入て見たらんがごとくにいていとも委しくあやしきまでにめてなし
 たひたふるにこめきて
 (釋)こより大やうに物やはらかなる女の事を論ずるなり
 ひきつくるひては「玉」ならはぬ事をば男のたすけてとりつくるふなり云々
 なほし所あるこちすべし
 (釋)心の柔らかなる人はいふがままに従ふべければおぼつかなきながらにも直しがひのあるこちすべしと也
 けにさしむかひて「玉」此げにといふ言のつかひさまいさゝむつかしまづしばらく語なひたるところ

るに。なに事ぞなど。あわつかにさしあふきわたらんは。いかゞはくちをしからぬ。たいひたふるにこめきて。やはらかならん人を。とかくひきつくるひてはなにか見ざらん。心もとなくとも。なほし所あるこちすべし。げにさしむかひてみむほどは。さてもらうたきかたに。つみゆるし見るべきを。たちはなれては。さるべき事をもいひやり。をりふしにいでんわざの。あだことにも。まめことにも。わが心と思ひうる事なく。ふかきいたりならんは。いとくちをし。たのもしげなきとがや。なほくるしからむ。つねはすこしそはしく心づきなき人の。をりふしにつけて。いでばえするやうもありかしなど。くまなきものいひもさだめかねて。いたくうちなげく。いまはたいしなにもよらじ。かたちをばさらにもいはじ。いとくちをし。ねぢけがましきおぼえだになくば。たいひとへにものまめやかに。しづかなる心のおもふきならんよるべをぞ。つひのたのみ所には。思ひおくべかりけ

につきていへるなり (釋)げには見んほどは下へおろして心得べしげにさても云々といふ意にてなほし所ある心ちすべしとあるを語なひたる也さてはつみゆるしの次なる見るべきへいなる意にてさても見るべきなと云也
 たちはなれては「玉」別所に離れて居るほど也 (釋)さるべき事はさしあたる用の事どもなり
 なりふしにいでんわざの云々 (釋)なりふしにつけて何事にまれ爲出んわざのあだなるにもまめなるにも其女の心として思ひわかつ事なくして功者ならぬは何の頼みにもなりがたきとなり
 たのもしげなきとがや「玉」立はなれぬる時わが心と物を心得ることあたはざる女は頼みにしがたき也とがは皆にて難といふこと也○なほといへるはこめきやはらかなるはよけれどそれもなほにてやはりまだの意也
 そはしく心づきなき人の

る。あまりのゆゑよし心ばせ。うちそへたらんをば。よろこびに思ひ。すこしおくれたるかたあらんをも。あながちにもとめくはへじ。うしろやすくのどけき所だにつよくば。うはべのなさは。おのづからもてつけつべきわざをや。えんにものはずして。うらみいふべき事をも。見しらぬさまにしのびて。うへはつれなくみさをつくり。心ひとつに思ひあはる時は。いはんかたなくすごきことの核。あはれる歌をよみおき。しのばるべきかたみをとめて。ふかき山ざと。よばなれたる海づらなどに。はひかくれぬかし。わらはに侍しとき。女房などの物がたりよみしをきつて。いとあはれにかなしく。心ふかき事かな。と涙をさへなんおとし侍し。今おもふには。いとかるくしくことさらびたることなり。心ざしふからんをとこをおきて。みるめのまへに。つらきことありとも。人の心を見しらぬやうに。にげかくれて人をまどはし。心をもみんとするほどに。ながき世の物思ひになる。い

〔玉〕そぼくしくはたみ調によそしくしたしからぬ也といへるよろし云々さてこは男の心にそぼくしく心づきなく思ふにて女の方よりそぼくしきにはあらざ

いざばえ〔玉〕事にふれてはえとくしきしわざのあるなり
くまなき物いひも〔玉〕世中の女のさまのやうなをのころ所なくよく知ていふ馬頭なれども也さだめかれては上件にいへるさまの女をすべていづれをよしも定めかぬる也

いたくうちなげく〔釋〕とにかくにたひたる女の有がたきを歎息したる也
今はたゞ品にもよらじ云々〔新〕かくあふさざるなるのみなれば今は品高きにも形よきにもよりがたしとさとり得たる世と一部の大意なるべし〔釋〕此説のごとく此段品定のむれとある所にてつひに物靜にまめやかなる人をたのみ所にせんより外にすべなきしをいへり心をつくべし

よるべ〔玉〕通ひすむ女を云注に本妻なりといへるはたがへり次につひのたのみ所といへるそ本妻なる
あまりのゆゑよし〔釋〕あまりは體言なりゆゑよしは小櫛に何わざにもあれひと才とるべきふしあるをゆゑよし有ともいふ世とあるがごとし

よるこびに思ひ〔拾〕俗にいふひろひものい心なり
おくれたるかたあらんをも云々〔釋〕おくれたるはたはぬ也しかたはぬ方ありとしひて求め加へじと也

うしろやすくのどけき所〔玉〕これ即上の物まめやかにしづかなる心のおもむきといへるもの也〔釋〕つよくはとはたしかにてたちるかぬ也
うはへのなさはは〔釋〕うはへは表方の意也なさはは風流才藝の類をいふなるべし上向の風流などは次々に見きならひて自然ともてつくるやうになるべきわざ也といふ意也〔評〕この段新釋にいはれたるがごとく品定の初に女のこれはしと雖つくまじきはかたくも有かなといひ出たるを結びたるにて世にあらゆる女の難を論じてつひに此まめやかにうしろやすきにとめたるいとめでたし人のおもふきは昔今たがふことなくあながちにたがき感しきにも拘らず女を擧ぶにはかくのごとくならんより外にせんかたなき事をよく思ひ辨へて作者の筆のいみじきを味ふべしさて次の段には名聞がましくしふれき女の心がるきを一種擧てれちげがましきをいましめられたりなほ下にいふべし
うへはつれなくみさをづくり云々〔釋〕つれなくは何げなくもてなす也〔玉〕みさをにもてつけてともいへりくづれぬやうに心をつけてもてつくるなり

すこきことのは〔釋〕執念の物すこきまでに聞ゆることのは也ことのはといへるも歌なるべし
物語よみしなききて〔釋〕むかし物語のふみにかゝる女のことを記したるを女房のよみしを馬頭のききて也

とあぢきなき事なり。心ふかしやなどほめたてられて。あはれすゝみぬれば。
やがてあまになりぬかし。おもひたつほどは。いと心すめるやうにて。よに
かへりみすべくも思へらず。いであなかなし。かくはたおほしなりにけるよ。
などやうに。あひしれる人きとふらひ、ひたすらにうしとも思ひはなれぬを
とこ聞つけて。涙おとせば。つかふ人。ふるごだちなど。君の御心はあはれ
なりける物を。あたらし御身を。などいふに。みづからひたひがみをかきさぐ
りて。あへなく心ほそければ。うちひそみぬかし。しのぶれど涙こぼれぬれ
ば。をりごとくにえねんじえず。くやしきこともおほかめるに。ほとけも
なかくこころぎたなし。と見給ひつべし。にぞりにしめるほどよりも。
なまうかびにては。かへりてあしきみちにもたよひぬべくぞおぼゆる。た
えぬすぐせあざからで。あまにもななで。たづねとりたらんも。やがてその
おもひ出。うらめしきふしわらざらんや。あしくもよくもあひそひて。とあ

心さしふかしらん男をおきて云々
〔玉〕男のつれづれの深き心さした
ばしらぬものやうにさしあたり
て富座に少々つらき事有とも也
こゝろをもみんとするほどに
〔釋〕いかにするにがと男の心を見
んとするほどに也
ながきよの物思ひになる〔玉〕さや
うの事によりてつひに離別するこ
とあるをいへり

心ふかしやなど〔新〕愛着を離れて
苦惱心に懸き給ふべき也などほむ
るにつけて情のすゝみて尼になり
ぬべしとなり〔玉〕はじめ心ひと
つに思ひあまれるすぢのいよゝゝ
すいむ也

ひたすらにうしとも云々
〔玉〕上に心をも見んとするほどに
と希しごとくに此女ひたすらに
男をうしと思ひはなれたるにはあ
らざる也

ふるごだち〔拾〕御等といふ意なる
べし云々〔玉〕古き女房ども也云

とあぢきなき事なり。心ふかしやなどほめたてられて。あはれすゝみぬれば。
やがてあまになりぬかし。おもひたつほどは。いと心すめるやうにて。よに
かへりみすべくも思へらず。いであなかなし。かくはたおほしなりにけるよ。
などやうに。あひしれる人きとふらひ、ひたすらにうしとも思ひはなれぬを
とこ聞つけて。涙おとせば。つかふ人。ふるごだちなど。君の御心はあはれ
なりける物を。あたらし御身を。などいふに。みづからひたひがみをかきさぐ
りて。あへなく心ほそければ。うちひそみぬかし。しのぶれど涙こぼれぬれ
ば。をりごとくにえねんじえず。くやしきこともおほかめるに。ほとけも
なかくこころぎたなし。と見給ひつべし。にぞりにしめるほどよりも。
なまうかびにては。かへりてあしきみちにもたよひぬべくぞおぼゆる。た
えぬすぐせあざからで。あまにもななで。たづねとりたらんも。やがてその
おもひ出。うらめしきふしわらざらんや。あしくもよくもあひそひて。とあ

ひたひがみをかきさぐりて
 「玉」あたら髪をそぎすてたる事よ
 と後悔するさま也
 うちひそみぬかし（新）是は泣と
 の口つきをいふ云々（釋）むかし
 より嘯字をよめる意にて俗にびり
 口するといふにあたり
（評）人きりにかゝづらひてあはれ
 しりがほする女の心がるさの後悔
 のさま見るがごとし此類今世にも
 をりあり
 にこりにしめるほどよりも云々
（補）俗にて過世にありし時より
 く出家のいち心のなまうかびなる
 はかへりて悪道にまよふべき事と
 也（釋）うかばんとて尼になりた
 るもの、悔しき心ありてなま／＼
 なる故になまうかびといへる也あ
 しき道はいはゆる悪趣の事也
 たえぬすぐせあさからて云々
（釋）すぐせは例の宿因縁也絶まじ
 き宿因ありて尼にならぬうちにた
 づね出してとりかへしたらんにも
 也

らんをりも。かゝらんきさみをも。見すぐしたらん中こそ。ちぎりふかくあ
 はれならぬ。われも人もうしろめたく心おかれじやは。又なのめにうつろふ
 なたあらん人をうらみて。けしきばみそむかんはた。をこがましかりなん。
 心はうつろふかたありとも。みそめしこゝろさしいとほしくおもはひ。さる
 かたのよすがに思ひてもありぬべきに。さやうならんたぢろきに。たえぬべ
 きわざなり。すべてよろづの事なだらかに。ゑんずべき事をば。みしれるさ
 まにほのめかし。うらむべからんふしをも。にくからずかすめなさは。それ
 につけて。あはれもまさりぬべし。おほくはわが必も。見る人からをさまり
 もすべし。あまひむげにうちゆるべ見はなちたるも。心やすくらうたきや
 うなれど。おのづからかるきかたにぞおほえ侍るかし。つながぬ舟のうき
 たるためしも。げにあやなし。さは侍らぬか。といへば中將うなづく。さし
 あたりて。をかしてもあはれとも。心にいらむ人の。女のもしげなきうたが

やがてその思ひ出云々（釋）やがてはうらめしきへかゝる意也その思ひ出は小橋にさきにそむきて家を出し事を思ひ出るをいふ也とあるがこ
 とし尼になさでたづね取たりとも一たび家を出し事を思ひ出てやがてうらめしきふしあるべしと也

われも人も云々（新）其男も女も也（祇注）さきのことくあひそひてありともさやうならん女はうしろめたくて心おかれぬ事はあるまじの心
 也（釋）我も人もは新釋のごとし祇注に女とのみいへるはたがへれど其外はよろしさてこの一句語の脈はなれて聞ゆるは脱文など有なるへ
 し猶考ふべし

又なのめにうつろふかたあらん人（玉）このなめはたしかにうつろふにはあらでたゞいさゝかうつろふ也
 いとほしく思は（玉）たみ詞に女の男をいとほしく思はゞの意にいへるはたがへり男の心に女をいとほしく思はゞ也
 さるかたのよすが（玉）見そめし心ざしをいとほしく思ふかたのよすがなりすがとは通ひすむ所をいふすべてよるべ又よすがなど有本妻
 と心得たるはたがへり必しも本妻にはかきらす

ふんずべき事をば云々うらむべからんふしなも云々（玉）こは同じ事の二つ重なりて聞ゆるにつきてつら／＼思ふにふんずるは心にうらめし
 く思ふことうらむべからんふしは恨みないふべきふしにして心に思ふ方と言にいふ方とを二つに分ていへる也云々（釋）ほのめかしはほ
 かにいひかすむることかすめなすはかすかにほのめかす事也
 それにつけてあはれもまさりぬべし（釋）ほのめかしがすむるいひさまにつけて初よりあはれまさるべしとなりまるといふに心をつくべ
 し

みる人からをさまりもすべし（玉）そへる女のあへしらひがらによりてなりをさまるは他へうつろふこゝろのやむないふ
 むげに打ゆるべ見はなちたるも（拾遺）拾遺第五に「うらみぬもうたがはしくぞおもほゆるたのむ心のなきかと思へばこの歌のこゝろ見えねど
 下の心はかよふべし

つながぬ舟の（河）文選鶴鳥賦云泛乎若不繫之舟「玉」河海に文選を引れたるは本也然れどもこゝは白氏文集の偶吟詩に無情亦任二方面
器不繫舟隨二去住風一といへるをとりて書るなりさてげにあやなしは此本文にかゝりていへり
 さは侍らぬかといへば中將うなづく（評）富夜ツヨのさまをあらはしたる第四の段なりさてすべてよろづの事といふよりこゝまでは女の男に相そ
 ふ心おきてないへり上にいとくちをしくれちけがましきおほえだになくば云々といへるは男の用意なるに對へてよく／＼味ふべし先男のよ
 ろづ見過すべきよしをいひて次に女のあへしらひさまをいへり文の法ついで亂れずしていひしらずめでたし次は中將のあへしらひの語とし
 てたのもしげなき女をいましむるなり
 ありあたりて云々（釋）時にあたりて我心にかかしてもあはれともおほはん人のあたぬ心あらんは大事なるべしと也たのもしげなきうたが

ひとは小節に女のあだにして外へ
心分るやうのうたがはしき事あ
るないふといはれたるがごとし大
事は俗にいふに同じく大せつなる
こゝろなり

わが心あやまちなくて

〔湖〕男のわきにうつろふ心なくば
との心なり (釋) この説よろし
れを女の心と見たる注はわるし
のもしげなきうたがひあらん女を
も男の心あやまちなくて見しのび
つゝ過ぎばさるあだなる心をもお
のづからにさし直してもなぞか見
ざらんとおぼえたれどきはあらじ
といふ意也心あやまちとつゞけて
よむべし體言なり男の心に女に對
してあやまちしたりと思ふやうな
る事をいへる也さしなほしてとは
女の男の心にはぢておのづからあ
だなるふるまひを直すをいふ此段
を新釋に頭中將の夕靨の事をした
に思ひていはれたるさまたとわれ
たるはいかゝあらん猶考ふべし
それさしもあらじ (釋) それとは上

ひあらんこそ。大事なるべけれ。我こゝろあやまちなくて見すべし。さし
なほしてもなどか見ざらん。とおぼえたれど。それさしもあらじ。ともかく
もたがふべきふしあらんを。のどやかにみしのばんよりほかに。ます事ある
まじかりけり。といひて。わがいもうとの姫君は。このさだめにかなひ給へ
りとおもへば。君のうちねふりてことばませ給はぬぞ。さうしく心やま
しと思ふ。馬のかみものさだめのはかせになりて。ひらぎるたり。中將は
このことわり聞はてん。と心にいれてあへしらひぬ給へり。よろづのことに
よそへておぼせ。木のみちのたくみの。よろづの物を心にまかせてつくりい
だすも。りんじのもてあそびもの。その物とあともさだまらぬは。そば
つきざればみたるも。げにかうもしつべかりけり。と時につけつゝ、さまをか
へて。今めかしきにゆうつりて。をかしきもあり。大事として。まことに
うるはしき人の。でうどのかざりとする。さだまれるやうある物を。なんな

のわが心あやまちなくて云々をさ
していへる也さしもあらじは然も
あらじにてしは助辭也

ともかくもたがふべきふしあらんを
〔弄〕畢竟の理なりともかくもとい
へるより惣じての批判と見るべき
也〔孟〕ともかくも女の男のたが
ひたる事あるを腹たぢ怨ぜずして
見忍ぶないふなり葵上の心むけこ
れにかなひ侍り〔湖〕前のとあら
んをりもかいらんきさみをも見す
ぐしたらん中こそといひすべてよ
るづの事ならかになどいひし
詞に答へたる詞と見るべし
わがいもうとのひめ君は云々 (釋)
このさだめとはともかくも云々よ
り下の事をさしていへるなるべし
君の打れふりて云々 (釋) このさだ
め葵上のさまにかなへれば源氏君
しきやせ奉らんと思ふに打れふり
て語を交給はぬ中將のさうしく
しく心やましく思ひ給ふよし也さ
うしくくはものさびしき意心や
ましくに起て聞給へかしとやうに

くしいづることなん。なほまことのもの、上手は。さまことに見えわかれ
侍る。又系どころに上ずおほかれど。すみがきにえらばれて。つきくくに。
さらにおとりまざるけぢめ。ふとしも見えわかれず。か、れど。人の見およ
ばぬはうらいの山。あら海のいかれるいをのすがた。から國のはげしきけだ
もの、かたち。めに見えぬおにのかほなどの。おどろしくつくりたるも
のは。心にまかせて。ひときは人のめをおどろかして。とちにはにざらめど。
さてありぬべし。よのつねの山のたゞずまひ。水のながれ。めにちかき。人
のいへるありさま。げにと見え。なつかしくやはらびたるかたなどを。しづか
にかきませて。すくよかならぬ山のけしき。こぶかくよばなれてたゞみなし。
けぢかきまがきのうちをば。そのこゝろしらひおきてなどをなん。上ずはい
といきはひことに。わるものはおよばぬところおほかめる。てをかきたる
にも。ふかき事はなくて。こゝかしこのてんがにはしりかき。そこはかと

心のいらる、意也このとる又當夜のごまをあらはしたる第五段なり
ものさだめのはかせになりて「新」はかせは博士にて博達の學士なり何の道々にも師匠なるないへどこは學問の博士が學生の論を判り定む
るがごとく馬頭が定むるをかくし書て與とするなり

ひらきぬたり「玉」俗言に口をたきぬたりといふこと也紫式部日記によろづつれなる人のまざる、事なきまゝにふるき反古ひきさが
しおこなひがちにくちひらかしずいの音たかきなどいといろづきなく見ゆるわざなりとあるも口ひらかしは經よみ念佛などくちやめ
ずいひつくるをいへり云々

このことわり聞はてんと云々「釋」このことわりとは上にしなくあげつらへる女のしなの理をいふあへしらはは孟津に會釋也と注せられた
るがごとし

よろづのことによそへておぼせ「評」こゝよりあだなる女と實なる女とのけちめな物によそへて説出せりさてそれはたゞ一事にてもあるべき
を同じたとへを三つまで舉てつひにならざるかたの一すちにむすびせられたる筆づかひ例のいといふじといふべしさるはこの實なるこ
との一事なん品定のむれとあることなればなりける

そのものとあともさだまらぬは「釋」たしかにいかに様と其形の定まりなき器物はなり
そはつきざれば「玉」そはつきは傍の形なりつきは顔つき手つきなどのつき也されば俗にしやれたるといふこと也云々これはうはへの
風流めきなさげだちて實なき女のとへなり

げにかうもしつべかりけり「釋」そはつきざればみたる物は打見るに與ありていかにかくすべき事なりとやうに一たびは感ぜらるゝ也げ
には見る人の感じうべなる語なり時につけつゝさまをかへては其時々流行にしたがひていかやうにも作りかふるをいふ

大事として「湖」是より定りたる格式ある道具のうへをいふなり
うるはしき人のでうどの「玉」うるはしきはでうどへかりて人へはかりず人のうるはしきでうどいふ事也たみ詞にうるはしき人と見て

善人也といへるはたがへり云々たこれは實なる女のとへなるをや「釋」案に小櫛の説一わたりはれたる事ながらなほこれはうるはし
き人にて貴人をさしたるにやあらんさだまれるやうある物といへるはむかしより定まりたる故實のやうある物といふ意と聞ゆればたゞに人
のとのみひてはいさゝかたはぬこゝちす

さまことに見えわかれ侍る「祇」うるはしき人のでうどのかざりをば人の家あるじといはるべき女のかたにたとへいふなり「釋」此段のすべ
ての意は臨時の既物などはさればみたるもいまめかしくてをかきしもありされど大事として故實ある貴人の調度のかざりとする物などを難
なく作り出ることとはまことの上手ならでは其さま殊にきはやかに見え分るまじといふ意を女のつへにたとへてなり／＼かよふ女などはさ

ればみあだめきたるもさるかたにをかしかるべけれどたのみとしてうしろの事とらせん人は實ならではかなふまじきよしをいへる也
ふどころ「河」西宮抄云書所在式乾門内東殿御書所南有別當五位藏人預云々

すみがきにえらばれて「玉」彩色をする事に對してたゞ繪をかくことはいへる名目也古は繪をかきて彩色なばべちに他人にせさする事ありし
故に二つに分て墨がきつくり繪といへりつくりみとは彩色するをいふ也墨繪彩色繪といふことにはあらす云々「釋」えらばれての下に

かくにといふことをくはへて心得べし小櫛にはつき／＼の下にいて心得べきよしはれたれどつき／＼にはまさりおとる次第をさして
いへる語なれば意いさゝかたがふべし

ほららの山「餘」列子湯問篇曰渤海之東不知幾億萬里有大壑焉云々其中有五山焉一曰岱輿二曰員嶠三曰方壺四曰瀛州五曰蓬萊其山
高下周旋三萬里其頂平處九千里山之中間相去七萬里以爲隣居云々下略

あらうみのいられる云々「餘」源經傳などいへるなるべしはげしきげだものは猛獸にて虎豹獅子の類をいへるなるべし
おにのかは「細」後漢書張衡傳云畫工畫圖大馬而好作鬼魅誠以實事難形而虛傳不窮也「新」餘「餘」韓子云客有爲齊王畫者齊王問

曰畫孰難者曰犬馬難孰易者曰鬼魅最易夫犬馬人所知也且難畫於前不可類之故難鬼魅無形者不難於前故易之也
すくよかならぬ山のけしき「玉」すくよかならぬは嶮岨ならぬ也といへる注よるし云々

よばなれてたみみなし「湖」世をはなれたる心なり「釋」山は幾重にも疊むがごとくかく物なる故に疊みなしといへる也
けちかきまがきのうち「湖」氣近き也「細」前綫をいふ也

こゝろしらひ「拾」有意日本紀第廿八天武紀上「釋」しらひはあへしらひなどのしらひと同じ辭也俗に心もちといふ意也體言なりおきても
體言なり

わか物はおよぼ所おほめる「釋」このくだりも又人の目を驚かす方をあだなる女にたとへよのつれの山の云々けちかきまがきの内などを
實なる女にたとへていへるなり

てをかきたるにも云々「釋」こゝより又書の事によそへていふ也字かくことを手といふは今もしかりふき事なきは深く違らぬをいふ
こゝかしこのてんながら「釋」こゝかしこ點を長くなどしてこぼへまぎらはずないふはしりがきのすむべし

まことのすちをこまやかに「細」唐穆宗問筆法柳公權曰心正則筆正筆正乃可法矣といへり「釋」まことのすちとは筆法の事也
うはへの筆きえてみゆれど「釋」うはへの筆とは筆勢のことなるべし法のごとくこまやかに書たるは筆勢なきやうなるを消てといへる也

今一たびとりならべて「釋」今一度とは立かへりて今一度よく見る也とりならべてはけしきばめるとまことのすちなるくらべて也
繪じちになんよりける「玉」これは上件の三つのとへをすべていふ也三のとへ皆同じ意にて女のけしきばめるとはへなきけと實なると

のたとへ也云々 (評)此語上件三つの事をつらめたる眼目の詞なるはいふもさちにてすべては品定の眼目の詞なることをよく心得てよむべし

はかなき事だにかくこそ侍れ云々 (釋)はかなき事は上件三つの事を云々に至りてつひに實によるべきよしなことをわりあかしたる也そのはじめの事 (釋)馬頭がそのはじめ有し事也

君もめさまし給ふ (湖)前に君の打服りてとありし首尾也 (釋)此所當夜の人々のさまをあらはしたる第六の段なり源氏君のれふりてさめ給ひ中將のしんじてあへしらひ給ふさまなど其人のすがたをまさしく見るがごとくにいていとくめでたし

中將いみじくしんじて (釋)つら杖をつきたるは感じたるさま也法の師の云々といふに對へて信じてとかけるとをかし (河)白氏文集吟苦支願

なくけしきばめるは。うち見るにかどくしくけしきだちたれど。なほまこと

のすぢを。こまやかにかきえたるは。うはべの筆きえてみゆれど。今ひと

たびとりならべて見れば。猶じちになんよりける。◎はかなき事だにかくこそ

侍れ。まして人の心の。ときにあたりてけしきばめらむ。みるめのなさを

ば。えたのむまじく思ひ給へ侍り。◎そのはじめの事。すきくしくともまら

し侍らん。とてちかくるよれば。君もめさまし給ふ。中將いみじくしんじて。

つらづえをつきてむかひる給へり。のりの師の。世のことわりとさきかせん

所のこちするも。かつはをかしけれど。かゝるついで。おのくひつを

とも。え忍びとめずなんありける。◎はやうまだいと下らうに侍しとき。あ

はれと思ふ人侍りき。聞えさせつるやうに。かたちなどいとまほにも侍らざ

りしかば。わかきほどのすき心には。この人をとまりにも思ひとめ侍

らず。よるべとは思ひながら。さうくしくて。とかくまされありき侍りし

曉燭前

のりのしの云々 (釋)法師の世間の道理を説く所の心ちするもをかしけれど、戯れたる也むつことは舊注にいもせの中の私語とあるがごとし

はやうまだいと下らうに侍し時

(湖)左馬頭官位淺かりし時也

(評)こゝよりはおのくひのうへにありし事をかたる也初はたゞしなと心ばせとを論じ其後物によまへて論じつひに我身にありし事なして論じをばるなり文のうつろひに心とめて見るべし

聞えさせつるやうに (湖)前にびさうなき家とうじといひし事也

まほにも (拾)まほは片帆にむかひたる詞なり云々 (釋)帆の事よりいでいたゞますぐなるといふ意につかひたりかたはその反にてゆがみたる事也

とまり (釋)つひのよるべとして其人に思ひとめる意がよるべとは思ひながら云々 (釋)此

を。物ゑんじをなんいたくし侍りしかば。心づきなく。いとかゝらでおいちか

ならましかばと思ひつ。あまりいとゆるしなくうたがひ侍るしもうるさく

て。かく數ならぬ身を見もはなたで。などかくしもおもふらん。と心づるし

きをりくも侍りて。じねんに心をさめらるゝやうになん侍りし。この女の

あるやう。もとより思ひいたらざりける事にも。いかでこの人のために

は。となきてをいだし。おくれたるすぢの心をも。なほくちをしくは見えじ。

と思ひはげみつ。とにかくにつけて。物まめやかにうしろみ。つゆにても

心にたがふことはなくもがな。とおもへりしほどに。すゝめるかたと思ひし

かど。とかくになびきつてなよびゆき。見にくきかたちをも。この人に見や

うとまれん。とわりなく思ひつくるひ。うとき人にみえば。おもてぶせにや

おもはん。とはいかりはせて。みさをにもてつけて。見なるまゝに。心も

けしうはあらず侍りしかど。たゞこのにくきかたひとつなん。心をさめず侍

女をとまりにとは思はれど又より
所とは思ひし也されどさてのみは
さうくしくてとくまきれあり
きしと也まるべは憑方の意にて憑
み寄る方といふ意なり
うるさくて「釋」此でもじは句をへ
だて、じねんに云々へつゝく意と
見るべしさらではこの所聞えがた
しうたがふもうるさくておのづか
ら心のなままるやうなる中に數な
らぬ身をかくまでも思ふらんと心
ぐるしき心もありてかつたん、心を
さめらるゝやうなりしなり玉小櫛
補遺に侍しはうるさけれどなどあ
るべしといへれどかくてもきこひ
るなり
數ならぬ身を「細」いまだ宜も淺く
て年もわかき我身をば何とて是ほ
どまでは頼みてゆるしなくはする
ぞとなり
思ひいたらざりける事にも
「湖」わが心のいたらの事にも也
なきてをいたし「玉」おのがえせぬ
及ばぬ事までをさ思はれじとし

りし。そのかみ思ひ侍りしやう。かうわながちに去たがひおちたる人なめり。
いかでこるばかりのわざして。おどして。このかたもすこしよろしくもなり。
さかなさもやめんと思ひて。まことにうしなども思ひて。たえぬべきけしき
ならば。かばかり我に去たがふ心ならば。思ひこりなんと思ひ給へて。こと
さらになさけなくつれなきさまを見せて。れいのはらだちゑんずるに。かく
おぞましくは。いみじき契ふかくとも。たえてまた見じ。かきりとおもはし。
かくわりなき物うたがひはせよ。ゆくさきながく見えんと思はし。つらき事
ありともねんじて。なのために思ひなりて。かゝる心だにうせなば。いとわは
れとなん思ふべき。人なみくにもなり。すこしおとなびんにそへて。また
ならぶ人なく(な)あるべきなど。かしこくをしへたつるかなと思ひ給へ
て。われだけくいひそし侍るに。すこし打わらひて。よろづにみだてなく。
ものけなきほどを見すぐして。人かざる世もやとまつかたは。のどかにお

ひてする意なり
すゝめるかたと「弄」さし過たる心也「釋」進める方にてすなはちなき手を出して思ひはげむを進めるといへるなりすゝめるとある本はわろ
し
とかくになびきしてなよびゆき「弄」此女の馬頭になびく也「釋」なびきは従ふ意なりなよびゆきはもの和らぐになりゆくをいふ
此人にみやうとまれんと「釋」此人は馬頭をいふ女の方を主としていふ所なる故に此人とはいへる也女の馬頭に見疎まれんかと思ひてかたち
をつゝるふよし也
うとき人に見えば云々「釋」うとき人は他人をいふわろきかたちを他人に見られれば馬頭がおもふせにやおもはんと女のはかりてかくれ
などする意也おもてぶせははぢたる貌にて面目なしといふ意なり「新」白氏文集に外人不見見、應笑
みさをにもつつけて「玉」俗言にたしなむといふ意にて容觀の事也「釋」この前後に脱文あるべくおぼゆるは女と馬頭とのわいためなし
はかりはぢてとあるは女のみなるまゝにといふは馬頭の女を見馴る也
心もけしうはあらず侍りしかど「釋」見なるまゝに心も異しうはあらざりしかどた、嫉妬じとつは心にかなはざりしと也にくきかたとは嫉
妬のことをさしてい入る也
心をさめず「湖」馬頭心おちつかざりし也「玉」補上のなをさめらるゝに應ず「新」にくしと思ふ心の治めがたき也「釋」案にこれはしくは
女の心にえなをさめざりし事にや馬頭の事としてはなをさめずといふ詞の白地たがへるやう也されど暫く諸注にしたがふ論考よべ、
このかたもすこしよろしくもなり「玉」此かたは嫉妬の事也よろしくなるはうすくなのめになる也さてなりの下へもじを加へて心得べし
さかなさもやめんと思ひて「玉」口がなきにて俗言に口やかましくといふこと也さて此かたもさかなさもといへるは二つの如く聞ゆれば
然らずさかなきは嫉妬してさかなきなれば一事也嫉妬もなめになりてさかなさのやむ也さてやむと思ひてはやむべくせん、思ひ
て也
まことにうしなども思ひて「玉」女をこらさんためにつくりてする事なるを真にうしと思ふことと見せてこの意なり
たえぬべきけしきならば「玉」こなたより絶ゆべきけしきに見せたらば也
かくおぞましくは「雅譯」女の心つよく手あらし意なり
いみじき契ふかくとも「新」いみじきといひふかくと有つら宿世の契ありともといふ意也只相契れるはいはふかき契は有ともなどいふべ
かきりと思はれ云々「釋」これを限に絶人とおもはすならなき嫉妬をもせよゆく末長く見えんと思はしつれなき事ありともたへ忍びてなめ

に思ひなして嫉妬をやめよさらば
あはれと思ふべき也

人なみにもなり (賦注)官位も
あがり人々しくもならばいよ

あひ思べきと女の心をとる儀也
(釋)おとなびんは官位すいみて
大人ぶるなにか

又ならぶ人なく (釋)外に又此女に
比すべきほどの寵愛の人はなかる
べしと也

かしこくなしへたつるかなと
(湖)我がしこく女を教へたつるか
なと思ひて也 (釋)たつるは仕立
るいじ立るなどのたつるに同じ

いひそし (河)言殺也いひそらす也
〔花〕殺の字詩にも懲殺備殺など作
れり (細)つよくいひすこす也

えぬまで好みそし給へる注にいひ
すこす心也とはさも有べし殺字は
あたらす

みだてなく (賦注)官位の賤き事也
人づなるよもつと (釋)官位進み
て人がましき時節もあらんかと待

つらき心をしのびて。思ひなほらんを
りを見つげんと。年月をかさねないだのみは。いとくるしくなんあるべ
ければ。かたみにそむきぬべきことさみになんある。とねたげにいふ時に。
はらだしくなりて。にくげなる事どもをいひはげまし侍るに。女もえをさ
めぬすぢにて。およびひとつをひきよせて。くひて侍りしを。おどろしく
かこちて。かゝるさすさへつさぬれば。いよくまじらひをすべきにもあら
ず。はづかしめ給ふめるつかさくらぬ。いとしく。なにをつけてかは人め
かん。世をそむきぬべき身なめり。などいひおどして。さらばけふこそはか
ざりなめれ。とこのおよびをかやめてまかでぬ。
手をとりてあひ見しことをかぞふればこれひとつやは君がうきふし。えら
らみじなどいひ侍れば。さすがにうちなきて。
うきふしを心ひとつにかぞへきてこや君がてをわかるべきぞり。などいひ

つらき心也

このかと思ひなされて (玉)其方の事にさのみ切にも思ひいれざるよし也
あいなだのみは (玉)すべて此詞はいかにあらんもしりかたき行末の事をそのわきまへもなく頼みに思ふこと也
はらだしくなりて (玉)二りなんといひて思ひしにたがへる故なり
えぬまで好みそし給へる注にいひすこす心也とはさも有べし殺字はあたらす

みだてなく (賦注)官位の賤き事也
人づなるよもつと (釋)官位進みて人がましき時節もあらんかと待

まじらひなく (湖)朝廷の交なり
はづかしめ給ふめるつかさくらぬ (玉)上に見だてなくものげなきほどを云々と女のいへるにあたりていふ也 (釋)この設けまじらひに聞にくし位の
下に字の賤たるにやいとしくは官位の賤きに近さへつげるといへる也人めかんは人がましくなるんの意なり
世をそむきぬべき身なめり (釋)過世すべき身といふ意也
このおよびをかやめて (釋)このは今かといふべき所也かくはれし指を痛き故に屈めて歸りしと被れていへるなり退出は源氏君頭中將に
對ひていへる歌の詞にてたが歸ること也

てをりて云々 (釋)湖月抄に五文字はおよびをいひてといへる詞書に於て見るべしといへるよろし手を折ては指を折てといふ事也さて
歌の意は指を折てあひ見し年月の間の事をかぞへて見るにたこの物れたみの一つや君がうきふしなるべきといひて其外の事はうしろみの
事も我に悲したる心も皆まめやわたりし物なとなくめたる意也やはの辭はふくめたる所にて結ぶ格にてうきふしの下にナルべきといふ辭な
いひさしたる其べきにて結ぶ意也此歌の解諸注がこと多し別に論ずべし

えららみじなど (釋)物れたみの外にはさしてうきふしもなかりしかば今別るとても其方をばえららみじと馬頭のいへる也さる故に女もさす
がにかなしくなりて打なきたる也この詞も諸注はいかや也別にいふべし

うきふしを云々 (釋)このうきふしは上の歌に君がうきふしといへるにつきて却て馬頭があだしくしきをうきふしといへるなりさてそのあだ
あだしきうきふしをなや我心ひとつにおしこめてたへしのびきてといへるにてかぞへといふは上の歌にかぞふればといふにあたりて一つ二
つとこらへ來りし事をいへる也下句はしこらへ來りたるにこの時にいたりてつひに君に別るべき時節到來したるならんと歎きたる也手を
別るといへるに今俗の言にも手ヲキキなどいふがごとくた別る事なるをの手を折てといふ句にあたりていへるなりこやのやはいひさ
してふくめたるナラシのむにて結びたる格なりこの歌も諸注はまきはし

いひしるひ (孟) ながひにいふ心なり (釋) しるひは辭にてひきしるひつきしるひなどのしるひと同じく互にする意也
 あくがれまかりありくに (玉) 万々の女のしとへむいひありく也あくがれとはかのよるべと思へる女にはなれたる故也
 りんじの祭のうがくに (花) 賀茂臨時祭調楽十一月午日於北陣 (傳) 有儀式有齋膳勸孟等 (紙注) りんじのまつりとは北祭の事也
 十一月酉なり調楽は午の日なり大内にてあるなり
 よふけていみじうみぞれふる夜 (評) 此二句身にしみてたし調楽のへりちふけてみぞれふるさま絶たる女を思ひいづといふべき心を
 越さんしたくみかへすいみじといふべし (釋) みぞれは雪まじりの雨也下には雪といへり
 これれまかりあがる所に (釋) まかりは禁中より出る也あがるは別れ散る事也伴ひて出たる人のわづる也
 なに家ちと思はんがたは (釋) 路はたかろくそへたるにて我家と思はん方は也
 またなかりけり (玉) かの女をおきて外に又なり
 うちわたりのたびねも (釋) うち禁中禁中あたりにひとりねせんも不用らしきとの意也旅歸はまるれするがつねなればいへるのみ也すと
 ましは物さびしく不用なる意也 (新) 家路といひ出せしより旅はといへり是文なり
 けしきばめるあたりは云々 (玉) こよひの寒きにけしきばみ風流ならんあたりは打とけがたくてそらほしく寒からんと也
 いかにおもへると云々 (玉) 寒き夜は心やすくうちとけてぬる所こそよけれと思ひてかの女の戀しく思はるゝからけしきも見がてらゆく也
 なま入わろくつめくはるれど (釋) さまわろく眠たる體也 (餘) うつば物語藏びらきの巻に講師はこゝろせよとのたまへばえよまでつめくひ
 もてさふらふ (釋) 睡たる體なり (玉) かのなまは俗言にどうやらといふこゝろばへ也
 さりとこよひ云々 (釋) さはありとも今夜あひつたらはここの日比の恨はとけなんと思ひし也
 かべにそむけ (釋) 臥々残灯背の壁影 白氏文集
 なえたるきぬどもあつこえたる (釋) なえたるは和らむなる也あつこえは筆注に結など入たるにやと有がことし
 大なるこに打かけて (新) 蕪の料ならば大なることいふべからず是はよるの物にあたれん料とみゆ
 びきあぐべき物のかたびら (河) 几帳の帷也 (新) これは几帳のみをいふならでかべしる具外なまかぬるならん
 さればよと (釋) さればこそ我を思ひはすてぬよと也 (釋) こゝろこりは心の中にて恨ずる意なり
 さうじみ (玉) 物語の側其本人といふ意に用る稱なり正身は古語にもなり見たり
 とまりて (釋) のこりとまりたる也
 けしきばめるせうこそせで (玉) 馬頭をうらみたるけしきを見せたるやのせうこそ也 (釋) これは上にはんかたなくさきことのはあ

はれなる歌をよみおき云々といへ
 るにあたりていへる也もの辭に心
 を付べし
 ひたやこもりに (玉) 河海に直障と
 ある字のごとく何のいへることも
 することもなくてその故といふこ
 ともしられずたひたすらにかく
 るいやうの意也やといふはこもり
 といふによれる言にて履の意より
 出たる言也
 我なうとみれ (玉) 我は馬頭が我
 なりうとみれと我を思へるにやと
 いふ意也我を女の見たるはひ
 がこと也さては我をといふ言いた
 づらなるなやこれはもし他に心を
 かはせる男のあるによりていつて
 うとめかしと我をば思ひしにやと
 いふ意にてこそ我をといへるな
 云々
 心とやめたる色あひしさいとあら
 まほしく (釋) 湖月本にいろあひ
 しさまとつげてよみたるはひが
 こと也色あひしとよみてさいと
 とよむべし心とやめてうつくしく

しるひ侍りしかど まことにはかはるべきこととも思ひ給へずながら。ひこ
 ろふるまでせうそこもつかはさず。あくがれまかりありくに。りんじのまつ
 りのうがくに。夜ふけていみじうみぞれふる夜。これかれまかりあがる
 所にて。思ひめぐらせば。なま家ちと思はんかたは。またなかりけり。内
 わたりのたびねもすさましかるべく。けしきばめるあたりはそらほさむく
 や。と思ひ給へられしかば。いかにおもへる。とけしきも見がてら。雪をう
 ちはらひつゝまかりて。なま入わろくつめくはるれど。さりとこよひ。日
 ころの恨はとけなん。と思ひ給へしに。火ほのかにかべにそむけ。なえたる
 きぬどもあつこえたる。おほいなるこに打かけて。ひきあぐべき物のか
 たびらなどうちあげて。こよひばかりや。とせらけるさまなり。さればよと
 心おこりするに。さうじみはなし。さるべき女房どもばかりとすりて。おや
 の家。このよさりなんわたりぬる。とこたへ侍り。えんなるうたもよまず。

染なし衣のさまあらまほしき形に
 見えたりし也
 わが見すてん後をさへなん
 「玉」此わが女我也これも人の
 手にうつる意をふくめたる所なる
 故にわがとはいふ也さて見すて
 いふも俗言にいふとは心ばへこと
 にしてこれはうしろみすること
 して、やむるをいふ也上下の詞を
 よく思ひ合せてしるべし
 とかくいひ侍しな（釋）ふたたびあ
 ひ見んなどいひやりしなるべし
 たづねまどはさんとも（湖師）此詞
 は彼品定にえんに物はちしてうら
 みいはざりし女の山里などにはひ
 かくれて人をまどはせしやうに男
 をたづねまどはさんともかくれあ
 りしりしと也が親の家へわた
 りし夜も馬頭をいとひてせしわざ
 りにはあらざりし心をあらはすなる
 べし
 じやかしからず（玉）馬頭が方よ
 りとかくいふにその返事のおだや
 かにおとなしきないふ也

けしきばめるせうそこもせで。いとひたやごもりになさけなかりしかば。
 あへなきことちして。さがなくゆるしなかりしも。我をうとみねと思ふかた
 の心やありけん。とさしも見給へざりし事なれど。心やまじきまに思ひ侍
 りしに。さるべき物つねよりも心とめたる色あひし。さまいとわらまほ
 くて。さすがにわが見すて、ん後をさへなん。思ひやりうしろみたりし。
 さりとともたえて思ひはなつやうはわらじ。と思ひ給へて。とかくいひ侍りし
 を。そむきもせず。たづねまどはさんともかくれまのびず。かやかしから
 ずいらへつ。たいありし心ながらは。えなん見すぐすまじき。あらためて
 のどかに思ひならばなん。あひみるべき。などいひしを。さりととも思ひはな
 れじ。と思ひ給へしかば。まばしこらさんの心にて。まかあらためんともい
 はず。いたくつなびきて見せしあひだに。いといたく思ひなげきて。はかな
 くなり侍りにしかば。たはぶれにく。なんおぼえ侍りし。ひとへにうちたの

たありし心ながらは（釋）もとの
 まいにあだしき心にてはと也
 のどかに思ひならば（玉）方々へう
 つす心をやめてしづかにおちつく
 ないふなり
 つなびきて（玉）たみ詞に引はりあ
 ふ體也といへるよろし（新）餘
 拾遺集平良文「引よせばたには
 よらで春駒のつなびきするぞ名は
 たつときくこの歌をもていへり
 思ひなげきて云々（釋）女の思ひ歌
 きてそのおもひにてつじに身ま
 りたる也
 たはぶれにく（新）たはぶれのま
 こととなりて興さむるといふが如
 く、こらさんのはかりごとに通てか
 ひなくなれるなり古今集に「あり
 ゆやとこらみながてらあひ見れば
 たはぶれにくきまでそ戀しき是を
 轉じて用ぬたり
 さばかりにて有ぬべく（玉）其上を
 くはへずともそのまゝにてたりな
 んと也
 はしなきあだ事をも云々

みたらんかたは。さばかりにてありぬべくなん。思ひ給へいでらる。はか
 なきあだことをも。まことの大事をも。いひあはせたるにかひなからず。
 たつた姫といはんにもつきなからず。たなばたのてにもおとるまじく。その
 かたもぐして。うるせくなん侍りし。とていとあはれとおもひいでたり。中
 將。そのたなばたのたちぬふかたをのどめて。ながき契にぞあえまし。げに
 そのたつたひめのにしきには。又まくものあらじ。はかなき花紅葉といふも。
 をりふしの色あひつきなく。はかしくしからぬは。つゆのはえなくさえぬる
 わざなり。さるによりかたき世ぞ。とはさだめかねたるぞや。といひはやし
 給ふ。さておなじころまかりかよひしところは。人もたちまざり。心ばせま
 ことにゆゑありとみえぬべく。うちよみ。はしりかき。かいひくつまおと。
 てつきくちつき。みなたどくしからず。みき、わたり侍りき。見るめもこ
 ともなく侍りしかば。このさがなものを。打とけたるかたにて。ときく

たつた姫といはんにも (新)立田彦立田姫の二神は風の神にて本は物染るなどの事はあられど此立田山は紅葉のよきよし古今集後撰集などに歌多く侍るによりて其後は立田姫は紅染出ず神のごとくいひなせる也 (祇注)うせたりし女の物をよく染るかたを龍田姫といひ織ぬふかたをたなばたの手にもおとるまじといへるなり (釋)いにしへは常の女もみづから物をそめしかばかばかりの人も衣服をそめしなり今世のさまを見て疑ふべからず間機姫神は古語拾遺に見えたりされどこはた機といふ事を取りて織る事に用ゐたるまでなりたなばたも七夕をおもへるなるべし

うるせく (釋)うるせくとある本は誤なり一本によりて改めつうるせくは功のいりてよろしきかたにつかひたり
 そのたなばたの云々 (祇注)裁ぬふかたは似ずとも長き契にあやからせたましし也「おふ事はたなばたつめにひとしくしてたらぬふかたはあえずぞありけるの歌をとりていへる也 (釋)此歌後撰集にありさてこの歌の意はあふことのまれに裁縫ふ事のつたなきよしなるをこにはたらぬふかたをのどめて世ともにつはらぬ契にあえんとうちかへしてとられたる例のいとめでたし長き契とはかの牽牛織女の契の天地ともにも久しきかたにいていへる也

たつたひめのにしきには (玉)これは其女のやうを聞いてげに其女にしくものあらじと女のすべてのうへをほめたる詞也たつ物染るかたのみをほめたるにはあらずにしきといへるはたつしく物といはんための縁のみにてその錦をいはんとして上の語によりて女を立田姫といへる也 (釋)立田姫のにしきはそめなす錦といふ意なりしくは及ぶ意にておふものあらじといへる也錦の縁にしくとかけていへり
 はかなき花紅葉といふも云々 (玉)いふもいへども意か又ははかなき物にいふ花紅葉もといふ意にもあるべしさてこれは本妻ともさだむべき女は大かた何事もたはではあしがるべきよしにていへるにてはかなき花紅葉だに云々なればまして妻とすべき女は何事もたはでははいふ意也然るを上に立田姫の錦といひこにもをりふしの色あひはかくしからぬはすこしの光映もなくいろの消はて、興なきわざ也といふ意なり露は花紅葉をにははし出る物なる故にいさゝかの事をつゆといふ詞にかけたいへるたくみ也新釋にたつばかりの意にのみとされたるはわろしさてこれは本妻とすべき女のとへなること玉小櫛にいはれたるがごとし
 さるにより (玉)此上になまして妻ともすべき女は大かた何事もたはではあはなはずといふ意をふくめたる物世上の詞にその立田姫の錦に云々とかの女をほめて花紅葉のくらべ物をいへるにてそのふくめたる意は開ゆるなりさてそのふくめたるをうけてさるによりといふ也
 いたき世ぞとは云々 (玉)妻とすべき女は何事もたはではあしがるべきわざなるによりてさやうの女は有がたき世中にて定められたり也云々

いひはやし給ふ (詞)馬頭をいひはやし給ふ也 (評)中將云々といひ榮し給ふといふ意にて當夜のさまの第七段也

人もたままさり (釋)指くひし女より人がらたままさりたる也

ゆゑありと見えぬべく (玉)人の見んにまことに故ある女と見ゆべきさまなりしと也

見き、わたり侍りき (玉)見はよみたる歌手きたるなどを見る事聞は琴をひきたるを聞也これらのわざなど、しからざるさまに馬頭が見聞て年月をわたりこしといふ也

みるめも云々 (釋)つちら難なき也このさがなものを (玉)すべてかといふべきをこのといへること多し心得おくべし云々 (釋)さがなものはさがなく物れたみして指くひし女の事也

うちとけたるかた (玉)心やすき所にして也
 かくるへみ侍りし (釋)指くひし女

かくろへ見侍りしほどは。いとこよなくこころとまり侍りき。この人うせて

後いかはせん。あはれながらも。すぎぬるはかひなくて。しばし、まか

りなる、まに。すこしをばゆく。えんにこのまじきことはめにつかぬ所あ

るに。うちたのむべくはみえず。かれぐにのみ見せ侍りしほどに。しのびて

心かよはせる人ぞありけらし。神無月のころほひ。月おもしろかりし夜。内

よりまかで侍るに。あるうへ人きあひて。この車にあひのりて侍れば。大納

言の家にまかりとまらんとするに。この人のいふやう。こよひ人まつらんや

どなん。あやしく心ぐるしき。とて。この女の家はた。よきぬみちなりけれ

ば。あれたるくづれより。池の水。かけ見えて。月だにやどるすみかを。

すぎんも。さすがにて。おり侍りぬかし。もとよりさる心をかはせるにやあ

りけん。此をとこいたくすいろきて。かどちかきらうのすのこだつ物にしり

かけて。とばかり月をみる。菊いとおもしろくうつろひわたりて。風に

かくるへみ侍りし (釋)指くひし女

にうけて也 (玉)木枯女をなり
 すこしよばゆく (玉)うるさく思はる心ばへ也
 えんにこのまじきこは (細)あだしくしきかたの心たのもしからぬと也云々
 心かよはせる人ぞ (釋)心かよはせる人は即下の殿上人をいふ
 あるまへんきあひて (釋)馬頭禁中より退出する時一人の殿上人來りあはせて馬頭の車に相乗したる也
 大納言の家 (弄)誰とも見えず馬頭にえんある人なるべし大納言といへるおぼつかなし馬頭が父にや云々河にも馬頭が父歟と云々
 此人のいふやうこよ人まつらん (釋)此殿上人馬頭にいふやうは今夜我をまつ女ありてあやしく心にかへればそなたへゆかんといふ意
 也との下に詞いさゝか落たるか或抄に給屋翁の説とて舉たるにも詞おほく脱たるべきよしをいへり (湖)馬頭のいふ事な此へ人は
 しらぬ也 (餘)古今雜下「今ぞしるくるしき物と人またんことをばかれずとふべかりけり此歌にこあやなしたる也云々
 此女の家はた (玉)はたはも又也大納言の家はゆくに此女の家も又かならず通る道なればと也大納言の家にとよらんとするに此女の家はた云
 云とつゞく語のはこび也

よきの道 (餘)契沖云よきはよけといふに同じ古今に花のあたりをよきてふけ萬葉のよき道を曲道とかげり云々
 あれたるくづれより池の水かけ見えて (釋)築地などのあれたるくづれより池の水に月のやどれる影の見ゆる意なるをあやなしてかける也
 月だにやどるすみかた (河)拾遺集伊勢「雲心にてあひかたはぬ月だにもわがやとすきてゆく時はなし (湖)月さへやどるすみかた男のや
 さらでもすがに通しがたしこの心也
 おり侍ぬかし (釋)上に脱交ある故にこの車よりおりたる人の自他まさらはししばらく上の心くるしきとてある所よりかげたる語を見て
 殿上人の下たる事とすべし萬水一露には馬頭もおる也といへり
 もとよりさる心をかはせるにや (湖)此へ人木枯の女に心を通じたるにやと也馬頭は此よしを見しりてさらぬやうにて見るに殿上人は其
 事を不知也
 とどかり (湖)しはしといふ心也
 うつろむわたりて (釋)霜にうつろひて色の赤くなるをいふ霜はうつろひたるを當るも常也わたりてはひとしく色の付たるをいふ
 あはれとげに (釋)げにあはれと見えたりといふ語脈也
 かげもよし (河)催馬樂に「あすかぬにやどりはすべしかげもよしみも寒しみまくさもよし (花)あすかぬの歌のかげもよしは木の蔭也
 かもひは寒水也みまくさは馬にかふ草也 (拾)飛鳥井はかげるふ日記によるべし大和の明日香にあり (細)此あすかぬをうたふ心は宿りも

すべし心をとる也
 つしりうたふ (餘)ひとくちづい
 うたふ也さだかにうたふべき時な
 らば也萬葉五堅壁なとりつ
 るひ末つむ花巻に御つしり歌の
 いとながしき云々
 しらべとのへたりけるを
 (玉)かいてよく調子をあはせおき
 たるを也もしこれを今ひくことい
 しては下のきあはせたりしとい
 ふこと重なり又とのへといふ言
 もいか也
 きあはせたりしほど
 (釋)琴を掻ひきて笛にあはせたる
 也けしうはあらずはあやしからず
 つきくしき意也
 りちのしらべは (細)飛鳥井も律の
 歌也律は秋を司る也又律は陰なれ
 ば女のむた也時節がみな月なれば
 なりにあへるなるべし (釋)この
 御説さも有べけれと陰陽のさだま
 ではあらざるべし又律の調子は
 女のやはらかなる手にききならし
 たる音の麗のうちより聞えたるが

きはへるもみずのみだれなど。あはれとげに見えたり。ふところなりける
 ふえとりいで、ふきならし。「かげもよしなどつしりうたふほどに。よく
 なるわごんをまらべとのへたりけるを。うるはしくかきあはせたりしほど。
 けしうはあらずかし。ちのまらべは。女の物やはらかにかきならして。す
 のうちより聞えたるも。いまめきたる物のこゑなれば。さよくする月
 をりつきなからず。をとこいたくめで。すのもとにあゆみきて。「庭の紅葉
 こそ。げにふみわけたるあともなけれ。などねたます。きくをりて。
 この音もきくもえならぬ宿ながらつれなき人をひきやとめける。わろか
 めりなどいひて。いまひと聲き、はやすべき人のあるときに。手なこの給
 ひそなど。いたくあざれかれば。女聲いたうつくろひて。
 こがらしに吹あはすめる笛の音をひきとひびきことのはぞなき。と
 なまめきかはすに。にくなるをもまらで。又さうのことをばんしきでうに

今めきたる意なるべし

にはの紅葉こそ (河) 秋はきぬもみち
ちはやどにふりしきぬ道ふみわけ
てとふ人はなし 古今集

うへ人此女を馬頭が妻とはしられ
どもいかさまにも此女に人のかよ
ふと聞てゐる也 (釋) 庭の紅葉に
踏分たる跡ありて人の來かよふさ
まなりといふ事を却てなしといひ
て反なきかせてくちをしがらする
意也

れたます (玉) れたましむるなり絶
角巻になべてやはなどれたまし聞
ゆれば蜻蛉巻になどかくれたま
しがほにかきならし給ふなども
有

菊を折 釋) 殿上人あたりの菊を
折もちて歌むくさばひとする也
ことの音も云々 (釋) 一首の意は
きひく琴の音もさきたる菊の色も
たゞならずめでたき宿ながらた
ひとつわろかめることば我ことく
何のへんもなき人を引とめけるに
てこそ迷惑ならめといふ意也

まらべて。いまめかしくひきたるつまおと。かどなきにはあらねど。まばゆ
さ心ちなんし侍りし。たゞときくうちかたらふ宮づかへ人などの。あくま
でさればみすきたるは。さてもみるかざりは。をかしくも有ぬべし。時々
にてもさる所にて。わすれぬよすがと思ひ給へんには。たのもしげなく
さしすぐいたりと心おかれて。その夜の事にことつけてこそ。まかりたえに
しか。このふたつの事を思ひ給へあはするに。わかき時の心にだに。なほさ
やうにもていでたることは。いとわやくたのもしげなくおぼえ侍りき。今
よりのちは。ましてさのみなん思ひ給へらるべき。御心のまゝに。をらばお
ちぬべき秋の露。ひろはきええなんと見ゆる。玉のうへのあられなど
のえんにあまかなるすきくしさのみこそ。をかしくおぼさるらめ。今さり
とも。なとせおまりがほどに。おぼしまり侍りなん。なにがしがいやしき
いさめにて。すきたわめらむ女には心おかせ給へ。あやまちして。見ん人の

るからにわろかめりといふことをそへていへる也わろかめりは女の心にわろく思ふなるべしといふ意也めりといふ辭に心を付べし一本に月

もえならぬとあるは菊を折てといへるにかなはず菊の方をとるべし此歌諸注いづれも解得られたるはなしながらといふ語の勢を味はふべし
今一撃き、はやすべき人の云々 (釋) 我よりも今一段間はやす人のある時には秘曲の手をこさずしてきかせ給へといひてあざれかゝる也書
注また新釋玉小櫛ともにこれを殿上人のみづからの事とせられたるはいみじき事也

聲いたうつくるひて (釋) 今一撃聞はやす人のある時などいふを聞て女きつとなりてこわづくるひして歌をよむ也事のけしき思ひやるべし
木がらしに云々 (玉) 此殿上人をこよひとまるべく引とめん詞もなしと也木枯にとむべき葉もなしといふ詞のしたて也 (釋) 一首の意は木
をからすばかり烈しき風に吹あはすめる笛の音なれば木葉のことくはかなき言葉にてはひきとむべきよしなしといひて言にわがひく琴を
かれ笛を殿上人にしていへる也さるはいたく疑ひてあざれたるに答へてしうたがひ給は、何といひて引とむべきやうもなしといへる意
也書注どもは例のいかなり (新) 前にいふ手つき口つきたどくしからぬをこに見せたり

にく、なるをもしらで (釋) 馬頭の心に憎しと思ふをも女のしらで也此所馬頭はまた車にあるがまた共に下りて物かげよりうかひ見たる
さまか上下にその事をこわらざればいさ、か紛らはしく聞ゆ諸注にその論なきはいか
ばんしきでうに (玉) 補) 樂のすがた般涉調はかるはづみなるもの也さるに依て此女の心さまに取合せて今めかしく云々といふ也 (釋) この説
のごとくなるべし書注に調子を時節にあていはいはれたるなどは例のうるさし

たゞ時々打つたらう云々 (新) かの調度重などの一時の興とまことの器とをいへるにこゝも同じ
さればみすきたるは (釋) 湖月本にすきを過としたるはわろしすきがまじき意にてあだなる也さもじ消べし
さてもみるかざりは (湖) さやうにさればみても逢見る時ばかりは面白からんと也

さるところにて (釋) にてはに。しての誤などにやすこしいか也さる所とはかよひ所といふ意也よすがは憑み所也
その夜のことにことつけて (釋) 其夜殿上人と歌よみかかせし事にことつけて也
御心のまゝに (玉) 御心のまゝに女のながきしたがふ事也云々

ならばおちぬべき秋のつゆ云々 (河) を見て見はおちぬべき秋はぎのえだもとをいにおけるしら露 古今集 (新) 心はかなくうきたる
女の事をいへるは明らかし云々さゝのあらは古事記に佐々木源平字都夜阿良禮能といふるき時よりいふ事也これをとれるならでもこゝの
あらは常いふこと也云々 (釋) 玉さゝの上のあらはも歌あるべし猶たづぬべし二つのたとへの詞いとえんにめでたし

七とせあまりがほどに (釋) 細流に馬頭源氏よりも七年ばかりの兄といふ義歟といはれたるよろしさを又七は大敷を擧たるやうにいはれた
るはひがごと也、は語中に馬頭が年のほどをおもはせたる書さまにていとめでたき所なり源氏を十七として見れば馬頭廿四五なるべし

新釋には中將のとし廿二三也と注せられたりされど中將の年はたしかに見えたる事なければいかにあらん又舊注に櫻椿七年の事などいはれ

たるはこゝにつきなきいたづら也

なながしが (釋)馬頭みづから名をいふべき所をながしといへるは此物語の例也下の頭中將のながしも同じ

すきたわめらん (新)すきは好色の好にあたりたわめらんは上のあえかといふに同じくなよと人になびきやすきないふ

中將れいのうなづく (釋)上に中將のうなづくといへる故に例のといへるとくはしくなかしさて此段當夜のありさまをあらはしたる第八の

段なり

おはさうず (細)おはしますなり

しれもの、物語を (玉)我身のうへに有し事を卑下してかくはいへる也 (釋)しれものは愚なる意にて俗言にたわけものといふ意也

ながらふべきものとしも (釋)ながらふは永く月日を経る意也月日永くあひ見んものとも思はざりしかど也

かえん (湖)絶々ながらといふ心也

うらめしと思ふ事も (釋)女の中將を憑ひにするにつけてはとだえ給ふなりなどはうらめしと思ふ事もあらんと中將のおしはかりて覺ゆる

也

みしらぬやうにて (湖)とだえのつらさを見しらぬやうにして也

たまさかなる人とも (釋)中將をかくたまさかかよふ人のごとくにも思はぬさま也

もてつけたらん有さまに見えて (玉)心に恨めしく思ひながらつゝしみて其色を願さるやうにおしはづらるゝ也さる故に心ぐるしき也朝夕

にはいつも／＼の意也

たのめわたる事ども (釋)たのめはたのませ也中將より女に行末を憑ましむる事なども有しと也わたるはしか憑みにして年月を経わたる事

也

おだしくて (釋)穏やかなる意也

この見給ふるわたりより (釋)この見給ふるとは此方に見るといふ意にて北の方の事也右大臣の御女四君の事也 (餘)夕顔巻に右近が物語す

る所にこそ秋のころかの右大臣殿よりいとおそろしき事の聞えまうでこしに云々西の京に御めのとすみ侍る所になんはひかくれ給へり

しといへるがこれ也

かすめいばせ (釋)あらばにはいば

でそれと心得らるゝやうにかすめ

ていばせたる也

後こ (湖)頭中將其由を後に聞

し也

心ぼそかりければ (釋)語脉甲乙點

のことし

涙ぐみたり (評)かなしさのせにな

ることを思ひ出て語らぬさまに中

將の涙ぐまれたるさま目の前に見

るが如し源氏君の間かけ給へるこ

とを挿みたるさらにめでたし其夜

のさまの九段也

いさや (餘)いなに同じ

ことなることもなかりきや

(玉)源氏君のゆかしげに問給ふに

つけていなとよさして語り申すべ

きほどの事もなかりしよと也

山がつの云々 (釋)山がつの垣は

我身を卑下してたとへなぞしこは

幼児のうへにたとへたる也さて我

には心淺くなり給ふとも此子には

あはれをいけ給へといふ意也露と

いへるはいけふといふ露の縁のみ

ためかたくななる名をも。たてつべきものなり。とをさしむ 中將れいの

うなづく (湖)君すこしかたゑみて。さること、はおぼすべかめり。いづかたに

つけても。人わろくはしたなかりける御物語かな。とてうちわらひおはさう

づ (湖)中將。ながしは。まれの、物がたりをせんとて いとまのびてみそ

めたりし人の。さても見つべかりしけはひなりしかば。さてながらふべき

ものとしも。思ひ給へざりしかど。なれゆくまゝにあはれとおぼえしかば。

たえん、わすれぬものに思ひ給へしを。さばかりになれば。うちたのめるけ

まきも見えき。たのむにつけては。うらめしと思ふ事もあらん。と心ながら

おぼゆるをりくも侍りしを。見しらぬやうにて。ひさしきとたえをも。

かうたまさかなる人とも思ひたらず。たゞあさゆふにもてつけたらんありさ

まにみえて。心ぐるしかりしかば。たのめわたる事などもありきかし。おや

もなくいと心ぼそげにて。さらばこの人こそは。とことにふれて。おもへる

もなくいと心ぼそげにて。さらばこの人こそは。とことにふれて。おもへる

もなくいと心ぼそげにて。さらばこの人こそは。とことにふれて。おもへる

もなくいと心ぼそげにて。さらばこの人こそは。とことにふれて。おもへる

もなくいと心ぼそげにて。さらばこの人こそは。とことにふれて。おもへる

もなくいと心ぼそげにて。さらばこの人こそは。とことにふれて。おもへる

もなくいと心ぼそげにて。さらばこの人こそは。とことにふれて。おもへる

もなくいと心ぼそげにて。さらばこの人こそは。とことにふれて。おもへる

もなくいと心ぼそげにて。さらばこの人こそは。とことにふれて。おもへる

もなくいと心ぼそげにて。さらばこの人こそは。とことにふれて。おもへる

もなくいと心ぼそげにて。さらばこの人こそは。とことにふれて。おもへる

にてさして心なし
 思ひ出しまいに(釋)歌をおこせし
 によりて申將の思ひ出られし也
 むしのねにきほへるけしき
(玉)蟲のなくにおとらずきほひて
 もの思ふけしき也
 むかし物語めきて(釋)昔物語のま
 うしに殊更に設けてかきたるけし
 きによく似ておぼえしといふ意な
 り舊注ひがこと多し
 さきまじる云々(釋)今この前載に
 咲まじりてある花はいづれめでた
 しともわかれども猶やはりとこ夏
 に及ぶものなしといへるにてをさ
 な子のらうたきといづれわかぬ物
 かなは其方にしくものはなしと
 よそへていへる也とこなつは狸夢
 の一名にて夏をむれと咲ものなれ
 ば常夏といふこれをやがて床にい
 ひよせたり床といふにしくといへ
 るも縁の詞也
 やまとなでしこをばさしおきて
(釋)大和なでしこは野山に自然に
 生るたけ高きないふ常なるはから

けしきも。らうたげなりき。かうのどけきにおだしくて。ひさしくまからず
カハユラシク ユルヤカナ コノヨナスク
 りしころ。この見給ふるわたりより。なまけなくうたてある事をなん。さる
ヒヨクナゲナ
 たよりありてかすめいはせたりける。後にこそ聞侍りしか。さるうきことや
ツライイコトガ
 わらんともまゑらず。心にはわすれずながら。せうそなどもせで。ひさしく
オトツレ
 侍りしに。むげに思ひ去をれて。心ぼそかりければ。をさなきものなどもあ
新玉ウラヒ
 りしに。おもひわづらひて。なでしこの花ををりておこせたりし。とて涙ぐみ
中道ノ詞也
 たり。さてそのふみのことば。ととひ給へば。いさや。ことなることもな
イヤモツ カクベツ
 かりきや。
女 山がつかきほあるともをりしに。あはれはかけよなでしこの露。思ひい
オクコモノナキ
 でしまゝにまかりたりしかば。れいのうらもなきものから。あれたる家の。
 露しげきをながめて。むしのねにきほへるけしき。むかし物語めきておぼえ
 侍りし。

撫子也その初外國より渡し物な
 るべしさて撫子といふ名をやがて
 子の事にいへる事上の歌のことし
 ナヤ子をばさしおきてといふ意也
 まづちりをだにと(奥入)「ちりを
 だにすふじとぞ思ふさきしより妹
 とわがぬるとこなつの花古今集
 夏みつれ
 心をとる(湖)櫻嫌をとる也
 うちはらふ云々(孟)ひこぼしのま
 れにあふよのとこなつは打はらふ
 にも露けかりけり 後撰集秋上四
 句打はらへども(釋)打はらふは
 床を打拂ふなり床を拂ふは男と共
 に寐んためなり上句はこの頃中將
 のとだえ給へるにて床打はらふ袖
 も涙にぬれて露けき心を常夏につ
 づけていひかけたる也下句はかの
 北の方よりうたてある事はいはせ
 たるをしたにほめかして常夏の
 花に嵐の吹てしなれしむる秋も來
 れりといふ意なりそふといへるは
 とだえのかなしき上にうたてある
 ことの添たる意也いたづらに見過

さきまじる花はいづれとわかねども猶とこなつにまぐ物ぞなき。やまとな
ヤハリ
 でしこをばさしおきて。まづ「ちりをだに。とおやの心をとる。
女 うちはらふ袖も露けきとこなつにあらし吹そふ秋もきにけり。とはかなげ
夏ニ露ヲトイヒテシタリ ナニトモヤク
 にいひなして。まめしくうらみたるさまも見えず。なみだをもらしおと
 しても。いとほかくくつゝましげにまぎらはしかくして。つらきをも思ひ
ツレナキ
 去りけり。と見えんは。わりなくくるしき物。とおもひたりしかば。心やす
ハ中道ノ ハツタニ カ
 くて。またとだえおき侍りしほどに。あともなくこそかきけちてうせにしか。
アヒツ
 まだ世にあらば。はかなき世にぞさすらふらむ。あはれと思ひしほどに。
ラチモナイ シフチ
 わづらはしげに思ひまつはすけしき見えましかば。かくもあくがらさざらま
コツカンシツク ヤウス
 し。こよなきとだえおかず。さる物にまなして。ながく見るやうも侍りなま
カクベツ サウオウサモノ 成
 し。かのなでしこの。らうたぐ侍りしかば。いかでたづねん。と思ひ給ふる
カハユラシク イカデタズネン
 を。今にえこそ聞つけ侍らね。これこそたまひつるはかなきためしなめれ。
ハ女

すべからず秋といへるは常夏の枯
ぬべきをりなるに物がなほしき心を
そへてさる時節到来したりといふ
意なり

なみだをもらしおとして

(釋)涙をおさへ忍びてもふともれ
おつるさま也此女のおさま思ふべし
いとほしく云々(湖)頭中將の
と絶のつらさを思ひしるけしきを
も恥る也

かきけちて(釋)かきは例の登語け
ちは消也跡を消してにげうせたる
也

まだ世にあらばはかなき世にぞ

(釋)上の世は現世の事にて女の此
世にあらばといふ意下の世は身に
つきたる境界の事にて女の不幸を
さしたる也

あはれと思ひしほどに(釋)ほどは
間の意也あはれと思ひしあひだに
云々のけしき見えばといふ意也小
橋にあはれと思ひし女なりしかば
の意也とあるはいかゝあらんさて
はほどいふ言俗語めきて聞ゆ猶

つれなくてつらしと思ひけるをも去らで。あはれたえざりしも。やくなき
かたおもひなりけり。今やうくわすれゆくきはに。かれはたえしも思ひは
なれず。をりく人やりならずむねこがる。ゆふべもあらん。とおほえ侍り。
これなんえたもつまじく。たのもしげなきかたなりける。さればかのさがな
ものも。思ひいであるかたにわすれがたけれど。さしゆたりて見んには。

わづらはしく。よくせずは。あきたきこともありなんや。ことのねのすめ
りけん。かどくしきも。すきたるつみおもかるべし。この心もとなきも。

うたがひそふべければ。いづれとつひにおもひさだめずなりぬること世中や。
たかくぞとりくにくらべぐるしかるべき。このさまくのよきかきりを
とりぐし。なんすべきくさはひませぬ人は。いづこにかはあらん。吉祥天女
をおもひかけんとすれば。ほうげづきくすしからむこそ。またわびしかりぬ
べけれ。とてみなわらひ給ひぬ。式部が所にぞ。けしきある事はあらん。す

わづらはしげに思ひまつはすけしき(新)たえをいと恨みなどしてつれに來ならずべき様にもいひなどせばおのづからさる心のおだしさも
なくてとふべきに也(釋)一本に思ひまどはずとありかくてはわづらはしげに云々はかの四君よりうたである事をいはせたる事にて四君
よりさやうにむつかしくいひて女を感はすけしきを中將の見たらばといふ意となるべしわづらはしげにといふ語は此方になへるやう也猶
考ふべし

考ふべし

わづらはしげに思ひまつはすけしき(新)たえをいと恨みなどしてつれに來ならずべき様にもいひなどせばおのづからさる心のおだしさも
なくてとふべきに也(釋)一本に思ひまどはずとありかくてはわづらはしげに云々はかの四君よりうたである事をいはせたる事にて四君
よりさやうにむつかしくいひて女を感はすけしきを中將の見たらばといふ意となるべしわづらはしげにといふ語は此方になへるやう也猶
考ふべし

かくもあくがらさし(湖)かやうにうかれ出るやうにはすまじきと也
さるものにして(湖)本義ならずと又一方の北方にもない也

これこそ給ひつる(湖)馬頭に對していへる詞也えんに物はちしてうらみいふべき事をも見しらぬさまにしのびてなどいひし事也
あはれたえざりしも(玉)絶ざりしもといふことおだやかならず聞ゆめれど然らず上の文に見えたることかくれうせて後までもあはれと思
ふこと絶ざりしし也下に今やうく忘れゆくきはとあるをも思ふべし

やくなきらた思ひ(玉)これは我をばかく恨みてかくれうせぬほどの女を此方には猶絶ずあはれと思ふはこれ片思といふものなりけり
と一種の片思につくりていへる詞也次の言にかはたえしも云々とあるをも實に片思ひといふにはあらざることをしるべし
人やりならず(雅譯)我心からにて人のしらの事をいふ

むねこがる(河)涙にしおもひのきゆる物ならべいとくむねはこがれざらまし後撰 千思千腸熱 一念一心焦 遊仙窟 (釋)この注は類
例のみ也中將を思ひはなれずおのれと心の焦るゝまで物思ふ夕べもあらんと也

えたもつまじく(玉)おもつは男の女をたもつ也上にさてもたもつるゝ女のためもあるが如し
さればつ云々(釋)こゝより端をあらためていへれど猶中將の詞也馬頭としたる説はわるし其よしは別に論ずべし
あきたき事(釋)厭痛の意にて心にいはるゝたいふありなんやのやはよの意と小橋に有

琴の音の(釋)すゝめりけんはかきびく音のをりにあひて進みたりし意也一本すゝめけんとは有はわるし
この心もとなきも(玉)のとは今みつから語りつる夕観の上をさしていへり心もとなきとはうらみいふべきをも忍びていはざるはその心の
ほどのしりがたきいふさてこのといふは夕観上をさしたる言なれども心もとなきも云々はひろくいへるにて此夕観上のやうにといふ意な
り

うたがひそふべければ(玉)或抄に別人に心をばしやするとの疑ひなりといへり
なりぬること世中や(釋)此所いさゝか紛らほしくは脱文あるにやこのまゝにて解ば世中の下になれといふ辭を含めて上のこそを結びた

る也さてやはいひすてのやにて歎息の聲也世中や云々とつづけて心得るはわるし

たかくぞとりに「玉」これをとりに見てもかれをとりに見てもとにかくに難ありて思ふにかなひがたき意也（釋）かくぞのぞ一本にこそとあるは結びのべきにかなはずくらべぐるしは並べ比べて定めがたき意也かくてもべきの辭少し種ならぬこちす猶考ふべしこのさまくのよきかきりを云々

（釋）品定の最初より論じたる中のよき事ばかりを一人に具へて難ずべきふしなまぜぬ人は何處にかあらんと也湖月抄師説に品定の初にこれはしもと難つくまじきはかたくもある哉といへる首尾なりといへるよろしくさばひは種子の意にて難の種となる事也

吉祥天女を「湖」帝釋のむすめ瑞殿の天女也最勝王經に有「玉」靈異記に聖武天皇の御世に信濃國のうばそくが和泉國の血浮の上山寺な

こしづ、かたりまうせ。とせめらる。志もが志もの中には。なでふことかきこしめし所侍らん。といへど。頭の君まめやかにおそしとせめ給へばなに事をとりまうさんと思ひめぐらすに「また文章のまやうに侍りしとき。かしこき女のためしをなん見給へし。かの馬頭のまうし給へるやうにおほやけごとをもいひあはせ。わたくしごまの世にすまふべき心おきてを思ひめぐらさんかたも。いたりふかくごえのきは。なま／＼のはかせはづかしく。すべてくちあかすべくなん侍らざりし。それはあるはかせのもとにがくもんなどし侍るとて。まかりかよひしほどに。あるじのむすめどもおほかり。と聞給へて。はかなきついでに。いひより侍しを。おやきつづけて。さかづきをもて出で。わがふたつのみちうたふをさけ。となん聞えごち侍りしかど。をさるさちとけてもまからず。かのおやの心をはかりて。さすがにかづらひ侍りしほどに。いとあはれに思ひうしろみ。ねがめのかたらひにも。身の

靈異記ノ
吉祥天女
ノ事ハ餘
ヲ事ニ舉グ

る吉祥天女の像に思ひなかけて云々せし事見ゆ又狭衣の物語にまだかゝる事はなかりつる物ないがかりなる吉祥天女ならん（釋）思ひかけんとすればとある語の上の山寺の事を思へるなるべし

ほうけづきくすしからんこそ（釋）法氣付也法は佛法の驗の方につきていへるにて靈妙不思議の事をさしていへりくすしは其靈驗の奇異きをいふ語にて萬葉などに多き語也さて意はかの上山寺の事のごとく吉祥天女の瑞殿なるを思ひかけんとすれば又佛法がありて神變奇怪ならんがわびしといへるにてすてよき女の有がたき意也

式部が所にぞ云々（釋）頭中將の詞なるべしけしきあるは一ふしありておもしろき事といはんがごとし（評）この藤式部をこゝにいたりて初めてあらはし出されたるいとをかし此人は馬頭に相副なることく書なしたる用をこゝに至りて延びて上にさま／＼論じたる事どもを笑はしくしてまがらはしたる筆つきいとめでたしさればこの一段は殊更にながましくたはふれて人の眼をさましつづくかゝれたり此所當夜のありさまをあらはしたる第十の段なり

しもがしもの中には云々（釋）上に下のきざみといふきはにれば殊にみたりずかしとありなでふは何といふ也

なに事をと申さんと思ひめぐらすに「玉補」嘉基云と申すは申上ると云程の詞也云々（釋）とりは執にて後世に執達など云執の意也さて此所思ひめぐらすにまだ云々とつづきたる語餘りにはかに聞えて穩ならず脱文などあるにやしばらく譯注のごとき意をふくめてさるとるべし文章生（餘）職員令大學寮律學博士二人已上同明法生十人文草生二十人簡取難仕及白丁職等（釋）儒家の人は皆大學寮にて學問して後つぎつぎに出身すること也式部もさる人にて若かりしほどは文章生なりし也

馬頭の申給へるやうに（細）前に朝夕の出入につけても公私の人のたゞまひよきあしき事のめにもみいにもとまるありさまをうととき人にわざとうちまねはんやといひしやうに也

さえのきは「玉」さえは才の字の音ながら物語にいへるはいづれも才智の意にはあらず俗に學問のある學問のなきなどいふ學問の事也きは、分際にてほどいはんがごとし

なま／＼の博士はづかしく云々（釋）此女の學問のほどを思へばなま／＼の博士は恥べきとの意也口あすべく云々は議論などしたらんにもすべて人に口を開きてものをいはずざりしと也かやうの女その世にはこれかれありきと見えたりかの清少納言が博士なもあそびたる類ひ思ふべしさる事をしたに思ひて此段はかけるなるべし（餘）職員令博士一人掌教授經業一課試學生

さかづきをもていづ（湖師）これもかの文集に主人會三良媒置酒滿玉壺といひし詞にてかく也

わがふたつの道うたふなきけ（餘）この詩白氏文集秦中吟十首のひとつにて議婚と題せり主人會三良媒置酒滿玉壺四座且勿飲聽我歌兩途富家女易嫁嫁早輕其夫貧家女難嫁嫁晚孝於姑聞君欲娶婦意如何（孟）これは博士の女貧家なるによりて

式部にいひきかせる也 (評)博士といふもの心見るがごとくいとをかし

きこえち (釋)きこえは例のいひ也こちはことしといふを約めたる辭也

かづらひ (釋)拘はる意也かの父の博士が心を憚りて絶はてもせずかゝりたるほどに也

いとあはれに思ひうしろみ云々 (釋)うしろみは用言也女の式部をあはれに思ひて後むる也れぞめのかたはは夫婦ともれしたる夜のかた

ひぐさにもといふ意也

いとよげに云々 (釋)消息文にもいとよげにといふ語脈也 (玉)假字をまじへずして眞名のみを書くを云

うべくしくいひまはし (釋)尺牘體の文章にことわりめきて書わたす也

その者を師として (釋)其女を師として文章を習ひしと也例のわざとをこがましくかたりなすさま也こしをれぶみは今も腰をれ歌などいふこ

とく用にたらの意也卑下の詞也

いまにその恩は (釋)これもをこめきたるすぢにていふ

なつかしきさいしと (玉)こゝにてはたし妻の事をいへり古今集の歌に世中をいとふ山べの草木と云々といへるも卯花は木なるを草木とい

へると同じ類の言也

なまわるならん (玉)なまは上になま入わろくとあるなまに同じわるはわろびれたるふるまひ也

はづかしくなん (釋)なつかしき妻とたのまんに學才なき人のわろびれたる行狀など見えんにははづかしくて心のおかる意也

まいて君たちの (釋)我等學問をもてつかまつるべき身なれどなほかくのごとくまいていはんや君たちの貴き御うへにはといふ意を含めり

はかなしくちをすと云々 (湖)戀變なる女をはかなしく口をすとかつ見ながらも只其みめがたらの我心につき縁にひかれてなどあひそふ事

もあるなればといひて女の才學はいらぬ心ふくめたる也侍るめればと句をきりてよむべし (玉)すぐせのひくかた侍ればの下へ女はさ

のみ學問などはなくともありぬべきものぞといふ意をふくめたる語也そは上にはかゝしくしたゝかなる御うしろみは何にかはせさせ給は

んといへるにて然きこゆ

をのこしもなんしさいなき物は侍める (玉)子細なきといふこと心得がたきを上よりのつゞきの趣をもてよく考るに何の一ふしもなきよしに

てこゝは學問などのなきをいふ也さてすべての意は世中には男にてすら學問なきものは侍る也といへるにたまして女は學問なくともなでふ

事かあらん意也語説みな子細といふこと洗みて大かたの意にかなはず (釋)此所いたくまざらばししげらく右の説どものごとく心得て

あるべしおのが考は餘釋にいへり

のこりをいはずんとて (釋)女の事をいひきしてやみたる故にのこりの事をいはずんとて説し給ふ也

心はえながらはなのわたり云々 (釋)すかし給ふとは心得ながらわざとほこりにをかしくかたりなすなり鼻のあたりをこづきはほこりにをかしきさまをいへる其世の俗語なり

つれの打とけぬたるかたには侍らで (釋)常に此女の打とけてすむ所にはあらで別なる所にて障子などをへだてて對面したる也物こしといふはいづれも物を隔てあふよし也

ふすぶるにやと (釋)式部が久しくこゝを恨みて女のすれたるかと思ふ意也今俗の言にもいふことにてイマス又ケアタガラスなどいふに同じ

またよきふしなりとも (釋)ふすぶるをふしにして中絶んによき時也と思ふよし也

このさかし人 (釋)學才ある女なればこの賢人と戲れていへる也

世のだうりを思ひとりて (釋)ことわりといはずして道理と

しらいへるは儒者さまの詞にて此

おはやけにつかうまつるべき。みちくしきことををしへて。いとよげに。せうそこふみにも。かなといふものかきませず。うべくしくいひまはし侍るにおのづからえまかりたえで。そのものを師としてなん。わづかなるこしをれみつくる事などならひ侍りしかば。いまにそのおんはわすれ侍らねど。なつかしきさいしとうちたのまん。むぎいの人なまわらならんふるまひなどみえんに。はづかしくなん見え侍りし。まいて君たちの御ためには。はかしくしたゝかなる御うしろみは。何にかはせさせ給はん。はかなし。くちをし。とかつ見つゝも。たゝわが心につき。すぐ世のひくかた侍るめれば。をのこしもなん。しさいなきものは侍める。とまうせば

◎のこりをいはずんとて。さてくをかしかりける女かな。とすかい給ふを。こゝろはえながら。はなのわたりをこづきてかたりなす◎さていと久しくまからざりしに。ものゝたよりにたちより侍れば。つねのうちとけわた

女の才學あるをうつし出せるなく
 み也世間の理を思ひとりわきまへ
 て恨みざる意也
 聲もはやりかにて (釋)よのつれの
 女は男にあひては聲ひきく物いふ
 なるを此女はしのぶ體なくあきや
 かにいふさま也
 ふびやう (玉)腹痛風病二説のうち
 風病のたよるしるべし春記に
 長曆四年四月十四日云々今日始
 服_ニ葦草_一依_ニ風病_一也とありさてふ
 びやうこくねちのさうやくさふじ
 らなど女のいふべき詞にあらざる
 を此女はせうそ文にもかんなど
 いふ物かきまぜずといへるたぐひ
 にてつれのものいひもこはんし
 くさかしたたるさまをことさら
 にかく書るなり此物語すべてほう
 しの詞僮者の詞などおのゝその
 心ばへを書り心をつくべし
 こくねちのさうやくを
 (餘)和名抄云大森本草云胡和
 比味辛温除_フ風者也 兼名苑云胡一
 名蒜音大蒜也 (細)土用のひるな

るかたには侍らで。心やましきものごしにてなん。あひて侍りし。ふすふる
 にや。とをこがましくも。またよきふしなりとも思ひ給ふるに。このさかし
 人はた。かる_ハしきものゑんじすべきにもあらず。世のたうりを思ひとり
 て恨みざりけり。聲もはやりかにていふやう。月ころふびやうおもきにたへ
 かねて。こくねちのさうやくをぶくして。いとくさきによりなん。えたいめん
 たまはらぬ。まのあたりならずとも。さるべがらんざふじらは。うけ給はら
 ん。といとわはれにうべくしくいひ侍り。いらへに何とかはいはれ侍らん。
 たいうけ給はりぬ。とてたち出侍るに。さうしくやおぼえけん。この香
 うせなん時にたちより給へ。とたかやかにいふを。聞すぐさんもいとほし。
 しばしたちやすらふべきにはた侍らねば。げにそのにはひさへ。はなやかに
 たちそへるもすべなくて。にげめをつかひて。
 さがにのふるまひしるきゆふぐれにひるますぐせといふがやななど。い

どいひて薬に用る事のある也 (釋)細流の如く今俗も暑氣の薬とてくふ事也さらば極熱のこる用る草薬と云意にや蒜は今ニクといふ物に
 て効おほき草なり
 いとくさきにより (釋)これもきすくにけざくといへたる詞也
 まのあたりならずとも (潮)直に御目にかいらずとも也
 いとあはれに (釋)あはれにといへるは後見の雑事を承らんといへるが式部をあはれふ意なればなるべし
 何とかは (玉)蒜を服したる事のことたて心づきなく思はれて何ともいらふべき詞もなきなり
 さうしくやおぼえけん (潮)事ならずのいらへやと思ひけん也
 たかやかにいふを (潮)式部はや立出てゆく故に聲高きいひてよく聞せんとする也
 聞すぐさんもいとほし云々 (釋)聞ながして出んもさすがにいとほしく又たちやすらひ物いふべきにもあらねばといふ意也
 げにそのにはひさへ云々 (釋)案に此所に詞説たるにやげにそのといふことおだやかならず潮月抄にたにも心につかざるにその香さへそひ
 町んはいよくうるさくてと也といへるさる意のことくは聞えたれどげにそのといふ詞は女のこの香うせなん時といへるをうけて式部がい
 ふ詞めきて聞ゆればなはいか也されどこのまにてしひて釋は潮月のことき意としてげにそのは女の詞をうけて式部が心におもへる事と
 せんかさらばやすらふべきにはた侍らねばにげめをつかひてと續く語脈として其間におもふ心をさしはさめる文とすべしされどとにかくに
 釋ならず猶試にいはいすべなくての誤にて式部がいふ詞にもあらんかさらばげにその云々もすべなくといひてにげめをつかひてと
 いふ意となるべしされどさては又さへといひそへるもといふにかなはぬこちす猶考ふべし先達はいかに思ひとられたるにか諸注ともに解
 説なしさてはなやかにとは臭き香の甚しきを戯れていへる語と聞えたりすべなくてせんすべなくての意也
 にげめをつかひて (釋)これはその世の俗語と聞えたり大かたに意を得てさるべし潮月抄にげまなこになりての心也といひ又孟津を引
 てとめられてはとの心にてにげめする也といへりさもあるべきとにつくに逃支度するありまとは聞えたり下にいひもはてずはしりいで侍
 りぬるにとあるに照して事の勢いをおもふべし
 さがにの云々 (釋)さがには珠の枕詞なるをやがて珠の事にとりなしていへりさて古今集にわがせこが来べきよひなりさがにのくもの
 ふるまひかれてしるしもある古き歌の詞によりて今夜我來べきよひなればかの珠のふるまひは夕暮よりいちじるからんを其夕ぐれにひる
 ますぐせといふは文なくわけのわからぬ事也といふ意にて晝間に蒜の香の失る間をかけたりあやなさは俗言にツケガナイといふ意也
 いかなることつけぞや (釋)いかなることつけ言に蒜くひたりとはいふぞやと告めうたがひたる也ことつけはかこつけといふにひとしく事に
 託てとかいふこと也

おひて「玉」返して跡より人に追かけさせて此歌をやる也たみ詞に此女おひ出るといへるはひがこととおひてとはみづからならでも跡より物するをいふ例なるをや

あふ事の云々「新」夜をへだてずむつましく逢ふほどの中にしあらば晝間のたいめも草藥の香する間をもなにかおもてはゆくばつかしからじをさばかり思はれの中なればかくはつゝまると也

しつゝと申せば「釋」をこがましき物語なればあわつけくたりもなすべきを静まりかへりてうべししくたれるにてますしをかしくをこがましきさまをあらはしたる也心をつくべし

おいらかに「玉」俗言にじんじやうにといふによくあたれりさやうのむくつけき女とそはんよりはじんじやうに鬼とそひぬたるこそまさらめといふ意也云々

あはめ「玉」河海に淡とあるよろし淡しとするにてうとみにくむをいふ詞也

これよりめづらしきこととは「玉」これもをこめきていふ詞也

おりの「釋」下ゆにて源氏君の御とのみ所より藤式部が下て歸りし也一本にはをりと有かくては細流のごとく居の意なりされども居にてはここのさまにかなはず下ゆといふに隨ふべし「評」今宵のまとの一人を先退き去しめたるは見ん人をして厭しめざるたくみなるべし例のいとめでたし今宵のさまをあらはしたる第十一の段也

すべて男も女も「釋」これより馬頭が詞にてかの才學だてすることは男も女もけにくゝわろきよしをことわる也

見せつくさんと「釋」おのがしれる事をみながら人に見せていみじく思はれんとする事也

三史「弄」史記 漢書 後漢書

五經「弄」毛詩 禮記 春秋 周易 尙書

みちしきかたをあきらかに「釋」三史五經のといふよりは女のこと也さるしたりかなる道理を明らかにとり明らかたる女は愛なからんと先ひて次にその故をことわる也

などか女といはんからに「釋」などかはい下のあらんまでへたる意也女といはんからになどかか公私の事につけてむげに通達せぬ事のあるらんと也玉小櫛にこれを學問のすぢを也とあるはいかや也たか公私の事とすべし

すこしもかどあらん人の「釋」公私の事につけてわざとならひ學ばずとも少しあらん女はつれに耳目にとまりてさとり得ることおのづからおほかるべしと也この注も小櫛はわろし

さるまゝには云々「釋」然有まゝには才學にまかせ世間の事に通達したるにまかせてといふ意也まんなはしりかきとは漢字を草書にかくこ

と也さるまじき中はさほ有まじき

女どちの中にも用ゐる文に也なげば

すきて書すくめは女文に漢字を過

半交てつく也やはらかなるべきに

かたき字を交る故にすくめとはい

へる也これ皆才學だてにする事也

かゝる女今世にもたりあり

あなうたて此かたの「釋」女ふみに

漢字をかきまぜたるを見るにあな

むやくの事や此才學だてのたの

たをやかならばと思はるゝよし也

心にはさしも「釋」かく人の心に

はしかにくげに見らるゝ事とお

もはざらめど打よむ時自然にかた

き音によまれなどしてわざとがま

しと也

これは上らうの中にも「釋」この紫

式部などの比は女の才學ある人多

かりしかげつやうの人上黨の中に

も有しなるべしそれをかたはら

いたく思ひて評したる語と聞え

たり

歌よむと思へる人の云々

「新」おのがひとへ心に好むかたに

かなることつけぞや。といひもはず。はしりいで侍ぬるに。おひて。
わふことの夜をしへだてぬ中ならばひるまもなにかまばゆからまし。さす
がにくちとくなどは侍りき。としづくとまうせば。君だちあさよしとおも
ひて。そらごととてわらひ給ふ。いづこのさる女かあるべき。おいらかに
おにとこそむかひぬたらめむくつけき事。とつまはときをして。いはんかた
なし。と式部をあはめにくみて。すこしよろしからん事をとり申せ。とせめ
給へど。これよりめづらしきことはさふらひなんや。とておりぬ。すべてを
とこも女も。わろものは。わづかにしれるかたの事を。のこりなく見せつく
さん。と思へるこそいとはしけれ。三史五經のみちしきかたを。あきら
かにさとりあかささんこそ。あいぎやうなからめ。などか女といはんから
に。世にある事の。おほやけわたくしにつけて。むげにしらすいたらすしも
あらん。わざとならひまねはねども。すこしもかどあらん人の。みにもめ

のみおもひ入たるをいふさる人今も多かるべし(釋)まつはればからまれといはんがごとし我は歌よ少也と思へる人のそのまゝ其歌にからまれてつきなきふるまひするよし也

なかしきふる事をも「新」をかしき古事も時にしたがひてかすかに聞えさせたるはわるかられどきとさる事と見えてなりにも似つかはしからぬをにくみて初よりとはいへり(釋)歌の初より故事をあらはしてとり入れむことなるべしすさまじきなり(釋)すさまじきは不用めきたる也につかはしからず不用めきたるをりによみかくる事也ものしきはいかしくあるまじき意也

かへしければなきなし(釋)よみかけたる歌の返歌をせば情をしらぬものによりもし又實にえせざらん人は手もちなくて不都合なるべしと評したる也

さるべきせちふなど「玉」はすな

にもとまることじねんにおほかるべし。さるまゝには。まんなをはしりかきて。さるまじき中の女ふみに。なかばすぎてかきすくめたる。あなうたて。このかたのたをやかならましかば。と見ゆかし。こゝちにはさしもおもはざらめど。おのづから。こはくしきこゑによみなされなどしつ。ことさらびたり。これは上らうの中にもおほかる事ぞかし。うたよむと思へる人の。やがて歌にまつはれ。をかしきふることをも。はじめよりとりこみつ。すさまじきをりをり。よみかけたるこそものしきことなれ。かへしせねばなきなし。えせざらん人ははしたなからむ。さるべきせちふなど。五月のせちにいそぎまゐるあした。なにのあやめも思ひしづめられぬに。えならぬねをひきかけ。九日のえんにまづかたき詩の心をおもひめぐらし。いとまなきをりに。菊の露をかこちよせ。などやうのつきなきいとなみにあはせ。さならでも。おのづからげに後におもへば。をかしくも。あはれにも。あべかりけることの。

はら次にいふ五月のせち九日のえんのことなまづいふ也

なにのあやめも思ひしづめられぬに(釋)いそぎ參内せんとするあしたは心いそがはしき故に何の分別もなく思ひしづめられぬ時に歌をよみておこする也「玉」あやめとは其日の縁の詞にていへる文なり

えならぬねを引かけ「玉」眞滿の根の事をふししたる歌をよみおこする也引かけとはあやめの根の縁の詞にていへる文也(釋)拾遺にえならぬに江をかけたるやうにいはれたるはさもあるべきが案にえならぬはえさらぬの誤にはあらじか少し穩ならぬやう也えさらぬは得去ぬにてのがれがたき意也

まづかたき詩の心を「玉」かたきとはすべて詩をつくるをむつかしきわざとしていへる也難題と見るはわるかめり

いとまなきをりに(釋)思ひめぐらしていとまなきをり也

そのをりにつきなく。ゆにもとまらぬなどを。おしはからずよみ出たる。なかへし心おくれて見ゆ。よろづのことに。なかばは。さても。とおぼゆるをりからときく。思ひわかぬばかりの心にては。よしばみなさげだ。ざらんなん。めやすかるべき。すべて心にしれらん事を。しらずがほにもてなし。いはまはしからん事を。ひとつふたつのふしはすぐすべくなんあべかりける。などいふにも。君は人ひとりの御有さまを。心のうちにおもひつけ給ふ。これはたらず。またさしすぎたる事なく物し給ひけるかな。とありがたきにも。いとむねふたがる。いつかたによりはつともなくて。はてはわやしき事どもになりて。あかし給ひつからうじてけふは日のけしきもなほれり。かくのみこもりさふらひ給ふも。おほい殿の御心いとほしければ。まかて給へり。おほかたのけしき人のけはひもけざやかにけたかくみだれたる所まじらず。猶これこそは。かの人々のすてがたくとりいでし。まめ人に

菊の露をかこちよせ 「拾」菊の露をかこちよせとて歌よみくるをこちよせといへり (釋)かこちは物に託ていふ意也
 つきなきいとなみにあはせ (拾)あはせはうきめにあはするなどいふに同じ云々 (玉)あはせの意拾遺のごとし俗言にじゆつないめにあはす
 るといふこと也さてこれは五月のせちに云々九日のえんに云々を合せていへるにていそき壘内せんとするをりかたき詩を案するなりなどに
 て他へは心はちらしがたきにそれに似つかぬいとなみをせざるなりいとなみは返歌を案するなりいふ也
 さならでもおのづから (玉)さならでもとはかならず其日ならずとも其日過てしづかになりて後によみおこせたりともよめるべきものをの意
 也おのづからとはまづ菖蒲の根は五日菊の露は九日ぞその時節にてはあれどもよしや其日は過て後なりともおのづからをかしからん意に
 ていへり

げに後におもへば (玉)其歌を後に見て思へば也げにとは其歌に同心していふ也さてこは後におもへばげにとうちかへして心得べしさて又此
 所の語さならでもおのづからと後に思へばとは二つに分ていへるにて後におもへばさならでもといふ意にはあらずかくてそのさならでもお
 のづからと後に思へばとの二つを合せてをかしくも云々と受たる語にして後に思へばおかしくも云々とつゞき又さならでもおのづからを
 かしくも云々とつゞき意也すべてかやうのところ言のいひざまてにはななどをこまかにわきまへてすべての語の意を心得べしよくせず
 はまされぬべし (釋)この玉小櫛の説まさらはしきがごとくなれどよく文脈を見得られたるもの也くりかへし見てあはふべしさてかく
 ても猶いとなみにあはせとある語少しおちぬこちすもしくは此下に詞脱たるか試にいはいふなどいふ辭など有しを上のなどいふ意やう
 に思ひてさかしらにけづりたるにや
 などかばさても (玉)などかばかゝることはせんさてもあれかしといふ意なりさてもあれかしとはそのまゝにてもあれがしにて俗言に物を
 せずしてやむをまゝにするといふ是也歌などをもよみてやらず何ともせずしてあれといふ意也
 をりからととく (餘)をりからにて句とせるはわろしかりととくといふてつゞけてよむべき也をりからも時々も詞をかへたるのみにて同語
 をかされていへる也人のいそがしと思へるなりからも時のさまも思ひわづあながちに歌などよみかくるさる心おそき本性ならばなま
 なかに歌まぬかたこそまさらためといへるなり

よしびみなさげだゝさらんなん (釋)よしびみはよしありげに見するなりなさげだつはなさげしりがほをするなり
 すべて心にしれらん事をも (新)これはかのはじめにすべて男も女もわろものはわづかにしれるかたの事をのこりなく見せつくさんと思へる
 こそいとほしけれといふ所をむすびたる也
 すぐすべくなんあべかりける (湖)いひのこして過すべしと也 (釋)馬頭の語こにてとちめたり
 君は人ひとりの御有さま云々 (釋)かく書て藤壺の事とおもはせたる事つきさりにめてたくみか事なるゆゑに心のうちにとりかへたる也

これはたらず云々 (釋)これは藤つばの宮をさしていへりたらずとて過たる事なく物し給ふとは何事によらずそのかたち心さま行ひさまを
 かけていへる也玉小櫛にこれとは今馬頭の論によることとして類ふところをさしていふとてこれにともある本をまされるやうにいはいれたるは
 みじきひがことと思ひつけ給ふといひ終りて又初馬頭の論をこれにとはいかていふべきか物し給ひけるかなといふ詞も上にかゝる
 詞なくて何人の物すとも聞えざるなり
 ありがたきにもいとむねふたがる (釋)ありがたき藤壺のごとき人の世にありがたき也むねふたがるは空おそろしくおぼえて心の寒る意
 なり此語にてたしかに藤つばの事とせたる書さまいとなくみなり桐壺巻のすゑの脈をこにははせて事あるさまにひかせおく也い
 とはたしにもむねふたがるにせしる人のありかたきと思ひいでいといふたがるといふ意なり心をつくべし
 いづかたによりはつともなく云々 (釋)品定の論まろなりしき事とは俗言にらちもなれといふ意にいへる也さるは聞にくき女の品定なればかくいへるなり藤壺に
 夜をあかし給ひつといふ意なりあやしき事とは俗言にらちもなれといふ意にいへる也さるは聞にくき女の品定なればかくいへるなり藤壺に
 拾遺上世中をかくいひのほはてははいかにやいかならんとすらん此歌にてこのとちめはしつる也といへるはいかやあらん事の意
 たがひたるやうなり又或抄に品定はわきになりてさまの物語どもにて夜あけたるとなりといへるは大かたさもあるべく聞えたりと猶
 あやしきといひなりてといへるにいさゝかかひがたきこちす新釋には論どもになりてとある異本をとられたれどいかになり (評)品定
 の論こにとちめたりとも、此論のむねとある事は上にもかづいへるがごとく今ひとりと見れば猶じちになんよりける
 云々見るめのなさをばえたのむまじく思ひ給へ侍りといふ所なるなほその餘波にまめなる女とあだなる女とに馬頭が昔あへりしことな
 いひてかたみにその難ある事を反對としてくらべて論じて其ついでに頭中將に夕顔の事をかたせて心もなき女の一くさの難をあけか
 つ後巻の伏線としたりさてその反對に藤式部系に才學をたてたる女の事をいはずしてかましくあざけりたる其中に夕顔は中將のいみじく
 心をかけられたるさまをあらはれにいひ博士のむすめは愛敬なくなさけうすさまにかゝれたるこれもまた反對の法なりさてそのついでに女
 の才學だてすることの殊にわるきよしを論じてふかくいましてとちめたるこれなんこの作者のつれにたてられたる心しらひなりけるその
 よしは此物語のうちにも所々に見え又かの日記の文などにも見えて巻のはじめにいへるがごとくして末にいたりて源氏君の御心に藤壺の宮
 の事をおもひいで給へるよしを書れたるは桐壺巻の脈を失はしがためかつかはすまに物のまされの事ありしよしをほのかしおきて末の巻々
 のつなぎとしたるもの也さてこの詞にてもこの藤つばの宮は何事もたらひてめでたく女とある女のほんとなるべきさまにてかの光る源氏と
 いふに對てかやく日の宮といへりし脈の書さまなるをしるべし

ちらうじてけふは云々 (評)此所より空蟬の君の事かたり出る也さて此段は上の品定とはいなくかけはなれたる事のやうなれど下のこゝろ
 は品定めよりつゞきたりさるはかの受領といひて云々といへる一種の品の事をまづ語り出るにて夕顔巻の末まではこの巻と一つづきなる事